

# 額見町遺跡Ⅳ

(F・G・H地区の一部区域の調査)

— 串・額見地区産業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 4 —



L字型カマド付設置穴建物 (SI112)

2009年 3月31日

石川県小松市教育委員会



# 額見町遺跡Ⅳ

(F・G・H地区の一部区域の調査)

— 串・額見地区産業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4 —

2009年 3月31日

石川県小松市教育委員会





## 例 言

1. 本書は小松市が施工する串・額見地区産業団地造成事業に伴って、平成6年から平成12年度までに小松市教育委員会が調査主体となって実施した額見町遺跡（ぬかみまちいせき）の発掘調査報告書である。本報告は平成17年度から平成22年度までに6分冊で、刊行を予定しており、本書はその第4分冊目、G地区とH地区西側の一部、前回の報告から除外したF地区南東端区域の北西端区域の報告書にあたる。
2. 発掘調査及び出土品整理は、小松市の単独事業として行なったものであるが、発掘調査費は小松市土地開発公社からの受託という形態をとった。
3. 発掘調査の調査地、調査面積、調査期間、調査担当者は次のとおりである。  
《調査地》石川県小松市額見町な1番地外  
《報告対象面積》(F・G・H地区にわたる区域の一部)約3,700㎡  
《調査期間》(F地区)平成10年10月12日～平成12年3月14日  
(G地区)平成11年5月10日～平成12年3月14日  
(H地区)平成12年4月10日～平成12年11月30日  
《調査担当者》(F地区)大橋由美子、岩本信一  
(G地区)望月精司、津田隆志、福海貴子  
(H地区)望月精司、大橋由美子
4. 遺構の測量図作成については、向出泰央・坂利彦・稲石純子・松本敦子（以上臨時職員）・谷口佳代・中村悦子・宮川明美・本村美那子・山岸陽平・西島一代・久乗仁美・塩原咲織・南健一・森本雄介ら測量補助員の協力を得て、調査担当者である望月と大橋、岩本、津田、福海が実施した。また、遺構全体測量及び基準点測量に関しては、アジア航測株式会社に委託した。
5. 出土品整理は、平成9年度から平成20年度までの中で、遺跡全体として行ったものであり、当該地区の整理は、その中で随時、出土品整理作業員を雇用し、望月精司が主に担当した。なお詳細な整理経過は第1分冊報告書「額見町遺跡Ⅰ」第1章第3節の記載に基づく。
6. 遺物実測、製図、観察表作成、遺物構成把握、遺構図修正、原稿執筆については、出土品整理作業員、江波圭、奥出桂子、柿田康子、国本久美子、谷口佳代、山崎千春の協力を得て、望月と大橋が実施した。
7. 本書の編集は望月が担当し、執筆分担は目次に記載した。
8. 写真撮影は遺構を望月・大橋・岩本が、遺物を望月が担当し、空中写真についてはアジア航空株式会社に委託した。
9. 本調査において出土した遺物を始め、遺構・遺物の実測図、写真等の資料は、小松市教育委員会が保管している。
10. 本書に掲載の写真等については、無断で複製、転載することを禁じています。転載利用の場合は小松市教育委員会へ使用許可を申し入れてください。
11. 発掘調査と報告書の作成にあたっては、次の方々、機関、団体からご協力、ご指導を賜った。ご芳名を記し、感謝の意を表したい（所属及び敬称略、五十音字順）。  
赤澤徳明、穴澤義功、池田敏宏、宇野隆夫、大澤正己、柿田祐司、春日真実、亀田修一、川畑誠、木立雅朗、北野博司、小嶋芳孝、小林正史、権五栄、坂井秀弥、笹澤正史、杉井健、須田勉、田嶋明人、出越茂和、戸調幹夫、橋本澄夫、斐田哲郎、藤原学、森内秀造、山中敏史、湯川善一、吉岡康暢、渡辺一、(財)石川県埋蔵文化財センター、額見町町内会

# 目 次

例 言 .....	i
目 次 .....	ii
凡 例 .....	iii
報告書抄録 .....	iv
第 I 章 額見町遺跡の概要と今回報告の調査区 .....	1
第 1 節 額見町遺跡と発掘調査概要 .....	(望月 精司) … 1
第 2 節 今回報告の調査区 (G 地区及び F 地区・H 地区の一部) 概要 .....	(大橋由美子) … 6
第 II 章 今回報告区域検出遺構 .....	13
第 1 節 建物遺構 .....	(大橋由美子) … 13
第 2 節 土坑・井戸 .....	(大橋由美子) … 51
第 3 節 手工業生産関連遺構 .....	(望月 精司) … 66
第 4 節 その他の遺構と包含層 .....	(大橋由美子) … 69
第 III 章 今回報告区域出土の遺物 .....	(望月 精司) … 95
第 1 節 出土遺物の概要 .....	95
第 2 節 古代の遺構出土遺物解説 .....	98
第 3 節 中世の遺構出土遺物解説 .....	146
付表 1 額見町遺跡Ⅳ報告区域出土古代遺物観察表 .....	167
付表 2 額見町遺跡Ⅳ報告区域出土中世遺物観察表 .....	175
第 IV 章 総 括 .....	
- 額見町遺跡の古代「村寺」に関する考察 - .....	(望月 精司) … 181
写真図版 .....	191
	～ 210

## 凡 例

### 《遺構について》

1. 本書で示す方位は、座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標標系に準拠した。また、水平基準は東京湾平均海面水準（T. P.）である。
2. 遺構名称は竪穴建物跡をSB、掘立柱建物跡をSK（土師器焼成坑もSK）、溝状遺構をSD、炉状遺構をSJ（鍛冶炉もSJ）、井戸をSE、特殊祭祀遺構をSX、ピットをPとし、土器溜まりは広範囲に集中していたため、地区名と時代名を付して土器溜まりとした。Pは調査地区ごとに遺構番号を付したが、他は遺跡全体での通し番号とした。
3. 現場で付した遺構番号を別に変更したもののについては、SB260→SB259へ吸収、SB263→SB265へ吸収、SK292・SK293・SK297～SK313・SK317～SK320→道路状遺構1の側溝状土坑列へ変更、SK387→SE03外周土坑の4件のみ。遺構ナンバーの漏れから欠番となったものは、SB290・SB296～SB300・SK328・SK380・SK405・SD61の10件がある。
4. 遺構図の基本的な図掲載縮尺は、竪穴建物跡に関して平面図・断面図を1/60とし、掘方平面図は1/120、造り付けカマド平面・断面図は1/30とする。掘立柱建物跡は平面・断面図を1/100、土坑は平面・断面図を1/40とするが、一部1/20の場合もある。炉状遺構は1/20とし、生産遺構の平面・断面図は1/30とする。道路状遺構の平面図・断面図は1/60とし、場合により1/30とする。溝状遺構の平面図は1/100、断面図は1/30とし、集石遺構・ピットの平面図・断面図は1/30とする。
5. 遺構図で示す平面図の+はグリッド杭の位置を、断面図は水平レベルラインである。これに付記するH=とした数値は標高値を水平基準から求めた海拔高を示す。
6. 竪穴建物平面図に記載する細かいドット網掛け範囲は被熱焼土化範囲を、粗いドット網掛けはカマドソデ粘土範囲を、ストライプ網掛けは切石を示し、砂目ドット網掛けはソデ被熱を、掘り方平面図に示した薄いドットは柱穴を示す。また、竪穴建物跡及び掘立柱建物跡の柱穴内に示した網掛けは柱圧痕位置を示す。なお、土坑と竪穴建物の遺物出土状況図に示す土器を結ぶラインは接合関係にあることを示すもので、それに付記した図Noは遺物図版の図に付した番号と一致している。
7. 竪穴建物跡の土層断面図に示す数字は覆土土層を、アルファベットは床下土層を示し（床下のみの場合数字で示すものあり）、その間の太線は床面ラインを示す。また、土層註に示す色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版 標準土色帖」に基づく。

### 《古代の遺物について》

1. 本書または観察表で示す遺物の種別や土器の器種名については、本文162ページに示したとおり、基本的に前掲報告の「顕見町遺跡II」の出土遺物分類に基づく。また、観察表や本文に示す遺物発掘時期については、田嶋明人氏の北陸古代土器編年軸（田嶋明人1988「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題（報告編）』及び田嶋明人1997「加賀地域での10・11世紀土器編年と層年代」『シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器様相』）に基づく編年標記であり、その編年の筆者層年代観については観察表の巻末にまとめて掲載する。
2. 遺物図版の縮尺は鉄器を1/2に、それ以外を1/3に統一した。また、遺構図に掲載した造り付けカマド笑口部材の石材実測図についても1/4とした。
3. 遺物図版で示す実測図断面に示される網掛けは、黒塗りが須恵器または須恵質製品、白抜きが土師器または土師質製品、ドット網掛けが陶磁器類、ストライプ網掛けが石器、鉄製品とした。また、土器の内外面に示される網掛けについては、細かいドットが赤彩、粗いドットが黒色焼成、砂目が黒炭跡または油煙痕跡、漆付着痕跡であり、カマドの支脚や笑口石材の網掛けは被熱部分を示す。
4. 須恵器や土師器、陶磁器類の実測図断面に示す「←→」はヘラケズリ調整の範囲を、外面や内面に記される「→」はケズリに伴う砂粒移動の方向を示す。また、砥石に示す「←→」は磨耗直線範囲を示す。
5. 須恵器、土師器の実測図においてロクロ（回転台等回転使用も含む）による成形や調整を行うものについては、口縁部ラインや底部ライン、内外面調整ラインを非ロクロ製品と意識的に分けるため、規定で線を引き、非ロクロ製品はフリーハンドで示した。ただし、中世土師器はロクロ使用でも回転惰力の弱いものはフリーハンドとしている。
6. 遺物説明、観察表で示す法量計測について、口径（受け部径・返り径）は口縁上部部（受け上端・返り上端）での直径を、底径は底部切り離し外端部での直径を、高台径は台の外端部径を、頸部径（基部径）は頸部（基部）屈曲部の最小径を、胴部径（つまみ径）は胴部（つまみ部）最大径を、脚部径は脚下部部での直径を示す。なお、器高等の高さ計測については、器形の安定している部分での平均的な数値とし、立高や返り高は受け部下端から口縁端部、返り端部までの垂直高とした。
7. 遺物説明、観察表で示す胎土については、観察表巻末に凡例をまとめて掲載する。
8. 遺物説明、観察表の土器成形痕跡の中で、叩き出し成形に伴う叩き痕跡については、内堀信雄分類案に基づき（内堀信雄1988「須恵器変類に見られる叩き目文について」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』）、H類を平行線文、D類を同心円文とし、H a類は平行線彫り込みに直交する目目のあるもの、H b類は右上がり斜交の木目のあるもの、H c類は左上がり斜交木目のあるもの、H e類は木目の見えないものとし、D a類は木目の見えないもの、D b類は同心円彫り込みに沿って同心円木目の見える芯材使用のもの、D c類は柵目状木目のもの、SD類は木製無文当て具の年輪痕跡のものとした。また、別のものは記号以外の表記にした。

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	ぬかみまちいせき (Nukamimachi Sites)							
書名	額見町遺跡							
副書名	串・額見地区産業団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4							
巻次	IV							
編著者名	望月精司・大橋由美子							
編集機関	小松市教育委員会							
所在地	〒923-8650 石川郡小松市小馬出町91番地 (電話) 0761-22-4111							
発行年月日	西暦2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
額見町	石川郡小松市額見町 な1番地外	160	03089	36度 21分 16秒	136度 24分 30秒	F地区 1998.10.12～2000.03.14 G地区 1999.05.10～2000.03.14 H地区 2000.04.10～2000.11.30	F・G・ H地区の 一部 約3,700	小松市が施 工する串・ 額見地区産 業団地造成
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
額見町遺跡	集落跡	飛鳥・奈良・平安時 代 今回報告区域は 8世紀～9世紀と11 世紀後半～12世紀前 半に集落経営の主体 がある。		堅穴建物6軒、掘立柱 建物47棟、土坑125基、井 戸2基、道路状遺構2本、 溝状遺構22条、加状遺構 1基、土器甕まり、土器 器焼成坑1基、鍛冶炉1 基		須恵器・土師器・甕形 土製品・片面硯・土製 馬形・土師・専用機軸・ 緑釉陶器・白磁・石帯・ 紡錘車・砥石・銭貨・ 鉄鏝・刀子・鎌・漆器碗・ 船		7世紀前半のL字型 カマド付設堅穴建物 1軒と9世紀の四面 庇付建物、大型井戸、 古代末期の大型掘立柱 建物群を軸とする集 落を検出。
要約	6世紀代に墓域化した台地上に、古墳群消滅とともに突如出現する古代集落遺跡。7世紀初頭の集落成立時にL字型カマド付設堅穴建物を高い確率で選択している点から、朝鮮系移民を主とした集落と判断される。7世紀後半に当集落内で生産される朝鮮系軟質土器や同時に始まる鍛冶生産、須恵器窯製品を運出した際に生じる窯道具片の出土など、当集落が手工業生産に携わったことを示す。当集落の近隣にある南加賀丘陵製鉄・製陶遺跡群が7世紀に変革期を迎えることと関連性が強く、広域での台地上集落群は丘陵部工業生産地帯の母村としての性格を持つ。7世紀後半は集落増加期であり、8世紀前半までに全盛期を迎えるが、7世紀後半の新たな建物様式の導入や近江系煮炊具、丹波系煮炊具の導入など、朝鮮系移民のみならず、西日本各地または西を經由しての移民流入によって集落の拡大が図られたことを示す。律令政府主導の下で計画的に設置・経営された集落と言え、それは地方支配政策、評制施行前段階策としての性格をもつ。当台地集落の成立は近隣地に置かれたたろろ江沼評や工業生産地と一体的なものであり、潟湖を媒体に屯倉的な領域支配がなされた地域と性格づけられよう。							
<b>S A M A R Y</b>								
The NUKAMIMACHI SITES are an ancient village ruins in the fee that appear suddenly on the plateau that was the grave region with the disappearance of the old tomb group in the sixth century. In view of the point to have selected the Ana building where L character type kitchen range is set up when the village is approved century seventh by short odds, this village ruins are judged to be ruins mainly composed of a Korean immigrant. The excavation of the kiln tool splinter caused when the blacksmith production and the Earthen kiln product that starts from existence of Earthenware group that introduces a Korean in be produced in the latter half of the seventh century technology and a simultaneous period are selected etc. show that this village was involved in the manual industry production. The vicinity Minamikaga hill steel manufacture and the pottery manufacture ruins group's in this village coming the revolution period in this in the seventh century has and the relation has the location village group on the plateau strongly said by the wide sense with the character as the mother's body village in the hill part industrial production zone. The latter half of the seventh century is a period of an increase of the village, and it is shown that not only Korean immigrants of the introduction of a new building style in the latter half of the seventh century and the Receptacle of cooking of the Ohmi system and the Receptacle of cooking of the Tanba system, etc. but also the expansion of the village was attempted by the immigrant inflow via West Japan various places or the wests though the glory period will come by the eighth first half of the century. It can be said the village that was set up and managed in premeditation under the Ritsuryo government initiation, and has the character as the steps measure by it before enforcing the criticism system of the local rule policy. The approval of this plateau village is an Enuma criticism, is industrial production ground that might have been put on the vicinity ground, is united, and it is thought the region where the seashore lake is assumed to be the medium and it was performed by area rule ton warehouse.								

## 第1章 額見町遺跡の概要と今回報告の調査区

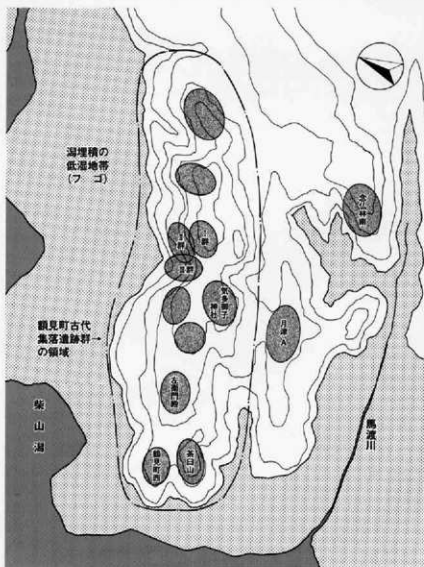
### 第1節 額見町遺跡と発掘調査概要

#### 第1項 額見町遺跡と額見町古代集落遺跡群

額見町遺跡は、長軸800m、短軸550mの北東方に長い遺跡分布を示す440,000㎡の広大な集落遺跡である。幾つかの集落単位が集合した結果、広大な面積の集落域となったものであり、大きくは額見町古代集落遺跡群と称したエリアが広義の額見町遺跡であると評価する。当地は昭和20年代の耕地整理によって起伏に富んだ台地地形が階段状に削り取られ、その際に台地南西端の茶臼山周辺が削平を受けた。茶臼山古墳や茶臼山祭祀遺跡、茶臼山遺跡はその時に発見された遺跡である。昭和30年以降、加賀三湖干拓工事に伴い、額見町遺跡から北東へ伸びる台地は土砂採取により大きく削平を受けたが、その際、埋蔵文化財調査を行った形跡はなく、存在したであろう額見町遺跡の北側部は消失することとなった。その後、大規模な開発等が行われなかったこともあり、当地は遺跡の発見が遅れ、昭和56年の石川県立埋蔵文化財センターが行った詳細分布調査まで、遺跡所在すら確認されずにあった。石川県立埋蔵文化財センターが平成8・9年度に発掘調査を行った額見町西遺跡にしても、平成7年に小松市教育委員会埋蔵文化財調査室が地主の依頼によって行った試掘調査において新発見した遺跡であり、当地上にはほぼ同一時期の集落遺跡が点在していたのだろう。明治42年及び昭和37年に行われた地形測量図をもとに、これまで近隣で調査してきた成果、遺存する地形等から額見町古代集落遺跡群の台地地形を復元したものが右図に示したものである。当台地領域は柴山湖に面して北東方に細長く伸びる台地で、馬渡川の開析谷に面する台地よりも若干小高い独立台地状を呈す、長軸2400m、短軸750m、約150haにも及ぶ広大な台地である。図に示した集落分布予想図は、旧地形をもとに想定したものだが、今回の調査所見で得たように、台地には複雑に小支谷や鞍部が入り込むため、さらに集落単位は分断されていた可能性が高い。今後の詳細な地形把握と分布調査により、遺跡分布の検討はなされるなければならないが、既に削平を受けた地域は多く、これから検証することは困難を極めるだろう。

#### 第2項 平成7年度～12年度発掘調査概要

今回報告する額見町遺跡は、平成7年度から12年度までの6年間にわたる発掘調査報告で、石川県立埋蔵文化財センター調査分も含め、38,500㎡の面積を発掘調査した。当調査で

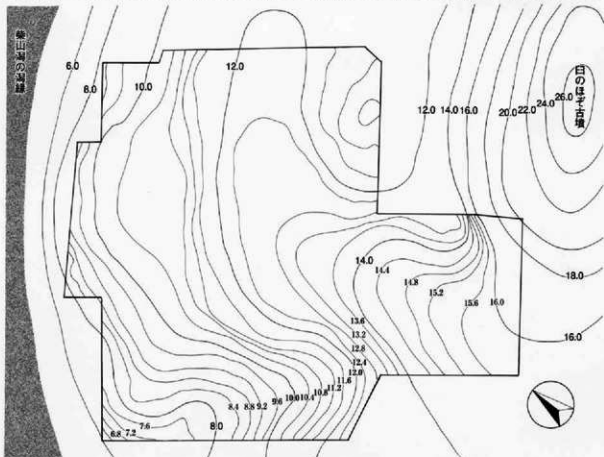


第1図 額見町古代集落遺跡群の復元地形と集落分布予想 (1/20,000)

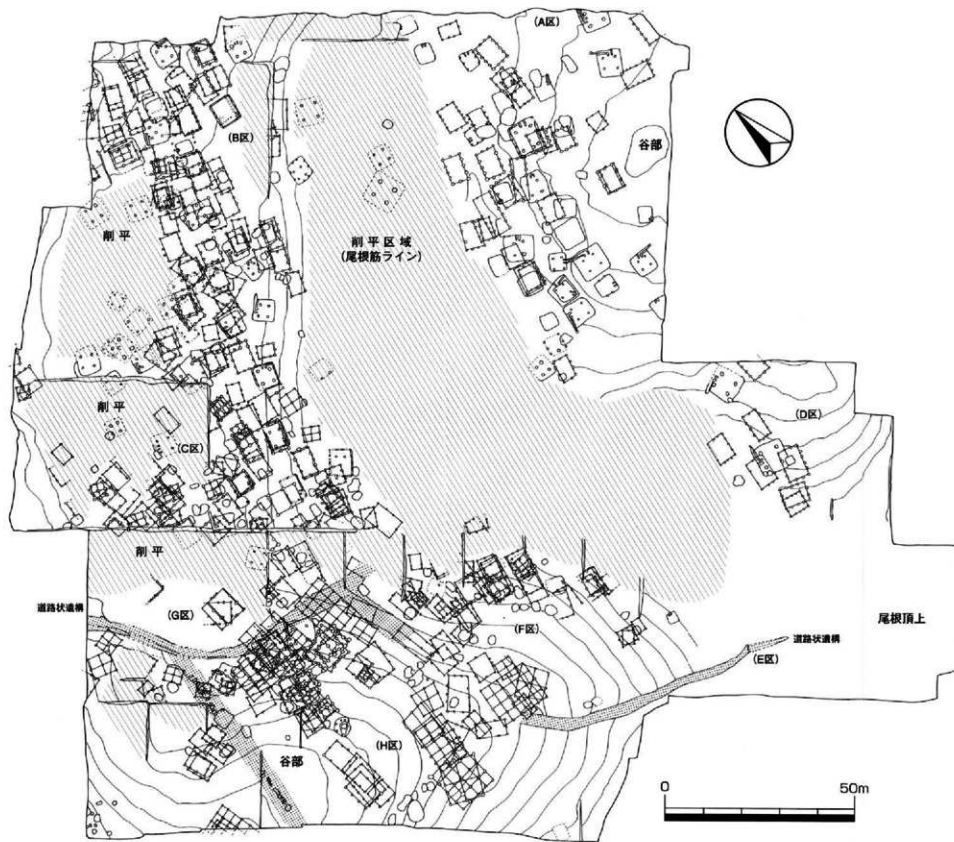
検出した遺構は、竪穴建物 119 軒、掘立柱建物 330 棟、土坑 424 基（うち土師器焼成土坑 10 基、製炭土坑 7 基、墓坑 15 基以上）、炉状遺構（うち鍛冶炉跡 12 基）、井戸 3 基、溝状遺構 53 条（うち道路状遺構 5 本）、集石遺構 2 基、他に土器溜まり遺構を 20 箇所以上確認している。後述するように調査面積の多くが削平されていたため、相当数の遺構が既に消失した状態であり、遺跡が完存していれば、どれだけの建物数が存在していたのか、悔やまれるところである。14 世紀頃の集石遺構 2 基と縄文時代に遡るであろう落とし穴土坑 1 基以外は全て、7 世紀前半から 12 世紀に位置づけられる古代遺構であり、多くの遺構が密集、重複する状況であった。

当地の旧地形を調査所見に基づいて作成したのが以下の図だが、調査区の東側に存在する標高 26 m の尾根頂上部（白のほぞ古墳立地）から南西側へ張り出すようにして尾根筋が延び、そこから北側へと緩く標高を減じる形で、馬の背状に尾根筋が延びていく。東側尾根頂上部から北側へ延びる尾根筋の間には谷部が入り込み、尾根頂部との比高差は 15 m にも及ぶ。谷部から見て、白のほぞ古墳の立地する尾根頂上は、見上げるような高さであり、集落立地に際して古墳を意識したような選地を行っていたことは間違いない。また、北側へ緩く延びた尾根筋から北西方へは緩く張り出してテラス状の部分（テラス状部分の中央は鞍部が入ったように若干下がり気味となる）を形成しており、そこから柴山岡の海縁へは比高差 7 m 以上の急傾斜となる。この張り出し部の南西側では、柴山岡から南東側へ延びてくる支谷に続く小さな谷が入り込み、楕円形状を呈する緩い傾斜地を形成している。比高差 6 m 程度を測る傾斜面で、南西側へ谷は広がっている。

極めて起伏に富んだ複雑な地形を呈していることが復元地形図から見て取れると思うが、耕地整理においては尾根筋部分を削り取り、鞍部や谷部へ土砂を埋めるという造成を行っている。この結果、約 14,000 m<sup>2</sup>、調査面積の 36% が削平による破壊を受けてしまっていた。一部深い遺構に関しては、遺構底部が遺存していたが、大半は遺構痕跡も残さない状態であり、特に尾根筋部分は遺構がどのような分布をしていたのか、把握できる状況にない。ただ、尾根筋でも削平を受けていない部分もあり、その箇所での遺構分布が確認できないことや鞍部から尾根部へと徐々にではあるが、遺構密度が希薄となる傾向などから考えて、尾根筋上での遺構分布はもともと



第2図 額見町遺跡発掘調査区内の復元地形（1 / 2,000）

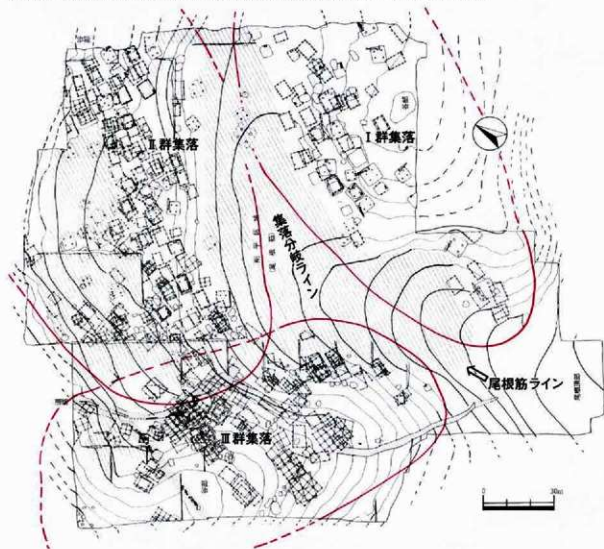


第3図 額見町道跡主要遺構配置図 (1 / 1,000)





と低かった可能性がある。尾根筋が集落の分岐線であった可能性があろう。当地は柴山湯から吹き込む風が強く、風当たりの強い尾根部を避けて選地していた可能性があり、建物立地は緩傾斜地を形成する谷部や鞍部を中心になされていたと予想される。鞍部や谷部は黒色土堆積が厚く、粘土質の黄褐色土地山が露出する尾根筋部分よりも比較的水捌けがよいという点も、建物選地の一つの要因であったろう。削平地が多く不確定要素は多いが、以上の集落分布傾向から想定すると、以下の集落群構成になるとみる。Ⅰ群集落はA D地区に展開する鞍部緩斜面上の建物群、Ⅱ群集落はB地区からC地区そしてD地区北端へ南北に延びる鞍部緩斜面上の建物群、Ⅲ群集落はF・G・H地区に分布する柴山湯へ緩く傾斜していく広い緩斜面上の建物群である。Ⅰ群集落は7世紀前半の竪穴建物の検出例が多く、7世紀代から8世紀前半に主体を置く集落群と言える。Ⅱ群集落は7世紀前半から8世紀代までの長期集落と言えるが、主体は7世紀中頃から8世紀中頃で、最も建物検出例の多い集住区域と言える。Ⅲ群集落は7世紀前半の建物も確認されるが、それはⅡ群集落からの延長で捉えられるもので、総じて8世紀以降に主体を置く集落と言える。特に11世紀後半から12世紀の建物群が広く展開しており、Ⅰ・Ⅱ群集落では未確認の井戸や道路状遺構、大規模な土器廃棄場遺構等を検出する。全ての遺構を検証したわけではないため、今後、報告する中で、細部の修正が行われるものとみるが、大略的には、以上Ⅲ群の集落群構造を展開していたものと考えている。当集落群のまとまりに基づき、報告書刊行順も、調査年度順に捕らわれず、Ⅰ群集落であるA地区とD地区の報告を報告書Ⅰとし、Ⅱ群集落であるB地区とC地区の報告を報告書Ⅱ・Ⅲとした。今年度はⅢ群集落の北西側に当たるG地区を主に報告書Ⅳとして刊行する。平成21年度は、H地区を主とした報告としてⅤとし、鉄関連遺物報告を報告書Ⅵとして、平成22年度には全ての報告を完了させる予定である。



第4図 額見町遺跡の集落のまとまり概念図

## 第2節 今回報告の調査区（G地区及びF地区・H地区の一部）概要

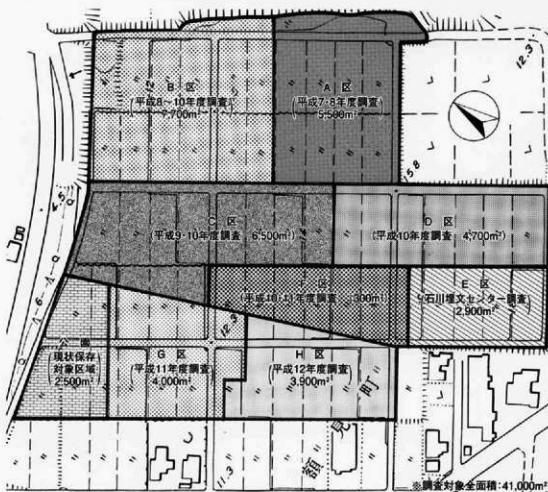
### 第1項 遺構の概要と分布

今回報告の区域は、当調査全区域の西端地にある。G地区の3,000㎡分、H地区の700㎡分が主体で、F地区とH地区に接するF地区は僅かな面積であり、これら総面積3,700㎡の報告となる。前回までの報告区域でも述べてきたように、昭和初期の農地開発により完全削平され遺構の検出されない区域が700㎡存在し、上層削平により遺構基部のみ検出される区域は950㎡である。前回までと違い、削平区域が比較的少ない区域と言える。

ここで、今回報告区域の旧地形を見てみると、遺跡全体の中央を走る尾根部から外れ、特にF地区南側尾根部から下って緩やかな傾斜を伴いながら西側方向へ向かう途中から、更に西に傾斜して谷部形成地に至るまでが今回報告区域となる。尾根部から西側に広がるB・C地区を中心としてF地区西側にも至るテラス状部分が存在し、この西末端が今回報告区域の東側にある。このテラス状部分は、遺構の集中する現状がみられ、今回、当遺跡内でも極めて密集度の高いものとなっている。これに加え当区域は、当遺跡内でも最も標高が低い谷部をも含んでおり、このような地形的要素が削平を免れた区域が多かった現状と考えられる。

今回報告区域から検出された遺構数は、本報告のために遺構整理した結果、竪穴建物6軒、掘立柱建物46棟、土坑109基（この内道路状遺構1に伴う土坑28基）、墓竈10基、製炭土坑1基、鍛冶が1基、土器焼成坑1基、井戸2基、道路状遺構2本、溝状遺構22条、炉状遺構1基、集石遺構1基である。

前回までの報告でも述べてきたように、今回報告区域においても遺構検出の困難さはひとしおであった。本遺跡の包含層は基本が黒色土で、遺構埋土も黒色土や黒褐色土が主体であり、その上今回谷部に堆積した黒色土層も加わり、更には遺構密集度が極めて高く、非常に遺構検出の困難な状況であったと言える。そのような検出状況の中、約8年前に調査された遺構図面を改めて広げると、本当に遺構であるのか疑問を生じたものも確かに存



第5図 額見町遺跡発掘調査区地区割図 (S=1/2,000)

在している。例えば掘立柱建物の場合、柱筋の通りが極めて悪い、桁行と梁行の交差する隅柱が直行からかけ離れている建物が存在するといったものである。しかし、現地調査において掘立柱建物を確認するという作業は、図面上で掘立柱建物と判断するよりも、格段に重要である認識があり、やはり現地判断には及ばないと判断されることから、前回までと同様に、そのままを報告することとした。

検出された遺構は、これまで額見町遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲで報告された遺構構造と同類のものが多い。しかし、これまで報告されていない新たな構造を伴う遺構も出現している。竪穴建物では、SI114に見られるようなカマド長煙道型があり、この建物は田嶋編年Ⅰ期である7世紀前半の時期にあたる古い段階の建物である。この時期のものとしては当遺跡の中で最も西端に位置する建物になる。また、掘立柱建物では、SB259のような四面廂建物が検出されることや、中世に主体をおく床構造の総柱建物が増加していることが挙げられる。その他、新たに井戸跡が検出されており、古代と中世の2時期のものが検出されている。また、当遺跡の中でも最も西端にあたる西端では、中世の墓群の存在が認められている。

遺構時期にの推移について、竪穴建物では、7世紀前半が3軒、7世紀後半が1軒、8世紀中頃が1軒、8世紀以降と思われるものが1軒である。掘立柱建物では、7世紀後半が1棟、8世紀前半が1棟、8世紀代1棟、8世紀後半が7棟、8世紀後半～9世紀前半が1棟、8世紀以降が1棟、9世紀前半が6棟、9世紀前半～10世紀前半が4棟、この他時期は不明だが建物構造からみて古代と思われる建物が8棟、中世建物（11世紀後半～12世紀中頃まで）が12棟である。古代だけで総数は36棟になるのだが、竪穴建物総数に対し6倍の数である。8世紀以降、掘立柱建物に代替してゆく傾向は本遺跡でも明らか現象であり、前回までの調査区でも確認された。これに加え、集落の主要地点が北から南へ時期とともに移りゆく様相をもつことが明らかとなっている。今回の調査区は、その最終地点にあたる。言わば、本遺跡の中では最も新しい段階を示していると言える。これを裏付ける形で一層顕著に認められるのは、中世建物とした古代末以降から中世にかけて確認できる低床をもつ総柱建物の棟数の増加である。

## 第2項 基本層序

本遺跡では、遺跡全体の包含層を含めた基本層を一貫して記録してきており、これは本遺跡調査全域に打設されたGr柱のライン軸で設定して土層観察を行ったものである。完全剛平を受け、包含層の残っていない区域では、耕作土や表土を取り除いた時点で、黒色地山土よりもさらに最下層となる褐色地山土や黄褐色地山土が露出するといった現象がみられ、このような区域では土層断面図を作成していない。今回報告区域で、地形傾斜を捉えられるものは、Gr「35」ライン、「32」ライン、「39」ライン、Gr「ら」ライン、「ろ」ラインである。「35」ラインは、今回区域内で最も標高が高い地点から、遺構が密集する区域を通り、谷部へ落ち込んでいく過程を顕著に表しているといえる。谷部を中心に検出されている古代末・中世の上層土器溜まり層も確認される。

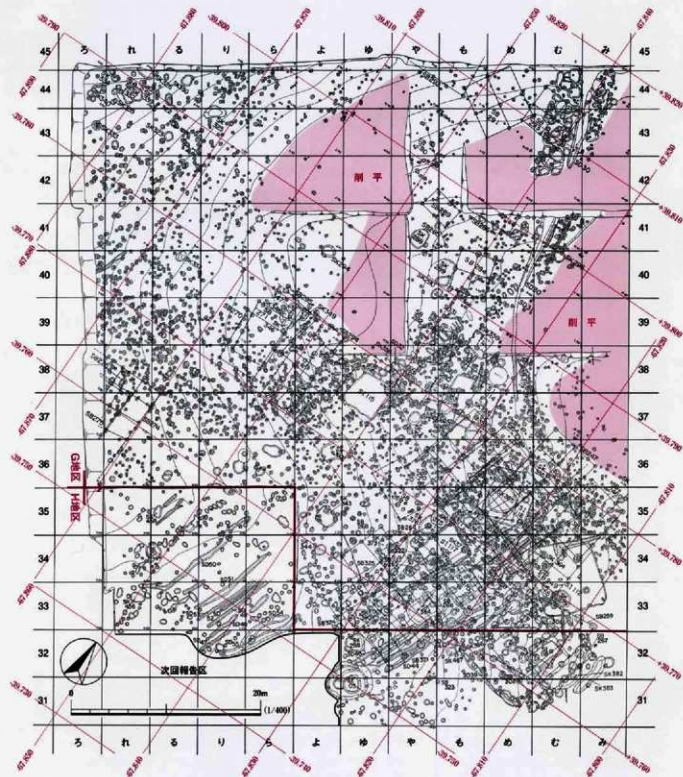
本遺跡では、最も下層に黄褐色系地山が存在し、この上の層に褐色系地山、さらに上の層に暗褐色系地山、この上の層に黒色系地山土との間の漸移層である黒褐色土地山、この上層に黒色系地山が確認されている。黄褐色系の粘土地山と黒色系地山を中心に、この両層の間に土色差によって分層されたといったものである。質的には、壤土や埴土を基本としており、下底にゆくに従い粘質性が増す傾向にある。

提示する土層断面図中には、殆ど地山層は図示されていないが、下底付近で、黒褐色系地山であるⅧ層、この上位もしくは同等のレベルで、黒色系地山の可能性をもつⅨ層が下方層に確認できる。Ⅸ層と同レベルで認められる堆積層がⅩ層であり、比較的標高の高い区域にあたる南西谷部にかけて確認できるもので、これはⅩ層が酸化し土層中の鉄分が錆びたと考えられる層である。Ⅹ層の上位、時には同レベルになるものがⅪ層の堆積層である。そして、この上位層にⅫ層、更に上位層にはⅬ層の堆積が認められる。以上は、比較的標高が高い区域の基本堆積層だが、谷部では基本堆積層が異なっている。まず、最下層にⅩⅢ層、この上層にⅩⅡ層が堆積し、この上層にⅩⅣ層である若干明めの黒褐色土層、この層と同レベルでⅣ層が認められる。そして、最上層にⅣ'層が確認できる。谷部堆積層は、黒色系土層の中でも比較的明めの土色のものが堆積していると認識できる。

遺構は、Ⅳ層レベルで既に掘り込まれているものが殆どで、これはⅣ層が最上層であることが多く、この時点で遺構の掘り込みが確認できていることによる。谷部ではⅣ層と同レベルであるⅩⅣ層で、更に西側の谷部ではⅩⅡ層レベルで掘り込まれているものが認められる。しかし、前回までの傾向を見ても、やはりⅣ層で遺構が掘

り込まれるものが認められたため、同じ様な傾向をもつのだろうと思われる。

さて、上層土器溜まりの②層、要するに古代と古代末の土器破片が極多量に検出された層は、IV層と同レベルにて認められる。そしてこの②層は、SE03の埋没土と同レベル時に堆積したと考えられるものであり、この層の上位層には上層土器溜まり①層、つまり古代末の土器が極多量に検出される層が堆積する。①層の上位には、IV'層が検出されているため、IV'層は古代末以降の層位になるものと考えられる。

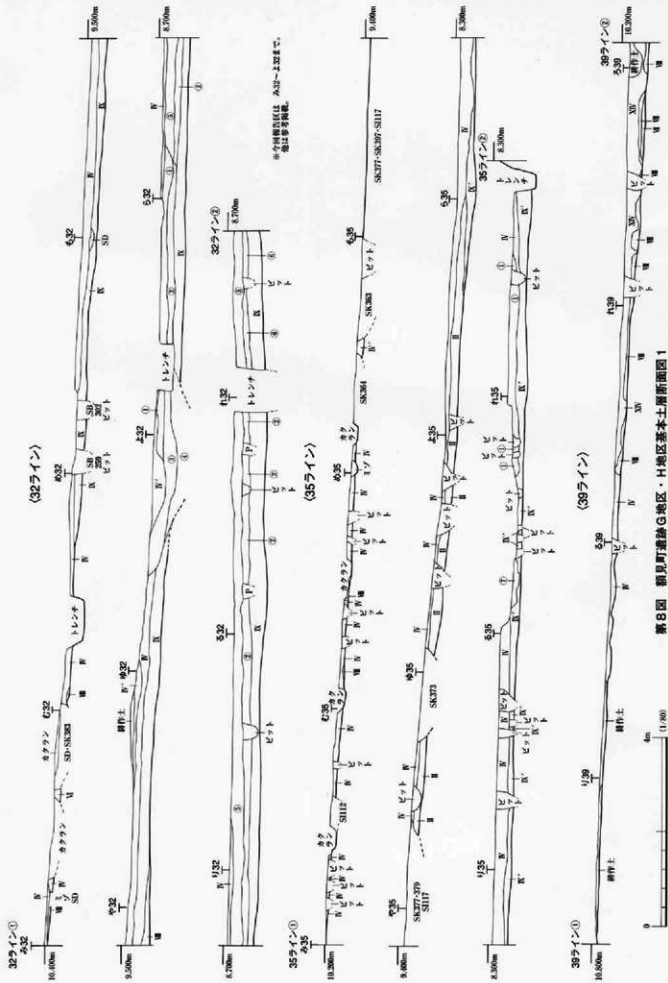


第6図 今回調査区の座標軸とグリッド配置図 (S=1/400)

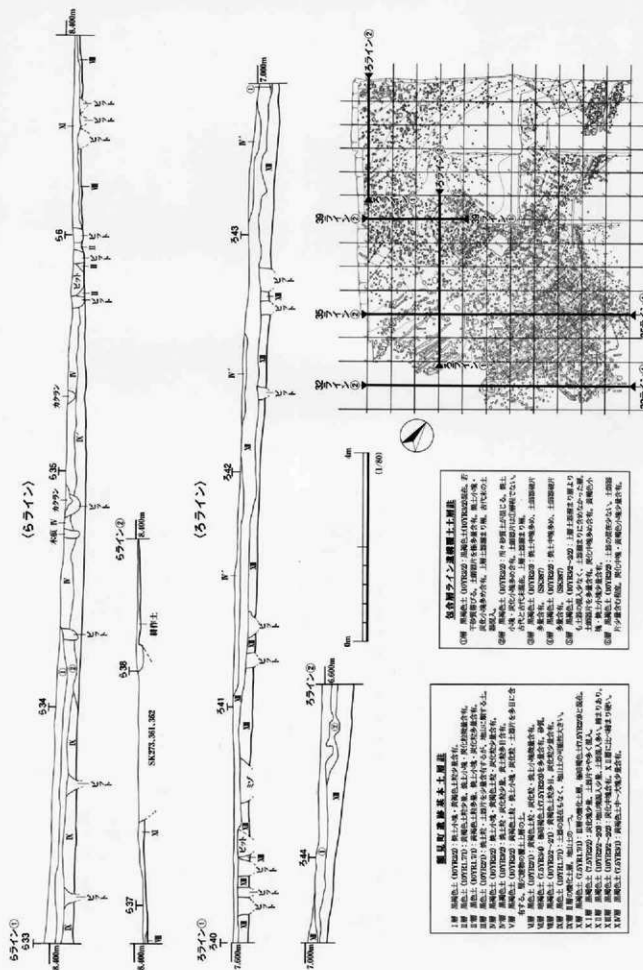


第7図 今回報告の調査区（G地区及びF地区・H区の一部）（S=1/300）





第8図 朝見町道路跡G地区・H地区基本土層断面図 1



第9図 観見町農跡G地区・H地区基本土層断面図2



## 第Ⅱ章 今回報告区域検出遺構

### 第Ⅰ節 建物遺構

#### 第Ⅰ項 竪穴建物

今回報告区域での竪穴建物は6軒である。G地区で3軒、F・G・H地区の境で3軒である。L字形カマド付設の大型建物、壁立式建物、通常カマドだが煙道を長くもつ屋外直結型カマド付設の建物、屋外直結型カマド付設の小型建物、コーナーカマド付設の無柱穴建物、無カマド無柱穴建物と、今回報告では建物構造が全て異なっている。これらの竪穴建物の殆どはこれまでの額見町遺跡Ⅰ～Ⅲにて報告されてきたものだが、SI114のみ新たなタイプの建物構造をもつものである。それは、カマドの構造の違いによるもので、SI114は戸外直結煙道型、煙道を長くもつタイプである。このカマド形態については、既に望月精司2006「第Ⅷ章総括—額見町遺跡の古代竪穴建物構造と造り付けカマドについて—」[額見町遺跡Ⅰ]にて分類され詳細が述べられている。

今回報告する建物は、遺構番号ではA地区からの通し番号でSI112・SI114～SI118にあたる。規模については、縦長×横長cmで記載する。面積においては、竪穴外も建物空間として使用した可能性をもつものがあるが、竪穴の部分のみの面積を表示している。建物主軸は、カマドを奥に向けた位置を中心として北・南からの角度を表示した。今回報告の調査区では削平区域でカマドが削平されている建物も多く、このようなものに関しては、長辺壁を廠軸として設定するか、北方位に近い軸を設定して、建物主軸を割り出している。竪穴建物構造の類型造り付けカマド類型は、一昨年度報告の額見町遺跡Ⅰにすべて基づいている。(望月精司2006「第Ⅷ章総括—額見町遺跡の古代建物構造と造り付けカマドについて—」[額見町遺跡Ⅰ] 小松市教育委員会。以下、本項の中では、※2006望月と記述する)。面積による建物類型も報告Ⅰ・Ⅱに準じ、特大が55㎡以上、大型が55～39㎡、中型36～25㎡、小型が25㎡以下としている。掘方土坑の位置づけも前回までの報告に準じた。竪穴建物の出土物については出土量を破片数換算で数量とし、時期については田嶋明人氏の北陸古代土器編年で表記する。

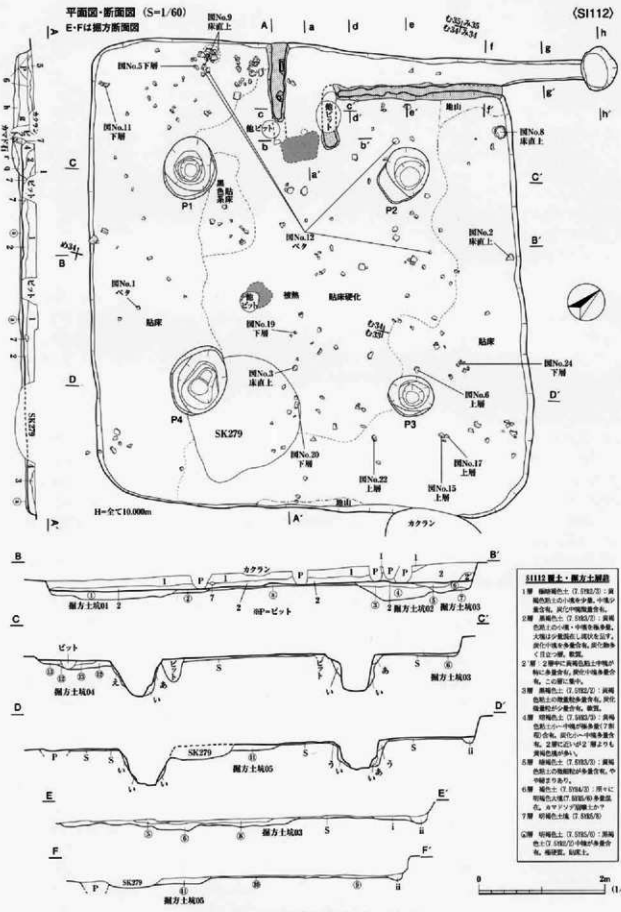
#### 1. SI112

**〔立地・規模・形態〕** G地区でも東端、F地区・H地区との境にあたる、み・む-33・34Grの遺構密集区域に位置する比較的良好な状態で検出された建物である。基本として隅丸方形プランを呈すものの、横壁軸と北東壁が歪むため、東側が出張る平面形状となる。よって、竪穴規模は700×736×660～690cmと幅をもつが、面積は48.47㎡を測る大型建物である。壁高は12～30cmで、竪穴主軸はN-49°-Wをとる。なお、南側の一部がSK279によって切られている。

**〔柱穴〕** 4本主柱である。竪穴中央に配置されるもので、柱間寸法が縦軸346・350cm、横軸338・340cmを測り、均等に配置されていない。P2とP3が縦軸に対し下へ若干ずれる形で配置されているため、当然直角とならないのである。しかし、柱穴は非常にしっかりと掘り込まれており、規模は径66～114cmを測って90cmを主体とし、P3のみ最小の66～72cm、深さは60cmを測りP3のみ44cmを測る。建物廃絶時には、全ての柱が抜き取られて、掘方が部分的に残る状態で埋め戻されている。

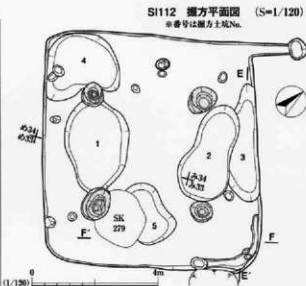
**〔カマド〕** カマドは、L字型カマドである。北西壁中央に焚口もち、東側に曲がって煙道が壁に添ってそのまま屋外へ至るものである。カマドの規模は、主部で縦長が外寸で165cm、幅100cm、煙道長はL字屈曲点から煙道ビットまでを外寸で390cm。煙道幅は、L字屈曲点地点で外寸82cm内寸52cm、壁ライン付近で外寸60cm内寸34cm、カマドビット際で外寸28cm内寸20cmを測る。要するに建物内では外寸60～82cmであり、屋外では28～38cmとなる。焚口幅は内寸55cmである。ソデ厚は、主部で30cm程度、煙道で25cm程を測る。支脚ビットは、痕跡のみ検出しており、径は10cm程度である。

カマド床面は、ほぼ平坦を呈す。焚口から奥へ83cm地点で若干角度をもつが、3°程である。カマドソデ基部底面や残存状況から、ソデは上部へ向かい直立していたものと考えられる。カマドソデ左側の末端にて、ソデ石を検出しているが、ソデ厚に対し規模は小さく、崩壊後部分的に残ったものと考えられる。煙道中央でソデの一部が内側へ向かって倒れたと思われる痕跡を検出しており、この部分は黒色土で補強してあった。カマド構築土は、主部左側に点在する崩壊ソデの状況から、ソデ土は主に粘土ブロック状のものを使用したと考えられるが、煙道ソデの一部では盤状を呈す構築土もなされている。なお、カマドは竪穴貼床より後に構築されている。ソデは、カマド廃絶時に破壊され、崩壊土塊が左ソデ外側の竪穴床面に集中して残存する。煙道ビットは屋外へ延び



第10図 竪穴建物遺構図1 (SI112①)

SI112 掘方土坑・竪穴覆土・竪穴土壇	
①層	黄褐色土 (F302/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に4期副土含有。(F1土壇覆土)
②層	黄褐色土 (F303/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。(F1土壇覆土)
③層	黄褐色土 (F304/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
④層	黄褐色土 (F305/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
⑤層	黄褐色土 (F306/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。いくばくして塊副土あり。(F2土壇覆土)
⑥層	黄褐色土 (F307/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
⑦層	黄褐色土 (F308/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
⑧層	黄褐色土 (F309/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
⑨層	黄褐色土 (F310/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
⑩層	黄褐色土 (F311/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
⑪層	黄褐色土 (F312/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
⑫層	黄褐色土 (F313/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
⑬層	黄褐色土 (F314/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
⑭層	黄褐色土 (F315/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
⑮層	黄褐色土 (F316/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
⑯層	黄褐色土 (F317/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
⑰層	黄褐色土 (F318/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
⑱層	黄褐色土 (F319/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
⑳層	黄褐色土 (F320/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㉑層	黄褐色土 (F321/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㉒層	黄褐色土 (F322/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㉓層	黄褐色土 (F323/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㉔層	黄褐色土 (F324/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㉕層	黄褐色土 (F325/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㉖層	黄褐色土 (F326/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㉗層	黄褐色土 (F327/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㉘層	黄褐色土 (F328/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㉙層	黄褐色土 (F329/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㉚層	黄褐色土 (F330/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㉛層	黄褐色土 (F331/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㉜層	黄褐色土 (F332/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㉝層	黄褐色土 (F333/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㉞層	黄褐色土 (F334/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㉟層	黄褐色土 (F335/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㊱層	黄褐色土 (F336/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㊲層	黄褐色土 (F337/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㊳層	黄褐色土 (F338/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㊴層	黄褐色土 (F339/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㊵層	黄褐色土 (F340/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㊶層	黄褐色土 (F341/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㊷層	黄褐色土 (F342/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㊸層	黄褐色土 (F343/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㊹層	黄褐色土 (F344/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㊺層	黄褐色土 (F345/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㊻層	黄褐色土 (F346/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㊼層	黄褐色土 (F347/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㊽層	黄褐色土 (F348/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㊾層	黄褐色土 (F349/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)
㊿層	黄褐色土 (F350/F) : 黄褐色土の中へ大塊多量に3期副土含有。酸化。(F2土壇覆土)



第11図 竪穴建物遺構図2 (SI112②)

た煙道に接して位置しており、この規模は長径70cm、短径60cm、深さ25cmで、底面は平坦である。

(覆土堆積と遺物出土) 覆土は上下2層からなる埋土が基本となっている。壁際の埋土状況からみても、自然堆積層とは考えられず、一括として埋め戻された可能性が高い。出土遺物は、建物全体から満遍なく出土するがカマド左壁際は多い。埋土下層を中心に鉄滓が多めに出土し、床下の掘方土坑1のP4直下部分から鉄製品が出土している。床に張り付いて出土する遺物の多くはI1期の時期にあたる。覆土から出土する遺物はII2~V期を示しており、建物廃絶後に混入したものと思われる。出土遺物は総数で、須器食膳具82点、須器貯蔵具41点、土師器食膳具39点、土師器煮炊具309点、石製品は砥石1点、土製品は土製支脚1点である。

(床の状況と床被熱・掘方) 貼床は、竪穴のほぼ全面に近い形で貼られている。カマドに相対する位置である南東壁中央と、カマドソデの煙道と壁の間の一部のみが地山土のままであるものの、極めて小さな区域である。この南東壁中央が当竪穴の入口になろうか。貼床土は1層のみの単層であり、床面は中央が著しく硬化し、4本主柱に囲われた中央とP1-P4幅で南西壁に向かった、これら一体が他の部分よりも10cm程高くなっている。また、P1-P2を結ぶ、ややP3側でやや中央寄り位置に炬が設えてある。小ピットにより一部が切られているもの、被熱焼結して固く、規模は長径40cm短径が残存で33cmを測る。

掘方土坑は、P1-P4を中心とした周囲、P2-P3を結ぶラインから壁にかけての2カ所に集中がみられ、中規模クラスの土坑が重なって検出されている。なお、南東壁と南西壁との境において、L字状に壁周溝らしきものが検出されている。但し、この部分にのみ検出されているので、壁周溝ではなく、単に掘方の低い部分が溝状になって検出されただけなのかもしれない。なお、本竪穴の構築順番は、掘方土坑と竪穴床が同段階で構築され、次にカマド構築、次いで掘方土坑3構築と考えられる。これは、竪穴床の後に掘方土坑3が掘り込まれているからであり、竪穴構築の最後に、掘方土坑3は掘り直されたと考えられる。

## 2. SI114

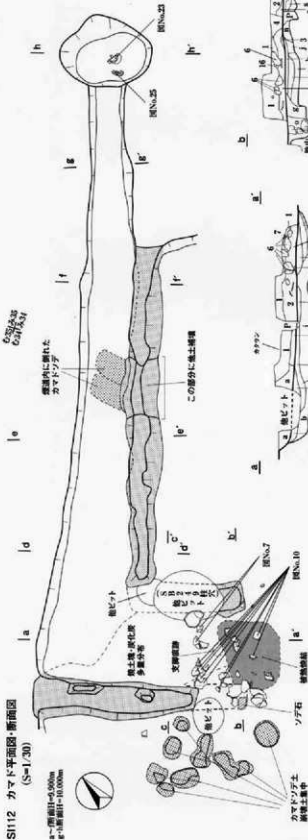
(立地・規模・形態) G地区中央から東寄り、め・も-36-37Grに位置し、規模は510~540×510~530cm、竪穴面積27.3㎡、中型の竪穴建物である。壁高は14cmを主体として最大で20cmを測り、主軸はN-14°-W。建物プランは、隅丸方形だが壁ラインは綺麗な直線とはならない。4本主柱をもち、カマドは中央に配置され、煙道は長くそのまま屋外へ直結する。

(柱穴) 4本主柱穴で、柱穴規模は径40cm、深さ45~56cmを測る。柱痕がP2とP3で認められ、径はP2が28cm、P3が22cmであり、この2本は廃絶時に抜かれていないか、途中で切られたものと考えられる。P1は抜き取られているが、柱のあたりが認められるものであり、この径は20cmである。また、同じくP1でのみ柱痕が柱穴の下底面で検出されている。この径が14~16cmであって、部分的に残存していたものを検出したものと考えられる。柱間寸法は、P1-P2間が220cm、P2-P3間が210cm、P3-P4間が210cm、P4-P1間が230cmである。

SI112 カマド平面図・断面図

(S=1/30)

a-平面図11=0.900m  
b-平面図11=10.000m

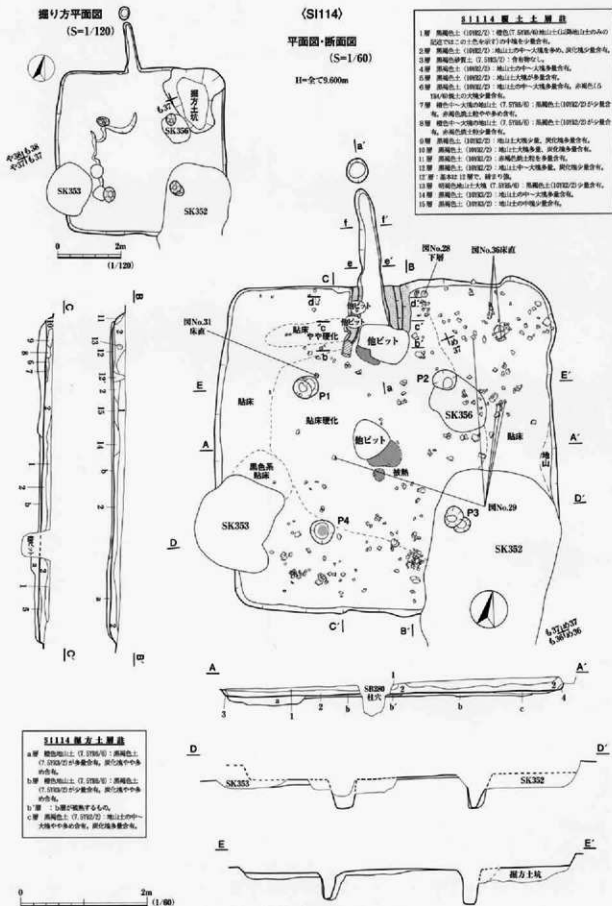


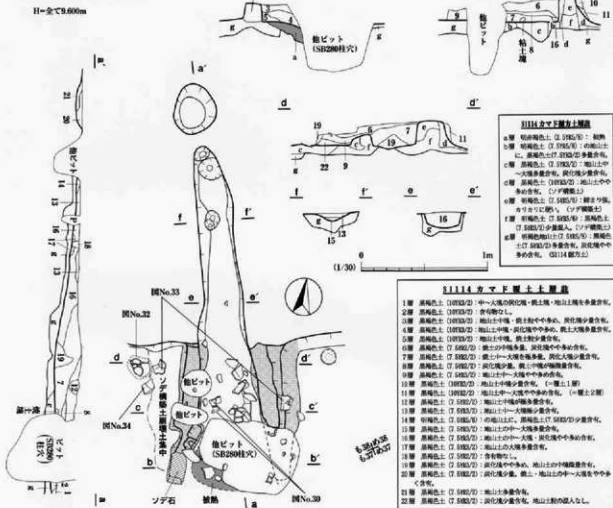
SI112カマド平面図・断面図

1層 黒城土 17 (S12) 2層 黒城土 18 (S13) 3層 黒城土 19 (S14) 4層 黒城土 20 (S15) 5層 黒城土 21 (S16) 6層 黒城土 22 (S17) 7層 黒城土 23 (S18) 8層 黒城土 24 (S19) 9層 黒城土 25 (S20) 10層 黒城土 26 (S21) 11層 黒城土 27 (S22) 12層 黒城土 28 (S23) 13層 黒城土 29 (S24) 14層 黒城土 30 (S25) 15層 黒城土 31 (S26) 16層 黒城土 32 (S27) 17層 黒城土 33 (S28) 18層 黒城土 34 (S29) 19層 黒城土 35 (S30) 20層 黒城土 36 (S31) 21層 黒城土 37 (S32) 22層 黒城土 38 (S33) 23層 黒城土 39 (S34) 24層 黒城土 40 (S35) 25層 黒城土 41 (S36) 26層 黒城土 42 (S37) 27層 黒城土 43 (S38) 28層 黒城土 44 (S39) 29層 黒城土 45 (S40) 30層 黒城土 46 (S41) 31層 黒城土 47 (S42) 32層 黒城土 48 (S43) 33層 黒城土 49 (S44) 34層 黒城土 50 (S45) 35層 黒城土 51 (S46) 36層 黒城土 52 (S47) 37層 黒城土 53 (S48) 38層 黒城土 54 (S49) 39層 黒城土 55 (S50) 40層 黒城土 56 (S51) 41層 黒城土 57 (S52) 42層 黒城土 58 (S53) 43層 黒城土 59 (S54) 44層 黒城土 60 (S55) 45層 黒城土 61 (S56) 46層 黒城土 62 (S57) 47層 黒城土 63 (S58) 48層 黒城土 64 (S59) 49層 黒城土 65 (S60) 50層 黒城土 66 (S61) 51層 黒城土 67 (S62) 52層 黒城土 68 (S63) 53層 黒城土 69 (S64) 54層 黒城土 70 (S65) 55層 黒城土 71 (S66) 56層 黒城土 72 (S67) 57層 黒城土 73 (S68) 58層 黒城土 74 (S69) 59層 黒城土 75 (S70) 60層 黒城土 76 (S71) 61層 黒城土 77 (S72) 62層 黒城土 78 (S73) 63層 黒城土 79 (S74) 64層 黒城土 80 (S75) 65層 黒城土 81 (S76) 66層 黒城土 82 (S77) 67層 黒城土 83 (S78) 68層 黒城土 84 (S79) 69層 黒城土 85 (S80) 70層 黒城土 86 (S81) 71層 黒城土 87 (S82) 72層 黒城土 88 (S83) 73層 黒城土 89 (S84) 74層 黒城土 90 (S85) 75層 黒城土 91 (S86) 76層 黒城土 92 (S87) 77層 黒城土 93 (S88) 78層 黒城土 94 (S89) 79層 黒城土 95 (S90) 80層 黒城土 96 (S91) 81層 黒城土 97 (S92) 82層 黒城土 98 (S93) 83層 黒城土 99 (S94) 84層 黒城土 100 (S95)

1層 黒城土 17 (S12) 2層 黒城土 18 (S13) 3層 黒城土 19 (S14) 4層 黒城土 20 (S15) 5層 黒城土 21 (S16) 6層 黒城土 22 (S17) 7層 黒城土 23 (S18) 8層 黒城土 24 (S19) 9層 黒城土 25 (S20) 10層 黒城土 26 (S21) 11層 黒城土 27 (S22) 12層 黒城土 28 (S23) 13層 黒城土 29 (S24) 14層 黒城土 30 (S25) 15層 黒城土 31 (S26) 16層 黒城土 32 (S27) 17層 黒城土 33 (S28) 18層 黒城土 34 (S29) 19層 黒城土 35 (S30) 20層 黒城土 36 (S31) 21層 黒城土 37 (S32) 22層 黒城土 38 (S33) 23層 黒城土 39 (S34) 24層 黒城土 40 (S35) 25層 黒城土 41 (S36) 26層 黒城土 42 (S37) 27層 黒城土 43 (S38) 28層 黒城土 44 (S39) 29層 黒城土 45 (S40) 30層 黒城土 46 (S41) 31層 黒城土 47 (S42) 32層 黒城土 48 (S43) 33層 黒城土 49 (S44) 34層 黒城土 50 (S45) 35層 黒城土 51 (S46) 36層 黒城土 52 (S47) 37層 黒城土 53 (S48) 38層 黒城土 54 (S49) 39層 黒城土 55 (S50) 40層 黒城土 56 (S51) 41層 黒城土 57 (S52) 42層 黒城土 58 (S53) 43層 黒城土 59 (S54) 44層 黒城土 60 (S55) 45層 黒城土 61 (S56) 46層 黒城土 62 (S57) 47層 黒城土 63 (S58) 48層 黒城土 64 (S59) 49層 黒城土 65 (S60) 50層 黒城土 66 (S61) 51層 黒城土 67 (S62) 52層 黒城土 68 (S63) 53層 黒城土 69 (S64) 54層 黒城土 70 (S65) 55層 黒城土 71 (S66) 56層 黒城土 72 (S67) 57層 黒城土 73 (S68) 58層 黒城土 74 (S69) 59層 黒城土 75 (S70) 60層 黒城土 76 (S71) 61層 黒城土 77 (S72) 62層 黒城土 78 (S73) 63層 黒城土 79 (S74) 64層 黒城土 80 (S75) 65層 黒城土 81 (S76) 66層 黒城土 82 (S77) 67層 黒城土 83 (S78) 68層 黒城土 84 (S79) 69層 黒城土 85 (S80) 70層 黒城土 86 (S81) 71層 黒城土 87 (S82) 72層 黒城土 88 (S83) 73層 黒城土 89 (S84) 74層 黒城土 90 (S85) 75層 黒城土 91 (S86) 76層 黒城土 92 (S87) 77層 黒城土 93 (S88) 78層 黒城土 94 (S89) 79層 黒城土 95 (S90) 80層 黒城土 96 (S91) 81層 黒城土 97 (S92) 82層 黒城土 98 (S93) 83層 黒城土 99 (S94) 84層 黒城土 100 (S95)

第12図 竪穴建物遺構3 (SI112) ③



SI114 カマド平面図・断面図  
(S=1/30)

第14図 竪穴建物遺構図5 (SI114②)

P2には、柱圧痕の硬化面が2本分検出され、同時にP3には、柱穴が2本分認められる。よって、柱の取り替えが行われた可能性がある。

〈カマド〉 カマドは、北壁中央に付設して煙道が屋外へそのまま延びるタイプ、戸外直結煙道型カマド(望月2006)である。カマド手前焚口が他のビットにて破壊されているものの、ソデ末端には凝灰岩のソデ石が残存する。煙道は、竪穴主軸に対して西へ5°ぶれる。要するに若干斜めに取り付け形となって屋外へ至る。90cmにおいては、両ソデがいの字に配置しており、主部の規模は、縦長110cm、横幅が残存100cm、壁障で横幅90cmであり、焚口幅は推定内寸65cmを測る。煙道は、壁から測り外寸160cm、煙道幅が外寸30～35cm、内寸は壁との境で30cmである。ソデ厚は20～40cmを測り、東側のソデが厚い。煙道ビットは、径34～36cm、深さ5cmを測る。カマド床の状況は、カマドの焚口から奥に向かい110cm地点まで平坦を呈し、この地点から奥へ向かい角度は9°となる。支脚やその痕跡はなく、カマド床と竪穴床の貼床は同じ土であり、同時に構築されたと思われる。ソデ自体は壁築状ではなく、粘土の塊で土台をつくり、この上にブロック状粘土を盛って高さを維持していったようである。

〈覆土堆積と出土遺物〉 覆土は、カマド付近でカマド崩壊土が認められる以外は、上下2層からなる埋土が主体となっている。壁障での壁崩壊土、2層堆積後の窪みにさらに1層が堆積したと考えられるような、自然な落ち込みが1・2層間に見られるため、自然堆積層による埋没と考えている。出土遺物状況は、P4・P3ラインから壁までの間と、P2から壁とカマドの間に出土の集中が認められる。北壁障のカマド右手際にて、下層から完形の環玉が出土している。要するに、竪穴外空間をも建物空間として使用した可能性があるものと考えられる。出

土遺物の時期については、掘方から出土する坏H身がI 1古期に相当する他、床張り付きで覆土から出土するもの殆どがI 1期に位置づけられるものである。出土遺物は総数で、須恵器食膳具24点、須恵器貯蔵具23点、土師器食膳具45点、土師器煮炊具443点、石製品2点、製塩土器片8点が出土する。その他、匠鉢の土製品が計9点、中世土師器食膳具8点も出土するが、混入したものであろう。

**(床の状況と床被熱・掘方)** 貼床は、ほぼ全面に施されている。貼床土は、地山土である褐色土を主体に黒褐色土が混在する土であり、特に4本主柱で囲われた区域に認められ、4本主柱から壁に向かう区域では、貼床土の黒褐色土の割合が比較的高い。この4本主柱で囲われた区域での床硬化は著しい。なお、西壁の極一部には地山土が認められる。床は、平坦を呈しているものの、北壁から南壁にかけて緩やかな傾斜を示しており、高低差は10cm程で、南壁側が低くなっている。床中央には、炉が大小2カ所に連続して認められ、大きな方は掘立柱建物柱穴に切られており、規模は長径54cm短径が残存33cm、小さな方は径20cmで、両者とも貼床が被熱しているものである。床下には、P2から壁の間に、不整形の土坑が検出されている。これは、掘方土坑とは言えない浅い土坑状の窪みであり、埋土も貼床層と同層である。掘方の底面が窪んだものであろう。

### 3. SI115

**(立地・規模・形態)** G区中央で中央付近SI114の西側、 $\phi 37 \cdot 38Gr$ に位置する。削平の影響を受け、南側壁が確認できない程、床も削られてしまっている堅穴建物である。但し、深い掘方をもつため、堅穴規模を復元することは十分可能であり、ほぼ正方形を呈していたものと思われる。堅穴規模は、推定 $390 \sim 430 \times 360 \sim 400$ cmを測り、面積は15.58㎡になるものと思われ、いずれにせよ小型タイプである。壁ラインは、うねるようなラインをもつ東壁の他は、ほぼ直線を呈する。壁高は残存で最大10cmを測り、主柱は検出されず、カマドは北壁・東壁間に造り付けられている。主軸は $N \cdot 5^{\circ} \cdot E$ 。

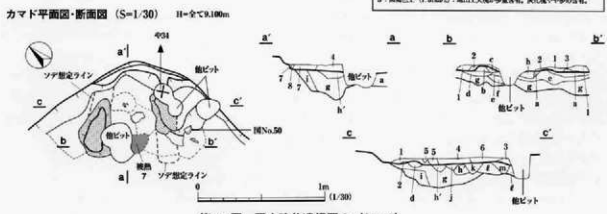
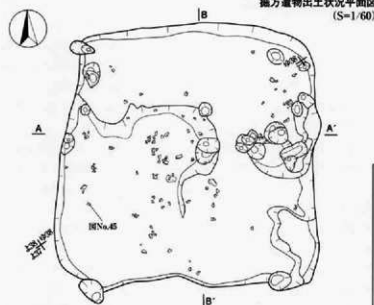
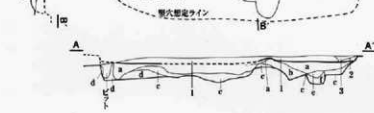
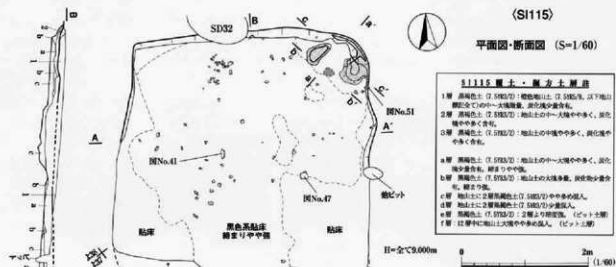
**(カマド)** カマドは、北壁と東壁の交差する壁間に造り付けられるコーナーカマドである。削平の影響と他ピットに切られていることもあり、その上ソデは廃絶時に破壊されたこととみえ、ソデ基部が部分的に残る程度である。壁隅の対角線上に焚口が設けられるタイプで、ソデがハの字に配置され焚口が開き気味、奥へ行くに従い窄まる形状をもつものと思われる。規模は縦長77cm、横幅65～80cmを測り、焚口幅は推定内寸が35～40cm、ソデ厚は残存で15～25cmを測る。床面は、焚口から奥壁に至る中程までの範囲で焼土や炭が多く、内部は平坦を呈し、奥壁で若干の段をもつ。カマド貼床は、堅穴貼床と同時に施されたと考えられ、堅穴貼床同様に深い掘方が認められる。

**(覆土堆積と遺物出土)** 覆土は、壁際で埋土に地山褐色土がやや多く含有する壁崩壊土と考えられる堆積物が認められる他は、黒褐色土に微量の地山褐色土が含まれる単層で、削平のため基本的に薄い。出土遺物の状況は、検出された床範囲から土器細片が出土し、カマド左付近に集中が認められる。また、掘方から出土する土器細片は多く、鉄滓の出土が目立つ。出土遺物は総数で、須恵器食膳具39点、須恵器貯蔵具27点、土師器食膳具17点、土師器煮炊具220点、石製品2点、中世土師器食膳具3点である。なお、須恵器食膳具には、内底摩耗痕・油痕をもつものが5点出土している。時期は、IV 1～IV 2古期が主体である。

**(床の状況と床被熱・掘方)** 検出された全ての床には、貼床が施されている。貼床は、全体が黒褐色土ベースであり、床土そのものは覆土層とそう変わらないもので、覆土よりもやや締まりをもつ程度の堅さといったものである。床面は基本として平坦であったものと考えているが、北壁際では若干の窪み、中央付近には凸状の出っ張りも認められる。また、カマドから西壁と南壁の接点に向かって、床面が低くなっており、カマド手前の床高さよりも10cm下がっている。なお、平面図において、壁際付近では地山褐色土がベースとなる箇所をもつが、床そのものが破壊されている箇所でもあるため、掘方土として扱うべきものである。よって、基本的にはA層が貼床となる。この貼床は基本的に非常に厚いものである。但し、厚さに均一性がなく、最も薄い部分で4cm、最も厚い部分で24cmを測るものである。更に下層に掘方土が認められるが、貼床と同厚以上で、貼床を含む掘方の深さは12～26cmを測る。掘方には、明確な掘方土坑は検出されておらず、掘方底面が凸凹で、不整形の窪みを呈しており、出土遺物は多い。

### 4. SI116

**(立地・規模・形態)** G区東寄り、SI112とSI114の間に位置するもので、 $\phi 35Gr$ 内にあたる。西側一帯が土坑SK365により切られているため、カマドの殆どと堅穴の半分近くを失っている。カマドは中央から西寄り



第15図 竪穴建物遺構図6 (S1115)



に造り付けられており、煙道を戸外に向かい長くもつタイプで、SI114と似た形状をもつものである。柱穴は竪穴の四隅に位置するように配置される4本主柱で、竪穴主軸はN-13°-W、SI114と同主軸にもつ。竪穴は隅丸長方形であり、規模は380×408×470×480cm、面積18.72㎡と小型の部類に入る規模をもつ。なお、竪高は30～38cmである。

(柱穴) 4本主柱が屋内の竪穴四隅に位置しており、柱穴の規模は径40～60cm、深さ20～26cmである。竪穴建物の柱穴は深いものが多いことが特徴でもあるのだが、当竪穴は非常に浅い。当竪穴は、竪穴外へ延びる建物空間が存在したと予想され、竪穴外で屋根を支える構造が、屋内での柱をこのように浅くても可能にしたのではないかと予想している。但し、これは予想であって、屋外での柱穴は特定できず、検出されていない。さて、4本主柱では、P3が外側に若干ずれているため、柱間寸法は、P1・P2間が370cm、P2・P3間が260cm、P3・P4間が386cm、P4・P1間が276cmとなる。これらの柱は建物廃絶時に抜き取られており、P2とP3においては建物軸に対し左側、西方向へ柱を抜き取っている。なお、柱穴覆土では、P4において地山土に入り込む形で柱下底面と考えられる層が検出されており、柱を突き刺して根腐れをおこした可能性、若しくは偶々突き刺さった状態であったが廃絶時に抜き取られた「柱のあたり」と考えられるような層を検出している。いずれもこの層の径は13～14cmである。

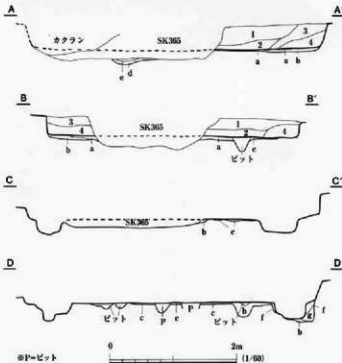
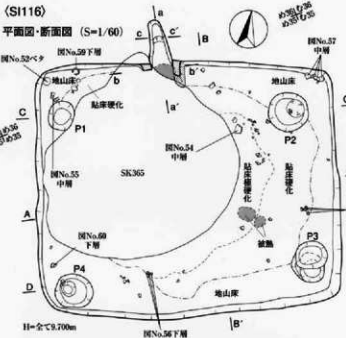
(カマド) カマドは、前述したように焚口を含め多くの部分が土坑により破壊されている状態だが、北壁中央からやや左寄りの位置に壁に直行して付設する。煙道が屋外にそのまま真っ直ぐに延びる、戸外直結煙道型カマドである。カマドの規模は、縦長が残存外寸で40cm、横長が残存外寸で74cm、ソデ厚は16～25cmを測る。煙道長は、壁から屋外へ向かい65cm、煙道幅は外寸で20～35cmを測る。焚口幅は、ソデから復元すると推定で36cmになるものと思われる。SI114に付設するカマドと非常に似ているが、当カマドは規模を縮小させた印象である。カマド内部は、竪穴壁際まで赤黒く被熱する状態であり、また右ソデ内面にも被熱層が認められる。焚口手前が破壊されていることから考えても、本来はもっと手前まで焚口は延びていたと予想されるため、床の殆どが被熱する位、非常に火の廻りがよかつたものと考えられる。床は、屋外へ延びる煙道も含め、全面貼床が施されており、貼床土にはカマドソデ土と同じ褐色粘土塊が貼られている。カマド内部では、焚口側から奥へ向かい15°傾斜を保ち、セクションポイントCライン地点より奥は緩やかになる。残存するソデの状態から、基底部からそでが上方へ直行して延びていたと考えられる。なお、建物貼床よりもこのカマドの貼床を先に構築しており、ソデ土には粘土を主体に黒褐色土や暗褐色土を混ぜたものを使用している。

(床の状況と掘方・床被熱) 床は、SK365により失われている部分が多いが、残存部分から、4本主柱を結ぶライン内側一体に貼床を施し、外側つまり柱から壁までの空間は地山床としている。貼床部分は硬化面をもち、特に中央付近では著しく硬化し、凸凹状を呈している。このような凸凹状が残るのは、建物廃絶後に直ぐに埋め戻されたことによりバックされた状態を示すと考えられており、当竪穴も廃絶後に時間をおくことなく埋め戻された結果であろう。残存する床面は平坦で、貼床自体も2～6cmと薄いものである。貼床土は、黄褐色粘土をベースにしており、中央は黄褐色粘土そのものに近い状態、周りには黄褐色粘土に4割灰褐色土が混在する土を使用する。床の硬化面がカマドと相対する壁である南壁中央へやや延び気味となる箇所があるため、この南壁中央が当竪穴の入口になる可能性がある。床面の中央から南東寄り、床面被熱を2カ所検出している。貼床が被熱する処と考えられるものであり、1つは、長径28cm短径22cm、もう1つは長径19cm短径16cmの規模を測る。

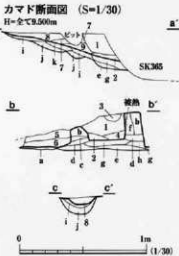
竪穴東側のカマドからP2・P3を含む一帯にゆるりと折れ曲がるような大型の掘方土坑が検出されるが、これも非常に浅く最大深5cmであり、掘方土坑というよりも、掘方の窪みと表現した方が的確ではないかと思われるものである。

(覆土堆積・遺物出土) 覆土は、黒褐色土(10YR3/2)をベースに、褐色土・地山や黒褐色土塊の形状や含有率で層分けされているものである。3層・4層は、地山褐色土が粒状で極多量に混在するものであり、壁崩壊土の可能性が高い。1層・2層は、殆ど同一層でも差し支えない位の違いは少なく、一括で埋め戻された可能性が高い。覆土からの出土遺物は、土坑に切られているためか全体として少なく疎らで、比較的上層からが多い。竪穴床面から出土する遺物は僅少だが、北壁・西壁境で完形品が床直上で検出されている。床直上は、床面よりも若干浮いた状態で検出されたものであり、屋外が棚として使用された可能性もたれよう。

出土遺物は総数で、須恵器食器具179点、須恵器貯蔵具49点、土師器食器具79点、土師器煮炊具286点、石

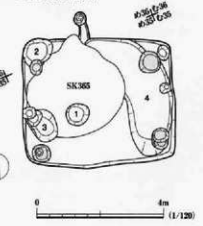


S116 壁土・周方土層	
1層	黒色土 (17354) 焼土の多い中層
2層	黒色土 (17352) 焼土の小・中塊多量含有。焼土上中塊少量含有。焼土中塊・焼土中塊少量含有。
3層	黒色土 (17351) 焼土の上(17351)とごとの大塊で隔てる。焼土の小・中塊多量含有。焼土小塊・焼土小塊少量含有。
4層	黒色土 (17350) 焼土上中塊多量含有。焼土の小・中塊多量含有。黒色土上中塊多量含有。
5層	赤褐色土 (17349) の塊層。壁化している。炭褐色土 (17348) が断面に並ぶ (1) 断面。炭灰粉少量含有。締まり強い。粘質。
6層	赤褐色土 (17346) 炭・17346 中・炭褐色土の炭土 (明礬) (炭塊 4)。締まり強い。
7層	赤褐色土 (17345) 黒色土 (17345) が 4 断面。締まりあるが、壁化している。炭灰粉少量含有。
8層	黒褐色土 (17344) 赤・17344 中・黒褐色土 (17344) が 4 断面少量含有。焼土中塊多量含有。締まりなく。粘りて凝結。
9層	赤褐色土 (17343) の焼土と赤褐色土 (17343)。炭褐色土 (17343) の断面 (赤 (1) 炭 (2) 炭 (3))。焼土中塊少量含有。
10層	赤褐色土 (17342) ペーストに。焼土 (17342) と赤褐色土 (17342) の中塊少量 (炭 (3) 炭塊 4 (炭塊 2))。粘りて凝結。
11層	炭褐色土 (17341) 黒褐色土 (17341) 中塊・大塊の層が凝結。赤褐色土 (17341) 中塊少量。

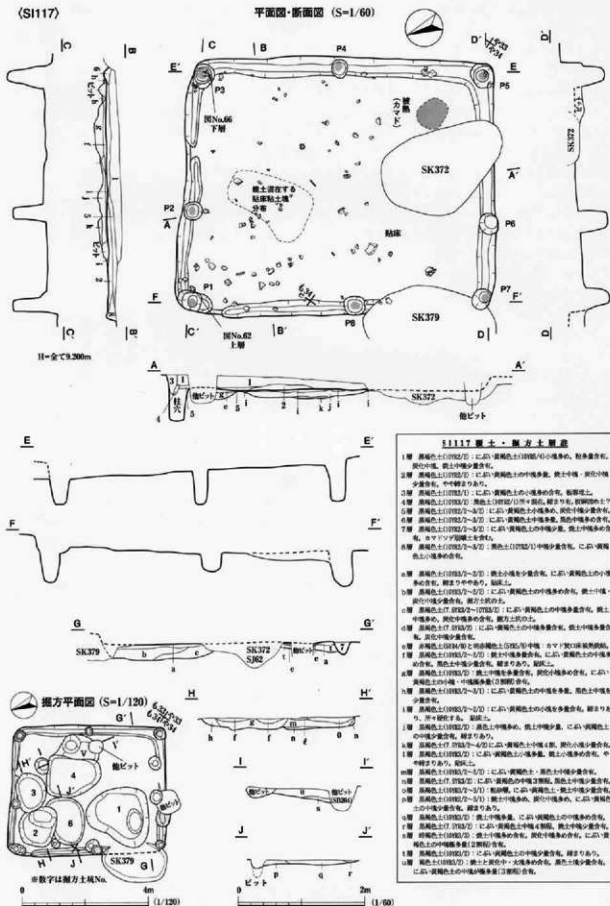


S116 カマド壁土・周方土層	
1層	黒褐色土 (17341) 2層。赤褐色土 (17341) の中塊・中塊多量少量含有。黒土上・焼土中塊多量含有。
2層	黒褐色土 (17341) 2層。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。
3層	黒褐色土 (17341) 2層。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。
4層	黒褐色土 (17341) 2層。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。黒褐色土 (17341) の中塊少量含有。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。
5層	黒褐色土 (17341) 2層。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。
6層	黒褐色土 (17341) 2層。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。
7層	黒褐色土 (17341) 2層。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。
8層	黒褐色土 (17341) 2層。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。
9層	黒褐色土 (17341) 2層。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。
10層	黒褐色土 (17341) 2層。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。
11層	黒褐色土 (17341) 2層。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。
12層	黒褐色土 (17341) 2層。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。
13層	黒褐色土 (17341) 2層。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。
14層	黒褐色土 (17341) 2層。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。
15層	黒褐色土 (17341) 2層。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。
16層	黒褐色土 (17341) 2層。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。赤褐色土 (17341) の中塊少量含有。

壁方平面図 (S=1/120)



第 16 図 壁穴建物遺構図 7 (S116)



第17図 竪穴建物遺構図B (SI117)

製品9点、中世土師器食器15点、中世陶磁器5点である。須恵器食器には、油痕・内底摩耗痕・墨痕をもつものが11点出土する。床に張り付いて出土する完形の坏日蓋がI 1新期にあたり、この他覆土の下層や中上層から出土する遺物の主体がI 1期である。中世遺物が出土するが、混入したものなのだろう。

#### 5. SI117

〈立地・規模・形態〉 SI116の南側に隣接する竪穴建物で、G地区も・や34Grに位置する。2基の土坑により一部を消失し、上面削平により竪穴の南部分を削られているもので、壁支柱と壁周溝を伴う壁式建物である。竪穴規模は410×484～500cmを測り、面積は20.17㎡と、小型タイプの竪穴となる。壁高は12～25cm残存し、竪穴の平面プランは長方形、カマドは検出されず、被熱面のみが検出されている。主軸はN-112°-E。  
 〈壁周溝・壁支柱〉 竪穴の南側区域一帯が削平されているものの、壁周溝と壁支柱は床面より低いレベルにあるために残存していたものである。

壁周溝は上端幅が22～34cm、深さ16～20cmを測り、壁際を全周しておらず、北西壁と南西壁の一部分13cmと16cmに渡り途切れている状況である。壁周溝内には、壁支柱が配置されているが、掘立柱建物のように柱筋は全く通らないものであり、また柱間寸法も不揃いである。壁支柱は1辺に3本が配置され、計8本で構成されており、支柱の規模は径30～38cm、深さは50～64cmを主体として最も浅いもので30cmを測る。深さは、Fラインにて旧地表に添った深さを呈し、P8は浅い。これら以外は、同じような深さを呈している。P6・P7を除く6本で柱圧痕が検出されており、径は10～12cmを主体に最大で14cmであった。

壁支柱の土層から、当建物廃絶時に基本的に抜き取って埋め戻しているものと考えられるが、P2・P4・P6では、下底から30～35cm地点で柱痕と思われる土層が認められ、これに被さるように上層に埋土が認められるため、これらの柱は根腐れをおこしたのか、途中で切られるかして残されたものではないかと思われる。また、これらの柱の径はP2で10cm、P4で12cm、P6で10～12cmであった。この他のものは全て抜き取られており、P7のみ「柱のあたり」を確認することができる。この径が10cmであった。また、P3・P4・P7において柱穴下底の地盤固めと考えられる締まりの強い層を検出している。

#### 〈床の状況・カマド被熱・掘方〉

竪穴の南側区域一帯が削平されている関係で、カマドとなるソダなどの検出はされていないが、カマド被熱のみ南東壁・南壁境付近で検出されている状況であり、この規模は長径50cm、短径42cmを測る。被熱のものは貼床が焼けたものである。よって、カマド貼床は別に設えられず、カマド床と竪穴床が一帯に貼床されている。カマドは壁に直行して付設されるタイプか、対角線上に狭口をもつコーナーカマドか、いずれかだろう。床は、前述の削平関連で一部が消失されているものの、復元が十分可能な状態であり、床そのものはフラットを呈して、全面が黒褐色系を主体とする貼床である。貼床土は、2～6cmの薄いもので、床下には、南東壁端と東北壁端を除く全ての区域で、ひしめくように配置する掘方土坑6基が検出されている。

〈覆土堆積・遺物出土〉 覆土では、3層のような板層埋土、4層のような板層を裏込めた掘方埋土とも言うべき層を、北壁側で良好な状態で検出している。この他、床のすぐ上面に2層や5層などの層が認められ、1層は2層と非常に似ており、同層でもよいものと判断可能であろう。2層や5層においては、壁式建物としての壁の関連とも言えるものかもしれないが、その見極めに際し決定的となりうる根拠が見いだせないのである。よって、恐らく一括で埋め戻されたものとするのが妥当かと考えている。出土遺物は、削平の少ない区域から満遍なくどき細片が出土している。床に張り付いた状態で鉄滓が多い他、掘方埋土に混じって多く出土している。

出土遺物は総数で、須恵器食器181点、須恵器貯蔵具49点、土師器食器26点、土師器煮炊具461点、内底摩耗・墨痕をもつ転用碗を含む土製品2点、石製品3点、中世土師器食器87点、白磁陶の中世陶磁器3点である。この内、須恵器食器においては、内底摩耗痕・墨書・油痕をもつ破片が11点確認されている。時期については、建物内出土で張り付きや床直上のものは少ないが、掘方出土のものがⅡ2～Ⅱ3期を示しており、当建物もこの時期になるものと思われる。

#### 6. SI118

〈立地・規模・形態〉 H地区でもG地区・F地区との境、む32Grに位置するものである。中央に溝状遺構SD42、掘立柱建物の柱穴などに切られて部分的に破壊されている竪穴建物で、北東壁側が外側へ出っ張る形をとるため、全体として歪な方形プランを呈す。規模は340～360×310～320cmを測り、竪穴面積は11.02㎡、

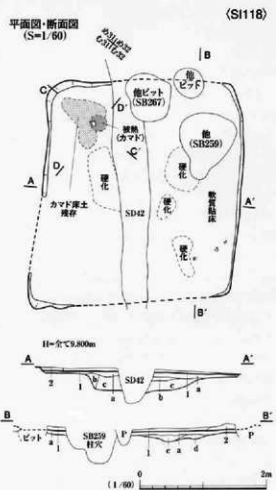
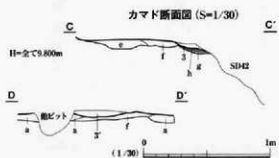
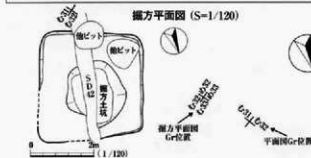
壁高は5cm未満と非常に浅いもの、南東壁隅にカマドを有している。なお、柱穴は検出されていない。当壁穴の規模や無柱穴という状況から、掘立建物に付設する土間の性格のものとしても検討してみたが、唯一主軸の揃うSB302は片廂建物であった。主軸はN-160°-W。

〈カマド〉 カマドは、壁穴の南東壁際に造り付けられて、対角線上に焚口を設けたものである。壁高からみてもわかるように、削平が著しい。よって、カマドそのものもソデは認められず、カマド基底土の痕跡と焚口被熱がかろうじて残存している状況である。これらから、カマド規模は縦長80cm、横長70cm程。焚口幅は内寸で25cm程度になろうと思われ。カマド内部の床土は、カマド構築のために貼られたものであり、焚口付近においては壁穴貼床と同時並行にて構築したようである。なお、カマド焚口被熱は、吸炭し黒色化した地山被熱であり、炭結して極めて固い。

〈床の状況と掘方・遺物出土〉 検出された床全面には貼床が施されており、貼床土は黒褐色土を主体にふい黄褐色土が多量含有する、所謂黒褐色系の貼床である。この貼床では、5カ所の極狭い範囲にのみ硬化が認められるもの、これら以外は軟質である。貼床の厚みは6cm程で、平坦面を形成している。床下には中央に大型の掘方土坑1基が検出されている。床面より深さ30cmを測り、底面をほぼ平坦にもつ、しっかりと掘り込まれた土坑である。

出土遺物は総数で、須臾器食膳具7点、須臾器貯蔵具2点、土師器煮炊具17点、中世土師器食膳具1点である。唯一カマド付近から出土する小型鍋がI期?と判断されるが、他の煮炊具でII期やIII期と判断されるものも出土している。壁穴構造から時期を判断すれば、III期以降である8世紀以降が妥当と思われる。

- 2118層土・竪穴(カマド)土層図**
- 1層 黒褐色土 (17782) にふい黄褐色土(17854)・灰中少量含有。黒色土中少量含有。壁穴床土。
  - 2層 黒褐色土 (17782-5)にふい黄褐色土の中量含有。壁穴床土。
  - 3層 黒褐色土 (17782) 硬質土(17857)及びふい黄褐色土(17787)に因って削けた粘土層が特徴。炭化、炭結した地山が少量含有。カマド床土。
  - 4層 黒褐色土 (17782) 硬質土(17857)の中量含有。炭化中量含有。カマド床土。
  - 5層 黒褐色土 (17782) にふい黄褐色土(17854)中量含有。黒色土中少量含有。削平残存。壁穴の掘削面。
  - 6層 黒褐色土 (17782) にふい黄褐色土(17854)中量含有(3期)付。黒色土が少量含有。
  - 7層 黒褐色土 (17782-5)にふい黄褐色土の大量・中量含有。黒色土中少量含有。硬まりあり。
  - 8層 黒褐色土 (17782) にふい黄褐色土(17854)大量付。黒色土中1割が認められる。
  - 9層 黒褐色土 (17782) にふい黄褐色土(17854)少量付。炭化中少量含有。カマド土。
  - 10層 黒褐色土 (17782) 硬質土(17857)の少量付。炭化中少量含有。カマド土。
  - 11層 黒褐色土 (17782) 硬質土(17857)に炭化した地山。炭化した地山被熱の跡。カマド床土。
  - 12層 にふい黄褐色土 (17854)に炭化した地山。炭化した地山被熱の跡。



第18図 壁穴建物遺構図9 (S1118)

## 第2項 掘立柱建物

今回報告区域の対象となる掘立柱建物は、SB246～259・263～276・280～286・289～302・321～325である。この内、調査区が年度をまたがったことにより、欠番となったものはSB290・296～300である。この他にも、やはり調査が年度をまたがったために、当初付した遺構番号で調査されたものが、新たな番号で調査されたいた遺構へ吸収され欠番となったものがある。それは、SB260・SB263・SB301で、SB260はSB259へ吸収され欠番に、SB263はSB265へ吸収され欠番に、SB301はSB259と一体の建物と判明して欠番となったのである。よって、今回報告する掘立柱建物は46棟となる。

今回報告する区域には、G地区を中心にF地区・H地区の境にあたる位置で、建物密集が認められる。これは、前回までの報告分であるB地区・C地区を中心とした舌状のテラス面という地形の西南部末端に今回報告区域が位置することによる。要するに、本遺跡の平場に極めて多くの遺構が認められ、今回区域はその西側末端となる。

今回報告区域から検出された掘立柱建物の基部構造を見てみると、側柱建物、片廂建物、四面廂建物、総柱建物、そして、古代末頃から登場して中世へと繋がってゆく大型の総柱建物、床東建物と言ってもいいのかもしれないが、要するに低床構造である総柱建物が検出されている。これら建物の検出数と割合は、側柱建物が23棟で全体の50%、次いで高床の総柱建物が11棟で24%、低床の総柱建物が10棟で22%、片廂建物和四面廂建物はそれぞれ1棟ずつである。前回区域に比べ、さらに低床タイプの総柱建物が増えている状況である。

文中表記では、長軸側を桁、短軸側を梁として、桁行×梁行として表示する。建物主軸については、桁行を主軸と設定して、北からの角度を表示した。但し横向きに配置するものに関しては考えられる主軸を提示した。掘立柱建物の各名称は、奈良文化財研究所2003『古代の官衙遺跡 1遺構編』を参考にした。出土遺物については出土量を破片数換算で数量とし、時期については田嶋明人氏の北陸古代土器編年で表記する。なお、遺構図内の柱穴内のアミ点は柱圧痕を示す。

### 1. SB246

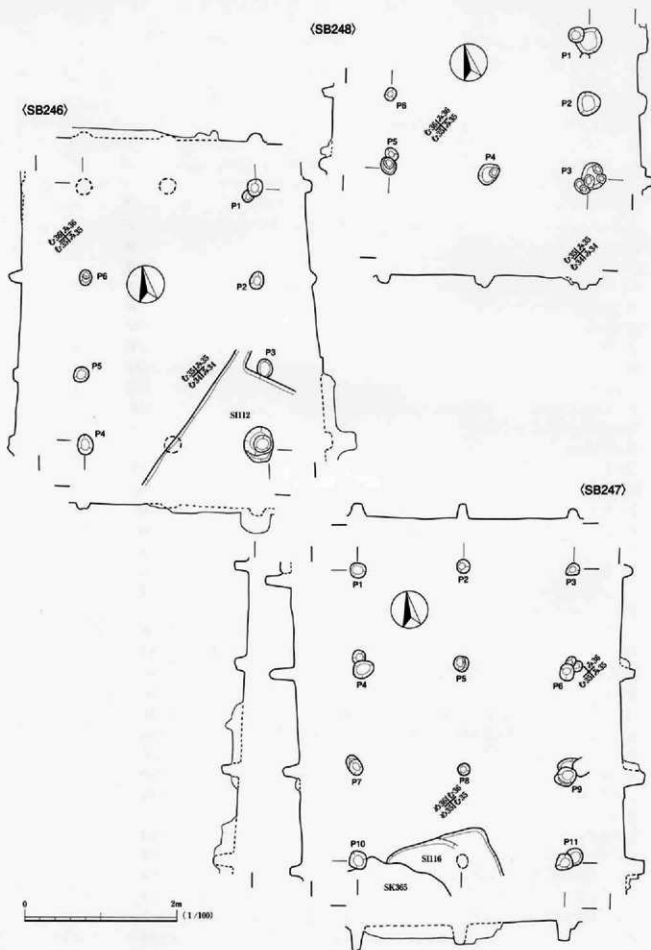
F地区・G地区の境、み・む-34・35Gr、建物密集区北側に位置するものである。上層削平とSII12との重複により、3本の柱を消失するが、3間×2間の側柱建物復元が十分可能で、建物規模は、桁行6.8m、梁行4.6mを測り、建物面積31.28㎡である。主軸はN-10°-E。柱穴掘方プランは円形を呈し、径40cm主体で、深さは12～32cm、基本として旧地表に添った深さをもつものと考えられるが、P6のように突出した深さをもつ柱穴もある。柱間寸法は、桁間184～256cm、梁間は測定不能だが230cm程になるものと予想される。柱筋の通りでは、P3・P5・P6が若干のずれをもつものの、通らないということはない。なお、柱は建物廃絶時に抜き取られ、埋め戻されている。出土遺物は、須恵器食器1点、土師器煮炊具3点で、時期はIV～VI?期にあたる。

### 2. SB247

G地区でF地区との境、み・む-35・36Gr、建物密集区北側に位置する、低床の総柱建物である。建物規模は、桁行7.72m、梁行5.4～5.6m、3間×2間で、面積は42.46㎡を測るが、南梁行が若干狭いため建物全体が若干台形状を呈している。建物主軸はN-10°-E。柱間寸法は、桁間240～272cm、梁間280cmを測り、柱穴プランは、円形、方形状、不整形円形を呈す。径は44cmを主体に34～52cm、深さは24～64cmを測って、基本的に旧地表に添っているものの中柱を深くするものが多く、総じて柱穴は小規模で深いものである。柱筋の通りは、桁行・梁行とも概ね良好で、中柱であるP5・P8も基盤目状の柱筋に通って配置されている。覆土層から柱の地盤固め土と考えられるような埋土がP4・P8・P9に認められ、また柱は建物廃絶時に抜き取られている。なお、柱穴際に小ビットが検出されているものがあり、添柱が存在した可能性をもつ。出土遺物は、須恵器食器6点、須恵器貯蔵具3点、土師器煮炊具4点、中世の土師器食器9点である。

### 3. SB248

F地区とG地区の境である、み・む35Gr、建物密集区北側に位置し、削平により建物北側を大きく消失する側柱建物である。桁行残存3.6m、梁行5.2m、推定で3間×2間若しくは4間×2間になるものと思われ、推定面積は30㎡前後になるものと考えられる。建物主軸は、N-15°-Eをとる。柱穴掘方プランは基本として円形を呈すが、西桁行側で方形状のプランも認められることから、本来は方形掘方プランであった可能性をもつ。柱穴規模は、径28～68cmを測るものの、西桁行側が削平のため径が小さく、64～68cmを主体としてよいだろう。深さは24cmと一定を示し、段掘されるものもある。また、深さは旧地表に添ったものとなっている。柱間寸法



第19図 独立柱建物遺構図1 (SB246・SB247・SB248)

は、桁間 160～200 cm、梁間 260 cm を測る。柱筋の通りは良好であり、柱は建物廃絶時に抜き取られ埋め戻されている。出土遺物は、須恵器食膳具 2 点、土師器煮炊具 3 点であり、時期は V 期? にあたる。

#### 4. SB249

建物規模が、桁行 7.8～8.4 m、梁行 4.4～4.8 m、面積 37.26 m<sup>2</sup> を測る、4 間×2 間、低床の総柱建物である。G 地区・F 地区の境、む 33・34Gr、建物密集区の中央東側に位置する。桁行・梁行寸法が統一されていないため、全体的にひしゃげた建物プランとなっており、建物主軸は N-8° -E をとる。柱間寸法は、桁間 2.12 m・2.16 m、梁間 2.12～2.68 m を測る。柱穴掘方プランは、円形、方形、長方形で、柱穴規模は径 40 cm を主体として 48 cm まで測り、深さは 24～48 cm を測る。柱筋の通りは、P9 が外側に若干ずれるものの桁行・梁行とも概ね良好で、掘方配置は、方形・長方形プランをもつ P2・P4 が斜めに配置されている。土層断面から、柱は廃絶時に抜き取られ埋め戻されている。出土遺物は、須恵器食膳具 2 点、須恵器貯蔵具 2 点、土師器煮炊具 11 点、中世土師器食膳具 4 点である。

#### 5. SB250

建物規模が、桁行 13・13.48 m、梁行 8・8.2 m、建物面積 107.24 m<sup>2</sup> を測る、5 間×3 間の低床の総柱建物である。この建物は、当報告区域の建物密集区の北西中央に位置、も 35～37・や 36・め 34・35Gr にあたる。柱間寸法は、桁間 200～320 cm、梁間 260～312 cm を測り、建物主軸は N-107° -E もしくは N-16° -E になるものと考えられる。柱穴は、円形や楕円形を基本とし、一部に方形も認められる。柱穴の規模は、径が 40～48 cm 主体、深さ 44～52 cm 主体で最も浅いもので 12 cm である。また、柱穴には底面が窪むものが多い。柱は、廃絶時に抜き取られて埋め戻されているが、'柱のあたり' は確認でき、その径は 20 cm 程である。柱穴には小ビットが接して検出されているものがあり、添柱をもっていた可能性がある。深さについては、基本として旧地表に添ったものが殆どだが、四隅を深めにもつものや、中柱を深くするものもある。当建物は、東側半分の柱の並びが悪く、建物全体が歪になる。しかし、西側半分は柱間寸法も統一されていることから、建物の東側と西側では様相ががらりと違っている。よって、東半分側の柱筋の通りは悪く、西側半分側の柱筋の通りは良好である。ちなみに、西半分にあたる P11 から P22 では桁行側の柱間寸法は 280 cm、梁行側に柱間寸法は 260 cm・280 cm であった。出土遺物は、須恵器食膳具 30 点（内面底部に摩耗痕跡 5 点含む）、須恵器貯蔵具 6 点、土師器食膳具 1 点、土師器煮炊具 34 点、土製品 1 点、石製品 3 点が古代遺物であり、時期は III～V 期にあたる。その他、中世土師器食膳具 27 点が出土する。

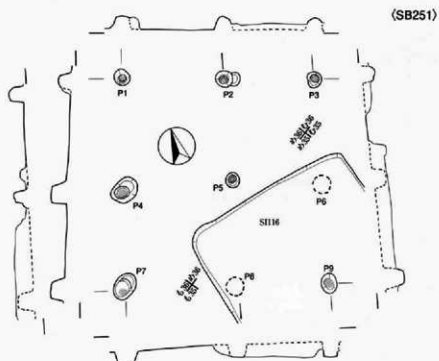
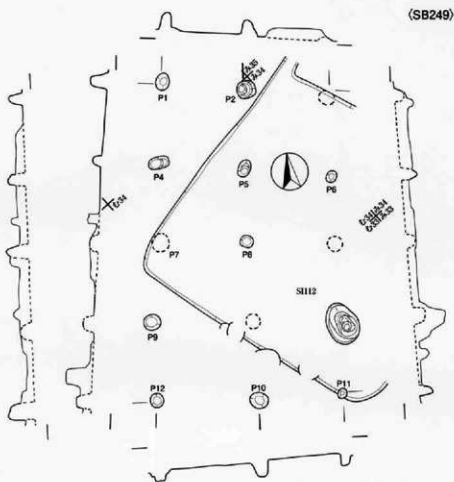
#### 6. SB251

G 地区め 35、め・も 36Gr、建物密集区北側に位置する総柱建物である。建物規模は、桁行 5.4～5.6 m、梁行 5.12～5.4 m の 2 間×2 間、面積は 28.93 m<sup>2</sup> を測り、N-17° -E に建物主軸をとり、全体的に建物プランが若干歪む。柱間寸法は、桁間 272～292 cm、梁間 240～272 cm を測り、掘方柱穴プランは、円形、長方形、楕円形を呈し、柱穴規模は、径 44 cm を主体に最大で 72 cm、深さは 36 cm を測る。建物廃絶時に柱は抜き取られているが、'柱のあたり' がみられ、この径が 20 cm 程であった。また、柱穴底面には、底面が若干窪む状態で柱圧痕が検出されており、この径が 16～22 cm で、22 cm に近いものも多く主体になるものと思われる。柱筋の通りは良好だが、これは建物歪んだ状態、隣柱が直行しない状態での通りであり、隣柱を直角に保てば柱筋は通らなくなる。なお、深さについては、旧地表に添ったものとなっている。出土遺物は、須恵器食膳具 7 点、須恵器貯蔵具 3 点、土師器煮炊具 3 点、中世土師器食膳具 13 点である。

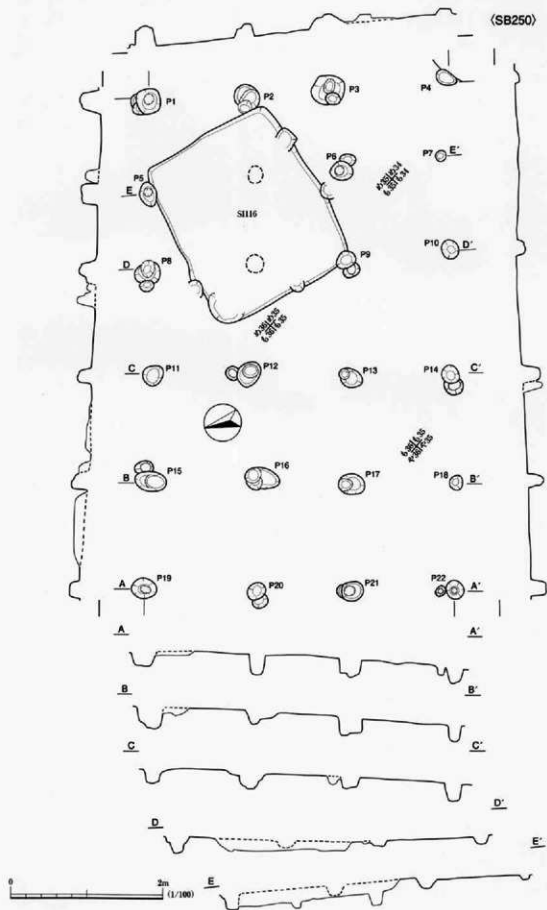
#### 7. SB252

建物規模が、桁行 7.2～7.8 m、梁行 4.2～4.72 m、建物全体が酷く歪んでおり、P1 が大きく飛び出す形状の偏柱建物である。3(4)間×2 間、面積 33.45 m<sup>2</sup>、建物主軸は N-17° -E。G 地区む・め - 34・35Gr、建物密集区域の北側に位置する。SK355 土坑や S116 竪穴建物とも重複するため、西側桁行の柱穴が多く消失する状態であり、P1 も本来 SK355 に取まる形で位置していた可能性は否めない。柱間寸法は、桁間 200～252 cm、梁間 180～300 cm である。P2～7 の掘方プランは、良好な状態で方形を呈す。径は 52 cm が主体、深さは 40 cm 主体、P2～6 では柱圧痕が認められ、この径が最大 20 cm である。柱は、建物廃絶時に西方向へ抜き取られたようである。なお、土層断面にて '柱のあたり' が確認でき、この径は 15～20 cm であった。柱筋の通りは不良で、桁行では西側の P4 が内側に、梁行では P2 が内側にずれるが、前述したように P1 位置によって柱筋は通ることとなる。

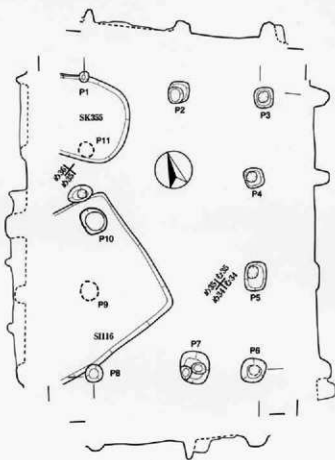




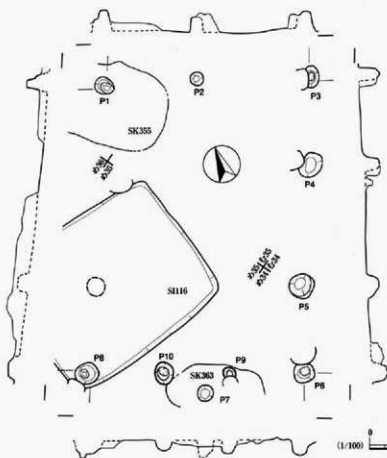
第20図 掘立柱建物遺構図2 (SB249・SB251)



第21圖 掘立柱建物遺構図3 (SB250)

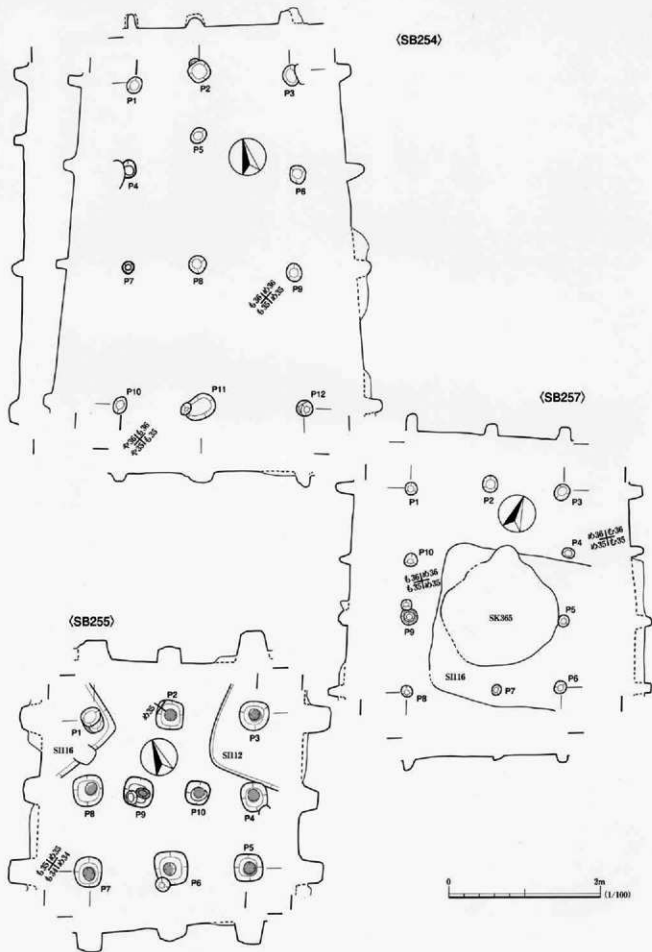


(SB252)



(SB253)

第22図 掘立柱建物遺構図4 (SB252・SB253)



第23図 掘立柱建物遺構図5 (SB254・SB255・SB257)

また、掘方配置については、建物の主軸に添って配置するものあれば、P4のように斜めに配置されているものもあり、統一感は弱い。なお、この建物はSB253と同位置で、SB253を切って建てられていることが土層断面で確認されているが、出土遺物の時期は逆である。出土遺物は、須恵器食膳具5点、須恵器貯蔵具4点、土師器煮炊具18点で、時期はⅡ2期を主体としている。その他、中世土師器食膳具6点が出土している。

#### 8. SB253

SB252と同位置に建てられた3間×3(2)間の建物で、規模は、桁行7.6～7.8m、梁行5.2～5.76m、建物面積42.2㎡。P7が検出されていることから棟柱建物の可能性をもつものの、建物プランは台形状をなし、その上P7が棟柱柱としては柱穴が浅いことから、棟柱建物として成立するか疑問をもつところである。建物主軸はN-22°-E。柱間寸法は、桁間232～312cm、南梁間172cm、北梁間300・350cm、掘方は円形を呈し、径52～60cm、深さ29～60cm、断面形状は柱位置が一段深くなる段掘のものが多く、深さは基本として旧地表に添いながら、隅柱が深くなる。柱筋の通りでは、桁行は悪く、梁行は良い。なお、廃絶時に柱は抜かれ埋め戻されている。出土遺物は、須恵器食膳具11点、須恵器貯蔵具4点、土師器食膳具5点、土師器煮炊具16点で、古代V期を主体にⅥ期までものが認められる。その他、中世陶磁器である白磁小皿1点、石製品1点が出土する。

#### 9. SB254

建物規模が、桁行8.52～8.8m梁行4.16～4.72mで、面積38.45㎡、3間×2間の低床タイプと考えられる総柱建物である。但し、P5やP8の配置からみてもわかるように、綺麗な基盤目状に配置されていないため、側柱建物の可能性も否定できない。柱間寸法も同じとなるものが1カ所もなく、P10位置以外は、角で桁行・梁行が直行しないため、建物自体が大きく歪んでおり、建物とするには疑問をもつところである。しかし、現地調査で、柱穴が小規模とはいえしっかりしており、結局建物として判断したものである。簡易な構造の建物なのであろう。建物密集区域の北西にあたる、G地区め・も-37・38Grに位置し、建物主軸はN-16°-Eをとる。柱間寸法は、桁間220～360cm、梁間172～260cmを測る。掘方プランは円形を呈し、柱穴規模は径が40cmを主体に最小で28cm、最大で54cm、深さは20～36cmを測る。深さについては、西桁行のみ旧地表に添うが、その他は旧地表に基本的に添いながらも、中柱が深いものや浅いものが見られる。柱筋の通りは、西桁行と南梁行は良好であるものの、北梁行のP5東桁行のP9がずれており、柱筋が通らない。建物廃絶時に柱は抜き取られ、掘方埋土が若干残る状態で埋め戻されている。出土遺物は、須恵器食膳具4点、須恵器貯蔵具5点、土師器煮炊具9点、中世土師器食膳具9点、石製品3点が出土する。

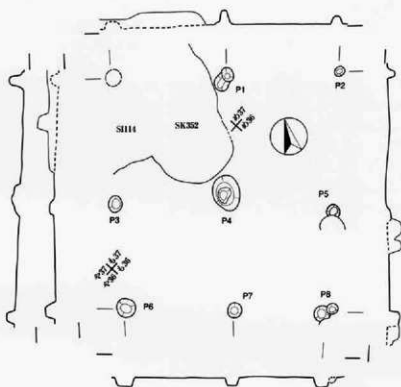
#### 10. SB255

遺構密集区域の中央、G地区際でH地区との境、む・め34Grに位置する。建物規模が、桁行4.04m梁行4.32mを測り、面積17.45㎡、2間×2間で、東柱を2本もつ総柱建物である。建物主軸はN-23°-E。柱間寸法は、桁間200・204cm、梁間212・220cmを測り、柱穴プランは方形を呈す。柱穴は、径72～76cmを主体に最大で86cm、深さ60～80cmで旧地表に若干深い、四隅が深めで非常にしっかりと掘り込まれたものである。柱穴底面には、若干の窪みをもつものが認められ、柱圧痕を全ての柱穴で検出、この径は30cm程度である。柱筋の通りは概ね良好であるが、P7のみ1本分外側へ飛び出すように配置される。方形プランの外側や内側ラインに縄張りをした可能性をもつ柱穴はP2とP3、P7とP8であり、方形ラインが揃うものの、この数本のみに限られている。しかし、総じてかなりの計画性をもって建てられた建物なのだろう。なお、廃絶時に柱は抜き取られている。出土遺物は、須恵器食膳具7点、須恵器貯蔵具3点、土師器食膳具4点、土師器煮炊具64点で、時期はⅤ2～Ⅵ期に位置づけされる。この他に、中世土師器食膳具5点、石製品3点で出土している。

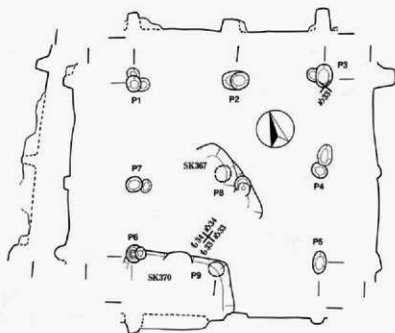
#### 11. SB256

建物規模が、桁行6.2m梁行5.2～5.8mで建物面積34.1㎡、2間×2間の低床の総柱建物である。遺構密集区域の北西端、G地区め・も-36・37Grに位置する。主軸はN-15°-Eで、柱間寸法は、桁間240・300・320cm、梁間280・300cmを測り、南桁行が狭いために台形状の建物プランとなっている。これは、南梁行のP7・P8間のみの柱間寸法が極端に狭いため、P8がこの建物に伴わないという可能性がよぎるが、現地調査で他に良好な柱穴はなかったため、伴うものと判断された。また、このP8の大きなずれにより、東桁行の柱筋は通らない。柱穴プランは円形を呈し、径34～48cm、深さは24cmを主体に最大で40cm、最小12cmを測り、建物廃絶時に、柱は抜き取られている。柱筋の通りでは、桁行は通りが悪く、梁行は良好であり、出土遺物はない。

(SB256)



(SB258)



0 2m  
(1/100)

第24図 掘立柱建物遺構図6 (SB256・SB258)

## 12. SB257

建物規模が、桁行5.2～5.4 m、梁行4.0 mを測り、建物面積21.2 m<sup>2</sup>、3間×2間の側柱建物である。建物密集区域の北西端、G地区めも-33・34Grに位置し、建物主軸N9°-W、南梁行が若干歪な建物プランをもつ。柱間寸法は、桁間148～200 cm、梁間160～208 cmで、柱間寸法が一致する箇所はない。柱穴掘方プランは円形を呈し、径28～40 cm、深さは36 cmを主体とする。四隅を深く掘り込むタイプで、柱穴は規模が小さく細長いものである。柱筋の通りは、東桁行のP4が外側に飛び出するため、通りは悪いものの、この他は良好である。出土遺物は須恵器食器1点、土師器煮炊具4点、石製品1点で、時期はIV 2期と位置づけされる。

## 13. SB258

建物規模が、桁行4.4～4.8 m、梁行4.8～4.96 mを測り、面積22.82 m<sup>2</sup>、2間×2間の総柱建物である。遺構密集区域の中央、G地区めも-33・34Grに位置し、土坑等数多くの遺構と重複する。どの隅も、桁行・梁行が直行せず、かなりひしゃげたプランとなっており、これで総柱建物として成立するのか疑問が残るところである。しかし、数多くの遺構と重複するにもかかわらず、しっかりと掘り込まれた良好な柱穴と言える。

建物主軸はN20°-Eをとり、柱間寸法は、西桁間が180・260 cm、東桁間が240 cm、梁間220～260 cmを測る。柱穴掘方プランは円形・楕円形で、添柱と思われる小ピットが検出されている。柱穴規模は、重複のため径そのものは小さいものが多く、径40～60 cmが主体になるものと考えられ、深さは32～60 cmを測って、基本として旧地表に添ったものとなっている。また、桁行側は中柱が浅い。柱圧痕が検出されており、その径は10～32 cmを測る。廃絶時に掘方埋土が残る状態で柱は抜き取られているが、抜き取り方向はランダムで、また、掘方埋土は黒褐色土ベースである。柱筋の通りは、南梁行P9が外側にずれるため悪いものの、他は良好である。但し、隅を直行させようとすると桁行・梁行とも柱筋は全く通らない。出土遺物は、須恵器食器2点、土師器煮炊具7点で、時期はIV期頃にあたるか。この他に、中世土師器食器6点、石製品3点が出土する。

## 14. SB259

四面廂建物である。身舎の規模が桁行4.92～5.2 m、梁行3.8 mの3間×3間に、四面の廂が取り付くもので、廂を含めた規模は、桁行9.0 m、梁行7.8 m、6間×5間である。建物面積は、身舎部分のみで19.23 m<sup>2</sup>、廂を含めた建物全体で70.2 m<sup>2</sup>である。建物主軸をN6°-Wにとる横配置の建物である。遺構番号について、側柱をSB259、入側柱をSB301として現地調査しており、ここでは一体のものとして報告する。

身舎は、東梁行が桁行と直行しないため、やや歪んだプランを呈している。身舎の主軸はN5°-Wを測るように、身舎と廂には僅かながら軸にぶれがあり、身舎である入側柱と廂である側柱の寸法が、北梁行側と南梁行側で僅かに違いが生じている。北桁行側の、入側柱と側柱間の寸法は、東側で216 cm、西側で208 cmであり、南桁行側では東側で200 cm、西側で212 cmを測る。とはいうものの、以上のことは非常に厳格に捉えた数値であり、入側柱と側柱の両者の配置においては、殆ど同じ軸上で合っているといえることができる。また、廂である側柱の配置は、身舎の柱筋の延長線上に位置しない身舎非一体型となっている。

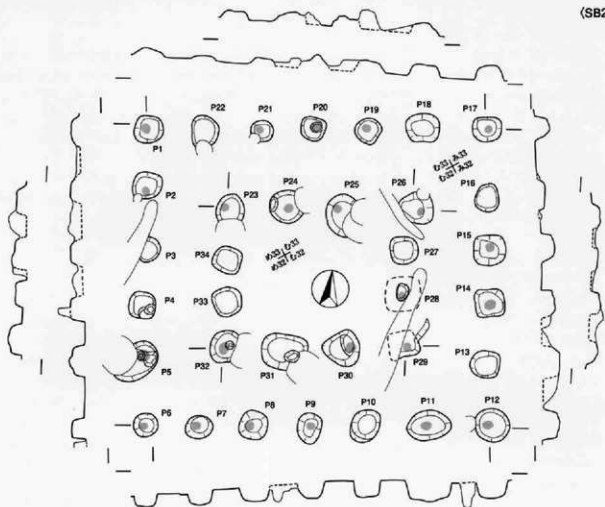
柱穴掘方のプランだが、方形を主体に円形、入側柱では不整形円形も認められるものの、本来は全て方形だったものと考えられる。柱穴の規模は、入側柱が径72～88 cmを主体に最大112 cm、深さは24～52 cmを測る。側柱では径72～76 cmを主体に、64～88 cmを測り、深さは32～40 cmを主体に最大56 cmを測る。身舎部分の柱穴規模の方が大きい。また、柱穴の深さは、基本的に旧地表に添ったものとなっているが、入側柱P6は深くなり、側柱のP16とP21・P22は浅い。

入側柱の柱間寸法は、桁間120～220 cm、梁間100・120・140 cmを測り、桁間寸法は全て異なっている。これに対し側柱での柱間寸法は、桁間が140 cmもしくは160 cm、梁間が140・160・180 cmを測る。南梁間の1区間のみが180 cmである以外は、140 cmか160 cmに寸法が統一されている。

柱穴内には、柱圧痕が多く検出されている。その径は、入側柱で14～22 cm、側柱で14～30 cmを測るように、意外と値に差があるものの、入側柱で20～22 cm主体、側柱で24～30 cmが主体であったものと考えられ、他は痕跡の一部が検出されたものであろうと思われる。柱穴底面には窪みが多く認められ、柱筋の通りは、入側柱が東梁行での通りが悪いものの、他は良好である。側柱においては全て良好な通りとなっている。

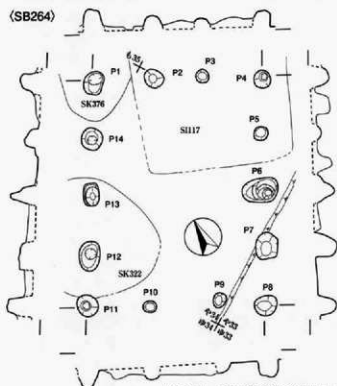
柱穴掘方の並びについて、入側柱・側柱とも縄張りしたような掘方外側の軸上の統一感は見られない。側柱は、建物主軸上に添うように掘方が配置されているものの、若干斜めに配置されているものもある。入側柱に至って

(SB259)

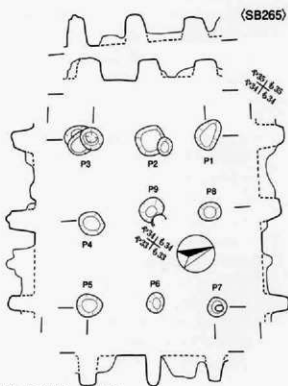


0 2m (1/100)

(SB264)



(SB265)



第25図 掘立柱建物遺構図7 (SB259・SB264・SB265)



は、方形プランが斜めに配置されるものが多く、方形を意識して掘り込んだだけのものと考えられる。土層断面から、入側柱埋土・側柱埋土ともに類似土や一部掘方土が残る状態の埋め戻し土を確認しているが、柱のあたりは検出されていない。出土遺物は、須恵器食膳具9点、須恵器貯蔵具3点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具23点であり、時期はⅤ2～Ⅵ2期に位置づけられる。その他、中世土師器食膳具5点が出土する。なお、入側柱のSB301柱穴はSB302に切られているのだが、出土遺物時期は逆となっている。

#### 15. SB264

建物規模が、桁行6.0m梁行4.52m、面積27.12㎡、4間×3間の側柱建物である。遺構密集区域の南側、G地区や33・34、は33Grに位置する。柱間寸法は、桁間140～168cm梁間120～180cm、建物主軸はN-28°-Eをとる。柱穴は、円形・方形・長方形・楕円形と様々なプランをもち、径は56～60cm主体、深さは44～56cmを測り、基本的に旧地表に添う、四隅を深めの掘り込むタイプである。柱筋の通りは、P11が完全に1本分飛び出して配置されるが、概ね良好である。建物廃絶時に柱は抜き取られており、方向はランダムである。出土遺物は、須恵器食膳具7点、須恵器貯蔵具5点、土師器食膳具8点、土師器煮炊具42点で、時期はⅣ2期頃とされる。

#### 16. SB265

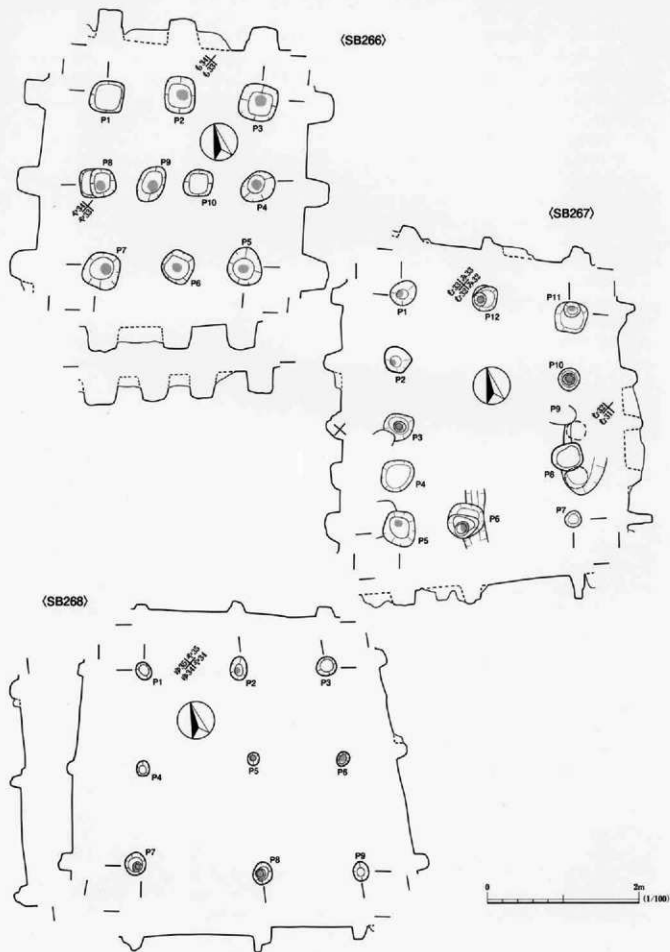
建物規模が、桁行4.4m梁行3.2m、面積14.08㎡、2間×2間の総柱建物である。遺構密集区域の中央南側寄り、G地区も・ヤ-33・34Grに位置する。柱間寸法は、桁間200・220・240cm梁間152・172cmを測り、主軸はN-70°-W若しくはN-20°-Eをとる。柱穴は、遺構重複により円形・方形・不整形円形と様々なプランをもつ。柱穴規模は、径が60～68cmを主体に最大で76cm最小44cmを測り、深さは56～80cmを測る。深さについては、北から南へ向かい次第に深くなっており、旧地表に添った深さをもつ。なお、しっかり掘り込まれたものが多いもののP6のように細長いものもみられる。柱筋の通りは、P7が外側に飛び出す、これ以外は良好である。出土遺物は、須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具8点、中世土師器食膳具2点、石製品3点であり、時期はⅢ期頃と位置づけられる。

#### 17. SB266

建物規模が、桁行4.6m梁行4.0m、面積18.4㎡、2間×2間、内部に東柱を2本もつ倉庫状建物と考えられるものである。遺構密集区域の中央南側寄り、G地区も33Grに位置する。建物主軸はN-17°-E。柱間寸法は、桁間が220・240cm、梁間は200cmと統一感をもち、柱穴掘方プランは方形を主体に円形も認められるが、これは本来方形だった可能性が高い。径は88cm主体で最大90cm、深さは60～68cmが主体で、旧地表に若干添う深さをもつとともに、どの柱穴もほぼ等しい深さを保つように掘り込まれている。柱圧痕が検出されており、この径は20～32cm、柱位置底面の窪みが多い。また、土層断面から、廃絶時に柱は抜き取られており、掘方埋土がそのまま残りつつ「柱のあたり」が認められ、径はP1が25cm、P5は30～35cm、P10は25～27cmであった。柱筋の通りは、P5が内側、P8が外側にずれて柱中央を通らないが、概ね良好である。また、掘方配置では側ラインが揃うところもないため、縄張りははされておらず、方形を意識しただけに留まったと思われる。なお、この建物の北にSB255、南にSB321と3棟の総柱建物が並び、出土遺物の主体時期に違いはあるものの、同時期のものが確認されている。出土遺物は、須恵器食膳具16点、須恵器貯蔵具6点、土師器食膳具6点、土師器煮炊具16点、中世土師器食膳具2点であり、時期はⅣ1期主体とⅤ2～Ⅵ1期に相当する。

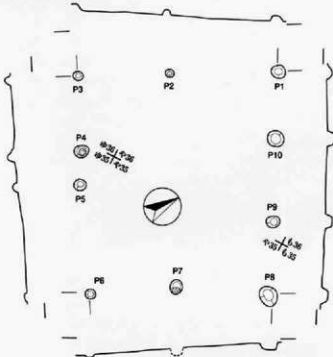
#### 18. SB267

建物密集区域の東側、F・G・H地区の境である、む31～33・め32・み32Grに位置する建物で、桁行5.6～6.0m、梁行4.52～4.6mを測る、4間×2間、面積26.45㎡の側柱建物である。北梁行の隅柱が両方とも直行しないため、やや台形状の建物プランとなる。主軸をN-16°-Eにとり、柱穴掘方プランは円形や方形を呈し、底面は窪みをもつものが多い。柱間寸法は、桁間120～184cm、梁間180～280cmを測る。柱穴規模は、径60～72cmを主体に最大80cm最小36cm、深さは28～40cmが主体だが、P7のみ深さ64cmと、この柱穴のみ細長く異質な感をもつ。深さについては北梁行と東桁行が旧地表に添う。柱筋の通りは、北梁行以外悪く、歪みの原因でもある北梁行のみが柱筋の通りが良い。なお、柱穴底面には柱圧痕が検出されており、16～24cmを測るものの16～20cmが主体である。この建物軸にあった状態でSI118がこの建物プランに収まる形となっており、出土遺物の時期にも共通があるため、関連をもつ可能性がどうか。出土遺物は、須恵器食膳具9点、須恵器貯蔵具2点、土師器煮炊具2点であり、中世土師器食膳具7点であり、時期はⅢ3期主体とⅣ～Ⅴ期に相当する。

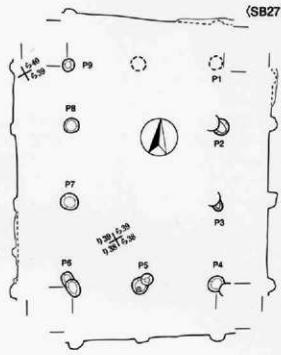


第26図 掘立柱建物遺構図8 (SB266・SB267・SB268)

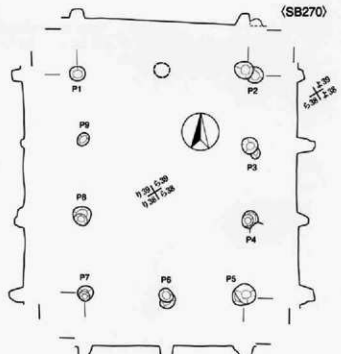
(SB269)



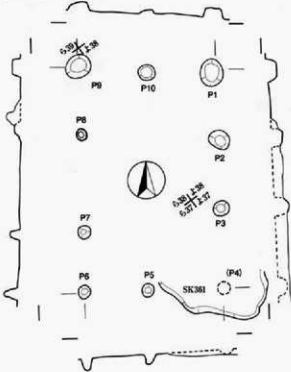
(SB271)



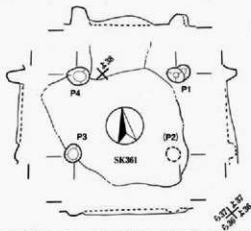
(SB270)



(SB272)



(SB273)



第 27 図 掘立柱建物遺構図 9 (SB269・SB270・SB271・SB272・SB273)

## 19. SB268

建物密集区域南側、G地区とH地区の境、や・ゆ34、ゆ33Grに位置、桁行5.2～5.4m、梁行4.88～5.88mを測る。2間×2間、面積28.51㎡の建物である。P9がかなり外側に広がって配置するため、東桁行が大きく歪む建物プランであり、総柱建物として機能するのか疑問が残るが、現地調査にて良好な柱穴が検出され、現地で建物と判断したもの。ただし、総柱建物ではなく、中央の柱穴は無関係で、小屋的な建物であった可能性もあるだろう。建物主軸はN-18°-E。柱間寸法は、東桁間232・312cm、西桁間260cm、梁間は240～268cmを測る。柱穴は、円形・不整形円形・楕円形を呈し、内面に段差をもつものがある。径は40～48cm主体で、深さは24～28cmを主体に最小16cmを測る。柱圧痕が検出されており、この径が8～12cmである。柱筋の通りは悪く、廃絶時に柱は抜き取られたと考えられる埋土を示している。出土遺物は、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具1点のみ、時期判断は難しい。ただ、煮炊具はⅢ期に相当する。

## 20. SB269

建物密集区域の中央西端、G地区や・ゆ-35・36Grに位置、桁行5.8～5.92m梁行4.68～5.28m、4間×2間で面積29.18㎡の側柱建物である。桁行と梁行がP8位置以外直行しないため、台形状のひしゃげたプランをもつ。柱間寸法は、桁間は88～288cmと柱間寸法が同じになるところはなく、梁間は228～280cmを測る。建物主軸は、N-30°-Eである。柱穴掘方プランは、円形や不整形円形を呈し、全体に上層削平を受けて柱穴規模は小さく浅いが、北桁行がまだ残存率が高く、この径が36～40cm、深さ20cmを測る。なお、柱筋の通りは、東梁行・北桁行のみ良好である。出土遺物は、須恵器食膳具1点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具8点であり、時期はⅣ期に位置づけられるものである。

## 21. SB270

G地区中央西寄り、ら・り-38・39Grに位置、桁行5.8m梁行4.4mを測る。3間×2間で面積25.52㎡の側柱建物である。建物主軸は、N-4°-W。上層削平が顕著で、1本の柱穴を消失している。柱間寸法は、桁間176～208cm、梁間220cm、柱穴は円形を呈し、径40～48cmを測り、上層削平により浅いものが多いが、深さは40cmが主体となるだろう。深さは基本的には旧地表に添った掘り込みをもつが、P3のように突出して深く掘られているものがある。検出されている柱圧痕の径は、16～28cmである。また、柱筋の通りは、P9のみ若干内側にずれるが通らないことはなく、概ね良好である。出土遺物は、須恵器食膳具1点、土師器煮炊具6点であり、時期はⅤ期に位置づけられる。

## 22. SB271

SB270と同位置で重複する側柱建物で、建物規模は、桁行5.8m梁行3.8m、面積22.54㎡、3間×2間である。上層削平と土坑により2本の柱穴を消失、柱間寸法は桁間160～220cm、梁間180・208cmを測る。柱穴は円形プランを呈し、径40cmを主体に、深さ10～15cmを測り、削平の影響を色濃く残している。小規模で簡易な建物のように思われるが、柱間寸法など意外にしっかりしており、計画的に建てられたものと判断される。建物主軸はN-6°-W。柱筋の通りは、桁行・梁行とも良好である。出土遺物は、土師器煮炊具6点であり、これらはⅤ期にあたるものである。

## 23. SB272

SB270・271の東側に隣接、G地区よ・ら-37・38Grに位置する側柱建物である。建物規模は桁行5.6～6.0m、梁行3.6mの3間×2間、面積20.88㎡を測る。北梁行のP1位置が南にずれているために、桁行・梁行が直行せず、建物全体が台形状を呈すものの、柱筋の通りは良い。柱間寸法は、桁間160～210cm、梁間168～188cmである。柱穴は円形プランで、規模は上層削平の影響で、径30cm前後を測るものの本来60cm程と思われる。深さは8～20cmを測り、四隅がしっかり深く掘り込まれるタイプで、旧地表に添うものとなっている。なお、廃絶時に柱は抜き取られている。建物主軸はN-0°-E。遺物は出土していない。

## 24. SB273

3本の柱穴のみ検出されているが、4本分として復元が十分可能である。建物規模が、桁行2.08m梁行2.2mで1間×1間のみ検出されたものであり、堅穴建物主柱穴の可能性があったものの、周囲からカマドの地山被熱など検出されなかったこと、また堅穴柱穴にしては上層削平を受けたとしても径が小さく柱間も狭いため、断定するに至らなかった。ただし、SK361・362は掘方土坑の可能性もあるだろう。

SB272に重複して、G地区よ・ら37Grに位置する。面積は4.58㎡、主軸はN-10°-E。柱穴プランは円形・不整形を呈し、形は48～60cm主体で、深さは最大48cm、最小で12cmを測る。土層断面には抜き取り埋土が残るとともに掘方埋土も残存、柱のあたりが確認でき、この径は20cm程である。また、柱穴底面には柱圧痕が検出されており、この径は14～20cmである。柱筋の通りは良好である。出土遺物は、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具7点、石製品1点が出土し、時期はⅣ期と判断される。

#### 25. SB274

建物の一部が調査区外に及ぶため、残存桁行8.0m残存梁行4.8m、残存4間×残存2間が検出されているもので、低床タイプの総柱建物である。G地区南東端れ37・38Grに位置、面積は残存で38.4㎡、建物主軸はN-2°-E。柱間寸法は、桁間180・200・220cm、梁間240cmである。柱穴プランは円形を呈し、径は28～40cm、深さ20～32cmを測り旧地表に添う。柱は抜き取られ埋め戻されるが、半層埋土をもつ柱のあたりが確認でき、この径が12・13cm、また、径16～20cmの柱圧痕が柱穴底面から検出されている。P10埋土の1層からは小皿が出土している。なおP8・P9は葎器目状からずれて配置されているが、これら以外の柱筋の通りは良好である。SB275と重複するが、SB275を切って柱穴が掘り込まれているため、高建物が新しいと判断できる。出土遺物は、須恵器食膳具4点、須恵器貯蔵具5点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具15点、中世土師器食膳具25点。

#### 26. SB275

SB274と同位置で検出されたものである。残存桁行4.24m、残存梁行2.0m、柱間寸法が似ていることから、恐らくSB274と同じような基部構造をもつ建物と思われる。桁間寸法は212cmで、建物主軸はN-3°-E。柱穴は円形・不整形プランを呈し、径32～40cm、深さ32cmで一定値を保つ。P3以外の全ての柱穴底面に、柱圧痕と思われる硬化が検出され、これも径18cmと一定している。柱筋の通りは良く、廃絶時に柱は抜き取られ埋め戻され、SB274へ建て替えられた可能性が高い。出土遺物は、土師器煮炊具3点、皿鉢破片1点、中世土師器食膳具5点であり、中世の建物と判断してよいだろう。

#### 27. SB276

SB274・SB275と同位置で検出されたもので、残存桁行2.92m、残存梁行2.12m、残存3間×残存1間の側柱建物である。柱間寸法は、桁間92～100cm、梁間212cmを測り、桁間寸法が極めて狭いため、全てを柱穴としてよいのか疑問が残るところである。建物主軸はN-1°-E。柱穴掘方プランは円形・不整形を呈し、径36cm、深さ11～42cmを測る。柱抜き取り痕跡が土層断面から確認できるが、1本のみ柱のあたりが認められ、この径が20cmであった。柱筋の通りは良好である。出土遺物はなく、時期不詳である。

#### 28. SB280

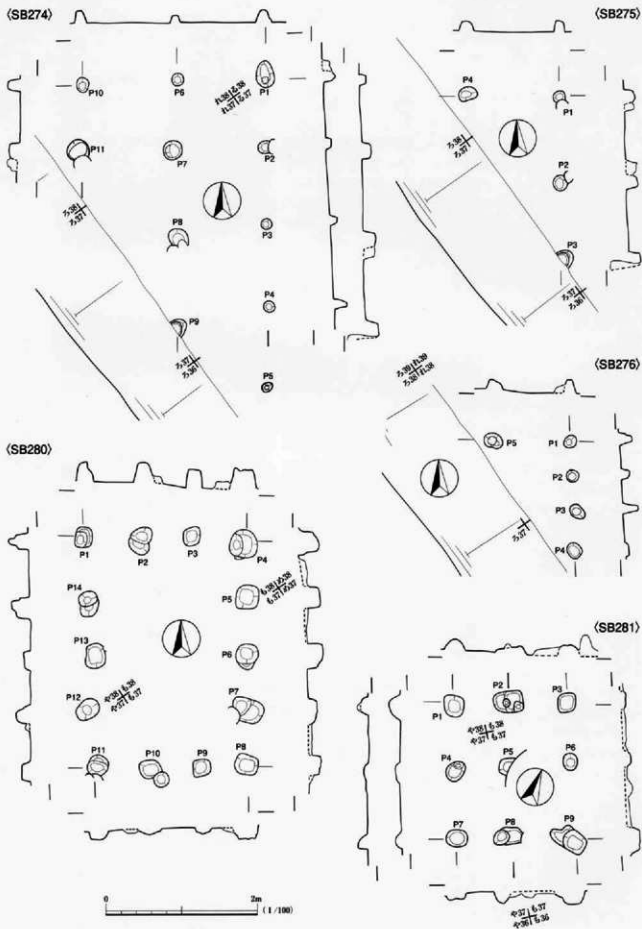
G地区中央、も・や-37・38Grに位置する。建物規模が、桁行6.0m梁行4.0～4.2m、建物面積25.2㎡、4間×3間の側柱建物である。P1が外側に飛び出して配置されているために、北梁行が若干広がる建物プランをもつ。柱間寸法は、桁間140・160cm、梁間120・140・160cmで、規則性がある。柱穴は方形・楕円形プランで、径は60cmを主体に46～72cm、深さは50cm主体に浅いものとしてP10の8cmがある。柱は建物廃絶時に抜き取られているが、抜き取り方向はランダムである。逆に設置は反時計回りに柱を掘り立てている。柱筋の通りは、西桁行以外は非常に良好である。建物主軸はN-0°-E。出土遺物は、須恵器食膳具4点、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具5点、土師器煮炊具36点であり、時期はⅣ2期を主体として、1期とⅣ期の3時期に渡る。

#### 29. SB281

G地区も・や-37・38Grに位置、桁行3.6m梁行3.0m、2間×2間で建物面積10.8㎡の総柱建物。主軸はN-22°-E、柱間寸法は桁間が180cm梁間148・152cm、柱穴は方形・長方形を呈し、添柱をもっていた可能性がある。径は52cm主体で最大76cm、深さ10～40cmを測る。土層断面から、柱は抜き取られ埋め戻されているが、柱のあたりで確認できる径は15cm程、なお柱は東の方向へ抜いたと思われる。P9に見られるような斜め掘方配置があり、また掘削時の縄張りもなかったと考えられるが、柱筋の通りは良い。出土遺物はない。

#### 30. SB282

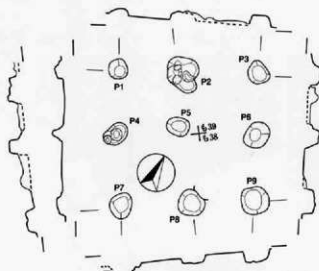
SB280よりもさらに西側、G地区も・や-38・39Grに位置する、桁行・梁行とも3.6m、2間×2間の総柱建物。面積は12.96㎡で、主軸はN-26°-W。柱間寸法は、桁間180cm、南梁間180cm、P2の配置が悪く北梁間148・212cmである。柱穴プランは、方形・不整形であり、径48～72cm、深さ20～32cmを測る。柱痕跡



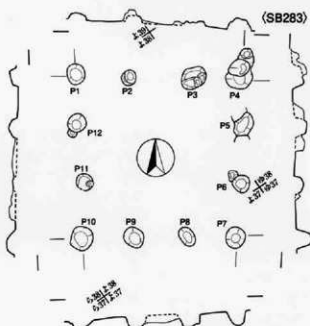
第28図 独立柱建物遺構図10 (SB274・SB275・SB276・SB280・SB281)

(SB282)

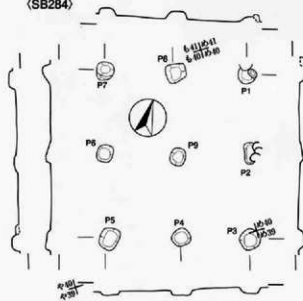
411  
420 5.30



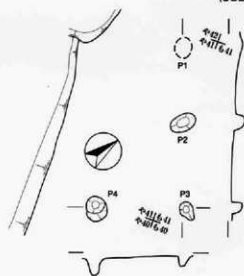
(SB283)



(SB284)

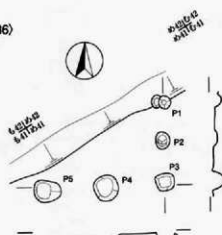


(SB285)

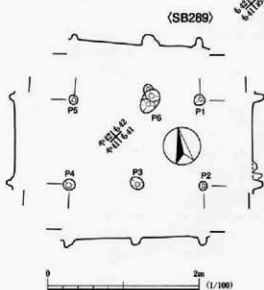


(SB286)

(SB286)



4.10  
4.10



第29図 掘立柱建物遺構図 11 (SB282・SB283・SB284・SB285・SB286・SB289)

がP4のみ検出されており、径は20～22cmである。この他は、全て抜き取られて廃絶されているが、抜き取り方向はランダムである。側柱の柱筋の通りは良好だが、中央柱P5が酷くずれており軸線上を通らない。出土遺物は、須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具3点、土師器煮炊具7点で、時期はⅣ2～Ⅴ期に相当する。

### 31. SB283

G地区よ37・38Grに位置、桁行・梁行とも4.2m、3間×3間で面積17.64㎡の側柱建物である。建物主軸はN2°-E、柱間寸法は、桁間120～160cm、梁間128～156cmであり、柱穴掘方は円形・不整形・楕円形を呈す。柱穴規模は、径44～68cm、深さ32～36cm主体で浅いものでP11の8cmだが、深さは旧地表に添う。柱筋の通りは、P11が上層削平のために下底部分のみ残存したと考えれば、概ね良く、廃絶時に柱は抜き取られている。また、掘方配置では楕円プラン柱穴が斜めに配置され、小ピットが付随することから、これら柱穴に添柱の存在した可能性がある。出土遺物は、須恵器食膳具5点、土師器食膳具3点、土師器煮炊具38点と、匣鉢の土製品1点で、時期はⅤ期主体、Ⅳ～Ⅵ期に位置づけられるものである。

### 32. SB284

G地区れ・ろ40Grに位置、桁行4.4m梁行3.8m、面積16.72㎡、2間×2間の総柱建物である。柱間寸法は、桁間220cm、北梁間184・196cm、南梁間180cmを測るが、北梁間はP8の中心を通そうとすると生じる若干のずれから発生した寸法の違いであり、殆ど180cmに統一されているといってもよいだろう。主軸はN17°-E。柱穴は、円形・方形を呈すが、円形プランも本来は方形だった可能性がある。径は52cmを主体に深さ10～20cmと上層削平により浅いものの、底面径がどしりとしており、旧地表に添いながらさらに中柱を浅くする。柱圧痕が検出されており、径は18～20cmである。柱筋の通りは良好で、掘方の配置についてはP5にみられるように方形が斜めに配置されるものがあり、方形を意識しただけの掘方形だったと思われる。廃絶時に柱は抜き取られている。出土遺物は、土師器食膳具1点、土師器煮炊具3点、石製品1点で、時期はⅣ～Ⅵ期に相当する。

### 33. SB285

G地区北側ろ・や41Grで、側柱建物になるとと思われる3本の柱穴と柱穴位置になると考えられる浅い窪みが検出された。桁行残存4.2m、梁行残存3m、柱間寸法は桁間300cm梁間200・220cm、建物主軸はN52°-W。柱穴プランは円形・不整形・楕円形で、径52cm程、深さは25cmでP2が45cmを測る。出土遺物は、土師器煮炊具1点のみ、時期不詳である。

### 34. SB286

SB285より北、G地区め41Grに位置し、側柱建物の殆どが削平され5本分の柱穴が検出されたもの。残存桁行2.2m、残存梁行3.2m、主軸はN3°-Wをとり、柱間寸法は桁間104・116cm、梁間160cmを測る。柱穴は円形・方形を呈すが本来全てが方形であった可能性がある。径は56～60cm主体、深さは最大28cm最小10cm、上層削平の影響が柱穴規模に反映している。柱圧痕がP3～P5で残存しており、径は15～22cmを測る。また、これら柱は抜き取られており、'柱のあたり'が認められ、P3で25cm、P4で20cm、P5で30cmであった。なお、柱筋の通りは、残存柱穴だけが良好である。出土遺物はなく、時期は不明である。

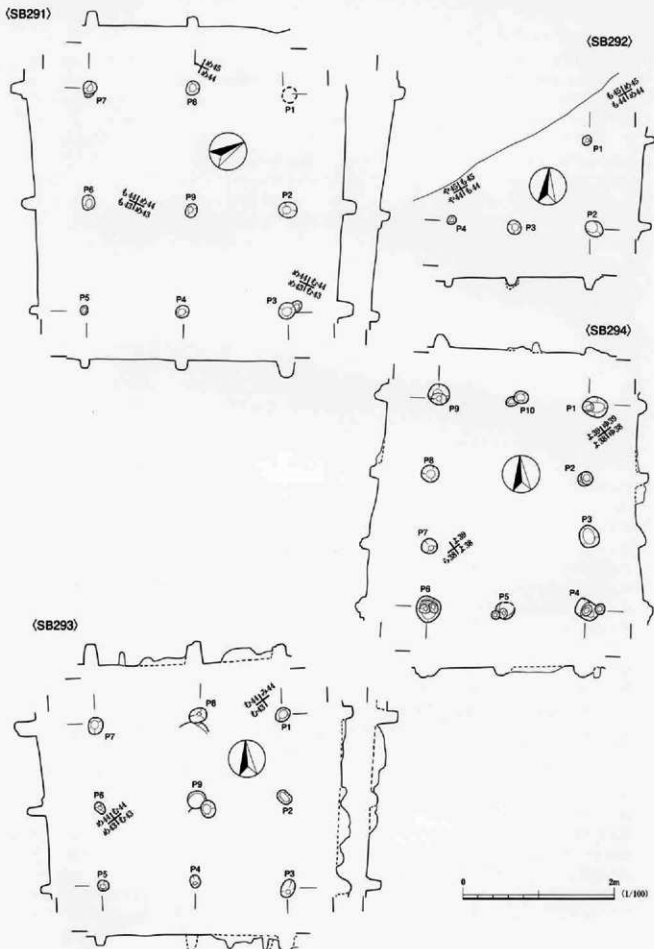
### 35. SB289

G地区北側も・や41、や42Grで検出された、桁行3.4m梁行2.2の3間×1間の側柱建物。建物面積は、7.48㎡、建物主軸はN12°-EもしくはN78°-W。柱間寸法は桁間136～204cm、梁間220cmで、柱穴は、円形を呈し、径30cm主体、深さ12cm主体に7～15cmを測るが旧地表に若干添う深さをもつ。上層削平区域とはいえ、柱穴は細く小規模といえる。柱圧痕が検出されており、この径は10～14cm、柱筋の通りは良好だが掘方配置は悪い。建物全体の規模も小さく簡易な印象のものである。出土遺物は、土師器煮炊具2点のみ、時期判断は難しい。

### 36. SB291

G地区北端、め・も-43・44Grに位置し、削平により1本の柱穴を消失する低床タイプの総柱建物である。桁行5.8m梁行5.2m、2間×2間、面積30.16㎡、建物主軸はN58°-W。柱穴プランは円形で、規模は径32～40cm、深さ28～44cmで旧地表に添い、検出された柱圧痕径は12～14cmを測る。柱間寸法は、桁間280・300cm、梁間252～268cmである。柱筋の通りは中央柱のP9が軸線上からずれるものの、この他は良好であり、建物廃絶時に柱は抜き取られている。出土遺物は、須恵器食膳具2点のみで古代遺物だが、柱間寸法から中世建物に相当するだろう。





第30図 掘立柱建物遺構図12 (SB291・SB292・SB293・SB294)

## 37. SB292

SB291西側にやや重複して位置し、建物の殆どが調査区外に至り、その上削平を受けており、4本のみの柱穴が検出されたもので、恐らく側柱建物になるものと思われる。残存桁行2.28m、残存梁行3.6m、柱間寸法は桁間で168・192cm、柱穴掘方プランは円形で、径24～36cm、深さ20～32cmと旧地表に添う深さをもつ。柱筋の通りはよく、廃絶時に柱を抜き取っている。建物主軸はN-1'-W。出土遺物はなく時期不詳である。

## 38. SB293

SB291東側に重複、G地区む43・44Grに位置する、建物規模が桁行4.28～4.6m梁行4.8～4.92m、2間×2間、建物面積21.58㎡、主軸はN-2'-Eをとる総柱建物である。柱間寸法は、桁間208・202・220cm、北梁間220・272cm、南梁間240cmを測り、P5が北側に位置するため重み、建物プランが台形状を呈している。柱穴は、円形・楕円形で、径29～40cm、深さは20～60cmで基本的に旧地表に添い、柱部分が段掘を呈するものもあり、中央柱P9が20cmで最も浅い。土層断面から、柱の下端部分が根腐れをおこし残ったものか下層から柱痕跡が検出され、この径が15～20cmを測る。但し上層には抜き取り痕があり、腐った部分だけを放置した可能性がある。また、柱圧痕が検出されており、この径は20～24cmで、柱筋の通りでは、桁行は良好だが、梁行は悪い。出土遺物は、須恵器食膳具2点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具1点、中世陶磁器である白磁皿1点である。

## 39. SB294

G地区中央西寄り、よ・ら-38・39Grに位置、建物規模が桁行5.6m梁行4.2m、3間×2間、面積23.52㎡の側柱建物である。建物主軸をN-6'-Eにとり、柱間寸法は桁間160～208cm、梁間200・220cmを測る。柱穴は円形・方形プランを呈し、掘方断面形状では段掘をもつものが多い。柱穴規模は、四隅柱が径60cm主体で、他は48cm主体、最小径で36cmを測る。深さは28～34cmで最小12cmであり、四隅柱が若干深く、基本として旧地表に添うものとなっている。径16cm主体の柱圧痕が検出されており、柱筋の通りは、桁行・梁行行きとも悪く、廃絶時にランダム方向に柱は抜き取られている。出土遺物はなく、時期不詳である。

## 40. SB295

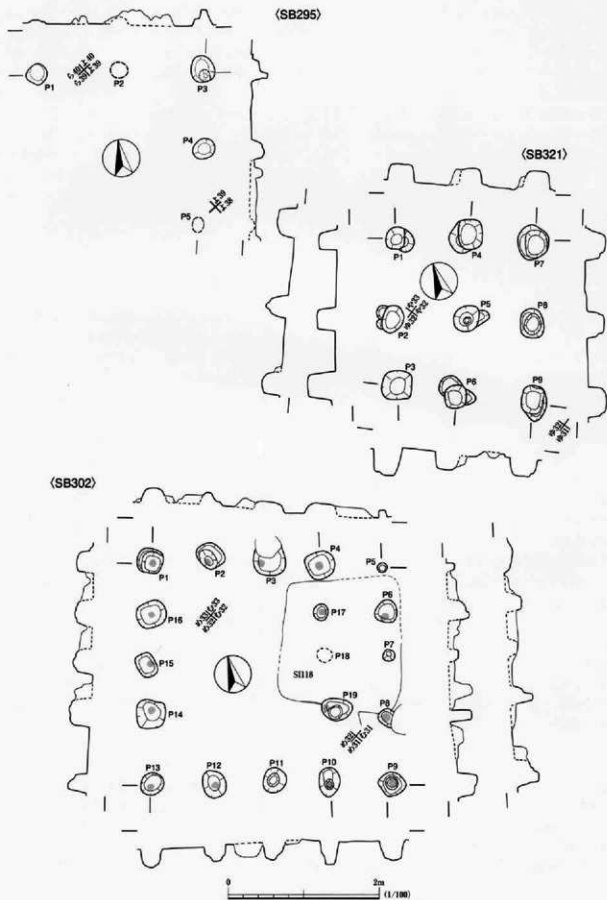
SB294西側に位置し、殆ど削平され3本の柱穴が検出されたものである。東西軸を梁行として報告するが、梁行の中柱も消失する。残存桁行2.0m、残存梁行4.0mで、推定3間×2間とするなら26㎡程の面積になるのではないかと予想する。主軸はN-10'-E。柱間寸法は、P3-P4間で200cm、柱穴は不整形円形を呈し、径56～68cm、深さは36～44cm最小で8cmを測り、建物廃絶時に柱は抜き取られている。出土遺物はない。

## 41. SB302

G地区とH地区の境、建物密集区域の東側である、む・め-32・33Grに位置する片廂建物である。建物規模は、身舎が桁行5.84m梁行4.4～4.8m、梁行軸線上に1.6mの廂が取り付くもので、身舎4間×3間に1面廂、建物面積は身舎で26.84㎡廂9.37㎡、合計で36.21㎡となる。身舎の南梁行が広い台形状の建物プランで、廂はそのまま併行して取り付けられているため、P4・P5間とP9・10間は同じ柱間寸法160cmである。身舎の柱間寸法は、桁間120～200cm、梁間140～172cmを測る。柱穴は、円形・方形・不整形円形プランを呈し、身舎柱穴で方形が目立つ。堅穴建物との重複もあり、身舎東桁行と廂桁行の並びに不整形円形プランが目立つ。掘方断面では、柱位置が一段下がる段掘となっているものが多く、段掘にならなくとも底面が窪むものも多い。柱穴規模は、径60～76cm主体、深さは残存状況の良い柱穴で44～56cmであり、浅くとも30cm程、最も浅いP5は20cmを測る。深さについては、基本的に旧地表に添いながら、中柱で深いもの浅いものも数本みられる。径10～18cmを測る柱圧痕が確認されており、柱径は18cm程が主体となろうか。柱筋の通りは概ね良好である、P13は柱圧痕中央を通らない。また、掘方配置においては、方形が斜めに配置されるなど、縄張りされた可能性は低い。なお、当建物の南側(SD39)・西側(SD40と遺構番号なし)・東側(SD37・38、次年度報告)に、当建物と同軸となる溝状遺構が検出されており、建物を囲んでいた可能性がある。建物主軸はN-17'-E。出土遺物は、須恵器食膳具4点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具5点、時期は古墳4様式とⅡ2?期とされる。

## 42. SB321

建物密集区域の南端、G地区や・ゆ32Grに位置する総柱建物で、建物規模は桁行4.0m梁行3.68m、2間×2間で面積14.72㎡である。建物主軸はN-23'-E、柱間寸法は桁間192・208cm、梁間176・192cmを測る。柱穴掘方プランは、方形・方形に近い楕円形を呈すが、本来全て方形であった可能性がある。柱穴規模は、径



第31図 掘立柱建物遺構図13 (SB295・SB302・SB321)

60～80 cmを主体に最大で88 cm、深さは48 cmを主体に最も深いもので72 cmを測る。非常にしっかりと掘り込まれているものであり、深さは旧地表に添うものとなっている。柱圧痕をP4・P6で検出しており、この径が20 cmであった。なお、建物廃絶時に柱は抜き取られている。出土遺物は、須臾器食膳具19点、土師器食膳具7点、土師器煮炊具27点であり、時期はⅡ2～Ⅱ3期を主体とⅢ～Ⅴ期に位置づけられる。

#### 43. SB322

建物密集区域南側、H地区ろ34、や33・34Grに位置する側柱建物で、建物規模は、桁行7.4～7.68 m梁行4.32～4.72 mの4間×3間、建物面積34.08 m<sup>2</sup>である。P8が飛び出して位置するために南梁行が広くなり、この位置で桁行・梁行が直行しないために、建物プランが台形状を呈している。建物主軸は、N-7-E。柱間寸法は、桁間168～200 cm、梁間132～240 cmを測る。柱穴は円形・方形・楕円形プランで、径は48 cm主体、深さは28～56 cmを測り、北から南へ下降する旧地表に添った深さをもつ。掘方断面形状では、柱位置部分が段掘となるものが多く、柱自体細い。柱圧痕は6本の柱穴から検出されており、径は6～10 cmであった。柱筋の通りは、P9が若干外側にずれるものの概ね良く、掘方配置には、方形や楕円掘方が斜めに配置されるものがある。全体的に簡易な印象の建物である。なお、建物廃絶時に柱は抜き取られている。出土遺物は、須臾器食膳具16点、須臾器貯蔵具1点、土師器食膳具5点、土師器煮炊具10点が出土しており、時期はⅣ1期主体、Ⅲ～Ⅳ期である。

#### 44. SB323

建物密集区域南寄り、G地区も・や-33・34Grに位置、建物規模が桁行7.0～7.2 m、梁行4.2～4.8 m、3間×3間、面積31.2 m<sup>2</sup>の側柱建物である。P1柱穴のみ桁行・梁行が直行、北梁行が狭く全体がひしゃげた形状の建物である。柱間寸法は、桁間200～280 cm、梁間120～160 cmを測り、柱穴プランは、円形・方形・長方形・不整形と様々であり、多くの遺構と重複している影響が顕著である。柱穴規模は、径60 cmを主体に最小42 cm、最大で94 cmを測り、深さは北側が16～64 cmを測って40 cm前後に主体をもち、南側が44～64 cm主体である。北側が倒平の影響で浅い。柱圧痕がP8のみ検出されており、径は22 cmであった。柱筋の通りは桁行・梁行とも良く、掘方配置については、P9・P10の長方形プランが梁行軸に添う。なお、建物廃絶時に柱は抜き取られている。建物主軸はN-21-E。出土遺物は、須臾器食膳具1点、須臾器貯蔵具4点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具6点で、時期はⅣ期前後に位置づけされる。

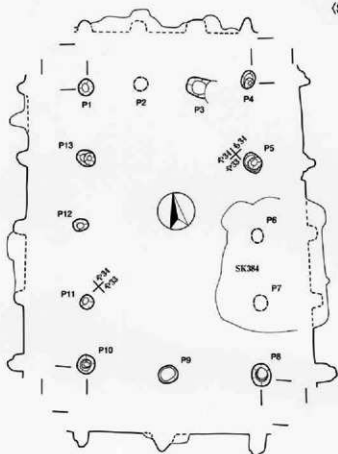
#### 45. SB324

遺構密集区域南端、G地区・H地区の境である、や・ゆ-32・33Grに位置し、建物規模が桁行5.72～5.92 m、梁行7.6 m、2間×2間、低床タイプの総柱建物である。建物主軸はN-17-E。P3が飛び出して位置することにより、桁行・梁行が直行せず、若干歪みを生じている。なお、P3のみ方形プランを呈しており、他ピットとの違和感を感じる。柱間寸法は、桁間240・332 cm、梁間312～448 cmと、建物全体のP2・P8を結ぶラインから東側が間延びするような形状である。柱穴はP3以外円形を呈し、径は40 cm主体に最小32 cm最大76 cm、深さは8～52 cmでP7・P8方向へ向かうごとに浅くなっていく。但し底面レベルを同じにもつので、上層倒平されたか盛土施行された可能性がある。柱圧痕がP5・P9のみ検出されており、径は10 cmである。柱筋の通りは北梁行P2が完全に内側にずれて悪いが、これ以外は良好である。なお、建物廃絶時に柱は抜き取られている。出土遺物は、須臾器食膳具1点、須臾器貯蔵具4点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具9点、中世土師器食膳具7点が出土しており、時期はⅤ～Ⅵ期が主体と判断されるものである。ただ、柱間寸法は中世の形態を呈している。

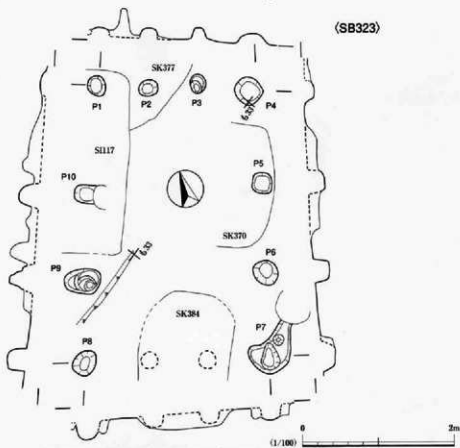
#### 46. SB325

遺構密集区域南端、G地区・H地区の境、や・よ33Grに位置、規模が桁行6.72～7.2 m梁行4.92～5.32 m、2間×2間で建物面積34.24 m<sup>2</sup>、低床タイプの総柱建物である。主軸はN-21-E。柱間寸法は、桁間332～380 cm、梁間は216～280 cmを測り、P1地点のみ桁行・梁行が直行、これ以外で直行することはなく、南側がやや歪んだ形状プランとなっている。掘方プランは、円形・隅丸長方形で、径は40 cm主体に32～56 cm、深さは40～52 cmで旧地表に添った深さをもつ。柱圧痕が7本の柱穴底面から検出されており、この径が10～12 cmである。柱筋の通りは西桁行・南梁行は良好である。なお、廃絶時に柱は抜き取られている。出土遺物は、須臾器食膳具7点、須臾器貯蔵具3点、土師器食膳具3点、土師器煮炊具9点、時期はⅤ期主体とⅥ期の2時期に相当する。

(SB322)



(SB323)

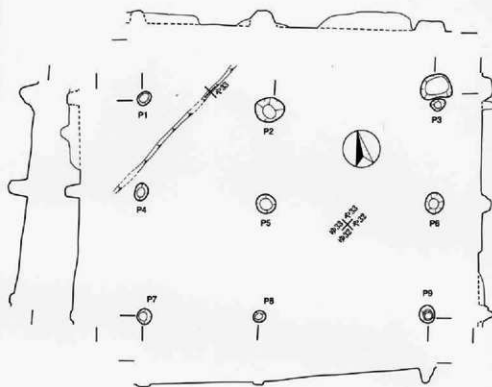


第 32 図 掘立柱建物遺構図 14 (SB322・SB323)

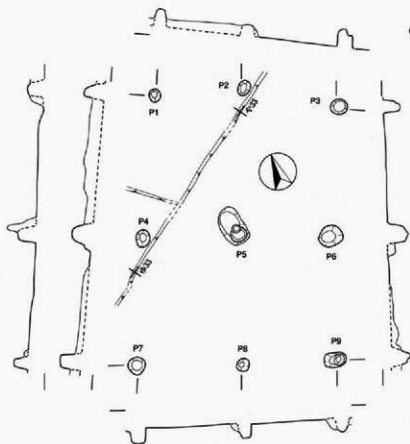
(1/100)



(SB324)



(SB325)



0 2m  
(1/100)

第33圖 掘立柱建物遺構図15 (SB324・SB325)

## 第2節 土坑・井戸

### 第1項 土坑

今回報告する地区から検出された土坑の番号は、他遺構と同様にA地区からの順番で付している。今回の対象となるのは、SK254～392・416～418・457～459・462～465・467・470～472である。この内、SK255は製炭土坑であり、第3節手工業生産関連遺構において報告する。SK292・293・297～321は、SD30C区の道路状遺構1に付設する可能性が極めて高いため、第4節その他の遺構と包含層第1項 道路状遺構1 (SD30)にて同時に報告することとした。なお、SK380・471は欠番となっている。

今回報告対象の土坑数は総数91基である。前回までの報告と同様に、様々な特徴をもった土坑が検出されているが、この内、遺物が多く出土するものや特徴的なものを22基を選んで報告することとする。前回報告と同様に、今回報告する土坑でも、墓塚や小型堅穴状の特徴をもつものが検出されており、目立つ。小型堅穴状の土坑は、掘立柱建物に付設する土間的な事例が知られ、当土坑も同様の機能をもつものと思われるが、本遺跡で掘立柱建物に伴うという確かな判断に至らず、また現地調査においてもされていない。

また、今回報告する区域で特筆すべきことは、G地区の西端にあたる区域、本遺跡内でも最も谷部となる区域一帯に、中世の墓群が認められたことである。これは、第34図の墓群全体図で示しているのとおりで、基本として小土坑状や大型ピット状を呈しており、部分的に被熱をもつものもある。供えられたように検出された土師器皿や河原石をはじめ、SK332・SK335・SK340埋土の化学分析ではリン酸や脂質が検出された。調査区末端でも遺構が検出されているため、この墓群が調査区外に延びる可能性が十分あるものと考えられる。

土坑の分類は、前回までの報告に即している。A類土坑を通常の土坑、B類土坑を遺物の比較的多い大型土坑で、当初は粘土掘削が目的とされ、その後土器廃棄として利用されたとするもの。但し今回粘土掘削が目的であったか不明なものも多く、大型で遺物出土の多い土坑をB類土坑に含めた。C類土坑は柱穴状の小型土坑。D類土坑は竪穴建物の掘方土坑状を呈するもの。E類は被熱焼結した小型炉の床下土坑位置づけされるもの。F類土坑は焼成土坑で、土師器焼成坑でないが何かを焼いたとされる土坑である。墓塚またはその可能性のある土坑をG類土坑とし、方形プランで小型堅穴状のものをH類土坑とする。出土遺物については、出土量を破片数換算で数量とし、時期については田嶋明人氏の北陸古代土器編年で表記する。なお、中世と時期をしているものは、古代遺物以外の当遺跡発掘期までの11世紀2/4～12世紀中頃、中1～1期や中1～II期を示している。

今回の報告区域での炉状遺構は、SJ63の1基のみで、SK381に接して検出されているため、ここで報告させて頂く。SJ63はH地区区32Grに位置、被熱径は長径68cm短径60cm、厚み8mm前後を測る。黒褐色土をベースにした土が焼けている状態で、被熱層の下層にピット状の掘り込みをもつ。遺構図は第37図下段に揭示した。

#### 1. SK254

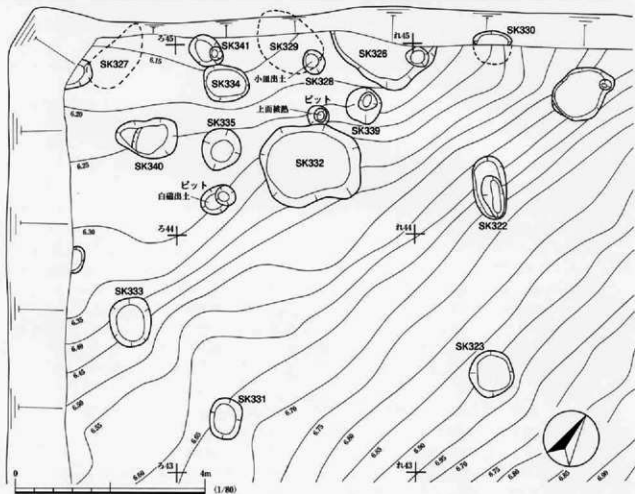
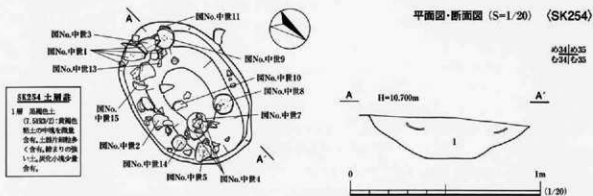
F地区むかめ34Gr、SII12を切って重複するものである。精円形プランで、立ち上がりに若干段を形成するも、底面はほぼ平坦をなす。規模は、長径84cm×短径58cm、深さ22cmと頗る小規模だが、完形の土師器皿がまとまって出土、土坑類型は通常土坑と位置づけているA類に相当する。完形皿は中世のものであり、破片を含め29点出土する。この他の出土遺物は総数で、須恵器食膳具14点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具5点、土師器煮炊具14点、石製品4点である。須恵器食膳具はII～VI期と時期幅があり、混在したものでらう。

#### 2. SK326

G地区北西の調査区端、るれ44Grに位置する土坑で、全体の半分が調査区外となるものである。覆土は、4層に細分され、1層底面で礫出土、3層底面で完形小皿が1点出土する。土坑規模は、残存で長径190cm×短径140cmを測り、深さは50～80cmである。墓塚である可能性が否定できないが、規模の大きいことが、墓群内の外的ものに比べ異質である。土坑類型は、G類土坑としておく。出土遺物は、土師器食膳具13点、土師器煮炊具15点が出土、古墳後期のものも出土するが、IV期のもの認められる。

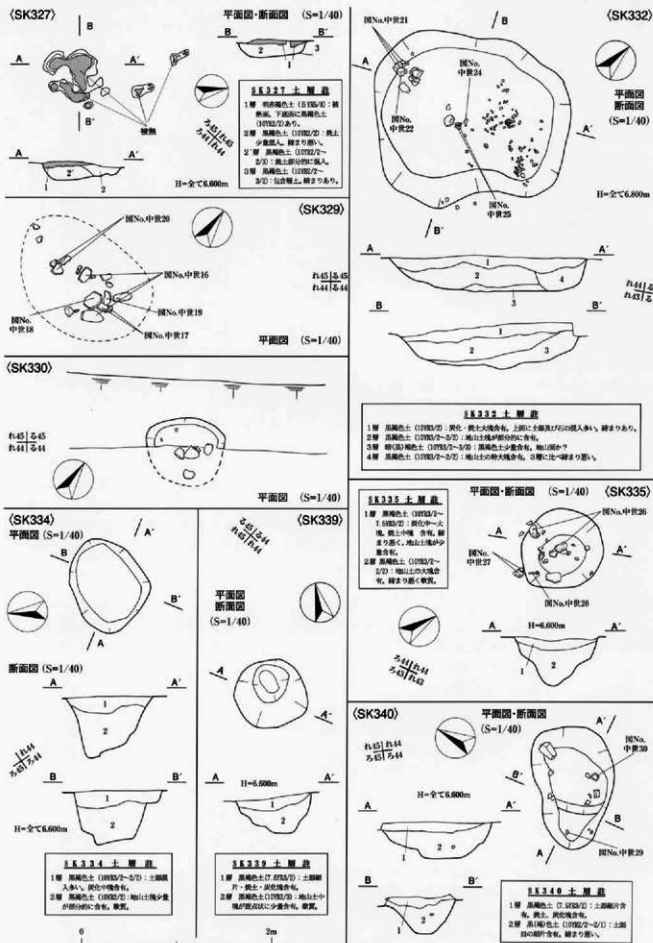
#### 3. SK327

るれ44Grの北西端中央に位置する。上面に被熱層を有す、径70～80cm、深さ最大40cmの小規模土坑であり、土坑類型はE類とすることができる。出土遺物は、須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具3点、土師器煮炊具7点、石製品2点が出土する。II～IV期の坏A破片、煮炊具ではIV・V期のものが認められる。



第34図 土坑遺構1 (SK254・SK326)、G地区中世墓群全体図





第35図 土抗遺構2 (SK327・SK329・SK330・SK332・SK334・SK335・SK339・SK340)

## 4. SK329

G地区区44・45Grで、調査区境でSK326とSK341の間に位置するものだが、プランや土坑落ち込み、土坑規模は不明のものである。中世の土師器小皿がまとまって検出されていることから、土坑と判断したものである。出土遺物は、土師器煮炊具9点に、中世土師器食膳具21点、時期は中世1-I期とされる。

## 5. SK330

G地区南東の調査区境で検出されたもので、44・45Grにあたる。大きめの河原石が集中して検出されたものである。標高6.46mが落ち込み部分の底面にあたるレベルであり、かなり上層の遺構となる。落ち込みを確認したプランから、円形状になるものと考えられるが、残存長軸は80cm、深さそのものは不明である。出土遺物は土師器煮炊具1のみ、時期不詳である。

## 6. SK332

G地区西端れ44Grに位置する。不整形形状プランを呈し、長径220cm×短径120～180cm、深さは38～46cmを測る。底面は平坦で、出土遺物は土坑規模の割に少ない。本土坑土の化学分析結果では、リン酸含有量が天然賦存量を大きく上回る値であり、埋葬遺構である可能性が高いという結果であった。土坑分類はG類である墓塚と位置づけできる。出土遺物は須恵器食膳具1点、土師器食膳具はミニチュア土器1点、土師器煮炊具10点、石製品2点、中世土師器食膳具が85点で、時期は中世1-II期とされる。

## 7. SK334

G地区区44GrのSK332西側に隣接するものである。不整形円状プランを呈し、長径100cm×短径80cm、深さ50～64cmを測り、底面に段状の窪みを有して、一見ピット状をなす。覆土は上下2層からなるが、黒褐色土が主体で締まりなく柔質である。この土坑も墓塚の可能性が極めて高く、土坑分類はG類と位置づけされる。出土遺物は、土師器食膳具1点、土師器煮炊具6点、中世土師器食膳具14点が出土する。

## 8. SK335

G地区区44GrのSK332南西側に隣接する小規模土坑で、円形を呈し、長径93cm×短径84cm、深さ50cmを測るものである。底面までの壁にはテラス状の段を有して、断面はすり鉢状となっている。覆土は軟質で、遺構上面に小皿破片や刀子や礫が出土する。この土坑覆土の胎土分析では、SK332と同様にリン酸含有量が高い数値を示しており、埋葬遺構の可能性が極めて高いという結果であり、土坑分類はG類とすることができる。出土遺物は、須恵器食膳具8点、須恵器貯蔵具2点、土師器煮炊具4点と古代遺物の時期はII～IV期に位置づけされるもの。中世の土師器食膳具17点は、中世1-II期?とされる。

## 9. SK339

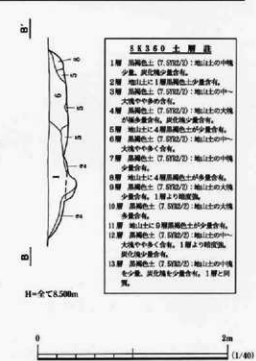
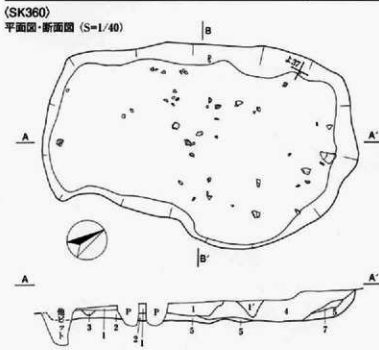
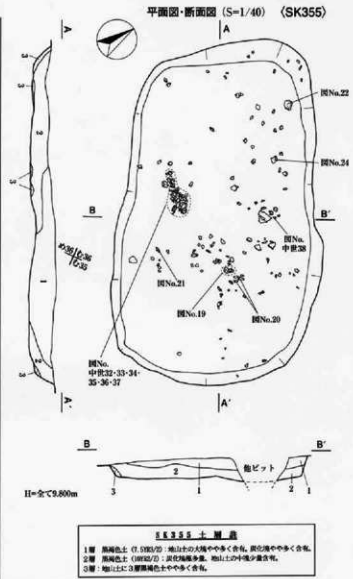
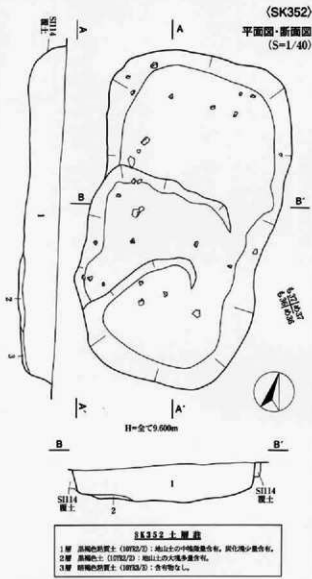
G地区区44Grで、SK326とSK332の間に位置する円形の小規模土坑である。規模は長径77cm×短径64cm、深さ最も深く40cmを測る。壁は底面までに若干テラスを形成し、底面は小さな規模となる。SK334と似ていて一見ピット状だが、覆土は黒褐色土を主体とした軟質であり、墓塚である可能性が高い。よって、土坑類型はG類と位置づけられる。出土遺物は土師器煮炊具1点のみ、時期判断は難しい。

## 10. SK340

G地区西端ろ44Gr、SK335西側に隣接する土坑である。不整形楕円形プランで、長径130cm短径最大86cm、深さ最大40cmを測る。土坑西側にテラス面を有し、一段下がって平坦底面を形成する。覆土は上下2層からなるが、黒～黒褐色土を主体に締まりが悪く、上下層いずれにも土師器細片や皿破片が混入する。また、上面には礫や土師器皿破片が出土する。この土坑の覆土も胎土分析され、SK332・335と同じく、リン酸が5.0P205mg/g検出され、天然賦存量を大きく上回る値であったことから、埋葬遺構である可能性が高いと判断されている。よって、土坑類型はG類の墓塚とする。出土遺物は、須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具8点、土師器煮炊具42点、石製品2点。中世土師器食膳具13点は、中世1-II期とされるものである。

## 11. SK352

G地区区・も37Gr境を中心に位置し、壑穴建物SI114を切って掘り込まれている土坑である。隅丸方形のプランで、長径350cm×短径160～200cmを測り、深さは34～42cmで、底面は3段に及ぶ微かな落ち込みを伴いながらも、基本的に平坦を呈している。遺物は疎らに出土、土坑西側で比較的多いと言えよう。この土坑類型はH類とするのが妥当と思われる。出土遺物は、須恵器食膳具16点、須恵器貯蔵具9点、土師器食膳具9点、



第36図 土抗遺構図3 (SK352・SK355・SK360)

(SK361)

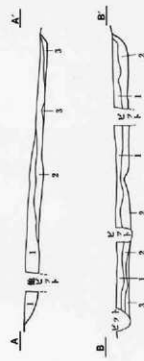
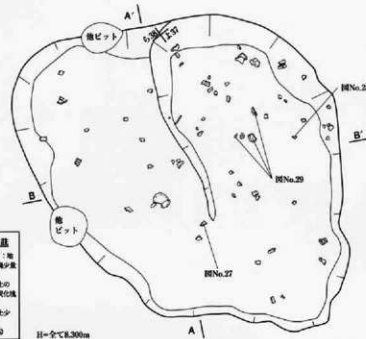
平面図・断面図  
(S=1/40)



33361土層図

- 1層 黄褐色土 (F. 500) 中・小塊の中塊少量。黄褐色土の少量含有。
- 2層 黄褐色土 (F. 500) 中・小塊の中塊少量。黄褐色土の少量含有。
- 3層 黄褐色土 (F. 500) 中・小塊の中塊少量。黄褐色土の少量含有。

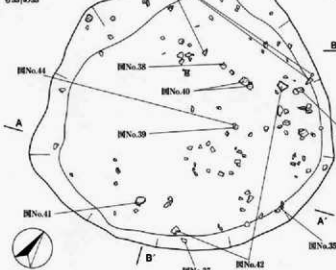
H=全て8.300m



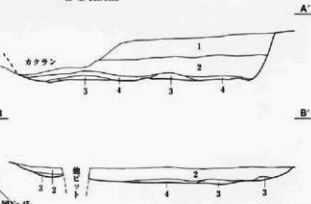
(SK365)

平面図・断面図  
(S=1/40)

6.26(約)36  
6.30(約)36



H=全て8.700m



33365土層図

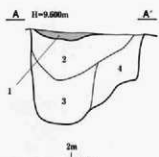
- 1層 黄褐色土 (F. 500) 中・小塊の中塊少量。黄褐色土の少量含有。
- 2層 黄褐色土 (F. 500) 中・小塊の中塊少量。黄褐色土の少量含有。
- 3層 黄褐色土 (F. 500) 中・小塊の中塊少量。黄褐色土の少量含有。
- 4層 黄褐色土 (F. 500) 中・小塊の中塊少量。黄褐色土の少量含有。

0 2m (1/40)



33363土層図

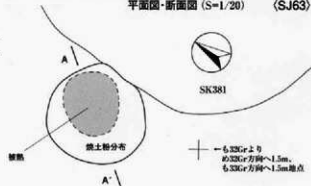
- 1層 黄褐色土 (F. 500) 中・小塊の中塊少量。黄褐色土の少量含有。
- 2層 黄褐色土 (F. 500) 中・小塊の中塊少量。黄褐色土の少量含有。
- 3層 黄褐色土 (F. 500) 中・小塊の中塊少量。黄褐色土の少量含有。
- 4層 黄褐色土 (F. 500) 中・小塊の中塊少量。黄褐色土の少量含有。



0 2m (1/20)

平面図・断面図 (S=1/20)

(SJ63)



SK381  
+ 5.32Grより  
約32Gr方向へ1.5m,  
約33Gr方向へ1.5m地点

第37図 土坑遺構4 (SK361・SK365)・炉状遺構 (SJ63)

(SK370)

平面図・断面図 (S=1/40)

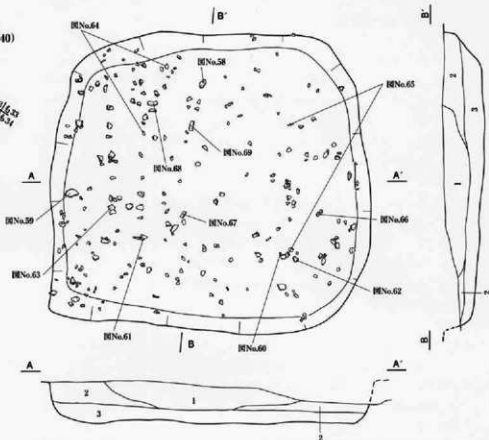


4/31/4/33  
4/31/4/31

SK370 土層表

- 1層 黒褐色土 (0755/2)：黄土中塊・小塊を多量含有。灰土中塊少量含有。黄褐色土の中塊を多量含有。所々黄中塊の分布する。
- 2層 黄褐色土 (0852/2)：黄土中塊を少量含有。黄褐色土中塊を少量含有。灰土中塊を少量含有。
- 3層 黄褐色土 (0953/2)：黄褐色土中塊を少量含有。黄土中塊を少量含有。灰土中塊を少量含有。

H=全て3,400m



(SK373)

平面図・断面図 (S=1/40)

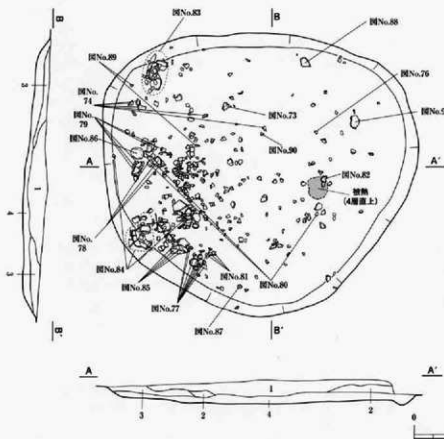


4/31/4/33  
4/31/4/33

H=全て3,900m

SK373 土層表

- 1層 黒褐色土 (0755/2)：黄土中塊・小塊を多量含有。灰土中塊少量含有。黄褐色土の中塊を多量含有。
- 2層 黄褐色土 (0755/2)：黄土中塊・小塊を多量含有。黄褐色土の中塊を多量含有。所々黄中塊の分布する。
- 3層 黄褐色土 (0755/2)：黄土中塊・小塊を多量含有。黄褐色土の中塊を多量含有。所々黄中塊の分布する。
- 4層 黄褐色土 (0755/2)：黄土中塊・小塊を多量含有。黄褐色土の中塊を多量含有。所々黄中塊の分布する。



第 38 図 土抗遺構 5 (SK370・SK373)

土師器煮炊具 84 点で、時期はⅡ～Ⅴ期と幅広い。

#### 12. SK355

G地区む35-36Grに位置、隅丸方形プランを呈して、長径320～370cm×短径190～220cmを測る。深さは15～25cmと浅いが、底面はほぼ平坦となる。前述したSK352とよく似た形状であり、土坑類型は同じくH類とする。遺構覆土は上下2層を基本として、出土遺物の殆どが上面及び上層から出土する、遺構覆土からは比較的多く鉄滓が出土しており、上面からは甕が出土している。出土遺物は、須恵器食膳具68点、須恵器貯蔵具22点、土師器食膳具6点、土師器煮炊具110点、石製品1点、土製品1点、中世土師器食膳具119点、中世陶磁器として白磁埴1点が出土する。古代遺物はⅣ1期が主体で、中世遺物はⅠ～Ⅱ1期に相当、2時期が認められる。

#### 13. SK360

G地区ゆ・よ36Grに位置する土坑である。長径200～230cm×短径150～216cmを測り、プランとしては方形状とも言えようが東側ラインが出張った形状をなしている。深さは20cmを主体に10～30cmを測るが、南側が最も浅くなっている。底面は一部凸凹状や窪みを有しながらも、多くが平坦を呈している。土坑規模の割に遺物は少なく、規模から言えばB類土坑となろうが、A類通常の土坑としておく。出土遺物は、須恵器食膳具4点、須恵器貯蔵具4点、土師器食膳具4点、土師器煮炊具51点で、これらの古代遺物はⅣ・Ⅴ期を示し、その他、中世1期の土師器食膳具10点出土する。

#### 14. SK361

G地区よ・ら37Grで、SK362を切って掘り込まれた土坑である。不整隅丸台形状のプランをもち、長径420cm×短径310cm、深さは14cm主体で、南東に行くに従い底面も傾き深さも浅くなる。ただし、北側と東西軸での底面は平坦を呈す。土坑規模の割に遺物は少なく、4本のみの柱穴が検出されているSB273と重複することから、竪穴建物の掘方土坑の可能性をもち、非常に浅いため、カマド山被熱部分も消失した可能性がある。隣接して重複するSK362も掘方土坑の可能性があろう。よって、類型は竪穴建物の掘方土坑状を呈すと位置づけられているD類になるものと思われる。出土遺物は、須恵器食膳具12点、須恵器貯蔵具5点、土師器食膳具20点、土師器煮炊具107点であり、Ⅲ～Ⅴ期に位置づけされるものである。

#### 15. SK365

G地区め35Grの西端で、SI116を切って掘り込まれている大型土坑である。プランは不整形円形を呈して、長径310cm×短径300cmを測り、深さについては、土層断面Bラインでは掘削時設定であるので、Aラインを見ると50cmと非常に深く掘り込まれている。底面は平坦であり、土層は上下2層が主体だが人為的に侮戻された埋土層と考えられるものである。この土坑は土器の比較的多い大型土坑として位置づけているB類土坑といえることができる。出土遺物は、須恵器食膳具41点（摩耗痕跡6点含む）、須恵器貯蔵具27点、土師器食膳具7点、土師器煮炊具138点、土製品1点、石製品1点である。古代遺物はⅡ～Ⅴ1期と時期幅があるものの全体としてⅣ・Ⅴ期のものが多い。その他、中世Ⅰ～Ⅱ1期の土師器食膳具11点が出土している。

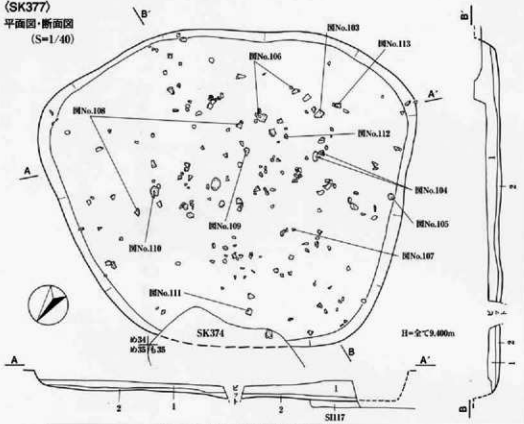
#### 16. SK370

H地区・G地区の境も33・34Gr、隅丸方形プランで、長軸径300～340cm×短軸径300～316cm、深さ40cmを測る大型土坑である。覆土は上下2層で形成され遺物も多く、底面は比較的平坦で、甕は直立気味である。底面での硬化はなく、カマド被熱も検出されていないため、竪穴建物とは断言できないが、小型竪穴状のものとしてH類土坑と類型付けられる。なお、この土坑は、SI117と隣接して主軸を同じにし、重複する多数の掘立柱建物とも軸を同じにするなど、他遺構に伴っていた可能性が高いと考えている。出土遺物は、須恵器食膳具203点、須恵器貯蔵具43点、土師器食膳具70点、土師器煮炊具215点、転用甕を含む土製品4点、石製品2点である。須恵器食膳具には、内底摩耗痕・油痕・墨痕をもつものが18点出土している。遺物の時期は、Ⅳ～Ⅴ2期のものが多く主体となろうが、Ⅰ～Ⅲ期のものも目立つ。

#### 17. SK373

G地区や・ゆ34Grに位置し、不整形円形プランを呈し、長径335cm×短径315cm、深さ12～26cmの土坑である。出土する遺物は多く、特に北側や北西側で集中している。覆土は4層から成り、2層のような焼土塊が主体で被熱部分が見られる層や、4層上面に被熱部分が確認されており、土坑のすべてが一気に埋め戻されたものではないようである。平面図内に示された被熱面は、粘土が被熱したもので、4層上面の、4層と1層間で位置して検

(SK377)  
平面図・断面図  
(S=1/40)



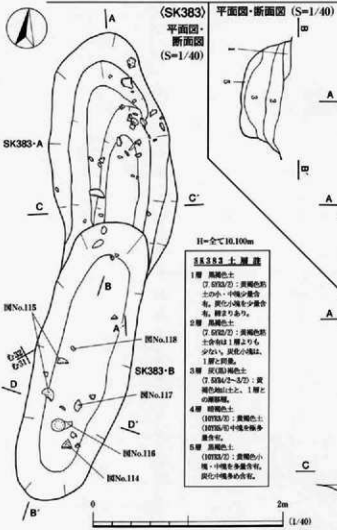
**SK377 土層図**

- 1層 黒褐色土 (1002層) : 1/1 : 褐色小塊多量、黄褐色土の塊多量含有。に黄褐色土の小塊(7.5cm)少量含有。黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。
- 2層 黒褐色土 (1003層) : 1/2 : 1 : 黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。

**(SK382)**

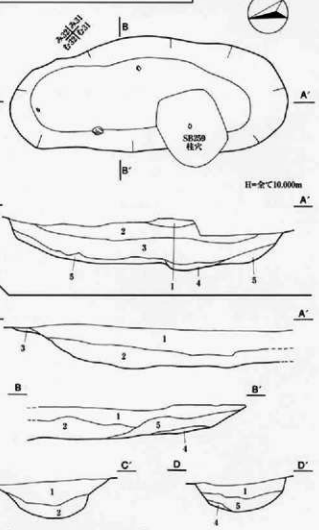
**SK382 土層図**

- 1層 黒褐色土 (1002層) : 1/1 : 黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。
- 2層 黒褐色土 (1003層) : 1/2 : 1 : 黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。
- 3層 黒褐色土 (1004層) : 1/3 : 1 : 黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。
- 4層 黒褐色土 (1005層) : 1/4 : 1 : 黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。
- 5層 黒褐色土 (1006層) : 1/5 : 1 : 黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。

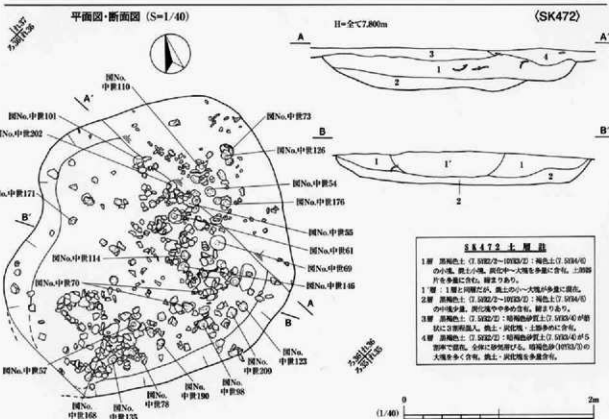
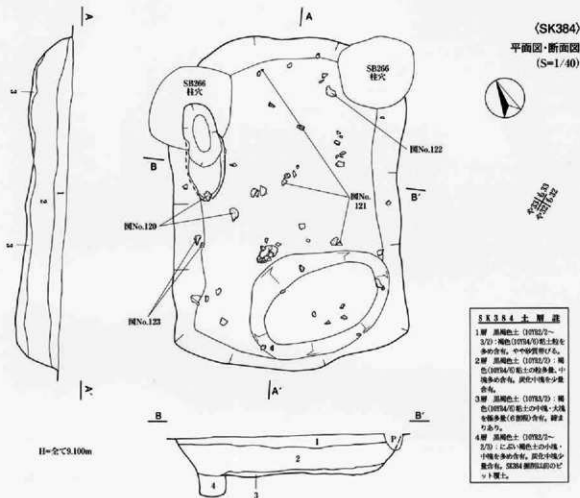


**SK383 土層図**

- 1層 黒褐色土 (1002層) : 1/1 : 黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。
- 2層 黒褐色土 (1003層) : 1/2 : 1 : 黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。
- 3層 黄褐色土 (1004層) : 1/3 : 1 : 黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。
- 4層 黄褐色土 (1005層) : 1/4 : 1 : 黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。
- 5層 黒褐色土 (1006層) : 1/5 : 1 : 黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。黄褐色土の塊多量含有。



第39図 土抗遺構図6 (SK377・SK382・SK383)



第40図 土坑遺構図7 (SK384・SK472)



出されたものである。本土坑は、土器の比較的多い大型土坑とされるB類土坑の要素と、恐らく埋め戻ってゆく際の途中段階で、窪みにおいて何かを燃したと考えられるため、被熱焼結した小型炉の床下土坑位置であるE類土坑とが考えられる。出土遺物は、須恵器食膳具36点、須恵器貯蔵具71点、土師器食膳具15点、土師器煮炊具383点、製塩土器や土製支脚を含む土製品3点、石製品は砥石1点、須恵器食膳具には油痕・摩耗痕・墨痕をもつものが4点認められる。時期はⅠ1期とされるものが多く、Ⅱ2～Ⅱ3期も認められ、これらが主体となる。他に、Ⅲ～Ⅴ期の遺物も確認されている。

#### 18. SK377

G地区の遺構集中区域である、め・も34Grに位置する土坑で、SII17を切って掘り込まれ、またSK374に切られており、この他多くの掘立柱建物とも重複する。不整形円形プランを呈し、規模は長さ390cm×短径310cm、深さは10～16cmを主体となるが、本来は25～30cm程にならう。底面は、南側が下がりが気味になるものの、平坦を呈している。土層は2層からなり、下層では地山土であるにぶい褐色土塊が多量に含まれた、締まりをもつ土が認められる。プランにいささか懸念もたれるところだが、H類と類型づけておく。出土遺物は、須恵器食膳具247点、須恵器貯蔵具28点、土師器食膳具8点、土師器煮炊具215点、土製品1点、石製品4点、中世土師器食膳具51点である。なお、須恵器食膳具には、墨書、墨痕、油痕、内面摩耗痕をもつものが13点出土する。時期は、Ⅳ～Ⅴ期のものが出土し、Ⅴ2期が主体となる。

#### 19. SK382

G地区遺構集中区域とF地区との境、む31・32Grに位置する。長楕円形を呈して、長さ270cm×短径90～110cm、深さ30～45cmを測るが本来50cmはあったと考えられる。底面は比較的平坦だが、中央から南側で10cm程落ち込む。覆土は、黒褐色土を主体に炭化物や黄褐色土塊を多量含有するものであり、最下層5層は締まりをもつ。出土遺物は非常に少なく、土坑形状からも墓壇である可能性があらう。よって、類型はG類土坑となる。出土遺物は、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具3点、土師器煮炊具2点のみである。

#### 20. SK383

F・G・H地区の境、み31・32～む31Grに位置する。この土坑の調査においては、出土遺物が2時期あったことから、2基の長楕円土坑が重複していると判断、北側をSK383A、南側をSK383Bとしている。なお、調査年度がまたがっていたため、切り合い関係は不明となった。SK383Aは、長径が推定で260～280cm、短径100～118cm、深さ40cm。SK383Bは、長さ306cm短径95～100cm、深さ30～40cmを測る。長楕円形を呈していることから墓壇である可能性があるため、類型はG類土坑となる。出土遺物は、須恵器食膳具29点、須恵器貯蔵具2点、土師器煮炊具6点であり、時期はⅡ2期が主体である。

#### 21. SK384

H地区とG地区の境、も・や33Gr内に位置する土坑で、平面プランは方形を呈し、長さ350cm、短径240cm深さ40cmを測るものである。底面は平坦だが、南東壁側に向かって若干低くなり、最下層にあたる3層は、粘土が6割混在する締まりのある層となっている。形状が小型堅穴状であり、プランも方形であることから、H類土坑となる。出土遺物は総数で、須恵器食膳具84点、須恵器貯蔵具24点、土師器食膳具20点、土師器煮炊具74点、石製品7点であり、須恵器食膳具に油痕・摩耗痕をもつものは8点確認されている。時期は、Ⅱ～Ⅳ期のものが確認できる。

#### 22. SK472

G地区南端とH地区西端の境、調査区端の断面にて極めて多量の遺物と遺構土層を検出したことから調査区の一部拡張して調査したものである。この区域一帯が土器溜まり内であり、土器溜まりとは別時期の遺物集積が認められ、整理時に同一土坑遺物と判断して取り扱った。よって、Aラインより東側の上端は想定ラインに過ぎないが、推定長径は350cm程の不整形円形プランになるものと思われる。短径は295cm、深さは30～35cmを測る。底面はほぼ平坦を呈し、出土遺物は極めて多く、遺物総数は須恵器食膳具5点、須恵器貯蔵具22点、土師器食膳具346点、土師器煮炊具82点、匝鉢を含む土製品3点、石製品7点、中世土師器食膳具834点、中世陶磁器として灰釉や白磁焼・皿が4点である。時期は、中世Ⅰ～Ⅱ1期を主体とするものである。古代遺物時期はⅣ・Ⅴ期のものが多い。なお、土坑類型は、土器の比較的多い大型土坑の位置づけであるB類とすることができる。

## 第2項 井戸跡

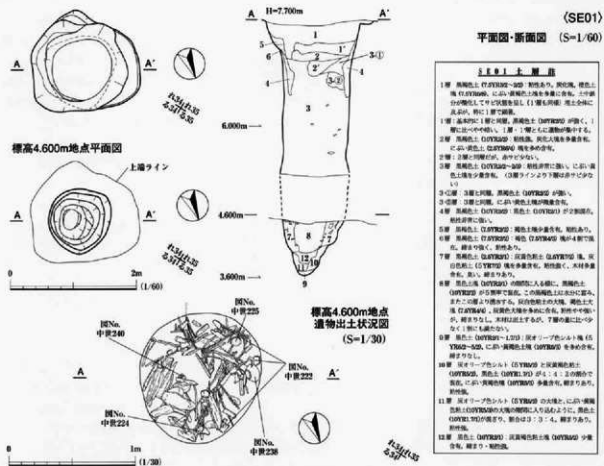
本遺跡では、井戸跡が3基検出されており、このうち今回報告対象となるのは、SE01とSE03である。SE03は古代、SE01は中世の井戸である。これらの井戸跡はH地区のみに検出されている。

### 1. SE01

G地区に近いH地区で、 $\cdot$ ル34Grに位置し、道路状遺構3と重複して検出されているものであり、道路状遺構3を切って掘り抜かれた井戸と考えられるものである。

検出時の径は、長径180cm短径165cmを測り、プランは不整形形状楕円形といったところである。断面形状は、上層付近で若干のテラスをもつものの、これより以下は直線的な壁面をもつ筒形であり、木材が多量に出土する最下層では次第に径が小さくなり、ややテラス面をもちながら一段落ち込む形状を呈してゆく。井戸自体の深さは、検出面から408cmと思いの他浅く、最下底面の標高は3,600mを測る。台地での立地であるにもかかわらず果たして井戸として機能したのか疑問をもつところであるが、調査時に標高4,500mラインより以下で湧水が認められ、本遺跡の谷部にあたるのが湧水起因となるのであろう。井戸側や井戸底の集水・浄水装置は検出されていないため、素掘り井戸であった可能性が考えられるが、井戸側を抜き取ってしまっている可能性もあるだろう。

出土遺物は、検出面から下へ165cm地点(標高6,050m)から下層にて遺物が比較的多量に出土し始めるが、これより上層では非常に遺物は少ないと言える。また、検出面から下へ210cm地点(標高5,600m)より下層で木材が出土し始めるものの、量としては少なく、最も多く遺物が出土するのは、標高4,600~4,500m地点より下層である。この地点で井戸底と考え遺物検出図を作成しているが、木材は自然木を含め細長い棒状のものが多く、面をもつものや板状のものも検出されているものの特別な加工痕跡は認められなかった。加工品として唯一、木製塊がほぼ完形で出土している。なお、出土遺物の中には、被熱したと考えられる部分的に赤化する凝灰岩が意外と多く出土しており、片手で持つにはやや困難な重さと大きさのものもある。覆土全体から出土しており、



調査時に印象的であったので記述しておく。

出土遺物は総数で、須恵器食膳具8点、須恵器貯蔵具31点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具21点、中世土師器152点、砥石を含む石製品10点（番号を付して取り上げたもの）、土製品2点、中世陶磁器8点（白磁坑6点と白磁坑・Ⅲ2点）である。中世遺物が圧倒的に多く、中世Ⅰ-Ⅱ1期に相当する。

## 2. SE03と外周土坑SK387・上層土坑

### （立地・全体の状況と規模）

H地区ゆ・よ-31・32Gr、H地区・G地区にまたがる遺構密集区の南端に付随するように位置する。本遺跡の谷部にさしかかる位置にあたる。井戸を中央に、外周にあたる大型土坑状のテラスと柱穴、井戸に付設して、井戸際へ降りて近づくための張り出し状のステップが設けられているものである。検出時には、この外周土坑内に極多量の遺物が出土し、これをSE03発掘後の廃棄土坑として判断してSK387と遺構番号を付した。さらにこのSK387を切って多量の中世遺物が検出されているものを上層土坑とした。

井戸の外周土坑は、上端プランが不整長楕円状を呈し、長軸径480cm、短軸径410cmを測る。底面はほぼ平坦で、言わば井戸本体までにテラスが設けられている形となる。長軸ラインの東側が最も標高が高く、テラス面まで深さ75cm、45°の傾斜で落ち込みをもつ。対する南側のステップ側からでは、標高8.150m地点から深さ25cmをもって緩やかに下ってテラス面に至り、さらに、テラス面からステップ面までの深さは25cmを測る。ステップは上端で長軸径110cm短軸径100cm、底面は平坦で径が80～85cmを測る。ここがこの土坑内へ降りるために最も適した位置になり、言わば入口になる。テラス面は、ステップ周辺から北にかけ比較的広く、最大幅100cmを測り中程に緩やかな落ち込みをもつ。なお、最小幅は30cmである。

土坑際には、柱穴が検出されている。土坑の落ち込み際またはテラス面までの中間地点に、8本の柱穴が位置している。配置は極めて厳格な対象位置となっていないものの、円形状に相対して配置がなされたものとみていいだろう。柱穴の規模は、径22～52cm、深さ44～77cmを測る。

以上のように、この井戸には、現況面より井戸際へ降りてゆく形状をもち、井屋が構築されている。

### （井戸の規模と形状）

テラス面での上端規模は、長径196cm、短径192cmを測る。ここから下へ直角に落ち込むのではなく、鋭い傾斜をもって下がり、標高6.800～7.200m地点で同一幅となり内法148cmを測る。調査の途中で重機掘削をしたため、断面形状は不明なのだが、標高5.000m地点で掘方土が認められ、この地点で内径プランは楕円形となっている。この径は、長径100cm、短径82cmである。これより下はほぼ同寸法の内法を示し、井戸幹地点から下は若干細くなってゆく。掘方プランは基本的には径130cmの円形を呈すが、部分的に円形からはみ出すような歪な形状をもっており、径162cmを測る。井戸の深さは570cmで、井戸底は標高2.150mである。なお、標高4.000m地点で壁面からの水滲み出しが認められている。

### （井戸底と井戸側の状況）

井戸底面は平坦で砂地山が露出している状態で、井戸側が地山に設置されている。井戸底は平坦であり、径は井戸内法で62～70cmである。井戸底面に設置されている井戸側は、木材丸太削り抜きを縦に半載したものを、円形となるよう組み合わせている。片方の丸太の削り抜きは、内面全てが円形ではなく、内側面が緩やかな箱状を呈する部分が認められ、また、切断面側には径6～20cmで方形状の貫通穴をもつ。木材の厚みは5～8cm、検出された残存長は150cm、形状から舟材を切断して転用しているものと思われる。井戸底に接する切断面は基本として平坦だが、地山との間に木材小片が挟まれており、井戸側を安定させるためと考えられる。また、標高3.650m地点で井戸側の突端が検出されており、腐食により突状の凸凹を呈している。

### （井戸の埋土・掘方）

井戸部分の埋土は、標高5.000mより下層では締まりが非常に強いことが特徴で、また標高7.000m地点が窪み形状を呈しており、4層と4'層を境に出土遺物の時期が明らかに異なっている。井戸は廃棄時に人為的に埋め戻されていたと考えられ、4層から上位層には多量の中世遺物が出土しているため、埋土の窪みを利用して廃棄土坑としたものと考えられる。また、3層のような炭下層が検出されているが、被熱層は認められていない。

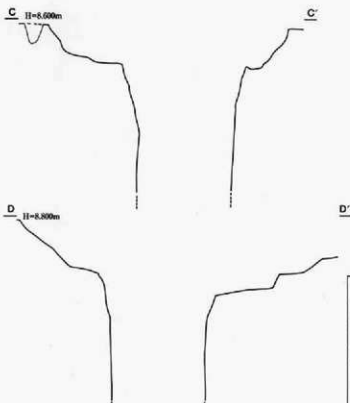
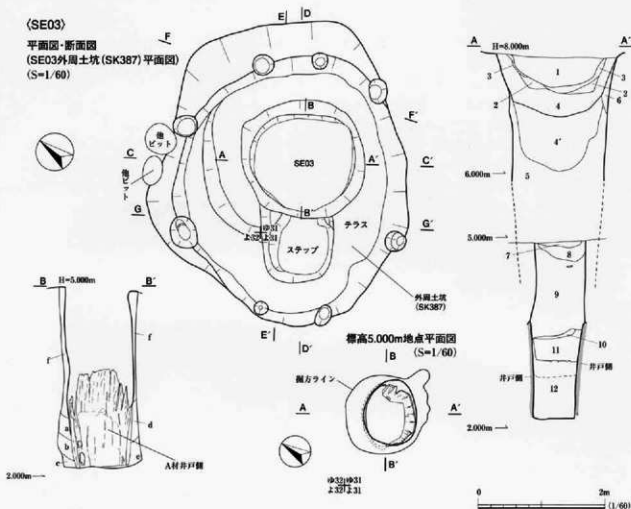
井戸には、掘方が検出されている。井戸幹を設置後に、地山との隙間を粘土や砂質土で裏詰めしたものと考えられ、掘方の幅は5～20cmを測る。掘方は、標高5.000mレベルで検出されているが、現地調査途中で重機で

(SE03)

平面図・断面図

(SE03外周土坑(SK387)平面図)

(S=1/60)



- SE03土層図**
- 1層 赤褐色土 (L:AY200) 腐植土(L:AY200)が白濁した泥状、黄土層。泥状地層を含有し、土層が厚く、シムが弱まり、粘性強弱。上層は硬質層。
  - 2層 赤褐色土 (L:AY200) 赤褐色土層。泥状地層で泥状。硬質層あり。上層は硬質層。
  - 3層 赤褐色土 (L:AY200) 赤褐色土層。泥状地層で泥状。硬質層あり。上層は硬質層。
  - 4層 赤褐色土 (L:AY200) 赤褐色土層。泥状地層で泥状。硬質層あり。上層は硬質層。
  - 5層 赤褐色土 (L:AY200) 赤褐色土層。泥状地層で泥状。硬質層あり。上層は硬質層。
  - 6層 赤褐色土 (L:AY200) 赤褐色土層。泥状地層で泥状。硬質層あり。上層は硬質層。
  - 7層 赤褐色土 (L:AY200) 赤褐色土層。泥状地層で泥状。硬質層あり。上層は硬質層。
  - 8層 赤褐色土 (L:AY200) 赤褐色土層。泥状地層で泥状。硬質層あり。上層は硬質層。
  - 9層 赤褐色土 (L:AY200) 赤褐色土層。泥状地層で泥状。硬質層あり。上層は硬質層。
  - 10層 赤褐色土 (L:AY200) 赤褐色土層。泥状地層で泥状。硬質層あり。上層は硬質層。
  - 11層 赤褐色土 (L:AY200) 赤褐色土層。泥状地層で泥状。硬質層あり。上層は硬質層。
  - 12層 赤褐色土 (L:AY200) 赤褐色土層。泥状地層で泥状。硬質層あり。上層は硬質層。

- SE03掘方土層図**
- 1層 赤褐色土 (L:AY200) 赤褐色土層。泥状地層で泥状。硬質層あり。上層は硬質層。
  - 2層 赤褐色土 (L:AY200) 赤褐色土層。泥状地層で泥状。硬質層あり。上層は硬質層。
  - 3層 赤褐色土 (L:AY200) 赤褐色土層。泥状地層で泥状。硬質層あり。上層は硬質層。
  - 4層 赤褐色土 (L:AY200) 赤褐色土層。泥状地層で泥状。硬質層あり。上層は硬質層。
  - 5層 赤褐色土 (L:AY200) 赤褐色土層。泥状地層で泥状。硬質層あり。上層は硬質層。
  - 6層 赤褐色土 (L:AY200) 赤褐色土層。泥状地層で泥状。硬質層あり。上層は硬質層。
  - 7層 赤褐色土 (L:AY200) 赤褐色土層。泥状地層で泥状。硬質層あり。上層は硬質層。
  - 8層 赤褐色土 (L:AY200) 赤褐色土層。泥状地層で泥状。硬質層あり。上層は硬質層。
  - 9層 赤褐色土 (L:AY200) 赤褐色土層。泥状地層で泥状。硬質層あり。上層は硬質層。
  - 10層 赤褐色土 (L:AY200) 赤褐色土層。泥状地層で泥状。硬質層あり。上層は硬質層。
  - 11層 赤褐色土 (L:AY200) 赤褐色土層。泥状地層で泥状。硬質層あり。上層は硬質層。
  - 12層 赤褐色土 (L:AY200) 赤褐色土層。泥状地層で泥状。硬質層あり。上層は硬質層。

第42図 井戸遺構図2 (SE03)

掘削したこともあり、どのような形状を成して上層に至ったのか不明である。残存井戸側の上位層に掘方土が及んだと考えられるため、上層にも井戸側が使われていたが抜き取られた可能性があるだろう。

#### 〈遺物出土〉

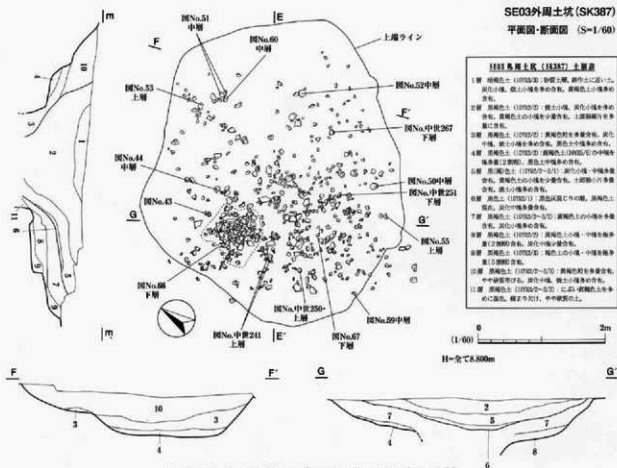
出土遺物の状況は、井戸廃絶後の大型土坑状のテラス面を廃棄坑として使用したSK387から極めて多量の遺物が検出されている。また、SK387と井戸上層を切って掘り込まれた中世の上層土坑からの出土も多い。標高4.500m付近の埋土内で完形の坏蓋が検出されている。

SE03覆土での総数は、須恵器食膳具138点、須恵器貯蔵具70点、土師器食膳具63点、土師器煮炊具136点、中世土師器232点、石製品8点(番号を付して取り上げたもの)、土製品7点、中世陶磁器8点(白磁焼6点と土師器焼・皿2点)である。この内、須恵器食膳具には、油痕80点、内面底部が摩耗するもの14点、墨書土器6点が含まれる。

SK387からの出土遺物の総数は、須恵器食膳具308点(油痕・摩耗痕85点、油痕60点、摩耗痕15点、墨痕2点を含む)、須恵器貯蔵具117点、土師器食膳具66点、土師器煮炊具685点、中世土師器食膳具714点、土製品9点、石製品13点、中世陶磁器10点(近江産緑釉焼、灰釉焼、白磁の皿・焼)である。この内、須恵器食膳具には、油痕をもつものが総じて145点と多い。

SE03・SK387から出土する中世遺物は、両者を切って構築された上層土坑からの出土と判断している。

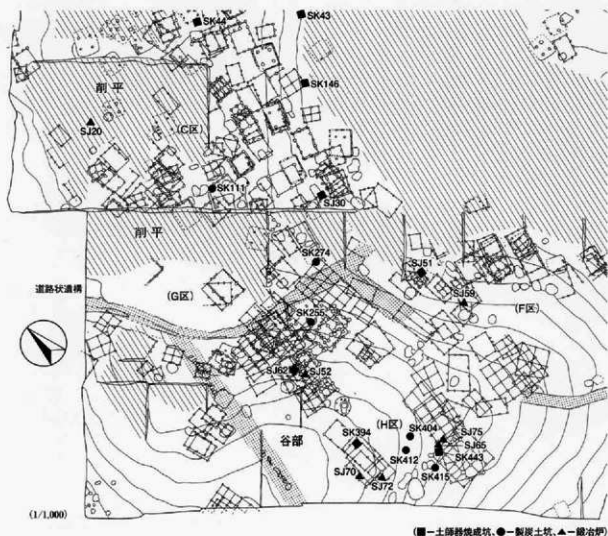
SE03井戸内から出土した遺物の時期は、Ⅳ2～Ⅴ2期に相当する。標高4.000m以下から井戸底までではⅣ2期主体で、標高6.300m以下から下層までの間ではⅤ2期主体、これより標高7.000mまでの間ではⅤ～Ⅵ2期に相当する。外周土坑SK387ではⅢ～Ⅳ期の遺物が検出されているが、主体はⅤ～Ⅵ期である。そして、上層土坑にあたる中世遺物は中世Ⅰ～Ⅱ1期に相当する。



第43図 井戸遺構図3 (SE03、外周土坑 (SK387))

## 第3節 手工業生産関連遺構

観見町遺跡は、各種手工業生産を生業とする集落遺跡であることは、遺跡の概要のところでも述べたが、今回の報告地区でも、手工業生産関連遺構が検出されている。土師器焼成坑、製炭土坑、鍛冶炉が各1基あり、比較的建物遺構の密集する区域において検出される。次回報告の日地区南西区域では、鍛冶炉と製炭土坑の密集する区域が確認されており、ここでも鍛冶炉は掘立柱建物内に位置する傾向が見られる。



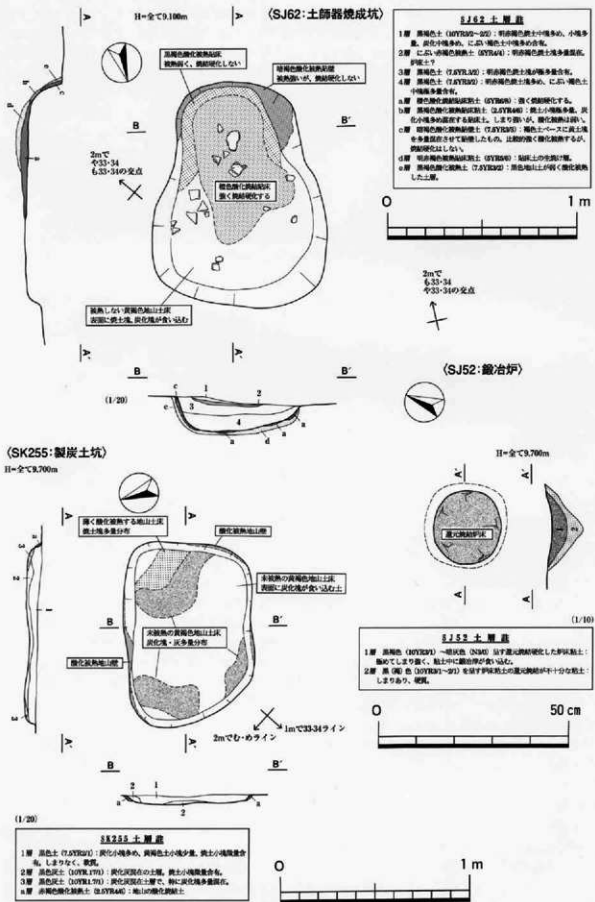
第44図 B・C・F・G・H区の手工業生産関連遺構分布図

## 第1項 土師器焼成坑 (SJ62)

今回報告区域の被熱遺構の中で、定型的な土師器焼成坑と呼べるものはないが、SJ62は床面に広く酸化被熱焼結層が確認され、立ち上がりの急な壁に顕著な被熱が確認されたため、土師器焼成坑と認定した。ただ、当遺構からは土師器焼成に伴う焼成剥離のある土師器や焼き歪んだ土師器など、明確に焼成破損した土師器は確認できておらず、根拠不足の部分は否めない。

当土師器焼成坑は、西側へ緩く傾斜していく斜面に位置し、古代Ⅱ2～Ⅲ3期に位置付けられる窪穴建物SI117と古代Ⅱ3～Ⅲ期頃の土師器廃棄土坑SK372とが埋没した後に掘削される。焼成破損した土師器がないため、土師器焼成坑の時期を特定しにくい。床面より出土した須恵器や強く被熱を受けた土師器片は古代Ⅲ～Ⅳ1期に位置付けられるものであり、SK372の時期から考えても、Ⅳ1期頃に位置付けられるものと推察する。

規模は縦軸長が120 cm、横軸長が奥63 cm、手前92 cmを測り、縦長の形態を呈す。平面プランが無花果形を呈



第45図 手工業生産関連遺構図 (SJ52, SJ62, SK255)

するもので、奥の幅狭部分が焼成箇所、手前の幅広部分が前庭部的な箇所にあたる。奥壁から奥部の側壁にかけては15～18cmの壁高をもってしっかりと立つが、手前前庭部的な部分の側壁から前部にかけては、立ち上がりは緩やかで、壁高も10cm未満と低い。焼成箇所の床と壁は黄褐色系の粘土で貼して作られており、その部分で強く酸化被熱焼結していた。被熱層は奥壁で3cm程度だが、床面では3～6cm程度あり、表面の焼結硬化も床面のほうが強かった。床から壁への傾斜転換点付近では焼結が弱く、2cm程度が弱く被熱する程度であった。壁の被熱箇所は奥壁付近に偏るが、床面被熱は手前側に伸びており、奥壁際より60cm程度の範囲で被熱が確認される。それより手前では、被熱が確認されず、表面に焼土塊や炭化塊が食い込む程度であった。

先に述べたように、当土坑の奥の幅狭部分のみを焼成部として使用し、手前の幅広部は作業場の空間として使用したことが、このような被熱状況になったものと理解される。

## 第2項 製炭土坑 (SK255)

古代Ⅰ期に位置付けられる壁穴建物 S112 が埋没した後に埋土中に掘削される土坑で、土坑床面は S112 の床面とはほぼ同レベルにある。当土坑に伴うと判断できる床面出土遺物がないため、時期を特定することはできないが、古代Ⅳ2新～Ⅴ2期頃に存在していたであろう、四面囲付き掘立建物 SB259 にも重複しているため、その間の時期、古代Ⅰ2期からⅣ2期の間で考えられよう。S112 の埋土に古代Ⅲ～Ⅳ期の遺物が多く混在している状況と、その覆土を切って存在していることから考えれば、古代Ⅳ2期とするのが妥当だろう。

土坑は長軸 98 cm、短軸 67 cm の隅丸長方形で、床面はほぼフラットに掘られている。壁の立ち上がりは立ち気味であるが、掘り込みは浅く、壁高は 5 cm 程度、土坑中央付近でも 10 cm 程度である。壁の立ち上がり部から上端にかけて酸化被熱痕跡が確認され、上端では特に焼結していた。床面は下層に堆積した大きな木炭片混じりの黒色灰層を除去すると、黄褐色地山が露出し、被熱焼結した様子はないが、木炭小片が床に食い込む形で検出されている。また、壁際近くでは木炭片と黒色灰が多量に分布する様子があり、以上の壁と床の被熱特徴、木炭片の出土、下層の黒色灰の溜まり状態から推察し、製炭土坑と判断した。

ただ、かなり小型の土坑であり、被熱痕跡も弱いなど、C 地区で検出された床面還元焼結の製炭土坑 SK111 に比べると、生産回数の少ない、一時的な生産のためのものであった可能性が高いだろう。当製炭土坑が鍛冶遺構との関連性の中で位置づけられる根拠はないが、当遺跡の鍛冶が 8 世紀代に生産の拡大を図った可能性が高いことを考えれば、鍛冶関連のものと性格づけるのが妥当と判断される。

## 第3項 鍛冶炉 (SJ52)

鍛冶炉は掘立建物の密集する場所に位置しており、総柱建物の SB265、側柱建物の SB322、SB323 の 3 棟の古代掘立建物と重複する。総柱建物は機能的に適さないので除外するとして、側柱建物に関しては、鍛冶炉の覆屋であった可能性がある。特に、SB322 は建物の中央付近に鍛冶炉が位置しており、掘立建物の規模がやや大きい点は気になるが、当鍛冶炉に伴う覆屋、工房的な建物であった可能性が高いだろう。鍛冶炉は、火の発生する範囲が狭いことと鍛冶作業における炎の色の識別を容易とするため、太陽光線を遮断できる屋内であることの方が都合がよいとされており、鍛冶炉の建物内設置は必然的とも言われている。SB322 の中で占める位置関係からしか、当掘立建物に伴う根拠はないが、一応の可能性として考えておきたい。因みに、SB322 は古代Ⅲ～Ⅳ1期に位置付けられるものと判断される。

鍛冶炉は還元焼結した炉床のみ検出されたもので、炉壁等の炉体構築物は遺存していなかった。炉床は 18 × 20 cm の略円形で、僅かに炉床中央が窪むような形状をもつ。炉床上面からは鍛冶剥片や粒状滓の確認はなかったが、炉上面及び炉床土中から極小型碗形鍛冶滓が数点採取できており、炉の周辺からも鍛冶滓が出土した。これら周辺の鉄滓も当鍛冶炉に伴うものと予想でき、炉壁等が消失しているため、炉の構造や規模は復元できないが、炉床の大きさや炉床に残された極小の碗形鍛冶滓の存在から、鍛冶工程の最終段階の作業を主とした小型の鍛冶炉であったものと予想する。

なお、炉床の地下に土坑状の付設遺構は見られず、黒色地山の上に、黒色系の砂質帯びる炉床粘土を直接貼り込んで作られている。炉床粘土は中央で厚さ 8 cm 程度あり、U 字状に貼り込む。被熱は上面半分程度が黒色に強く還元焼結しているが、下面半分では還元焼結不十分で、生焼状態であった。



## 第4節 その他の遺構と包含層

### 第1項 道路状遺構と今回報告部分

本遺跡で検出された道路状遺構は、C地区の一部を含めF・G・H地区において確認されている。本遺跡全体で大きく3本が確認でき、検出地点ごとに遺構Noを付している。まず、G地区北西端から南東側へ緩やかに曲がってF地区に延び、さらに東に緩やかにカーブを描いてC地区へ繋がるものが道路状遺構1である。道路状遺構1のF地区西側から分岐してH地区に延び緩やかな弧を描く様にF地区に至り、斜面を登るように続くものが道路状遺構2である。そして、道路状遺構1のG地区東側から分岐するように南側へ向かって直線的に延びるものが道路状遺構3である。

これらの道路状遺構は、路面の検出、道路幅員と思われる溝状遺構、道路の付帯的構造痕跡と思われるピット列や波板状凸凹面の検出が個別になされ、それぞれつながり面的に捉えることが出来たことから、最終的に大きな3本の道路状遺構であると判断したものである。但し、削平の影響により路面の検出が一部に至るものや、上層削平され路面内埋土が露出していると思われる状態のもの、床下構造もわからないくらいに削られて消滅する箇所も見られる。特に、C地区に一部かかる区域から先の東側は恐らく道路状遺構が続いていたものと考えられるが、更に標高が高くなるため完全に消滅してしまっている。なお、道路状遺構2の本遺跡検出の南端から先、要するにF地区の末端部分から先のE地区とした区域には、(財)石川県埋蔵文化財センターが平成9年に発掘調査した道路状遺構が続く。

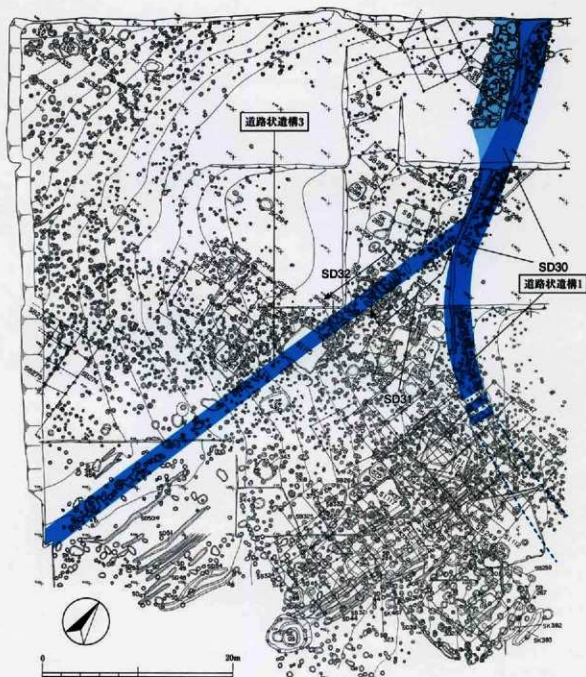
今回報告対象となるのは、G地区にて検出された道路状遺構1の一部分と、道路状遺構3である。道路状遺構1については現地付した遺構番号SD30、道路状遺構2については遺構番号SD31とSD32が該当する。SD30では、路面と考えられるバラス敷き硬化面が溝状遺構内にて検出されている他、波板状凸凹面、ピット列群、土坑列群が検出されている。SD31では波板状凸凹面のみの検出である。SD32では、バラス敷きや硬化面をもつ路面が若干マウンド状に検出され、その下層にて溝状遺構と別路面、部分的に波板状凸凹面が検出されている。

#### 1. 道路状遺構1 (SD30)

今回報告する道路状遺構1のSD30は、前回報告(額見町遺跡Ⅲ)したSD25の続きにあたる。全体形状は、G地区北西端からF・G・H地区境の東に緩やかにカーブを形成する。その先には、時期が全く異なっているもの方向の目安としてS112に向かう形で前回報告のSD25に続く。SD30は、近代の切土削平による影響のため、途中2カ所の途切れ、要するに上層削平が認められるが、バラス敷き面(土器細片を中心に礫や鉄滓も含んで硬化する広がり)・前回報告では土器敷き面としての路面とし、溝状の落ち込みを中央にして両側にピット列群や土坑列群を伴うことが特徴であり、北西端が最も標高が低く、東へ向かうに従って標高が高くなってゆく。この高低差は、溝底面(路床)地点の差で1m74cm、溝上端地点の差で1m61cmを測る。要するに、SD30は、緩やかな斜面に立地する道路状遺構だということと言える。そして、標高が高くなるにつれ削平の影響が顕著と言える。



第46図 額見町遺跡道路状遺構全体図



第47図 今回報告区域の道路状遺構全体図 (S=1/400)

SD30の全長は北西端から36mで、更に東側へ続いて検出されたピット列群も含めれば40m以内に留まる。その先に続くSD25までの15mの範囲では、道路状遺構は検出されていない。この区間は、完全に削平されてしまった可能性が大きい。例えばSD30 A区のようにかろうじて痕跡が残っていたとしても、この区間は遺構密集区でもあり、検出は極めて困難な状況であったろう。

さて、切土削平が3段に及んでいる状況から、報告者はSD30を3地区に分けた。南側にあたる、む・め-37・38Grに位置するものをSD30 A区とする。中央にあたる、め39、む・め-40・41Grに位置するものをSD30 B区とする。北西にあたる、み・む-42~44Grに位置するものをSD30 C区として報告する。

## (1) 区割りごとの状況

## ① SD30 A区

この区域は、土器細片や鉄滓が集中する広がりがあり、この面より下層位から、浅い溝とピット列群が更に検出されたものである。土層断面ポイントであるBライン・Cラインを結ぶ区画内で、Cラインに近い側の半分に鉄滓が集中して検出され、この部分はA地区中で最も傾斜の強い箇所にあたる。これらの検出遺物の広がり、幅60cmを測り、溝プランと概ね一致しながらもはみ出るように位置する。バラス敷きの一部と考えられようが、次に述べるB・C区と比較しても検出溝は浅く、出土遺物は路面に敷かれたバラスというより、路面内の土に混入していた可能性が高いのではないと思われる。路面幅はもっと広がった可能性があるだろう。

検出溝は、残存で長さ4m84cm、上端幅20～30cm、深さ10～14cmを測り、非常に細長く浅いものである。溝は単層で、黒褐色土を主体に地山土である褐色土塊を少量含有、SD30C区1層と同傾斜となるものである。この覆土を除去した底面には所々硬化面が認められる。これが路床となろうが、溝の底面は幅が最大でも20cm程度で、平坦ではなく浅い断面皿状を呈した窪みといったものである。溝の東側には、ピット列群が検出されている。ピット覆土は黒褐色土が基本で、粘性の強い締まりをもつ黒褐色土も認められる。

## ② SD30 B区

SD30 B区で検出された溝は、残存長9m90cm、残存上端幅が最南で30cm、最北で1m70cmを測る。溝は、上端の末端から緩やかに底面に向かって下っている状態で底面が平坦となる断面皿状や逆台形状を呈し、深さは5～20cmを測る。最南にあたる溝幅の狭い部分が最も浅く、最も北にあたる溝幅の広い部分が最も深い。

この溝の内部において、バラス敷きを有して若干硬化する路面と、最下底面の路床の硬化が検出されている。バラス敷きは、溝覆土の3層下面から検出され、A区同様に土器細片と特に鉄滓が多い。路面は、溝中央で一直線をなしており、幅は60～70cm主体で、最も30cmを測る。高、路面検出状況図で、路面幅から外れて出土する遺物を記載しているが、これは路面に伴うものではなく、路床までの覆土から出土しているものが加わっている。路床幅は、20～30cmが主体で、15cm程の箇所も認められる。路床の硬化は、後述するSD32よりも硬いとのことである。路床上層には、1～10cmの黒褐色土に地山褐色土の混入が少ない遺物を伴う層が認められ、この上面が硬化し、路面となるのである。また、路面よりも更に上層にあたる3層にも硬化が認められるので、この層も改修のための搬入土となろうか。

溝の東側を中心にピット列群と土坑(SK296)が検出されている。ピット列群の覆土は、黒褐色土をベースに地山褐色土塊が少量混入するもので、中には軟質なものも認められるものの、本遺跡の基本的なピット覆土を網羅しており、覆土に特別な印象はもたれない。土坑は、底面が平坦で、覆土は下層に暗褐色土に地山褐色土が3～4割混在する層、上層に黒褐色土に少量の地山褐色土塊が混入する層の、これら2層が基本となる。ピットと土坑の切り合いは様々であり、両者は併存していた可能性が高い。ピットの深さは、浅いもので10cm前後、深いもので40cmを測る。深さそのものは、溝の路床レベルと同等のものが殆どで、溝が次第に浅くなれば周囲のピットも浅くなるといった状況である。

## ③ SD30 C区

この区域で検出された溝は、残存長10m90cm、残存上端幅50cm～1m86cmを測る。溝は断面皿状や逆台形状を呈して、上端から緩やかに下底へと傾斜する。溝内には、路面と路床が検出されており、この面はほぼ平坦となる。路面はやや硬化しており、バラス敷きを伴うもののB地区に比べ量は少ない。バラスには土器細片や鉄滓を用いており、鉄滓率は意外と高い。路面幅は、50～1m20cmを測る。路面下の1層や4層は、地山褐色土塊の混入が少ない黒褐色土ベースの土が入り、土器も混入する。最下底面である路床は、幅12～68cmで硬化しており、この路床までの深さは、溝の上端から14～40cmを測る。深い部分では、断面形状が逆台形状であることが顕著であり、オープンカット法を用いて造成された可能性もたれる。ただ、断面Cラインを見ると、路床の硬化面が偏っていることがわかり、初期段階では狭い幅を保っていたが、どこかの段階で道路幅を広げた可能性あると考えている。また、路面検出状況図で、路面幅から外れて出土するものを記載しているが、これは路面に伴うものではなく、路面下出土のものや周辺で検出されたものが加わっている。

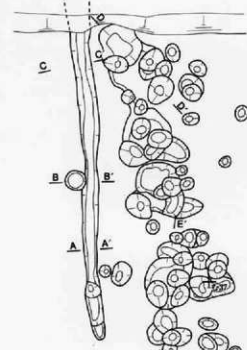
SD30 C区は両サイドでは、土坑・ピット列群が検出されている。西側では土坑群が主体、東側ではピット列群が主体となっている。これらの土坑群には遺構番号が付してあり、SK292・293・297～313・315・317～

SD30 A区 平面図 (S=1/60)  
(バラス除去後の溝状遺構とピット群)

め39/639  
め38/638

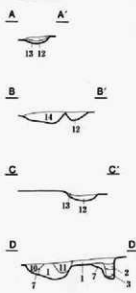
(SD30 A区)

- SD30 A区土層表**
- 1層 黒褐色土 (O.VY125) 地土上の中硬多量含有、硬化塊少量含有。
  - 2層 黒褐色土 (O.VY220) 地土の中～大硬多量含有、硬化塊少量含有。
  - 3層 黒褐色土 (O.VY125) 地土上流が極多量含有、硬化塊少量含有。
  - 4層 黒褐色土 (O.VY125) 1層よりやや硬い。
  - 5層 暗褐色土 (O.VY125) 4層に比し硬化塊減少あり。
  - 6層 土河原。
  - 7層 地土。
  - 8層 黒褐色土 (O.VY125) 4層に比し硬化塊減少あり。
  - 9層 黒褐色土 (O.VY125) 硬化塊減少あり、地土大塊が多量含有。
  - 10層 黒褐色土 (O.VY125) 地土の中～大塊が多量含有。
  - 11層 黒褐色土 (O.VY125) 地土上流が中～多量含有。
  - 12層 黒褐色土 (O.VY125) 地土の中～大塊が多量含有、この層の下に、硬化した面の存在あり。(溝状遺構・SD30 C区1層と同等層)
  - 13層 地土上に1層少量混入、地土地土上流が多量含有。
  - 14層 黒褐色土 (O.VY125) 土層が多量含有、硬化塊少量含有、SD30 A区からピット土層。



断面図

A・B・Cライン S=1/30  
D・Eライン S=1/60  
H=全て9.700m



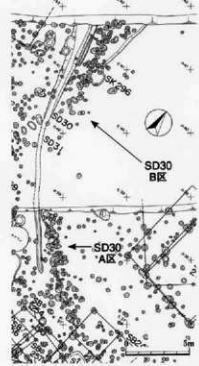
め33/637  
め36/636



0 2m (1/60)

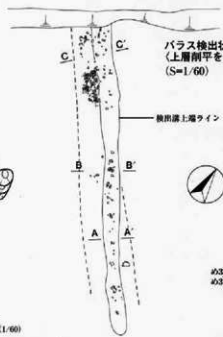


SD30 C区



SD30 B区

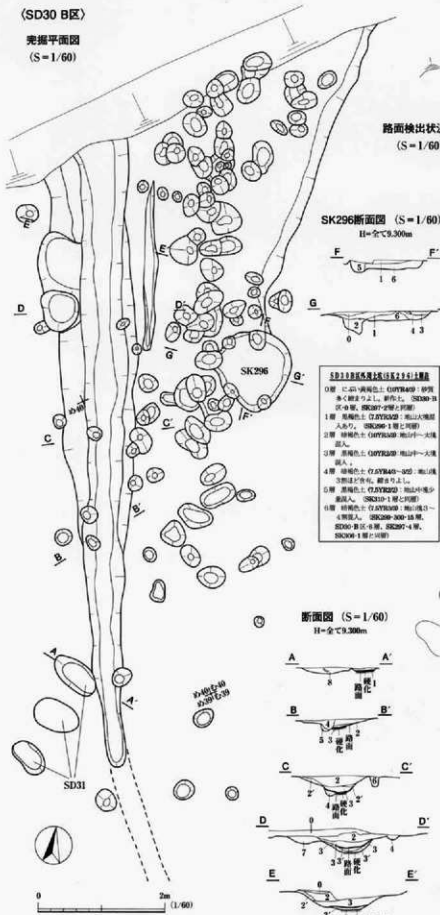
SD30 区割り図 (S=1/300)



め38/638  
め37/637

第48図 道路状遺構1 遺構図1 (SD30 A区)

(SD30 B区)  
発掘平面図  
(S=1/60)

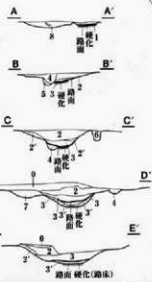


路面検出状況図  
(S=1/60)

SK296断面図 (S=1/60)  
H=全て9.300m

- SD30 B区土層層序
- 0層 礫質黄褐色土 (OY7940) 砂利多量を含む。断面は、SK299-5層、SK297-2層と同層。
  - 1層 黄褐色土 (OY7942) 地山に中程度混入。SK299-1層と同層。
  - 2層 黄褐色土 (OY7943) 地山に中程度混入。
  - 3層 黄褐色土 (OY7944) 地山に中程度混入。
  - 4層 黄褐色土 (OY7945-50) 地山に中程度混入。SK299-1層と同層。
  - 5層 黄褐色土 (OY7942) 地山に中程度混入。SK299-1層と同層。
  - 6層 黄褐色土 (OY7943) 地山に中程度混入。SK299-3層、SK297-4層、SK298-300-15層、SK300-3層、SK297-4層、SK300-1層と同層。

断面図 (S=1/60)  
H=全て9.300m



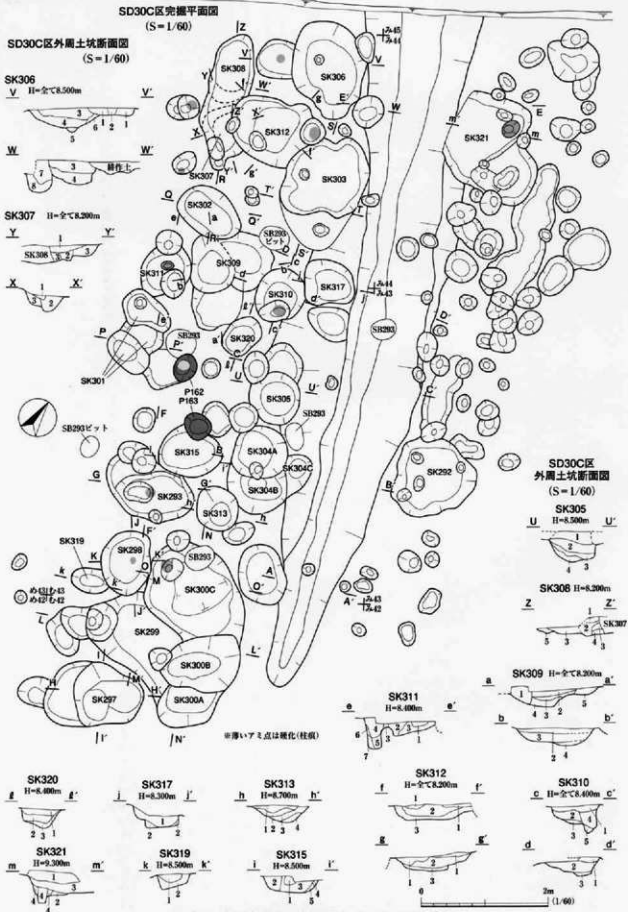
SD30 B区土層層序

- 0層 礫質黄褐色土 (OY7940) 砂利多量を含む。SK297-5層、SK297-2層と同層。
- 1層 黄褐色土 (OY7942-50) 地山に中程度混入。地山に中程度混入。SK299-1層と同層。
- 2層 黄褐色土 (OY7943-50) 地山に中程度混入。
- 3層 黄褐色土 (OY7944) 地山に中程度混入。SK299-3層、SK297-4層と同層。
- 4層 黄褐色土 (OY7945) 地山に中程度混入。SK299-1層と同層。
- 5層 黄褐色土 (OY7942) 地山に中程度混入。SK299-1層と同層。
- 6層 黄褐色土 (OY7943) 地山に中程度混入。SK299-3層、SK297-4層、SK298-300-15層、SK300-3層、SK297-4層、SK300-1層と同層。
- 7層 黄褐色土 (OY7943) 地山に中程度混入。土塊混入。混入なし。
- 8層 黄褐色土 (OY7943) 混入あり。地山に中程度混入。SK299-1層、SK297-2層と同層。

第49図 道路状遺構1 遺構図2 (SD30 B区)



第50図 道路状遺構1 遺構図3 (SD30C区一①)



第51図 道路状遺構1 遺構図4 (SD30C区-②)

第330号区西側土層断面2	
【SK301層上】	1層 埋納品点：OY3092-20：地中に大塊含む。やや軟し。SD30土層 2層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 3層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 4層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 5層 埋納品点：OY3092-20：地中に大塊含む。やや軟しあり。 【SK302層上】
1層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 2層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 【SK303層上】	1層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 2層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 3層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 【SK304層上】
1層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 2層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 3層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 4層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 【SK305層上】	1層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 2層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 3層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 4層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 【SK306層上】
1層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 2層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 3層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 4層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 5層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 6層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 7層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 【SK307層上】	1層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 2層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 3層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 4層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 5層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 6層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 7層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 【SK308層上】
1層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 2層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 3層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 4層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 5層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 6層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 7層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 【SK309層上】	1層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 2層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 3層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 4層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 5層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 6層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 7層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 【SK310層上】

第330号区西側土層断面2	
【SK310層上】	1層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 2層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 3層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 4層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 5層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 6層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 7層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 【SK311層上】
1層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 2層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 3層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 4層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 5層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 6層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 7層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 【SK312層上】	1層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 2層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 3層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 4層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 5層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 6層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 7層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 【SK313層上】
1層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 2層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 3層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 4層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 5層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 6層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 7層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 【SK314層上】	1層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 2層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 3層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 4層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 5層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 6層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 7層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 【SK315層上】
1層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 2層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 3層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 4層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 5層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 6層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 7層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 【SK316層上】	1層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 2層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 3層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 4層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 5層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 6層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 7層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 【SK317層上】
1層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 2層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 3層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 4層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 5層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 6層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 7層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 【SK318層上】	1層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 2層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 3層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 4層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 5層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 6層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 7層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 【SK319層上】
1層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 2層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 3層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 4層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 5層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 6層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 7層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 【SK320層上】	1層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 2層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 3層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 4層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 5層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 6層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 7層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 【SK321層上】
1層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 2層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 3層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 4層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 5層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 6層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 7層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 【SK322層上】	1層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 2層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 3層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 4層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 5層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 6層 埋納品点：OY3149-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 7層 埋納品点：OY3124-30P：地中に大塊含む。やや軟しあり。 【SK323層上】

321にある。土層断面を見ると、SD30C区溝を切ってSK304・SK319・小ピットが掘り込まれている。逆に、SK321は、SD30C区に切られている。覆土においても、土坑同士やピット覆土、SD30の他地区の覆土と同質・同層が確認でき、同時に機能したものと考えられる。路床の深さの基準とすれば、溝は最も深い北西端から緩やかに登って南東端まで至るため、南東端が最も浅くなる。西側の土坑群は、路床よりも深く掘り込まれているものが大半で、路床よりも更に20～30cm深い。ただ、浅いものも認められ、SK311とSK301の北側一部、これら遺構に隣接するピットと、溝の土層断面Aポイントにかかる土坑の数基のみであるが、これらは、路床レベルよりも2～5cm底面が高い程度である。

一方、東側に広がるピット列群・土坑群の底面レベルは、殆どが路床よりも浅い。路床レベルよりも5～30cm前後上位に留まっているのである。但し、土層断面ポイントE'地点から北に向かう薄層の土坑やピット列のみ路床よりも深く掘り込まれている。このように、SD30C区の西側土坑群と東側土坑群では、深さに違いが認められる。また、土坑群の覆土層で、杭のような細い柱痕が認められる他、調査時には、土坑群やピット群から、杭や柱のようなものが位置していたと考えられるような圧痕、円形に硬化する痕跡を検出している。そして、PI62とPI63からは、それぞれ「八水」と墨書された坏Aが出土している。

## (2) SD30の出土遺物

出土遺物はSD30全体で、須恵器食膳具752点、須恵器貯蔵具357点、土師器食膳具74点、土師器煮炊具440点、管状土鍬や土製支脚を含む土製品13点、砥石を含む石製品9点が出土する。これら遺物の時期はI1～VI2期までに位置づけられ、時期幅は甚だしいが、路面のバラスとしてあらゆる土器を使用したからであろう。また、遺物図版No.6・7などは、VI2期と判断されるが、覆土からの出土である。SD30C区西側に位置するPI62・163から出土する墨書土器はV2期を示している。これらのピットがSD30に伴う可能性は高いため、少なくとも道路状遺構1はV2期までは機能しており、VI期段階で埋没したのではないかと考えている。この他、加賀焼の中世陶磁器3点、中世(11～12C前半)の土師器食膳具11点、中世鉢底部1点が出土するが、古代遺物に比べ数量は格段に少なく、混入したものと思われる。

周囲の土坑群からは、全ての土坑の総数で、須恵器食膳具58点、須恵器貯蔵具44点、土師器食膳具13点、



土師器煮炊具 82 点、土製品 4 点が出土する。土坑数の割には少なく、最も多く出土する SK321 でさえ、須恵器食膳具 12 点、須恵器貯蔵具 3 点、土師器煮炊具 11 点、土製品 2 点といった程度である。土坑群から出土する遺物の時期もⅠ2～Ⅵ2期と幅広いが、Ⅴ期やⅥ期が主体となっている。

### (3) SD30 東側ピット列について

道路状遺構の際に添ってピット列が検出される事例は全国に認められるようである。このようなピット列は、「土留めの際の杭列」「樹木痕」「柵」であろうとの認識がなされている（近江俊秀 2003『古代国家と道路』、山村信栄 2001『古代道路の構造』『古代交通研究第 10 号』）。SD30 の東側は、確かに標高の高い方向である。そして、ピット同士が連続しつつも規則性はなく、ピット規模も様々であり、ピット底面が路床レベルよりも高いということ挙げられ、ピット覆土は人為的埋土であり、土層断面においても杭痕跡ではないかと思われる土層も認められる。これらのことから、道路内へ土などの流入を食い止めるための痕跡、土留めのために施された何らかの痕跡である可能性が高いものと考えている。

### (4) 道路状遺構 1 (SD30) 小結

SD30 は溝内に路面を有し、この路面は弱い硬化とバラス敷きを伴うもので幅は削平区域で最小 30 cm、最大で 120 cm を測るものであり、バラスには鉄滓が目立つ。路面下には、遺物を伴う別土が充填されており、この充填土下に、硬化の強い路床が認められる。路床の幅は最も削平された区域で 15 cm しかないが、30～44 cm を主体とする。初期段階の路床は、断面風状を主体とするが、次段階で拡げられ C 区や B 区の一部では逆台形状の断面プランをもって路面とされたと考えられる。何れの地区でも溝東側にピット列群が検出され、土止めの役割を担ったと考えられ、目的は不明だが C 区のみ西側に土坑群が検出されて特異な印象をもつ。

## 2. 道路状遺構 3 (SD31・SD32)

道路状遺構 3 は、道路状遺構 1 から分岐して、直線的に南西方向へ続くものである。SD31 と SD32 が該当する。SD30B 区から分岐するのが SD31 で、波板状凸凹面が検出されている。SD32 では、SD31 から更に南へ続くもので、北側では波板状凸凹面のみが検出され、南側では 2 枚（～4 枚以上？）の路面を検出し、路床よりも下層レベルで部分的に波板状凸凹面が検出されている。

### (1) SD31

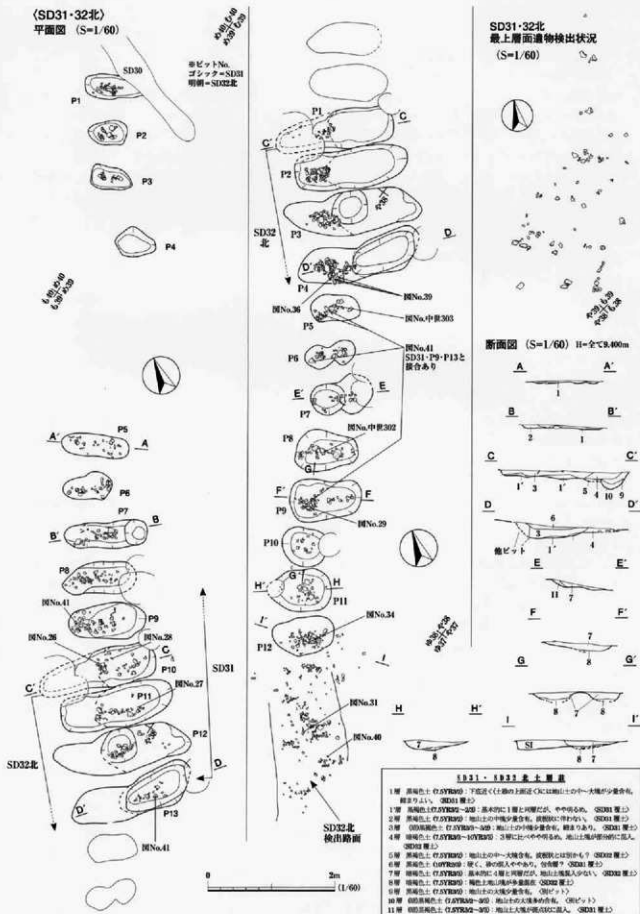
SD31 は、SD30B 区南端から延び、め 39・40 - も 39 - や 38・39Gr にまたがって位置する。SD30 との切り合いについては、平面図で SD31 が SD30 に切られているように示されているが、断面図では新旧を見分けることはできない。

さて、SD31 は、浅い土坑状窪みが連なっているもの、波板状凸凹面のみが検出されている。長楕円形の短径を南北軸に対し垂直に並ぶもので、検出されているのは 13 基分、検出されない箇所も認められるものの全体で 11 m 60 cm に及ぶ。遺構プランは、長楕円形や長不整楕円形を呈し、規模は、長径 62～132 cm、短径 34～65 cm、深さ 2～22 cm を測る。め 39・40Gr に位置するものが、長径が 63 cm 前後を示して短く、深さも 2～4 cm であり、も 39Gr に位置するものは長径 110 cm 前後で、深さも 10～20 cm 主体である。要するに、北へ向かうほど上面削平により、規模が小さくなっていく。底面は、やや凸凹を呈するが、平坦面を形成するものもある。覆土は、黒褐色土がベースで、地山土である褐色土の塊が少量もしくは部分的に混入するものであり、土層断面の土層Ⅱ層のみが纏まりをもつ。落ち込み内には多くの遺物を伴い、小石や土器破片を主として鉄滓も含まれ、特に底面で目立つ。伴う遺物は土とともに充填したと思われる。

SD31P10 から南方向にて、SD31 が切る別遺構と現地調査にて判断されたのが SD32 北部分である。これらは、SD31 の連続する輪からずれ、西側にプランをずらして掘り込まれていると判断したためである。この箇所を SD32 北として詳細は次項に述べるが、最終的には一連の遺構としてよいだろう。

波板状凸凹面以外で、も 39Gr 内、丁度 SD31 と SD32 北の重なる区域において、上層に位置づけられる遺物のまとまりが検出されている。波板状凸凹面から、どのくらい上位のレベルになるものか不明ではあるが、恐らく路面内埋土に伴うような遺物が残っていたものと思われる。

出土遺物は総数で、須恵器食膳具 92 点、須恵器貯蔵具 189 点、土師器食膳具 16 点、土師器煮炊具 104 点が古代遺物の時期はⅤ期に位置づけられるものである。その他、管状土錘を含む土製品 2 点、カマド石を含む石製品 6 点の他、中世Ⅰ-I 期（11 C 後半）の土師器食膳具 44 点が出土している。



第52図 道路状遺構3 遺構図1 (SD31・SD32北)

## (2) SD32

SD32は、前述したようにSD31波板状凸凹面に切られて掘り込まれていた別遺構としての波板状凸凹面が検出されたSD32北の区域と、顕著な路面が検出されている南区域とに分けて報告する。北区域と南区域との間には、削平のために遺構が検出されなかった区域があるが、一連の道路状遺構と判断可能である。削平区域を加えてのSD32の全長は、残存で52m60cm。南北を軸として直線的に構築され、西側調査区端にまで至る。

## ① SD32北の区域

SD32北で検出された道路状遺構は、も39端-や39端-や・ゆ38Grに位置する。波板状凸凹面は、SD31P10の西側にずれて重なって始まり、続いてSD31P11～P13と重なりながら、総数12基の浅い窪みが連なっているものである。SD31がSD32を切っている。波板状凸凹面は、楕円形・不整楕円形のプランを呈して、規模は長さ70～114cm、短径30～68cm、深さ5～14cmを測る。断面皿状で、底面は丸く、暗褐色基本土に地山褐色土の含有土を覆土にもつ。SD31と同様に、土器破片や石が充填されて、下底に近い位置に集中が認められる。検出された波板状凸凹面から南側である、ゆ37・38Gr内で、路面もしくは路面内埋土に含まれていたと考えられる土器の広がりも検出されている。長さ2m60cm、幅は土器検出の範囲で1m45cmを測る。しかし、この面より下位層において、波板状凸凹面のような遺構は検出されていない。また、SD32北の区域の路面より更に南側となる、ゆ37-よ37・38Grにおいては、道路状遺構の痕跡は全く検出されていないため、削平を受けてしまったと考えられる。

## ② SD32南の区域

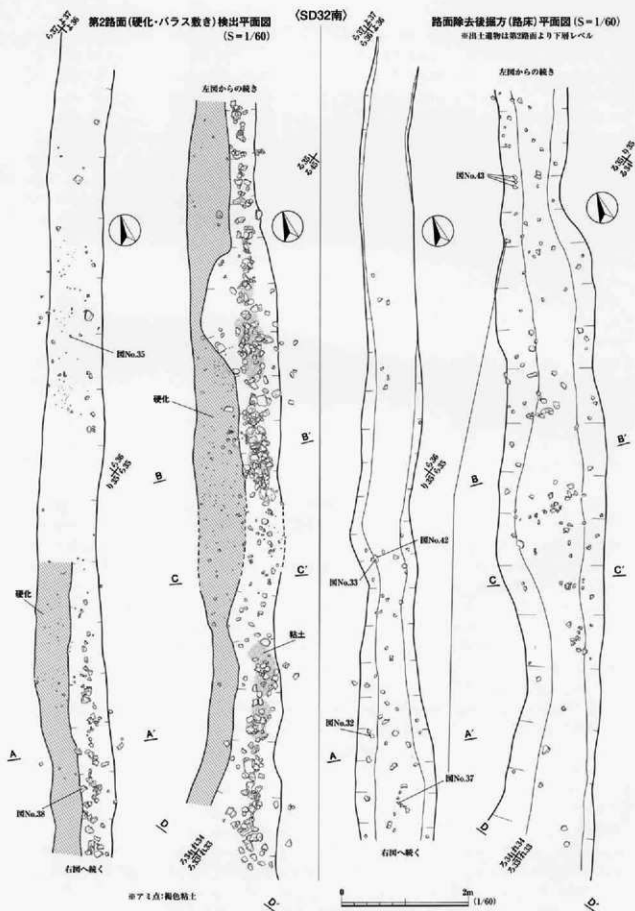
(検出された路面(第2路面)) SD32南の区域での全長は、ら36Grから始めて南に向かい、れ33Grの調査区端までに至る範囲に位置、残存長25m20cmを測る。路面の硬化とバラス敷きは、り36Gr以南から調査区端まで顕著に確認でき、路面幅90～140cmを測る。但し、り36Gr杭以南は100～140cmであるのに対し、り36Gr杭以北は95cmと狭くなっており、削平による違いと思われる。路面は、硬化面よりも若干バラス敷き面の方が下がっている箇所もあれば、土層断面図Aラインのように浅い断面皿状を呈している箇所もある。しかし全体として、土層断面Cラインの形状にみられるような盛り上がる形状、中央マウント状が主体となりつつ、平坦であったり凸凹をもったりと、一定の形状をもっていない。

路面には硬化が確認でき、この硬化は、幅に対して西側の約半分のみに認められる。硬化の度合いは堅穴建物の貼床のような顕著で極めて硬いというようなものではなく、ある程度の硬さを保つようなもので、移植コテで楽に削ることができる程度のものである。東側半分には、バラス敷きも検出されている。り36Gr以北の部分については、明確なバラス敷きは検出されておらず、暗褐色土の砂質土が硬化するとともに少量の土器細片をともなっている。バラス敷きは、路面の東側に寄っている。バラスには粉砕された凝灰岩(礫)や土器を主体として用いている。礫は、最大のもので径20cmを測るものも認められる。バラスの下には、粘土主体の塊層が検出されており、バラスとしての礫を固定したものではないかと調査担当者は述べている。この粘土塊の範囲は、全面というわけではなく北側が3m20cm範囲、南側が1m60cm範囲の2カ所に限られ、粘土は長さ30～100cm、短径20～40cmを測り、塊が点在する状況である。粘土が連続せず点在する点や、礫全体に及んでいないことから、部分的に路面の補修が行われた可能性も考えられるだろう。

(覆土・路面下の状況と別路面の検出(第1路面・第3路面以上・路床・改修)) まず、路面の砂気を帯びた土で土器細片が多量に含有する1層土が認められる。この土は、路面を覆うように検出されているため覆土と考えられるところだが、耕作土に似たもの、つまり砂気が多いということが特徴となっている。当遺跡では古代末以降の堆積土で砂質傾向が認められるので、調査者は現地では判断しかねたものの、土器細片が多量に混入されていることから、1層も路面であった可能性は否定できないと言ったことである(第3路面)。

1層下には4層、5層が認められる。4層の上面が、前述してきた第2路面である。4層・5層とも極めて土の締まりがよく、特に5層は4層よりも強く叩き締められた硬化が認められ、割られるような質を伴うものである。これは、長い月日を風雨にさらされ、ぬかるんだり乾き切ったりする状態を繰り返し、土を補充して修復したものが次第に嵩上げされていったものと思われる。5層は10cm前後の厚みを持ち、4層は4～9cmの厚みをもつ。両層とも出土遺物は少ないことも特徴である。この5層上面が第1路面となる。

さて、これら4・5層を切っているのが2・3層のピット若しくは溝状となる落ち込みである。2層が上層に



第53図 道路状遺構3 遺構図2 (SD32南-1)

あたり黒褐色土に褐色土粘土が混入する土、3層が下層にあたり軟質の黒(暗)褐色土を呈しているが、総じて粘土主体層である。この落ち込みは、路面の東半分のみ、要するにバラス敷き側にのみ検出されている。溝状になるものか、部分的であるのかは不明だが、底面幅が15～25cmで平坦となる。深さは、路床面にまで届いておらず、落ち込み底面には硬化面を検出している。路面を切って掘りこんでいることから、路面の使用中に施された修復痕跡の可能性が高いだろうと思われる。バラス敷き部分についての、言わば掘方と捉えることも可能であり、バラス敷きを施すための何らかの地業痕跡であった可能性もあるだろう。

以上の層を全て取り除いた状態が、路床である。所謂、掘方に近いものがあると思われる。SD30のような自然発生した様な断面風状やオープンカットされた様な逆台形状ではなく、底面は平坦面を呈しているものもあれば、そうでないものもあり、一貫していたのか不明で、SD30のような硬化を伴わないのが特徴である。

以上のような状況の他、調査区域の土層断面から、SD32の続きと思われる土層が検出されている。断面Dラインにあたるもので、路面と考えられる硬化面が3面認められている他、Dライン1層内でも路面と考えられる面を検出している。1層を除く3枚の路面が今回の調査区で検出された路面に比定されるものと判断することができると考えている。そして、7層路面を切る形で10層が、6層路面を切る形で6層や9層が認められ、この現象がA～Cラインにおいての2層や3層と同様のものと考えている。また、これらと同じ土層は、包含層セクションの35ラインにおいても検出されている。ここでは、完全に3面の路面を確認でき、最上面にDライン1層と同等となるよう砂地層を確認している。

なお、路床(掘方底面)の幅は、40～80cm、第1路面の幅は残存で64cm、切られているため、この値よりは広がったと思われる。第2路面の幅は100～120cm、第3路面の幅は90cm以上、第4路面以上では75cm以上はあったと思われる。

**(波板状凸凹面の検出)** 路床検出後の精査により、更に下層レベルで不整形円形状のプランが検出されたことにより、波板状凸凹面の存在が明らかとなった。波板状凸凹面は、SD32北の一部で検出されており、SD32南の区域では、り・る35～る34Grにのみ検出されている。規模は、長径40～120cm、短径20～90cm、深さ20cmを主体に浅いもので15cm、深いものでP25のように50cmを測る。遺物は、覆土の1層から多量に出土している。

このように南区域においても波板状凸凹面が検出され、道路状遺構3の中では全面に及ぶものではなく、部分的なものに留まっていることとなる。そして、明らかに斜面に構築されたものと言えよう。これに対し、SD30には波板状凸凹面は検出されていない。SD30は標高に添うように展開しており、ある程度の勾配はあったとしても、SD32程ではない。本遺跡の波板状凸凹面は、斜面との関連が考えられよう。

### ③ SD32の出土遺物

路面での礫を主体としたバラスは、前述した土層の2層上面に張り付くように、第2路面で検出されている。バラスには、SD30やSD31で検出されているような細片もみられるものの、凝灰岩を粉砕した大小の礫や、甕などの土器で大振りな破片が目立つ。この他では、5層路面覆土内をはじめ埋土層全体からの出土があり、SD30のように路床面での多量出土という現象ではない。北側と南側の2カ所で検出された波板状凸凹面の北側区域では、底面や覆土から多量の土器細片が出土している。出土遺物は南側区域ではどちらかという上層面みに多く、北側では底面に多く、両者に検出状況の差が認められる。出土遺物は、SD32の覆土から波板状凸凹面検出分の総数で、須恵器食膳具224点、須恵器貯蔵具427点、土師器食膳具65点、土師器煮炊具421点、以上が古代遺物である。これらの時期は、Ⅱ～Ⅲ3期までに位置づけされるもので、大きな時期幅をもつ。この他に、窯壁片や焼成粘土塊の土製品2点、カマドや石縄文時代の磨製石斧等の石製品が9点、古墳時代の土師器食膳具が出土している。そして、中世の土師器食膳具48点、白磁小皿・碗の中世陶磁器8点が出土しており、これらの時期は中世Ⅰ～Ⅰ期(Ⅰ1 C後半)・中世Ⅰ～Ⅱ1期(Ⅰ2 C中頃)と位置づけされる。

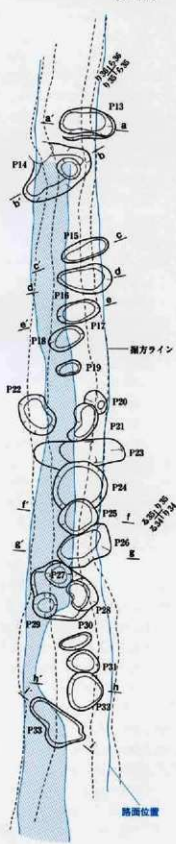
### ④ SE01との重複について

本遺構はSE01井戸と重複する。丁度断面Bラインに重複する形をとり、SE01の埋没後にSD32が構築されたこととなる。調査時においても、SE01の埋没後、本遺構が構築されたと判断している。しかし、筆者は、井戸プランがSD32と概ね一致することが気にかかっている。

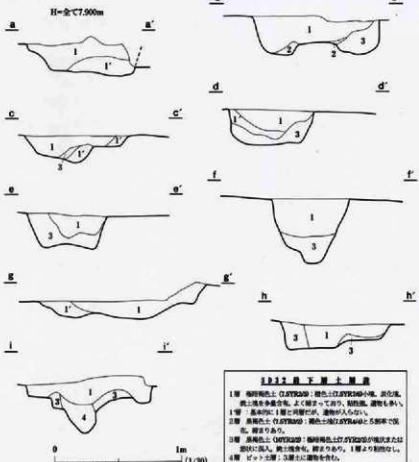
井戸は標高7,700mレベルで検出されている。これは、SD32の当初路面レベルよりも20cm下がったレベルで



**SD32南 最下層検出波板状凸凹面平面図 (S=1/60)**



**SD32南 最下層(波板状凸凹面)断面図 (S=1/30)**



第54図 道路状遺構3 遺構図3 (SD32南-②)

あり、掘方底面レベルからは6～10 cm以内となっている。掘方底面より下位で検出されている波板状凸凹面と同じ様なレベルである。井戸の検出時に上面を削っていることと、井戸が道路状面よりもある程度低い位置にあったと加味することができるならば、SD32が道路として使用され始める初期段階で共に井戸が機能していた可能性もあるのではないかと筆者は考えている。井戸の機能時期は、中世Ⅰ-I～中世Ⅰ-II 1期(11 C後半～12 C前半)、最終段階でも12世紀中頃までである。この時期は額見町遺跡の終焉時期と一致する。SD32の板状凸凹面内から出土する遺物は11世紀後半であり、少なくともこの時期には道路は構築されていた可能性がある。

いずれにせよ、額見町集落の終焉時期の12世紀中頃までに井戸は埋められた。そして、この段階で初期ともいえる道路が機能していた可能性があり、その後、新たに道路を整備し新たな路面を形成、その後も改修を続けて道路として使用し続けたのではないかと考えている。

### (3) 道路状遺構3 (SD31・SD32) 小結

道路状遺構3には、削平を免れた一部において、少なくとも3面の路面が存在する。これら路面の更に下層レベルである最も初期段階に、路床とまで言えないまでも、断面Dラインで確認できるような断面皿状の底面をもつ面が機能していた可能性がある。路面はいずれも硬化し土器細片を多く伴うが、第2番目に構築されたと考えられる面では西側半分に部分的に粘土で補強されたバラス・礫敷きをもつ。

そして、道路状遺構3では波板状凸凹面が検出され、道路状遺構の全面ではなく部分的、2カ所に限られる。板状凸凹面は、道路軸に直行して連続して配置され、長楕円形や不整形円形を呈して、内部に多量の土器細片を伴うことが特徴である。北側で重なるSD31の方向軸とSD32の方向軸に差が認められるため、何らかの理由で道路の方向が変わった可能性もたれる。道路の付け替えの可能性や、作道時の方向修正の結果である可能性もあろう。

出土遺物には非常に広範囲の時期差があり、路面を構築する際、様々な硬質物を集めて路面に敷いた、若しくは路面修理時に混入させたものと考えられる。よって、当遺構の時期を判断するのは非常に難しい。SD32波板状凸凹面内からの出土遺物に中世Ⅰ-I期・11 C後半の遺物が認められるため、この時期に作道された可能性は高い。断面Dラインをみると、断面皿状を呈して、底面に薄く縛りをもつ7層が認められることから、ごく初期段階には自然発生した道路であった可能性もたれるのではないだろうか。そして、前述したような、井戸SE01との関係である。断面皿状の底面が初期段階の道路面と考えるならば、概ね重複する井戸と共存していた可能性をもち、その後額見町遺跡が終焉を迎える中世Ⅰ-II 1期までは少なくともも存続していたものと考えられる。額見町集落が終焉すると共に井戸が埋められ、その後既存道路を改修し新たな路面を形成した可能性をもつ。断面Dラインの1層に反映しているように、道路として長く使われ続けたのではないかと考えられるが、12世紀後半以降の遺物が出土しないために、判断しかねるのである。しかし、遺物が出土しないからこそ、集落区域から外れ、道路のみが機能していたと考えることもできるのではないだろうか。

## 第2項 額見町遺跡の道路状遺構1・3のまとめと若干の考察

### 【道路状遺構1の評価】

道路状遺構1の昨年報告区域と合わせ、ここでまとめてみたい。今回報告区域から、道路状遺構1の初期段階においては、地山の路床が硬化するという通行痕跡が検出できていることから、自然道に近い状況で発生した可能性をもっていると思われる。そして、この面に、ある段階で別土を充填し嵩上げして新たな路面を形成したものと考えられる。充填土は、歩く行為により自然に攪拌されたようなものではなく、最低標高面で充填土が殆ど検出されていないことから、全面には及ばない改修と見なすことができる。これとともに、この段階で、断面形状が遊台形状となるようにオープンカットして、道幅を広げたものと判断できる。

道路状遺構1の前回報告では、近代削平を免れて残存する幅95 cmの路面が平坦地にて検出されている。今回報告区域では、最大路面幅120 cmを測るため、道路状遺構1全体で概ね似たような路面幅をもっていたものと思われる。しかし、前回報告区域では、路面検出面では確認できなかった側溝が路面下より検出されている。この側溝は、路面機能時に完全に埋没していた状況であり、側溝間300～400 cmを測り、制限された区域にしか検出されていないという特徴をもつ。側溝の本来の目的は、排水にあるのではなく道路範囲の明示または道路状遺構が通過する周辺の土地を区画する必要があったと考えられている(近江俊秀2003『古代国家と道路』、

山村信榮 2001「古代道路の構造」〔古代交通研究第10号〕。当遺跡では、側溝間と路面幅が一致しないばかりか、路面構築後の段階において既に側溝は埋没していた。とすれば、少なくとも路面形成以前の段階において、作道以前の区画としての役割が強かったのではないかと考えられる。この区画内を道路として認識した可能性もあろうし、また、後述する居住区との区画であったのかもしれない。それが、後に整備し直され、路面として構築されたのではないだろうか。ただ、このような区画は道路状遺構1内では極一部であり、立地にも関係するのではないと思われる。そして、前回報告区域で今回遺構と類似するような溝の断片が側溝検出東側において路面下に認められているため、道路としてのごく初期段階は、自然に発生したものであった可能性が高いと考えている。

道路状遺構1は、北西から緩やかな斜面を登るが、東へ行けば行くほど極めてなだらかとなり平坦に近くなる立地である。極初期段階では、自然道であった可能性があり、平坦地区では区画溝を伴っていた可能性がある。次の段階で、緩斜面ではオープンカットを施しており、平坦面では区画溝内に、120cm程に道幅を拡げて路面を構築したと思われる。また、東側の標高が高くなる部分に、土留めが施されていたと考えられる。全域での検出がされていないため、特に土が流れやすい箇所集中して土留めを行ったのであろう。一方、北西末端にあたるSD30C区西側のみを検出されて連続土坑をどう捉えるのが問題である。

#### 【道路状遺構3の評価】

道路状遺構3は、緩やかな上り坂を想像できるように、斜面に構築されているものである。3面ないしこれ以上の路面を形成し、掘方に似た路床と、路床よりも下位レベルで波板状凸凹面を伴う。この波板状凸凹面は全面に及ばず、北側と南側の2カ所のみで、北側が剥き出しの状態で見出されていることから、上層削平を受けていると思われるが、底面硬化が認められるものである。南側の波板状凸凹面は、路床よりも下位層で見出されている。両者の保存状況に差があることは確かであり、北側の波板状凸凹面の上面に本来路面があったか否かは想像に過ぎない。しかし両者には、波板状凸凹面の覆土が硬いという点と、土器細片を中心として遺物が非常に多いという点が共通するものの、検出状況には差が認められる。深さを伴う南側では、上層面に遺物が多い。対して、北側では覆土のみならず下底面においても張り付くように出土する。要するに、土器細片を多量に混在させた土を充填し叩き締めているか、踏み固めたと考えられるのである。これに加え北側では底面に加圧が施されている。

波板状凸凹面の解釈については、道路の利用形態に係わる痕跡（枕木などの痕跡）、自然発生的なもの（通行痕跡）、作道に伴う工法（路床構築痕跡）などの諸説が提示され研究されてきており、今後も検討が必要な点をもつもの、以下5つのいずれかによって説明できるとされる。それは、「枕木痕跡」、「道路基礎工事・補強工事・地盤改良工事」、「足掛け」、「自然発生的なもの」、「牛馬歩行痕跡」（近江2003）である。当遺跡で見出された道路状遺構3の波板状凸凹面は、これまで述べてきたように、道路全面ではなく2カ所のみ限定され、北部分に底面加圧と多量遺物片混入の状態からも、枕木痕跡とするには疑問が残る。北側は、充填・鎮圧痕跡が顕著で浅いため足掛け痕跡の可能性ももたれるが、上層削平を受けているため道路全般が不明であり、断言することはできない。牛馬歩行痕跡というには検出傾向から外れている。地盤改良工事である可能性も考えられなくはないが、当遺跡の地盤は基本的に軟弱ではない。このように除外を試みると、道路基礎工事や補強工事が該当するのではないかと考えられるのである。

路床は硬化が認められず、掘方に近い状況のものであり、本来の路床と言えないのかもしれない。しかし、断面形状となる部分も認められるため、ごく初期段階では自然発生的なものであった可能性ももたれる。波板状凸凹面が道路基礎工事や補強工事とするなら、自然に発生した窪み、道路として弱かった2カ所に補強を施し、この上に硬く叩き締められた第1路面を形成したのではないと思われる。第1路面土は剥がれるような層を成していることから、修復や土の堆積を繰り返したものと考えている。この上面に第2路面を形成していても、第2路面通行段階で、路面の硬化面までも切らるような、東側半分に溝が掘り込まれるとともに上面に礫・バラス敷きが施されるという、改修工事を部分的に行なったと考えられる。なお、溝内覆土は軟質主体であり、水の染み込み易い状況を作りたかったのではないと思われる。部分的とはいえ、大がかりな施工であり、そうせざるを得なかった理由があったのだろう。そして、更に上面に第3路面が施され、以後も道路として使われ続けていったの可能性があるという、Dライン土層断面から予測している。道路状遺構3の波板状凸凹面から出土する遺物に中世1-1期・11C後半のものが確認でき、これが作道時期になるものと考えている。道路状遺構3は、額見町遺跡終焉期とリンクし村落の廃絶と関係なくその後も道路として使用されていったものと思われる。



## 【道路状遺構1・3と、周辺主要建物・井戸との関係と変遷】

道路状遺構1と道路状遺構3は、道路の規模からみても幅30cm～120cm、最大でも140cm程であり、生活道レベルの道路である。今回・前回の報告区域の中で検出された道路状遺構1と道路状遺構3と周辺主要遺構を選抜して少し考えてみたいと思う。

道路状遺構1は、少なくともV2期段階までは確実に機能し、覆土遺物からVI2期まで、多くともVI期以内には埋没していったと思われる。通行し始めた時期については、重複するSK355の時期がIV1期を示しており、SK355埋没後以降に道路として機能していったものと考えられる。当道路の周囲には、IV～V期とされるSB279、このSB279が建て替えられV期に位置づけられるSB278片廂建物、同じくV期に位置づけられるSB157片廂建物、V2～VI期の倉庫建物SB255、SB255と同じ東柱2本をもつ同構造で遺物主体がIV1期でV2～VI1期も認められる倉庫建物SB266、これらの建物と同軸をもつSB302、SB302を区画する溝と考えられるSD39やSD33の遺構を見出すことができ、これらの建物は全て同軸をもつ。この他、SB259四面廂建物がV1～V2期と位置づけられるが、前述した建物群と全く軸が合わないばかりか、両側に広い空間を伴っていた可能性が高く、特別な意味をもった建物であったものと考えられる。このSB259と重複するのが、区画溝を伴うSB302片廂建物で、建物北側からはIV期内に収まる油痕をもつ須臾器がまとも出土している。

以上の建物検出状況から、SB302と区画溝のSD39・SD33、SB266と出土遺物の時期は異なるが同じ東柱2本の構造で並列するSB255がIV期代には建てられていたと考えられる。また、SB259と同時期となるSB279、SB278、SB157の建物群がV期を主体に建てられていたと考えられる。そして、これら建物群の中央には、道路状遺構1が通っているのである。加えて、これら建物群の最南端にSE03井戸が存在することは、注目すべきことである。SE03の時期はV2～V2期を示すが、油痕をもつ須臾器も多量に出土しており、IV2期が主体でV2期には半分が埋まっていた状態をもつ。よって、SB302段階はIV2期である可能性が高いと思われる。この段階にて道路状遺構1も機能し始めたのでないかと思われるのである。このように、道路状遺構1を中央に据えて周囲に展開する主要建物は、IV2期、V1～V2期の2段階において認められた。これ以後、建物は廃絶されていくことから、道路状遺構1も次第に使われなくなっていった可能性が高く、VI期段階には埋没していったものと考えられる。

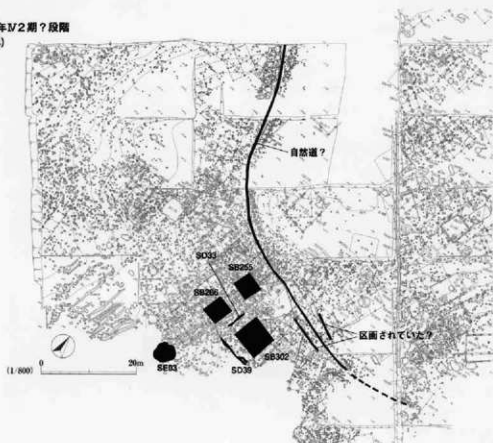
道路状遺構1は、道路の規模からみても初期段階では村落内で生活領域に密着し、村落外へ続く自然道として役割を担ったと思われるが、額見町集落の再編期に次第に100～120m幅の路面へと改修された可能性をもつ。

道路状遺構3は、額見町の集落が終焉を迎える少し前に形成された道路である。同じ頃に構築された井戸SE01と同時併存していた可能性があり、井戸への通路としての機能を初期段階にはもっていたのではないかと予想している。その後、額見町の集落が終焉を迎えると同時に井戸も埋められたが、この上に新たな道路を構築し、中世12世紀後半以降も補修・改修を幾度も繰り返しながら道路として使われ続けていったと考えられる。12世紀後半以後の遺物が出土しないため、道路がいつまで使われたのかは不明だが、村落外に延びてゆく道路であったことは確かだろう。そして、道路だけが存在するといった景観であっただろう。なお、道路が直線という形状に注目すると、その先には、非常に興味深いことに気多御子神社が存在する。この気多御子神社は、「延喜式」に記載される式内社・気多御子神社の後裔とされているものである。現位置に当時の社が立地し、現時も全く変わらないとは言えないが、時期から判断しても、神社に続く通路を担っていた可能性もあるのではないかと考えている。

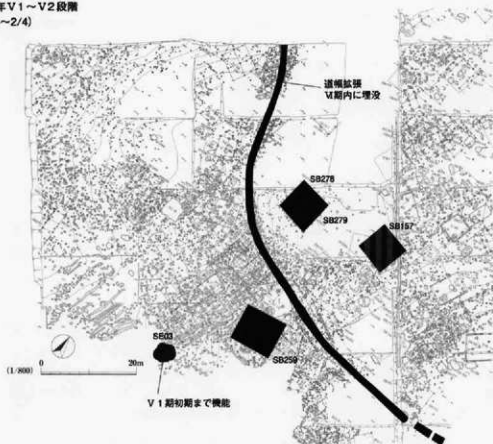


第55図 道路状遺構3と気多御子神社の位置

田嶋編年Ⅱ2期?段階  
(8C4/4)

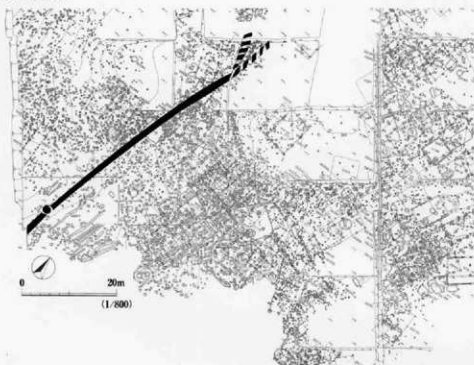


田嶋編年Ⅴ1～Ⅴ2段階  
(9C1/4～2/4)

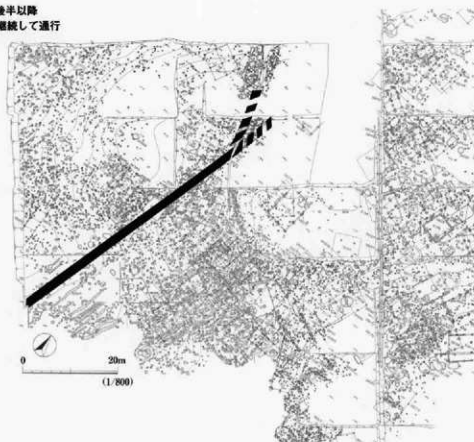


第56図 道路状遺構と周辺主要建物の変遷図1

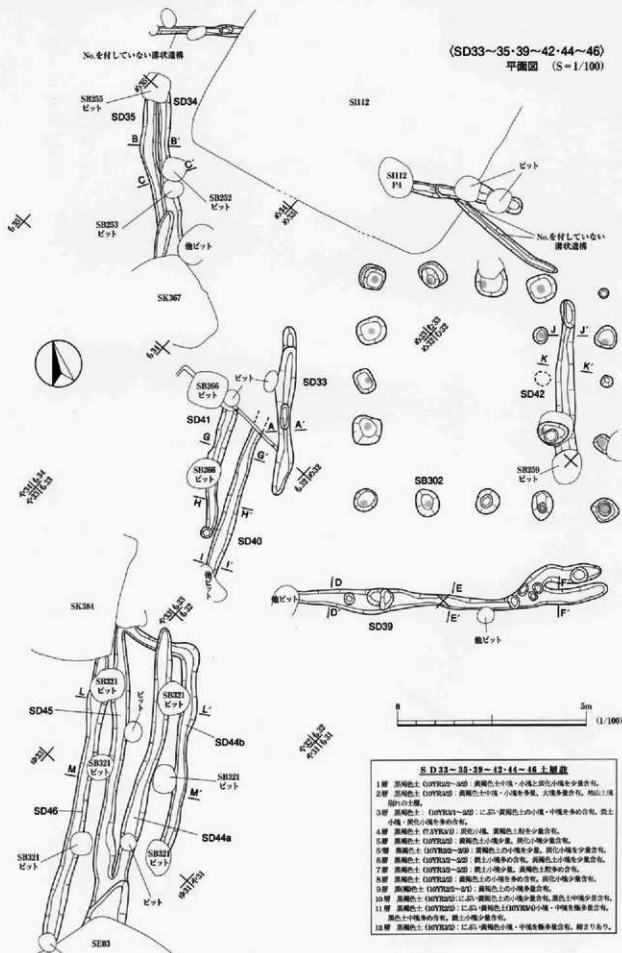
中世1-I期・中世1-II1期段階  
(11C2/4~12C前後まで)



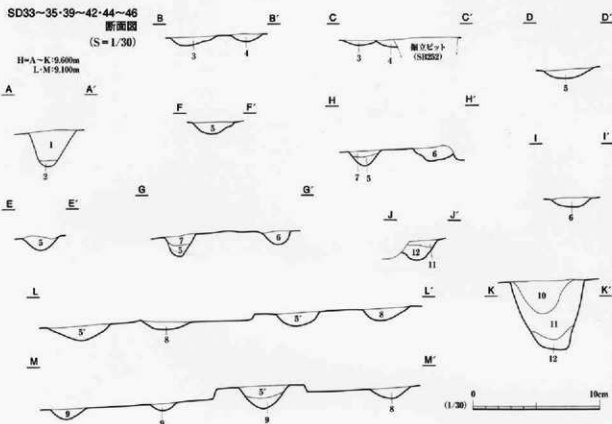
12C中頃?後半以降  
これ以降も継続して通行



第57図 道路状遺構と周辺主要建物の変遷図2



第58図 溝状遺構 遺構図1 (SD33~35・39~42・44~46-①)



### 第3項 溝状遺構

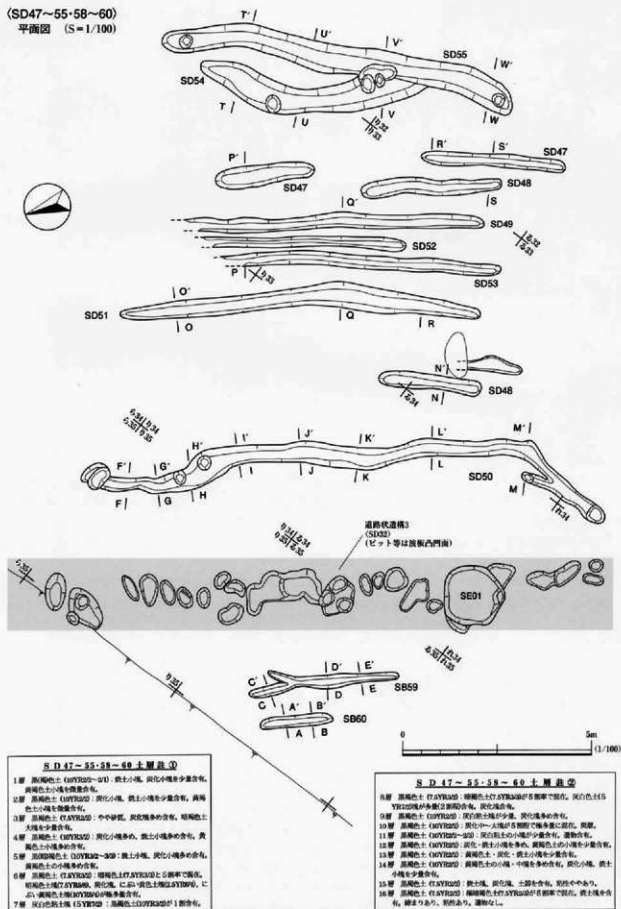
今回報告する溝状遺構は、SD33~35・39~42・44~55・58~60である。これらの溝状遺構は、G地区H地区の境で、殆どの溝状遺構が道路状遺構3 (SD31・32) 主軸に対して並列・直交する形で位置し、遺構密集区域内とSD32南側の大きく2カ所に集中して検出されている。遺構密集区域内ではSD33~35・39~42・44~46、SD32南側ではSD47~55・58~60にあたる。

SD33・SD39は、SB302を囲むように当建物の主軸に添った形で位置するもので、この建物を区画するような役割があったものと思われる。SD42は、SB302内部に取まるように位置するものである。SB302は片廂建物で、廂側にSD42が位置すること、また廂柱穴規模が身舎柱穴規模と異なることから時期差も考えられるものであり、SD42は身舎が付設する以前の区画溝であった可能性も考えられるだろう。なお、溝の規模は、SD39が幅20~56cm長さ652cmを測り、SD33は幅24~40cm、長さ356cmを測る。

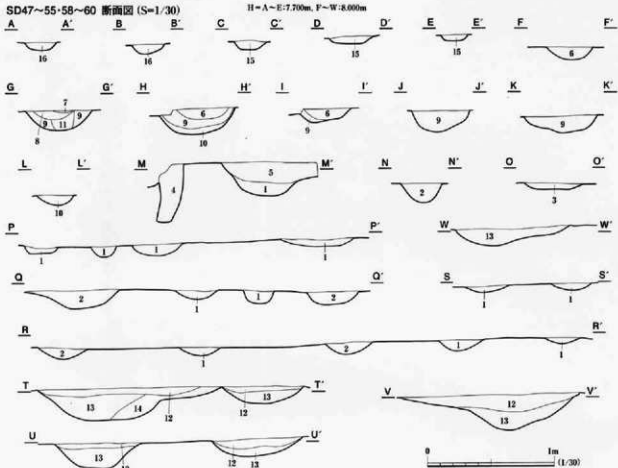
以上の他にも、SB302周辺には、この建物主軸に概ね合う形で配置されている溝状遺構が多い。SD40・SD41や、S1112・P2から東側に延びる遺構番号の付されていないものである。また、次回報告区域分においても、SB302建物主軸に合う溝が認められる。この建物と主軸を同じにするものは他にもSB326 (次回報告分)、SB255・SB266・SB321の三列に立ち並ぶ倉庫群があり、SB302を中心とした配置の印象があり、この他の溝状遺構として、並列するSD34・SD35、4列に配置してSE03へ向かうSD45・SD44ab・SD46があり、何れも先に述べたSB302を中心として並行・直行する溝群と同軸をもつものである。これらの溝の規模は良く似ており、幅は30cm前後を主体として24~40cm、長さは最も短いもので272cm、最も長いもので640cmを測るが、いずれも重複遺構が多いため、残存規模となる。

SD32の南側において並列する溝状遺構群は、SD47~55・58~60である。これらの中には、先端が曲がるものも認められるもの、南北軸をとってほぼ一定方向に並ぶものである。規模は、SD60で幅22cm長さ156cm、SD59が幅16~38cm長さ320cmでこれらの溝の中で最も規模が小さい。最も大規模なのは、SD50であり、幅24~64cm長さ1,160cmを測る。次はSD51で幅40~52cm長さ760cmである。SD51周辺のものはいずれも長さに違いがあるものの、幅は似たような値の24~32cmで、連なるように検出されている。そして、SD54・55は

(SD47~55-58~60)  
平面図 (S=1/100)



第60図 溝状遺構 遺構図3 (SD47~55-58~60-①)



第61図 溝状遺構 遺構図4 (SD47~55・58~60-②)

最も幅が広く、他の溝に比べ規模に違いが認められるようである。規模は、幅60cm主体として44~72cm、長さ756cmを測る。

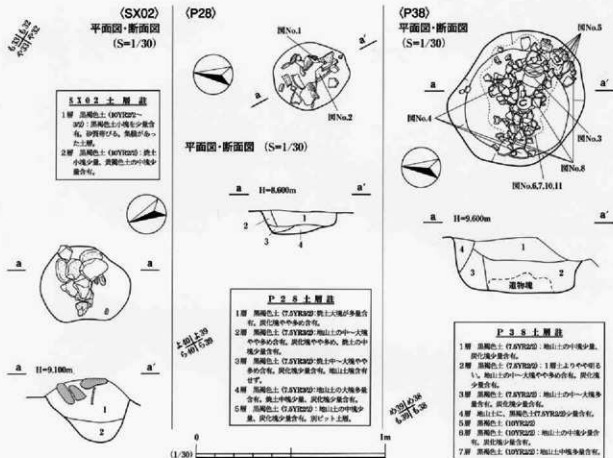
出土遺物の破片総数は下記表のとおりである。各遺構からの出土遺物は極めて少なく、それぞれの時期を判断するのは難しい。ただし全て時期は古代に収まるものと思われる。この中で特筆すれば、SD39からは、土製品として土馬が出土しており、時期はⅡ~Ⅳ期と判断される。SD40からは油痕の須恵器食膳具が1点出土、Ⅳ期以内に位置づけられるものである。

遺物大別	遺構№	33	34	35	39	40	41	42	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	58	59	60
須恵器食膳具		4	4	0	1	2	1	0	2	7	2	1	0	2	5	1	3	0	3	4	2	1	0
須恵器貯蔵具		1	1	0	9	2	1	0	1	2	0	0	0	0	6	1	3	0	3	3	0	0	0
土師器食膳具		0	2	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0
土師器煮炊具		12	4	0	0	8	2	16	3	4	2	3	3	0	31	3	2	0	11	10	2	1	0
土製品		0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中世土師器		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	2	0	0	0	0

今回報告の溝状遺構出土遺物破片数表

#### 第4項 集石遺構

今回報告する集石遺構は、SX02の1基である。や33Grの、遺構密集区域で検出されたものであり、SK384上端の脇に接して、遺構検出時と同レベルで遺構確認されている状況である。上面に河原石・カマド石・須恵器甕破片が40cm四方に積まれるようにして出土し、この下底からピット状の掘方らしき落ち込みを検出している。掘方断面形状は、ややすり鉢状であり、覆土は、石とともに砂質を帯びる黒褐色土が認められ、下層は地山塊を含む人為的埋土となっている。出土遺物は、須恵器貯蔵具の甕割部破片1点、土師器煮炊具1点と非常に少なく、時期は古代に収まるものであるが、時期を判断することは難しい。



第62図 集石遺構・ピット遺構図 (SX02・P28・P38)

### 第5項 ピット検出遺物

今回報告する区域で、ピットに遺物が集中して混入するものが認められるため報告する。P28とP38である。P28は、G地区よ39Grに位置、径35～40cm、深さ12cmを測る。焼土が多量に混入するもので、遺物には粘土塊も含まれるが、ピット壁面や底面が焼けるということはない。出土遺物は、須器食膳具が壊破片で3点、土師器食膳具3点、土師器煮炊具21点である。壊破片はⅤ期、煮炊具のロクロ釜やロクロ鍋もⅤ2期のものが認められる。

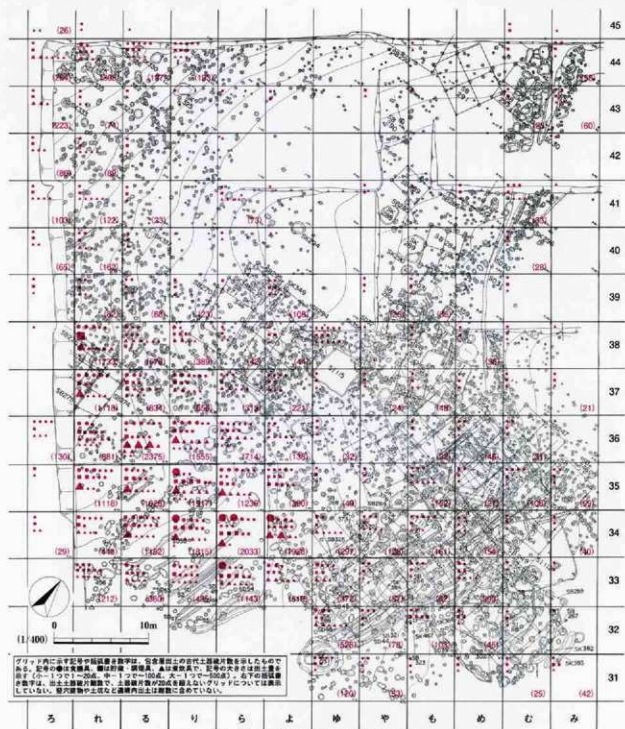
P38は、G地区め38Gr内だが、も39Gr杭に近接しており、SK359と隣接するカクランと、東に近接するカクランとの間に位置するピットである。径63～72cm、深さ28cmで、平坦な底面に遺物が張り付きかたまって出土する。出土遺物の総数破片は、須器食膳具1点、須器貯蔵具1点、土師器食膳具12点、土師器煮炊具30点、そして匣鉢10点である。特筆すべきは匣鉢であろう。数個体の匣鉢が廃棄されたようであり、出土遺物の時期は何れもⅤ期とされる。

### 第6項 包含層と古代・中世土器だまり

包含層として提示したものは、遺構を認定できずに、グリッド毎に取り上げた遺物を示している。そして、調査時に遺構確認が出来なかったものの遺物がまとまって出土する区域、要するに土坑のような落ち込みをもたないもので、多量の土器を伴うものを“土器だまり遺構”として取り扱っている。包含層については、今回報告区域と境界ラインが若干異なっており、グリッド毎でデータを集めやすいよう区割りして報告する。

G・H地区の谷部に展開していた古代の時期のものが「G区古代土器だまり遺構」である。中世の時期のものが展開する土器だまりは2カ所あり、いずれもG地区で、り・る・れ-44Grの「G区中世1号土器だまり遺構」、り・れ-36・37Grの「G区中世2号土器だまり遺構」である。なお、誤解なきよう述べておくと、ここでの中世は、





第63図 古代土器包含層出土分布図

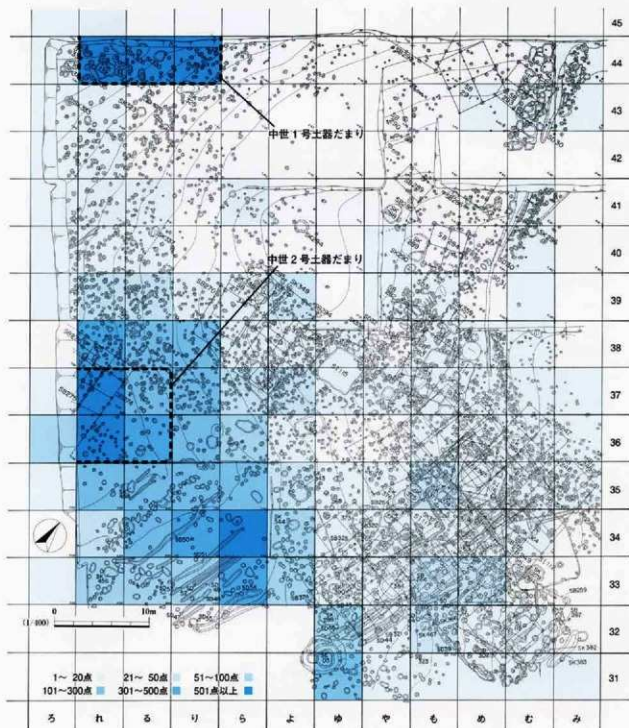
額見町遺跡の終焉時期である古代末（11世紀後半～12世紀前半）を意味している。

さて、このように名称を違えて表示してはいるものの、遺物整理時に、古代の土器だまり遺物と包含層遺物の時期にそれぞれ纏まりや違いは認められず、両者を分ける意味を見出せないと望月精司により判断された。よって、古代土器だまり遺物は、谷部へ流れ込んだ性格のものと判断することができ、そして出土量図では包含層出土遺物に加える形で提示することとなった。

中世の土器だまりは、2カ所に分かれている。中世2号土器だまりと名称付けてはいるものの、中世遺物の出土量を見ると、2号土器だまりのみならず、他グリッドでも極めて多量に出土するグリッドが存在するのである。また、中世2号土器だまりは、古代土器だまりと重複する形で展開していることから、やはり谷部へ流れ込んだものではないかと考えられるのである。これとは逆に、中世1号土器だまりは、確かに谷部に位置するものだ

が、隣のグリッドには全く出土していないという現象をもつ。流れ込みとは考えられない、わざと捨てたかのような様相であり、何らかの祭祀的な空間として機能していた可能性もたれよう。

これらの土器だまり遺構の出土遺物は、全て包含層出土遺物に含めて表示している。これらのデータを見ると、中世遺物分布図では、500点以上を示すグリッドでの出土量は、殆どが600点代を示しており、最大量で、れ37Grの680点である。谷部を中心に300点以内に収まる値が顕著であり、これらの量は、前回までに報告してきた値をはるかに上まわるもので、約2倍の数値を示している。多量に検出された谷部が、削平されることなく良好に残存していたこと、遺跡内での中心移動により今回報告区域が当遺跡で最も新しい時期に属することが、値の高さの要因と思われる。



第64図 中世(11～12世紀)土器包含層出土分布図

## 第III章 今回報告区域出土の遺物

### 第1節 出土遺物の概要

#### 第1項 出土遺物の総量と時期別比率

今回の報告の対象とした区域は、G地区とH地区西側の一部、前回の報告から除外したF地区南東端区域である。8世紀以降を中心とするⅢ群集落の分布域であり、調査グリッドでは、みへろ-33～45Grとみへろ-31・32Grの区域だが、遺構の広がりや土器の分布のまとまりから、みへろ-30～33Grでは今回の報告に入れた部分もあるし、次回報告に回した部分もある。

今回報告する区域より検出された遺構は、竪穴建物6軒、掘立柱建物46棟、土坑121基（道路状遺構関連の土坑は除外）、井戸2基、道路状遺構2本、溝状遺構22条で、出土した遺物は、遺物収納箱（645×380×145mm）で168箱を数える。内訳は須恵器（陶磁器含む）が59箱（F地区1箱+G地区38箱+H地区20箱）、土師器が89箱（F地区1箱+G地区53箱+H地区35箱）、石製品が5箱（G地区3箱+H地区2箱）、鉄洋・鉄製品が15箱（G地区9箱+H地区6箱）で、遺物片総数で示すと古代の須恵器13,962点（食膳具8,540／貯蔵具5,409／土製品13）、古代の土師器21,670点（食膳具3,209／煮炊具18,287／土製品174）、中世の土器7,186点（陶磁器165／土師器食膳具7,021）、石・石製品314点、鉄洋・鉄製品6,000点ほどとなる（点数に若干の補正必要）。

今回の報告区域は、全体で約3,700㎡ほどであるが、過去の造成工事によって既に削平を受け消失した区域が約600㎡あり、これを差し引いた3,100㎡という面積が今回報告区域の実質調査面積となる。これまでの報告でも示したが、遺跡における遺物出土指数（1,000㎡換算での箱数比率。田嶋明人「古代の土器と中世の土師器」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』第5回北陸中世土器研究会1992年）は遺跡の格付けを示す要素となるものとされているが、今回報告区域の出土量から割り出した遺物出土指数は54.2であり、報告Ⅲ区域の43.4よりも高い数値となる。報告Ⅲ区域は、掘立柱建物を中心として建物遺構が密集していた区域であり、竪穴建物も少なく、土器溜まりなどの遺物を大量廃棄する遺構もほとんど確認できなかったことが低い数値となったものと推察される。これに対し、報告Ⅱ区域は59.1、報告ⅠのA地区は61.1と高い数値であり、今回報告区域よりも多いが、それは竪穴建物密集区であることと関係があらう。遺物出土指数は8世紀2/4期以降に顕在化してくる土器の大量消費を前提とする使われ方の数値を示したもののだが、やはり7世紀代の資料も同様の対比の仕方をするに問題はあらう。加えて、土師器煮炊具は祭祀等に伴う大量消費の対象からは除外する必要があり、数値を示す方法に問題があったと言える。時期を限定した上で、食膳具と貯蔵具の出土量を調査面積で割り出すことで、比較可能な数値を提示できるだろう。今回の報告データでは、時期の特定までできないが、今回の報告区域と報告Ⅲの区域は、8世紀以降に活発化する地区であるため、概ねの傾向は出せるものと理解しており、それを対比すれば（但し古代Ⅰ・Ⅱ期の土器も含んだ数値）、今回報告区域の54.8（食膳具・貯蔵具点數16,976点／調査面積3,100㎡）に対し、報告Ⅲ区域は59.0（食膳具・貯蔵具点數20,667点／調査面積3,500㎡）の数値となる。今回報告区域より報告Ⅲ区域が多いのは、土坑内への須恵器食膳具を中心とする大量廃棄が存在するか、否かによると言えるだろう。

遺物の時期は、これまでの報告区域と同様、7世紀初頭から12世紀前半に位置付けられるものがほとんどである。縄文時代の土器や石器、月影式期と思われる弥生土器、5世紀頃に位置付けられる土師器が破片で僅かに確認されるが、遺構を伴うような性格のものではなく、近隣に集落遺跡が存在することによって当遺跡内に持ち込まれたものだろう。なお、7世紀初頭以降の古代遺物であるが、時期標記は、田嶋明人編年の北陸古代土器編年と北陸中世土器編年（田嶋編年で示す場合の古代土器は「古代〇期」、中世土器は「中世〇期」と示す）及び、筆者が報告ⅡとⅢで考察した三湖台集落資料を基軸とした土器編年表（「三湖台〇期」と示す）で示す。

顕見町遺跡は、Ⅰ群集落、Ⅱ群集落が古代Ⅰ1期から古代Ⅱ期までを中心とし、古代Ⅳ期以降はやや衰退傾向を示す集落群であるのに対し、今回報告のⅢ群集落は古代Ⅲ期以降に中心をおく傾向があり、竪穴建物の数はⅠ群、Ⅱ群集落よりも著しく低下する。それに比例して掘立柱建物が増加するわけであるが、特に中世Ⅰ期に位置付けられる掘立柱建物が増えることが当群集落の特徴である。また、今回の報告区域では、古代Ⅴ期前後の遺構が多く、SE03の大型井戸を中心として営まれる様相が看取される。また、これまで確認の少なかった古代Ⅵ期の遺構も複数確認されており、古代Ⅴ期に集落の新たな展開を見せるが、ただ、古代Ⅵ期以降に集落が著

しく衰退することは確かで、古代Ⅵ期・Ⅶ期に顔見町遺跡が衰退期にあったことは間違いない。

中世Ⅰ期になると、当集落は新たな展開を見せる。4×5間的大型竪柱建物複数出現し、一つのまとまりをもった集落を形成し、再興される。建物群の周りには、土師器食器類を一括廃棄する土坑や土器溜まりが複数形成され、その周辺から船載磁器を多く出土させる。Ⅰ群集落・Ⅱ群集落では確認できなかった集落様相であり、Ⅰ期以来の古代的集落とは一線を画すだろう。

このように、古代Ⅰ期からⅦ期までの集落と中世Ⅰ期の集落とは様相が異なるため、土器数量を提示する上でも分けることが必要である。以下に、まず古代の土器様相を概観し、続いて中世の土器を示したい。

古代土器の様相について、まず遺構別の出土状況を見ると、土器溜まりや包含層出土が60.9%の過半数を占める。土器の大半はG区古代土器溜まり遺構として一括掲載した広い範囲の土器溜まり遺構から出土しており、土器の帰属時期が長期であることも合わせて、長きに渡りこの軟部となった窪地が土器廃棄場になっていたことがわかる。竪穴建物出土は7.4%と少なく、土坑出土も18.0%を占めるにとどまる。竪穴建物の検出軒数が少ないため、このような量比であるのは当然であるが、土坑出土が2割以下であるのは、掘立柱建物を中心とする集落では異例と言える。土器廃棄場が土坑ではなく、広い範囲の土器溜まり遺構へ集中したものであり、土坑程度の小規模単位の土器廃棄が蓄積されて、G区古代土器溜まりという一つの遺構を形成したのだろう。これは次回報告のH地区5号土器溜まりの極めて大量に廃棄された須恵器貯蔵具類の在り方と共通するものが、今後検討していきたいが、Ⅲ群集落にこのような土器廃棄形態がまとまることは、注目されることであろう。

なお、当地区では道路状遺構が95%の高い数値を占めることも重要と言える。道路状遺構は道路軌の溝状遺構と路面下の掘方遺構である波板状凸凹面からの遺物が多いが、当地区の場合、遺物出土の大半がその両側に掘られる連続土坑からであり、道路軌溝に似た様相を有していた可能性がある。

次に、遺構帰属時期から集落の中心時期を見てみると、竪穴建物の時期は、当地区で検出された竪穴建物6軒のうち、7世紀前半が4軒、7世紀後半が1軒、8世紀後半が1軒と、7世紀前半を主体に確認できる。ただし、竪穴埋土上半には竪穴建物の時期よりも確実に新しい遺物廃棄が確認できており、中世の遺物も含め、8世紀後半以降の遺物を定量含んでいる。

掘立柱建物は47棟のうち34棟が古代と推察される。土器の時期から判断すると、7世紀前半1棟、7世紀後半1棟、8世紀前半5棟、8世紀後半7棟、9世紀前半7棟で、8世紀代から9世紀前半が主体的である。土坑は150基と多いが、古代に特定されるものは少なく、100点以上の土器を出土する土坑のみを取り上げ、時期別の数値を出すと、7世紀前半1基、8世紀前半4基、8世紀後半7基、9世紀前半3基となる。掘立柱建物の帰属時期と概ね同様の時期分布を持ち、8世紀後半を中心に集落が形成されていたことを物語る。

井戸と道路状遺構については、SE03の大型井戸と道路状遺構1が関連性を有す可能性が高く、概ね古代Ⅳ2新期からⅤ1期以降に営まれたものと考えられる。

以上の遺構帰属から、Ⅲ群集落が8世紀前半から9世紀前半にかけてを中心とする集落であることが理解され

出土遺物名	須恵器食器類	須恵器貯蔵具	土師器食器類	土師器煮炊具	土製品	石製品	遺構別計
竪穴建物	512(19.2%)	191(7.2%)	206(7.7%)	1,736(64.9%)	11(0.4%)	17(0.6%)	2,673(7.4%)
掘立柱建物	182(22.9%)	72(9.1%)	62(7.8%)	457(57.5%)	2(0.1%)	20(2.5%)	795(2.2%)
土坑	1,519(23.5%)	618(9.6%)	794(12.3%)	3,430(53.1%)	29(0.5%)	68(1.0%)	6,458(18.0%)
井戸	146(29.4%)	101(20.4%)	65(13.1%)	157(31.7%)	9(1.8%)	18(3.6%)	496(1.4%)
伊状遺構	2(6.5%)	1(3.2%)	3(9.7%)	25(80.6%)	0(0.0%)	0(0.0%)	31(0.1%)
道路状遺構	1,108(32.8%)	1,051(31.1%)	173(5.1%)	1,019(30.2%)	10(0.3%)	17(0.5%)	3,378(9.4%)
溝状遺構	42(20.4%)	38(18.4%)	9(4.4%)	115(55.8%)	2(1.0%)	0(0.0%)	206(0.6%)
土器アリ(包含層)遺構	5,029(22.9%)	3,337(15.2%)	1,897(8.7%)	11,348(51.8%)	124(0.6%)	174(0.8%)	21,909(60.9%)
計	8,540(23.8%)	5,409(15.0%)	3,209(8.9%)	18,287(50.9%)	187(0.5%)	314(0.9%)	35,946

G地区及びH地区西側区域出土古代遺物集計表（破片数表示）

※本集計に際し、集計方法の手違いから、若干の数値訂正が必要となることが判明したが、時間的制約から再集計できなかった。ただし、概ねの数値傾向は妥当性をもつものであり、そのまま掲載した。

るが、それは包含層資料やG区古代土器溜まり遺構の出土土器の時期からも同じ傾向を読み取ることが可能である。時期比定可能な食膳具のみでの比率だが、各時期に分けた食膳具破片概数（10点程度の括りて表示した）では、7世紀前半が須恵器30＋土師器10、7世紀後半が須恵器40＋土師器10、8世紀前半が須恵器270＋土師器20、8世紀後半が須恵器550＋土師器100、9世紀前半が須恵器550＋土師器80、9世紀後半が須恵器280＋土師器40、10世紀前半が須恵器100＋土師器10となる。7世紀前半の数量を100とすると、後半も125のまま推移し、8世紀前半に725へ激増する。その後8世紀後半には1,600へさらに倍増、9世紀前半の1,575を頂点に、9世紀後半には800へ半減、10世紀前半は270へとさらに減少させる。8世紀後半から9世紀前半までをピークに、その前後の時期へ減少させる様相であり、遺構所属時期よりもやや新しい時期へズレ込む傾向が認められるが、これは土器溜まり遺構への土器廃棄が、8世紀後半に築造される大型井戸の出現によって、仏教祭祀的な意味合いで土器廃棄行為が盛んになったものだろう。

次に、中世土器についてだが、全て中世1期の範囲におさまるもので、11世紀2/4期頃から12世紀中頃の100年を超える程度の時期幅に入るものである。特に、11世紀後葉から12世紀初頭に位置付けられる中世Ⅰ－Ⅱ期の遺構が過半数を占め、大型の総柱建物も当期に位置付けられるものがほとんどであろう。中世の土器は、当地区の土器総点数42,818点の中で7,186点を占め、17%の高い割合をもつ。これまでの報告区域では確認できないほどの割合であり、それは当期の掘立柱建物の分布からも窺える。遺構別では古代同様に、6割以上を土器溜まり（包含層・ピット）が占め、次いで土坑の3割強、井戸の1割弱となる。器種別では土師器食膳具が96%とそのほとんどを占めるが、陶磁器類が3%程度存在することは重要で、船載白磁類がそのほとんどを占める。土師器煮炊具は極めて少なく、小型鍋状器形のものだけが僅かに存在する。

## 第2項 出土遺物の分類と器種名

### 1. 古代遺物

古代遺物は大半が土器・土製品で構成されるもので、僅かの金属製品と石製品が装身具や工具、武器、部材などに使われる程度である。金属製品は鉄製品が主で、刀子、鉄鎌、鎌、釘、鍛冶道具類、金具類、加工途中品などが確認でき、銅製品では貨銭がある。貨銭は3枚出土するが、全て「神功開寶」で、出土地点はまとまっている。石製品は、鈎帯の蛇尾、紡錘車、砥石（大型砥石含む）、金床石、支脚、造り付けカマドや炉の芯材などがあり、ほとんどは砥石とカマド部材で占められる。この中では鈎帯の出土が目目される。額見町遺跡の中ではこれ1点のみであり、比較的大型の蛇尾である。

古代の土器・土製品は、須恵器と土師器、緑釉陶器がある。緑釉陶器は碗類で、近江産と推察される。須恵器は食膳具と貯蔵具、土師器は食膳具と煮炊具に機能分化している。ただ、一部、須恵器に瓶や長胴釜、赤彩土師器に鉢や小型壺など、例外的なものも確認される。

古代の土器は、須恵器を食膳具と貯蔵具、土師器を食膳具と煮炊具に大分類する中で、各個別の器種名を付しているが、須恵器の鉢や瓶などの調理具としての機能を持つものについても、須恵器貯蔵具として分類してある。当遺跡出土の古代土器の器種分類については、『額見町遺跡Ⅱ』の第Ⅲ章第1節第2項の「出土遺物の分類」で、既に器種分類案を提示しており、本報告では基本的にそれに基づいて器種名を付している。ただ、その分類案についても、これまでの小松市の筆者記述報告書に準拠しており（『二ツ梨一貫山跡跡』2002年、『八里山山遺跡群』2004年）、須恵器食膳具については田嶋明人氏の1988年北陸古代土器編年での分類案（『古代土器編年軸の設定』『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題（報告編）』北陸古代土器研究会）、須恵器貯蔵具類については1999年の北野博司氏の分類案（『須恵器貯蔵具の器種分類』『北陸古代土器研究』第8号 北陸古代土器研究会）、土師器食膳具と煮炊具については、筆者の提示した『額見町遺跡Ⅱ』に基づいている。

なお、土師器食膳具については、色による識別を明示してあるので、提示しておく必要がある。つまり、焼成段階に内面に発炭素材を入れて黒色に焼成させる内黒品と赤色酸化鉄を胎土に混ぜ合わせることで赤い発色の製品を作り出す赤色品、黄土と鉄粒を混ぜた赤色塗布材により器面のみを赤く焼成した赤彩品、色調の変化をさせるための造作を特にしない通常品とに分けられる。なお、9世紀以降、外面赤彩塗布し、内黒焼成する輪皿類が出現するが、これについては外赤内黒品とする。

以上の須恵器・土師器以外に、緑釉陶器が2点あるが、それ以外にも土製品が多く出土する。土製品について

は、分類案提示という形ではなく、今回の報告地区から出土した土製品について、概要をここでまとめておく。

まずは、須恵質の土製品だが、文房具類である円面硯の破片が3点、土製形代である馬形土製品が1点、須恵器生産関連遺物として、須恵器室内で使用する貯蔵具専用焼台10点と須恵器窯の溶着置台片1点が出土する。当地区の円面硯出土量は他の地区に比べて少なく、その代わりに転用の磨溜めや硯が21点と多く出土している。墨書土器は17点で、これも他の地区よりも多い。特にSE03の大型井戸周辺での出土が目立っており、この周辺で多量に出土する油煙痕跡をもつ灯明具転用灰類（当地区では95点出土）とともに、仏教祭祀に伴うものだろう。

次に土師質土製品だが、煮炊きに伴う竈関連用具として、甕形土製品が21点、円筒形土製品が2点、支脚形土製品が29点出土する。A地区出土量（甕：84点、円筒：6点、支脚：103点）や報告Ⅱ区域の出土量（甕：38点、円筒：5点、支脚：60点）、報告Ⅲ区域の出土量（甕：64点、円筒：23点、支脚：100点）と比較すると量は少なく、それは古代掘立柱建物の少なさに起因しよう。次に、生産用具だが、製塩土器片が12点、漁労網罟として使用される管状土罟が34点、土師器焼成に伴う鉋鉢状土製品が153点出土している。鉋鉢状土製品については、一つのピットから100点以上まとまって出土しており、当遺跡内で行われる土師器焼成に付随する焼成道具廃棄品と位置付けられる。

## 2. 中世遺物

今回報告区域より出土する中世遺物については、土師器食膳具ではは構成されることは前述したとおりだが、これに僅かの土師器煮炊具と灰軸陶器または山茶碗、中国産白磁、中世焼締陶器、中世須恵器の中世陶磁器類が加わる。中世陶磁器類は、灰軸陶器碗類が27点、灰軸陶器瓶類が1点、中国産白磁碗皿が121点、中世焼締陶器が9点、中世須恵器が2点、それに瀬戸・美濃窯系陶器が3点で構成され、特に中国産白磁碗皿類の出土が突出する。出土地点は土器溜まりや包含層からで、大型の掘立柱建物の分布することと関連性が深いだろう。また、加賀古窯かと思われる中世焼締陶器や珠洲焼と思われる中世須恵器、瀬戸・美濃窯系陶器については破片であり、中世土師器食膳具の主要時期に位置付けられるものかは判断できない。

古代土器と同様、中世土器に関しても、『額見町遺跡Ⅱ』の第Ⅲ章第1節第2項の「出土遺物の分類」で提示した、器種分類案に基づいて器種名を付している。図での表示についても同様とし、焼き上がり状態については、内面を吸炭させて黒色に焼成するものを内黒品、通常の焼き上がりだが赤色酸化鉄粒を胎土に練り込んで赤く発色させるものを赤色品、白色粘土を使用して意識的に白く発色させるものを白色品、通常土師器の発色のものを通常品とする。

## 第2節 古代の遺構出土遺物解説

ここでは、古代に位置づけられる遺物について述べるが、遺構出土の個別の遺物説明は観察表に譲るとして、特徴的なものや特記事項、時期を代表できるような一括資料の土器様相などを中心として、竈穴建物、掘立柱建物、土坑（墓坑含む）、井戸、道路状遺構、溝状遺構、炉状遺構、ピット、土器溜まり遺構（包含層含む）の順で提示する。なお、本報告においては、鉄滓や羽目、炉壁等の製鉄及び鍛冶に関連する遺物は除外して報告してある。これは、当遺物群の取り扱いについて、遺跡全体との検討が必要であり、地区別に報告する性格のものではないと判断したからである。当遺跡は土器生産・鉄加工の工程を行っていることが、集落の成立や遺跡としての性格を物語る重要な要素と見ており、遺跡全体での報告を科学分析結果とともにまとめ、報告書Ⅵとして別冊で刊行する予定である。よって、今回の報告では、鉄生産に関連する遺物群の報告は一切行わず、それと切り離して処理できそうな鉄製品のみを報告する。

### 第1項 古代竈穴建物出土遺物

古代の竈穴建物から出土する遺物はまとまりをもった一括性高い遺物群が多いが、破片数では96ページで示した出土遺物別器種破片数構成表のように、7.4%を占めるに止まる。構成としては、食膳具が27%、煮炊具が65%、貯蔵具が7%で、時期の古いものが中心ということもあるが、竈穴内へのカマド使用土器の廃棄により、煮炊具の比率が高い。以下では、遺物を図示できた全ての遺構について述べることにする。

## 1. S112 出土遺物

L字型カマドをもつ大型の竪穴建物で、竪穴の掘り込みも深く、遺物出土量は多い。埋土下層から床面、カマド周辺で土師器食膳具、煮炊具を中心として、三湖台1B期に位置づけられるまとまった資料が出土しているが、埋土上層から中層にかけては、古代Ⅲ期前後の資料を中心として、Ⅱ2期からⅤ2期までの資料が混在して出土する。埋土上層資料もまとまりをもって出土しているため、ここでは竪穴建物に伴う資料と埋土上層資料の2項目に分けて述べることにする。

### (竪穴建物に伴う資料)

1～12の土器が該当する。竪穴建物に伴う須恵器食膳具が全く出土していないため、時期比定に苦慮するが、後述する土師器食膳具や煮炊具形態から、古代Ⅰ1期に位置づけられることは間違いなく、口頸部大きい甕の形態から、古代Ⅰ1期の中でも古段階、三湖台1B期に位置づけられるものと理解する。

土師器食膳具は在来型の椀Hと高坏Hで構成される。椀Hは、小型底部で体部開く器形と大型底部で腰に張りをもって立ち上がる器形とがある。前者は口縁部端でやや内湾する器形で、後者は口縁部外屈する器形と内側に面を形成する器形とがある。内面黒色焼成されるもの一般的で、それは高坏Hも同様である。高坏Hは坏部がやや浅い椀形を呈すもので、内面ミガキ調整される。

土師器煮炊具は在来型技法の短胴小釜と長胴釜が出土している。外面縦ハケ目調整、内面ヘラナデ後の縦ケズリ調整を行うもので、比較的薄く作られるものが多い。短胴小釜は球胴を呈し、長胴釜は胴部径の大きなもので、当期の形態的特徴を有している。

### (埋土上層資料)

古代Ⅱ2期～Ⅲ期に位置づけられる土器と古代Ⅳ2期～Ⅴ1期に位置づけられる土器とがある。

古代Ⅱ2期～Ⅲ期に位置づけられる土器は、13・14・16～19・22～24・26で、13は返りの形状や形態からⅡ2期に、16はⅡ3期に、14・17・19・24はⅢ期に位置づけられる。いずれも南加賀窯産である。なお、22は混和材を多く混在させる胎土をもつ須恵器小型鉢で、Ⅲ期～Ⅳ1期に生産される専用の灯明具である。

古代Ⅳ2期～Ⅴ1期に位置づけられる土器は、15・20・21・25で、20・21は灯明具使用がなされる須恵器小型坏Aである。20には油煙痕を顕著に残している。なお、25は坏Bを逆転したような形態を呈す團足円面硯で、脚部に3つの円孔を三角配置し、それを6単位施すものである。視面は丁寧にケズリ調整が施されており、当期の定形硯としては優品に位置づけられよう。

## 2. S114 出土遺物

良好な遺存状態の中型の竪穴建物であり、比較的出土遺物は多い。一部埋土上層で古代Ⅳ期～Ⅴ期の遺物が混在するが、下層出土やカマド出土のものは古代Ⅰ1期に位置づけられるもので、三湖台編年では1B期に位置づけられる。

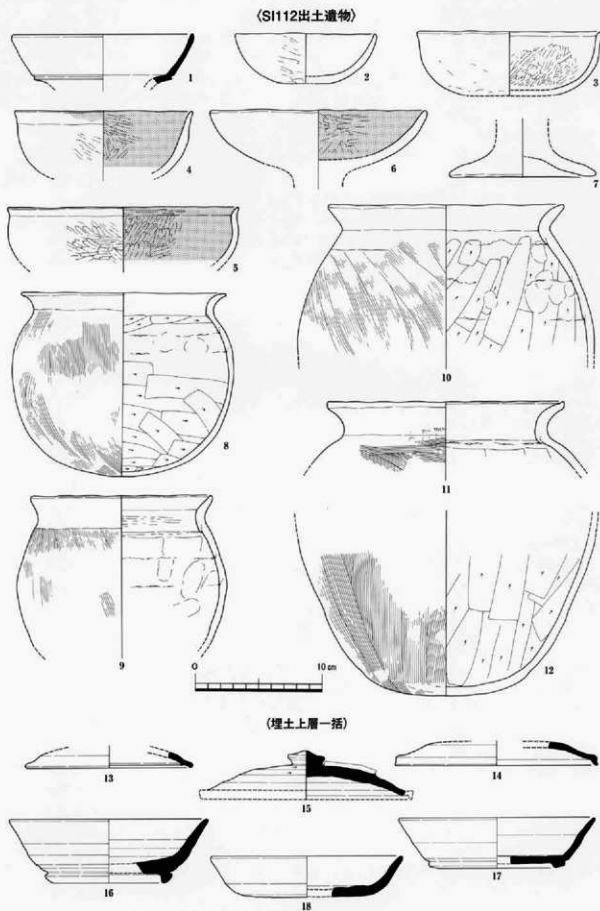
図示した遺物は、当竪穴建物に伴うと判断される上記時期のもので、比較的まとまりをもった資料と言える。

須恵器は少なく、図化できたものは27の坏H身のみで、Ⅰ1期古段階に位置づけられるものである。能美窯産で、内底面や外底面に磨耗痕があり、受部端も細かな欠けが認められる。なお、須恵器甕が破片で数点出土するが、図示できたものはない。

土師器食膳具は在来型の椀Hと高坏Hで構成される。椀Hは、小型で体部開き口縁部内湾する器形の28とやや大型で深身を呈し、口縁部端外屈する29の2法量が存在する。前者は内面黒色焼成、後者は赤色発色するものであり、器形や法量分化などとあわせ、当期の椀Hを特徴付けるものと言える。なお、28の椀Hは小さな底部円盤に右回りで粘土紐を2回転半巻き上げた痕跡が残っており(写真15-14)、作り手の利き手や作る姿勢、姿勢を復元できる良好な資料と言える。高坏Hは内黒焼成を基本とする大型のもので、いずれも脚基部付近の破片である。30の脚部はさほど長くなく、三湖台1A期のような長脚のものに比べて短くなっている。

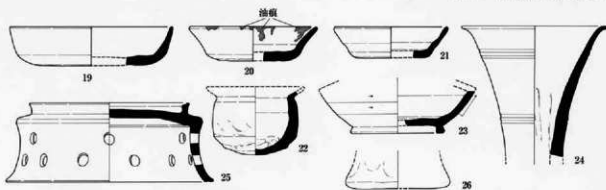
土師器煮炊具は全て在来型技法のもので、器種は小型鍋と短胴小釜、長胴釜、深鍋、そして破片のため図示していないが、甕も出土している。小型鍋は椀Hの大型深身タイプの器形に近似するものだが、内面ミガキ調整はなく、外面指頭痕を残すなど、粗製品である。外底面中央に煤付着、その外周に顕著な煤痕跡、外面上半は顕著な赤化剥落を持つもので、内面は上位にやや暗いヨゴレ状の付着が認められる。短胴小釜、長胴釜、深鍋は外面縦ハケ目調整、内面ヘラナデ後のケズリ調整を基本とするもので、いずれも胴部の張りが強い、古い形態を残す



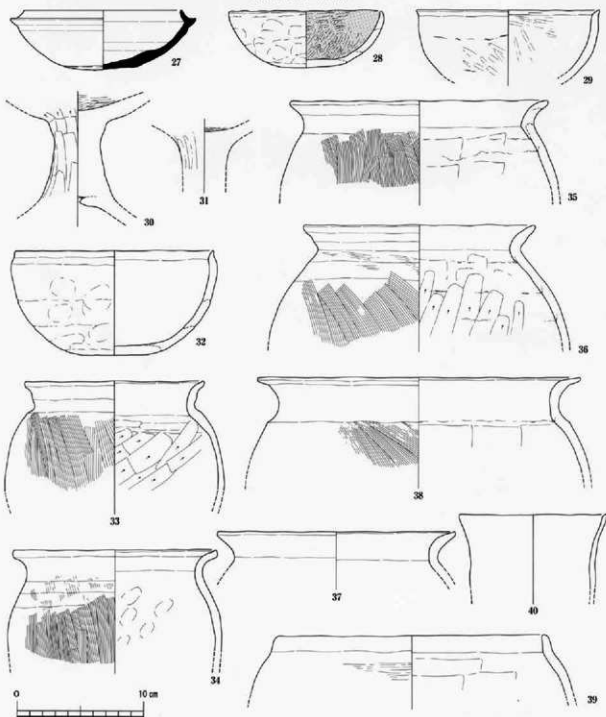


第65図 古代竪穴建物出土遺物1 (SI112-1、全てS=1/3)

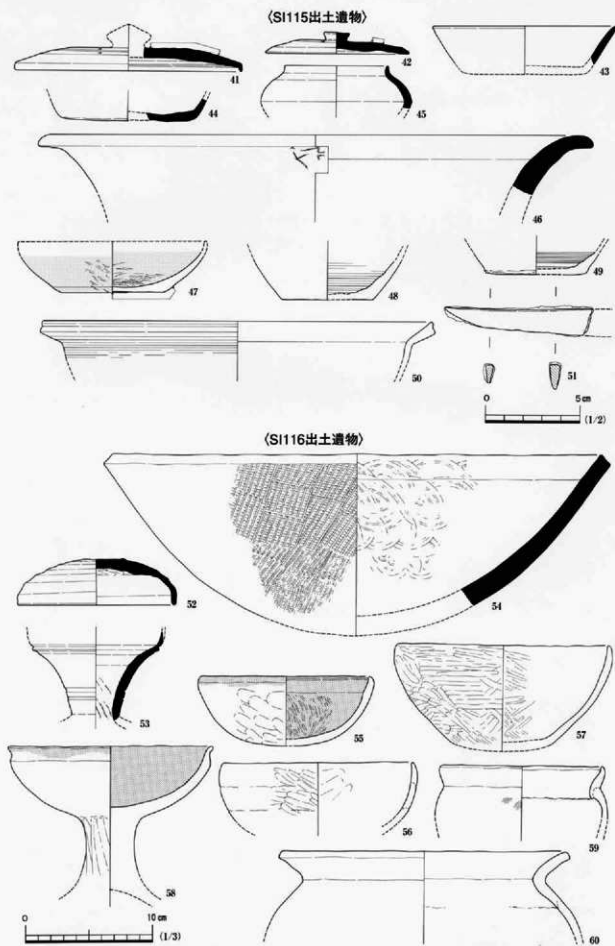




(SI114出土遺物)



第66図 古代竪穴遺物出土遺物2 (SI112-2、SI114、全てS=1/3)



第 67 図 古代竪穴建物出土遺物3 (SI115、SI116、51のみS=1/2、他は全てS=1/3)

ものである。なお、39の鍋か?としたものは、胴部から窄まったまま口縁部に至るもので、無頸器形を呈すものである。胴部上位は横ハケ目調整、内面ヘラナデするもので、深い鍋状器種として使用されたものだろう。

その他の器種としては、製塩土器が8点出土している。底部丸底を呈す小型鉢状器形をなすものと思われ、褐色の大型粒が極多量に混在する地元B類胎土をもつ。被熱顕著で器面剥落している。

### 3. SI115 出土遺物

中型の竪穴建物で、出土遺物は少ない。一部埋土上層で古代V期～VI期の遺物が混在するが、下層出土やカマD出土のものは古代IV1期、三湖台編年では4B期に中心をおく。

図示した遺物は、当竪穴建物に伴うと判断される上記時期のもので、比較的まとまりをもった資料と言える。

須恵器食膳具は坏Bと坏Aで構成される。41の坏B蓋の大型法量と42の小型法量とが存在し、坏Aは口径の大きなものである。須恵器貯蔵具の小型短頸甕や大甕も含め、全て南加賀窯産のものであり、貯蔵具には他に鉢Bや煎類が破片で出土する。なお、46の大甕の口頸部外面には何か絵文状の線刻が認められるが、破片のため判断としない。

土師器食膳具は、全てロクロ成形品に統一される段階で、赤彩土師器碗Aのみを図示したが、破片で盤Bが確認されている。図示した碗Aは底径の大きなやや扁平気味の器形のもので、IV1期の特徴を有す南加賀窯産である。

土師器煮炊具は、底部糸切り痕を残す短胴小釜と外部カキ目調整の浅鍋とを図示したが、胴部叩き成形痕を残す長胴釜や飯片も出土している。全て北陸型煮炊具と呼べるもので、在来型技法のものは確認されない。

なお、当竪穴建物の、下層から鉄器が出土している。刀子の刃部片で、背は平造り、身幅は1.5cmを測る。

### 4. SI116 出土遺物

中型の竪穴建物で、出土遺物は比較的多い。埋土上層に古代IV期～VI期の遺物、埋土中層に古代II2期～II3期の遺物が混在するが、下層出土やカマD付近出土のものは古代I1期新段階に、三湖台編年では1C期に中心をおく。

図示した遺物は、当竪穴建物に伴うと判断される上記時期のもので、比較的まとまりをもった資料と言える。

須恵器は口径12cm台に小型化した坏H蓋と頸部の短くなった甕が出土しており、いずれもその器形特徴から古代I1期新段階に位置付けられるものである。坏Hは南加賀窯北群産、甕は能美窯産である。なお、54は南加賀窯南群産の大型鉢で、外面Ha類叩き、内面Da類当て具で成形されるものである。大甕の丸底底部と同様の形態、成形を行うものであり、厚手で調整にロクロを使用していない特徴は、大甕の鉢状底部を鉢に転用成形したものと理解されよう。大甕には丸底の鉢状底部を先に作ってから胴部を粘土継ぎみ上げ+叩き成形するものがあるが、その鉢状底部の上端を切り揃えて、横ナデ調整し、口縁部としたものだろう。なお、内面は横ナデを下に施して、仕上げられている。

土師器食膳具は在来型の碗Hと高坏Hで構成される。碗Hは、小型で体部開き気味に立ち上がり、口縁部内屈する器形の55と体部が内湾気味に立ち上がる小型の56、やや大型で深身を呈し、体部開き気味に立ち上がり、口縁部内湾する57の2法量が存在する。55は内面黒色焼成だが、他は黒色焼成しないもので、大型のものは全体にやや粗めのミガキ調整を施す薄手のものである。なお、56の碗Hには外面に薄く煤の付着が見られる。高坏Hは内黒焼成するもので、脚部形状は通常の高坏Hと同様であるが、坏部はやや碗状に立ち上がり、口縁部が外屈する器形のものである。体部が碗形傾角を示す1C期の高坏Hの中で、口縁部外屈形態を残した形状と言えるだろう。

土師器煮炊具は全て在来型技法のもので、器種は小型鍋と短胴小釜、長胴釜、深鍋、浅鍋、甕が出土しているが、図示できたものは短胴小釜と深鍋のみである。

### 5. SI117 出土遺物

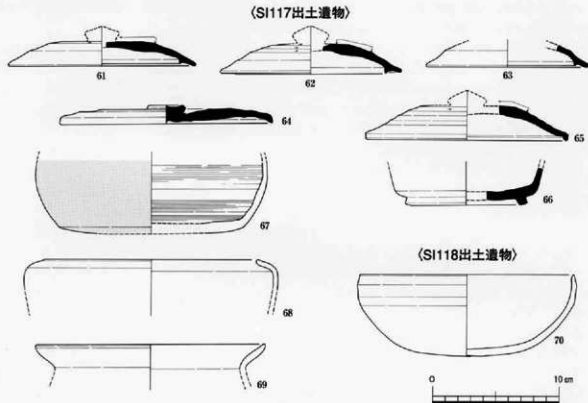
中型の竪支柱竪穴建物で、出土遺物は比較的多い。ただ、その遺物の多くは埋土上層から中層にかけて混在する古代IV期～VI期の遺物(66)であり、当竪穴建物に伴う下層出土のものは少ない。

下層出土の土器は61～63の古代II2期の特徴をもつ須恵器坏A蓋と64・65の古代II3期の特徴を持つ須恵器坏B蓋、69の在来型技法の土師器長胴釜など、概ね三湖台編年の3B期から3C期に位置付けられる。須恵器は南加賀窯北群産で占められ、土師器煮炊具は地元B類胎土である。なお、外面赤彩を施す鉢状器形の67とロクロ成形の土師器鉢E68が出土している。鉢Eはその形態からV期に位置付けられる可能性を持つが、67の

赤彩土師器鉢は竪穴建物に伴う可能性があるだろう。

## 6. SI118 出土遺物

小型で浅い竪穴建物であり、出土遺物は極めて少ない。図示できた土器は、在来型技法の土師器小型鍋で、薄手でやや器彩が三湖台1期のものとは異なるが、出土する土師器煮炊具がハケ目調整の釜類を中心とする点から、三湖台1期に位置付けられる竪穴建物と判断する。



第68図 古代竪穴建物出土遺物4 (SI117、SI118、全てS=1/3)

## 第2項 古代掘立柱建物出土遺物

古代掘立柱建物の柱穴から出土する遺物は、一つの遺構としての一括性や同時期性を問いにくい資料が多い。それは遺物出土量の少なさに起因するが、掘立柱建物どうしの重複をはじめとして、土坑や竪穴建物と重複するものが多く、他の遺構からピット埋土層への土器混入が多いことも要因である。よって、掘立柱建物出土遺物としてここで図示したものが掘立柱建物に伴うものであるのか、微妙な部分があり、最終的には遺物と遺構の構造、方位から総合判断するしかないだろう。ここでは、比較的時期にまとまりをもった資料と特筆すべき遺物を出土した遺構のみを取り上げる。なお、その他の掘立柱建物出土資料は以下の一覧に代えることとした。

SB252は27点の遺物を出土する掘立柱建物で、出土するピットは異なるが、図化できた須恵器は1~3に上げるように古代Ⅱ2期の特徴を有するものである。当掘立柱建物からは他の時期の遺物も出土するが、当該時期に位置付けられるものと見る。

SB259は四面箱付建物で、仏堂的性格を有する建物と判断されるものである。柱穴から32点の遺物が出土しており、図化できた須恵器は11の環B蓋や12の盤A、14の水甕など古代Ⅴ期に位置付けられるものが主体だが、土師器ではⅤ2期からⅥ期頃に位置づけられる浅鍋が出土しており、13の須恵器環AもⅥ期に下る可能性がある。概ねⅤ期を中心にⅥ期まで営まれた建物と位置付けられようか。なお、12の盤A外底面には墨書の記載があり、水甕とともに仏堂における仏教行事に関連するものかもしれない。

SB264は62点の遺物を出土する掘立柱建物で、比較的土師の時期がまとまっている。図示した18・19の須恵器環B蓋の形状から、Ⅳ2新时期からⅤ1期に位置付けられるものと見られ、20の赤彩土師器輪AもⅣ2期に位置付けられよう。概ね古代Ⅳ2新时期を前後する時期の掘立柱建物と位置付けておきたい。

SB266 は 44 点の遺物を出土する掘立柱建物で、ビット 1・8 を中心に図化可能な土器が出土する。24・25 の坏 B 蓋は古代Ⅳ 1 期頃に位置付けられるもので、26 の坏 B 身も古代Ⅳ 1 期～Ⅳ 2 古期に位置付けられる。27 の盤 A はⅤ 期に下るものだろうが、他の柱穴から出土する土器も概ね古代Ⅳ 期に中心を置いており、当該時期に位置付けられるものと思われる。

SB267 は 28 点の遺物を出土する掘立柱建物で、28・29・31 の須恵器食器類は、古代Ⅱ 3 期～Ⅲ 期を中心とする時期に位置付けられる。32 の盤 B はⅤ 期に下る資料だが、この須恵器は SB03 上層と接合関係にあり、混在したものと理解される。

SB269 は柱穴出土遺物が 11 点と少ないが、図化した 33 はⅣ 1 期に位置付けられる須恵器坏 A で、内面に油煙痕が複数箇所確認された。灯明具として使用されたものだろう。

SB280 は 47 点の遺物を出土する掘立柱建物で、複数の柱穴から古代Ⅳ 2 期頃に位置付けられる須恵器、土師器が出土している。Ⅵ 3 期に位置付けられる 39 の須恵器輪 B も出土しているが、他の図化していない遺物も、Ⅳ 2 期からⅤ 1 期に位置付けられるものであり、当掘立柱建物はⅣ 2 期頃に位置付けておくことが妥当だろう。

SB283 は 47 点の遺物を出土する掘立柱建物で、図示した 42・43 の須恵器坏 B 蓋・身、45 の土師器短胴小釜など、古代Ⅴ 2 期を前後する時期に位置付けられる。44 の須恵器皿はⅥ 期に位置付けられるものであるが、概ね、古代Ⅴ 2 期を中心とする掘立柱建物と位置付けたい。

SB302 は古代に位置付けられる須恵器や土師器も出土するが、図示した 46 の須恵器坏 H 蓋は 6 世紀後葉に位置付けられる可能性があるもので、47 の長頸瓶も口縁部形態や頸部波状文装飾を有す点から、6 世紀に遡る可能性がある。掘立柱建物自体は、その形態から 8 世紀以降と判断されるが、観見町遺跡の古代集落の前身の集落が小規模に営まれていた可能性を示唆しよう。

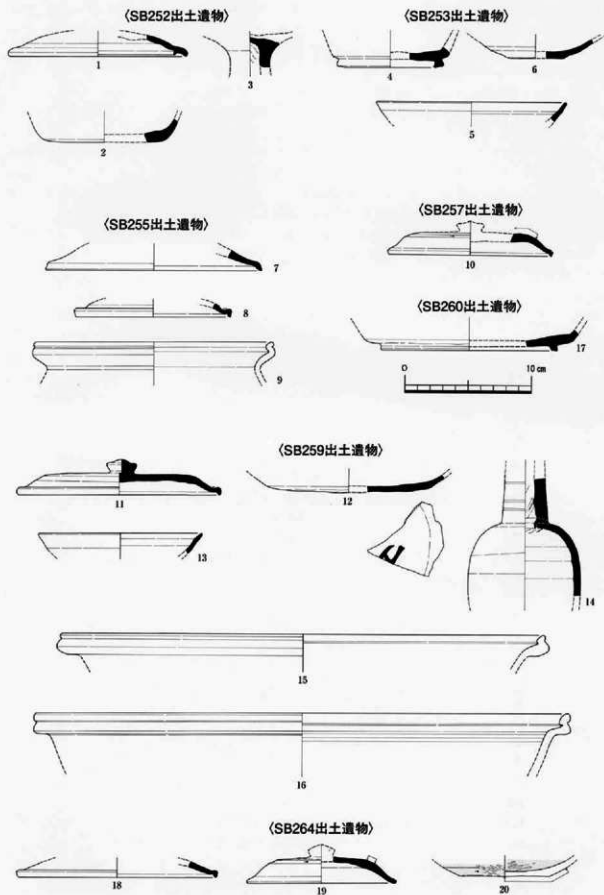
SB321 は 30 点の遺物を出土する掘立柱建物で、図示したものはいずれも古代Ⅱ 2 期～Ⅱ 3 期に位置付けられる須恵器食器類である。破片で赤彩土師器碗や在来型技法の煮炊具も出土しており、当該期に位置付けて問題ない掘立柱建物だろう。

SB322 は 32 点の遺物を出土する掘立柱建物で、図示した 53～55 の須恵器坏 B 蓋や坏 A、57・58 の土師器長胴釜 B 類から、古代Ⅲ 期～Ⅳ 1 期に位置付けられる掘立柱建物と思われる。56 の須恵器輪 B や破片出土の外面赤彩内黒土師器碗類は、古代Ⅵ 3 期に位置付けられるものだが、点数は少なく、混在品と理解される。

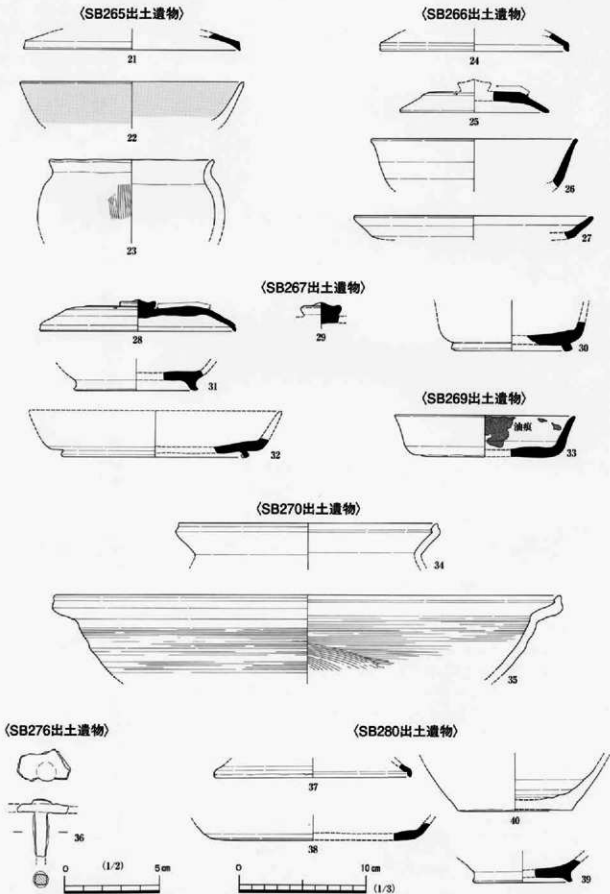
SB323 は柱穴出土遺物が 12 点と少ないが、図化した 59 はⅣ 1 期に位置付けられる須恵器坏 A で、口縁部に油煙痕が複数箇所確認された。灯明具として使用された可能性がある。

今回報告区域の古代掘立柱建物出土遺物一覧表

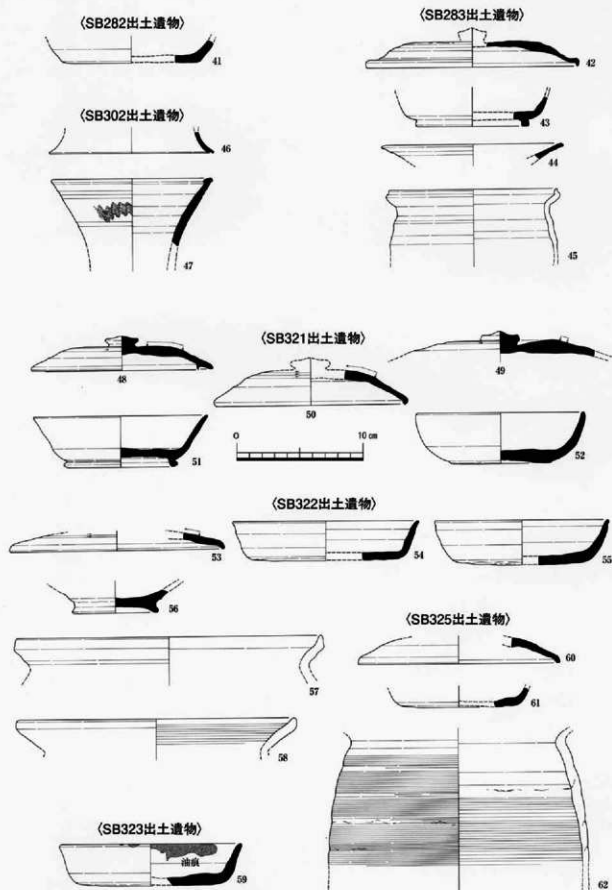
遺物名	遺物の概要	遺物名	遺物の概要
SB246	遺物 4 点。古代Ⅳ～Ⅵ期? の須恵器・土師器。	SB280	遺物 47 点。古代Ⅳ 2 期主にⅠ期とⅥ期の須恵器・土師器。
SB248	遺物 6 点。古代Ⅴ期? の須恵器と土師器。	SB281	遺物出土なし。掘立柱建物の形跡から古代認定。
SB252	遺物 27 点。古代Ⅱ 2 期の須恵器・土師器。	SB282	遺物 13 点。古代Ⅳ 2～Ⅴ期の須恵器・土師器。
SB253	遺物 36 点。古代Ⅴ期主にⅥ期までの須恵器・土師器。	SB283	遺物 47 点。古代Ⅴ期主にⅣ～Ⅵ期の須恵器・土師器。円鉢形土製品。
SB255	遺物 78 点。古代Ⅴ 2～Ⅵ期主にⅢ期前後の須恵器・土師器。	SB284	遺物 5 点。古代Ⅳ～Ⅵ期の土師器。
SB256	遺物出土なし。掘立柱建物の形跡から古代認定。	SB285	遺物 1 点。時期不明古代土師器煮炊具。
SB257	遺物 6 点。古代Ⅳ 2 期の須恵器・土師器。	SB286	遺物出土なし。掘立柱建物の形跡から古代認定。
SB259	遺物 32 点。古代Ⅴ 2～Ⅵ 2 期の須恵器・土師器。水風と黒書土器。	SB292	遺物出土なし。掘立柱建物の形跡から古代認定。
SB264	遺物 62 点。古代Ⅳ 2 新期頃の須恵器・土師器。	SB294	遺物出土なし。掘立柱建物の形跡から古代認定。
SB265	遺物 16 点。古代Ⅴ期頃の須恵器・土師器。	SB295	遺物出土なし。掘立柱建物の形跡から古代認定。
SB266	遺物 44 点。古代Ⅳ 1 期主にⅡ 2～Ⅵ 1 期の須恵器・土師器。	SB301	遺物 5 点。古代Ⅴ期頃の須恵器・土師器。
SB267	遺物 28 点。古代Ⅱ 3 期主にⅣ～Ⅴ期の須恵器・土師器。	SB302	遺物 10 点。古墳 4 様式Ⅱ 2 期? の須恵器・土師器。
SB269	遺物 11 点。古代Ⅳ 1 期の須恵器・土師器。灯明使用坏。	SB321	遺物 30 点。古代Ⅱ 2～Ⅲ 3 期主にⅢ～Ⅴ期の須恵器・土師器。
SB270	遺物 7 点。古代Ⅴ期の須恵器・土師器。	SB322	遺物 32 点。古代Ⅳ 1 期主にⅢ～Ⅵ期の須恵器・土師器。
SB271	遺物 6 点。古代Ⅴ期の土師器煮炊具。	SB323	遺物 12 点。古代Ⅳ期前後の須恵器・土師器。灯明使用坏。
SB272	遺物出土なし。掘立柱建物の形跡から古代認定。	SB324	遺物 16 点。古代Ⅴ～Ⅵ期の須恵器・土師器。
SB273	遺物 11 点。古代Ⅳ期の須恵器・土師器。	SB325	遺物 22 点。古代Ⅴ期主にⅢ期の須恵器・土師器。



第69図 古代掘立柱建物出土遺物1 (SB252～SB264、全てS=1/3)



第70図 古代掘立柱建物出土遺物2 (SB265～SB280、36のみS=1/2、他は全てS=1/3)



第71図 古代掘立柱建物出土遺物3 (SB282～SB325、全てS=1/3)



### 第3項 古代土坑出土遺物

古代土坑から出土する遺物は、今回報告地区の中では18%の割合を占める。ここに図示した遺物は142点と多いが、一つの遺構で出土する一括性高い資料群となると、その数は少なく、そのような一括土器群を中心として、以下では遺物解説を行う。また、遺物の中には特筆すべき資料、特殊な資料もあるため、それらについては単体での出土であっても、解説を加えることとした。

#### 1. SK279 出土遺物

当土坑はS112埋没後に重複して掘られる土坑で、須恵器食膳具をはじめとして20点程度の土器が出土する。図示したものは半完形品の須恵器杯B身と小型鉢で、須恵器杯B身の口径15.8cmの法量と扁平器形、高台形態から古代Ⅲ期に位置付けられるものと見る。これに伴する須恵器小型鉢は、口縁部外屈し、上端を積み上げる特徴的な器形のもので、灯明具として専用に製作されたものと見られる。南加賀産産の生焼け品で、内面に広く油煙痕跡が付着する。灯芯の置かれた痕跡が7箇所確認できるもので、度重なる使用が行われたことを予想させる(写真16-29)。当器種は土師器煮炊具同様に胎土中に大粒の砂粒など混和材を含む胎土が使用されるが、当製品は通常の須恵器食膳具に類した胎土で、形態もしっかりと作られていることが特徴である。なお、同形態のものは南加賀産産群の矢田野山1号窯(古代Ⅲ期に位置付け)において出土しており、報告では焼台としているが、2と同様に灯明具として専用に製作された器種と評価できる。

#### 2. SK326 出土遺物

当土坑からは古代Ⅲ～Ⅳ期の赤彩土師器碗とロクロ成形煮炊具が主に出土するが、それらに混じって時期の古い土師器が2点出土している。図示した小型丸底壺の口頸部破片と中空高坏の脚部破片で、その形状や法量などから、漆町Ⅱ年の12群土器に位置付けられるものと理解する(田嶋明人1986「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター)。5世紀前半に位置付けられる土器群であり、周辺に所在したであろう当期の遺跡から紛れ込んだものと予想される。

#### 3. SK342 出土遺物

遺物量はさほど多くはないが、古代Ⅲ期～Ⅳ期に位置づけられる土器とⅤ期に位置づけられる土器とがあり、数量的には拮抗している。ただ、図示したものはⅤ期に位置づけられるものが主体であり、10・11・13の坏B蓋・身はⅤ期に位置付けられるものである。いずれも南加賀産産の須恵器で、白色胎土で堅緻に焼成される特徴をもつ。

#### 4. SK355 出土遺物

須恵器食膳具68点、須恵器貯蔵具22点、土師器食膳具6点、土師器煮炊具110点を出土する土器廃棄土坑である。破片資料が主で、図示できたものは少ないが、出土土器の時期が比較的近くまとまっており、図示した土器のとおり、概ね古代Ⅳ期に位置付けられる。

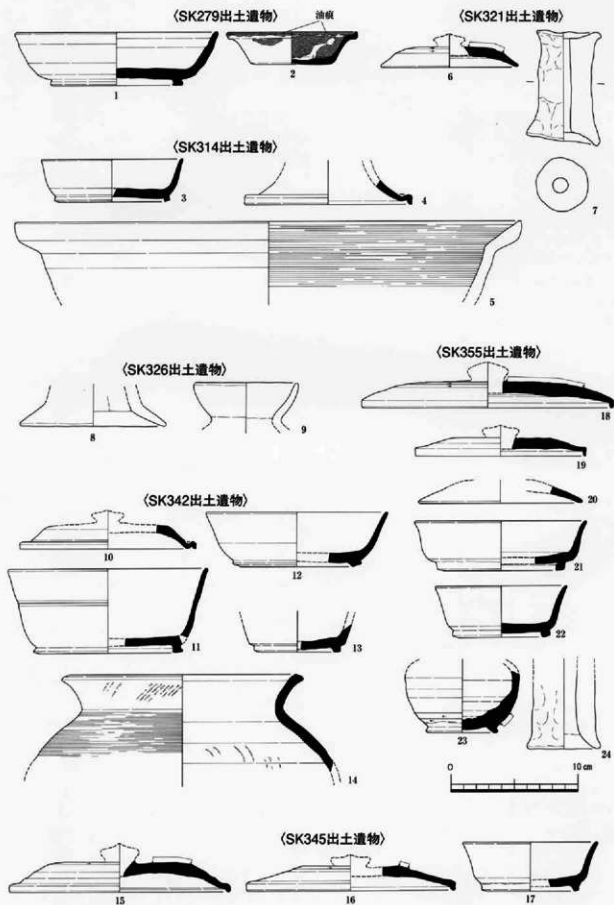
須恵器食膳具は坏A、坏B、盤Aで構成され、坏Bは大・中・小の3法量に明確に分化し、小法量の蓋には折り曲げのない特徴を持つ。須恵器産地は19の坏B蓋のみが能美産産だが、他は南加賀産産で占められている。なお、18の坏B蓋は内面に顕著な磨耗痕と墨痕を残すもので、硯として転用されたことを示す。土師器では図示したものが少ないが、土師器製品では支脚形を国掲載した。上下端を若干つまみ出して広げる筒形の支脚で、外面に指頭痕をもち、中空に作られている。

#### 5. SK358 出土遺物

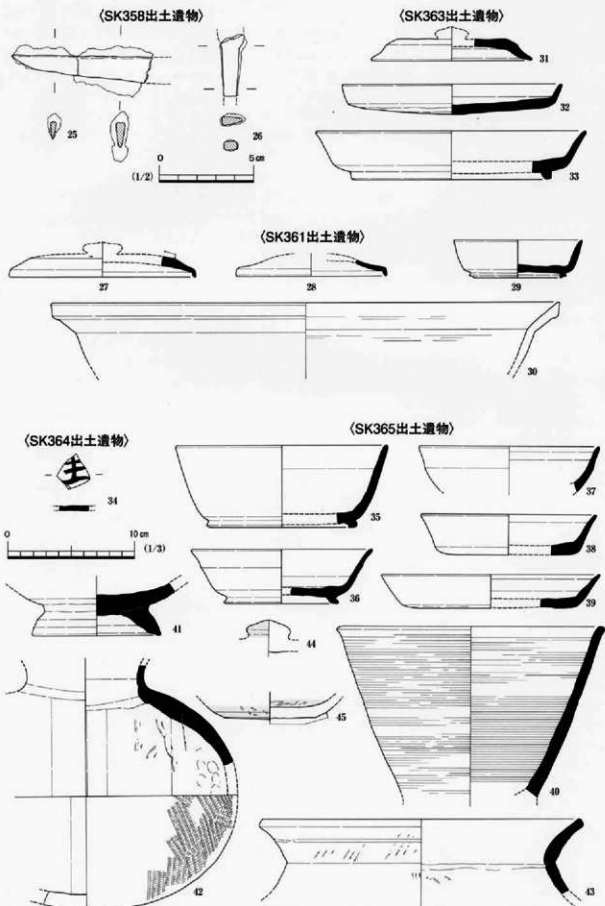
土器の出土量は少ないが、出土する須恵器ⅢBや土師器長胴釜・浅鍋の器形から、古代Ⅵ期に位置付けられる土坑と判断される。図示したものは鉄製品2点で、刀子と鎌と思われる。25の刀子は刃部のみの破片で、背は平造を呈し、刃先へ向かって幅を狭める形状のもの。26の鎌は上下端を欠損する破片だが、一部残る刃部の形状から片刃の長胴鎌と思われる。

#### 6. SK364 出土遺物

土器の出土量は少ないが、古代Ⅴ期～Ⅵ期の須恵器が出土しており、そのうちの坏A底部破片に墨書が確認された。極めて薄い底部片であり、古代Ⅴ2期からⅥ2期に位置付けられるものと予想される。墨書は外表面に記されており、破片のため定かではないが、「生」の可能性が高い(写真16-26)。「生」墨書は、SE03を始めとして、当遺跡からは数点出土しており、時期的にもⅤ期を中心とする時期にまとまる傾向がある。



第72図 古代土坑出土遺物1 (SK279、SK314、SK321、SK326、SK342、SK345、SK355、全てS=1/3)



第73図 古代土坑出土遺物2 (SK358、SK361、SK363、SK364、SK365.25-26のみS=1/2、他は全てS=1/3)

## 7. SK365 出土遺物

須恵器食膳具 41 点、須恵器貯蔵具 27 点、土師器食膳具 7 点、土師器煮炊具 138 点を出土する土器廃棄土坑であるが、破片資料が主で、図示できたものは少ない。出土土器は古代Ⅱ 3 期～Ⅲ 期とⅣ 2 新时期～Ⅴ 1 期の 2 時期にほぼまとまり、図示した 36・37・40～43 は前者の時期に、35・38・39・44・45 は後者の時期にそれぞれ位置付けられる。図示したいずれの須恵器も南加賀窯産で、赤彩土師器は坏 B 蓋のみ能美窯の可能性もある窯場 B 類胎土である。なお、41 の有台器種であるが、雑で分厚く大型の台が付くもので、内底面がナデツケされている点や底部からの立ち上がりの器形などから、台付の壺・瓶類とは考え難く、台付鉢とした。承盤のような器種も可能性としては考えられよう。

## 8. SK366 出土遺物

遺物量はさほど多くはないが、古代Ⅴ 期～Ⅵ 2 期に位置づけられる土器を中心に出土している。図示した 48 の須恵器は坏 B 身を伏せたような器形のもので、天井中央に紐の割かれたような痕跡があり、天井部外面にカキ目調整が施されること、降灰軸の状況などから、環状突帯の巡る大型の蓋とした。このような環状突帯の巡る大型蓋は、南加賀窯跡群では古代Ⅴ 1 期からⅥ 1 期の間で生産が顕在化するもので、金属質的な特徴を有す大型の有台坏が身として伴うが、当資料とは天井部から口縁部へ移行する部分が異なる。つまり、Ⅴ 1 期以降のものは天井部からそのまま真っ直ぐ開き口縁部へ至る器形であるのに対し、当資料は平坦な天井部から一度屈曲して垂下する形状のもので、このまま壺蓋状に口縁部に至るか、垂下した後口縁部で外屈する器形かとなる。壺蓋に環状突帯が巡るものは存在するが、この器形と法量で壺蓋というのは考え難く、大型法量とやや開き気味に垂下する形状から、口縁部で外屈する蓋の形状を想定したい。このような蓋は、陶器窯跡群では 8 世紀前半に確認されているもので、北陸でも 8 世紀前半の押水高松窯跡群八野ガメヤマ 1 号窯で生産されている。

## 9. SK367 出土遺物

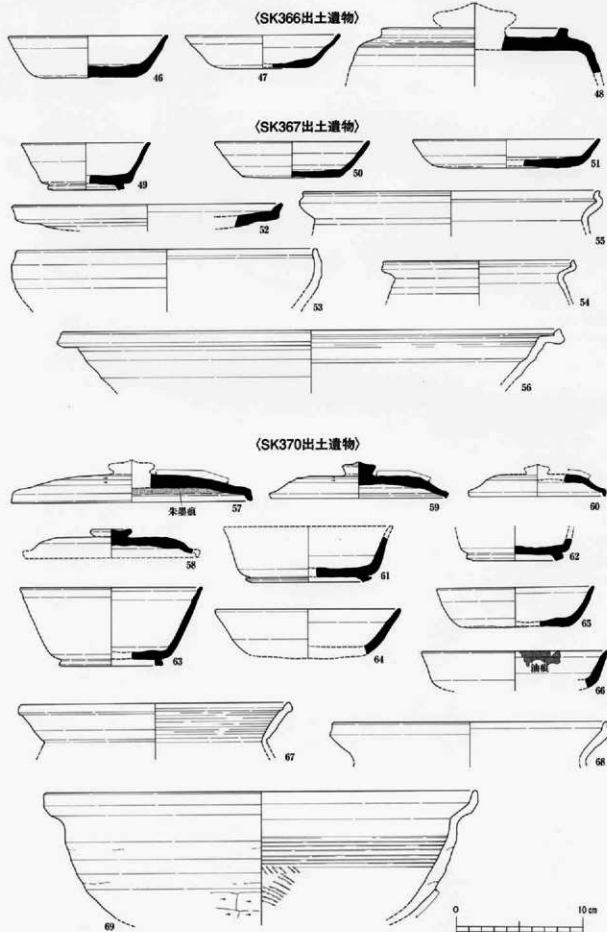
須恵器食膳具 44 点、須恵器貯蔵具 35 点、土師器食膳具 3 点、土師器煮炊具 108 点を出土する土器廃棄土坑である。破片資料が主で、古代Ⅲ 期からⅥ 期まで時期がばらつくが、図示できたものは概ね古代Ⅴ 期に位置付けられる。図示した須恵器食膳具は坏 B 身、坏 A、盤 A、高坏 A、土師器煮炊具は短胴小釜、長胴釜、浅鍋、そして鉢 E で、須恵器は南加賀窯産、土師器は南加賀窯産が想定される窯場 A 類に統一されている。当遺構で注目されるのは、土師器鉢 E の存在である。今回報告区域では仏教的器種である鉢 E の出土が目立つが、その半数を土師器が占めており、時期も概ねⅤ 期頃に集中する。後述する SE03 には複数の土師器鉢 E が廃棄されており、周辺で出土する油煙痕跡をもつ須恵器食膳具とともに仏教行事に使用されたものと考えられよう。当土坑は仏堂的建物である SB259 の西側に隣接して掘られる土坑であり、当建物に関連する土坑と位置付けられる。

## 10. SK370 出土遺物

須恵器食膳具 203 点、須恵器貯蔵具 43 点、土師器食膳具 69 点、土師器煮炊具 215 点を出土する大型の土器廃棄土坑である。当土坑も SK367 同様に、SB259 の西側に隣接して掘られる土坑であり、位置関係や SB259 との土器接合関係 (SB259 で図示した須恵器水炊は SK370 と接合) から見て、当建物に関連して掘られた可能性が高いだろう。土器の時期はⅣ 2 新时期からⅤ 2 期を中心に、Ⅱ・Ⅲ 期の土器やⅥ 期の土器が混在する。図示した土器は 66 の坏 A がⅣ 1 期に遡る可能性がある程度で、他は概ねⅣ 2 新时期からⅤ 2 期におさまるものである。当資料の特徴として、油煙痕の付着するものや墨痕の残る須恵器食膳具が目立つことが上げられる。油煙痕付着の土器は、62 の坏 B 身と 66 の坏 A を図示したが、破片では他に坏 A で 9 点出土しており、いずれもⅣ 2 新时期～Ⅴ 2 期に位置付けられる。墨痕を残すものは、57 の内面に広く朱墨を残し、磨耗痕の顕著な坏 B 蓋をはじめとして、60 の坏 B 蓋も内面に墨痕を残す。他に破片で坏 B の内底面に墨痕と磨耗痕を残すものが 1 点と坏 A か盤 A の内面に墨痕と磨耗痕を残す破片が 3 点出土しており、周辺で出土する墨書土器との関連が想定される。

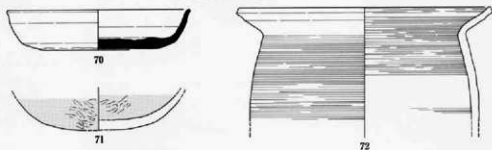
## 11. SK373 出土遺物

須恵器食膳具 36 点、須恵器貯蔵具 71 点、土師器食膳具 15 点、土師器煮炊具 383 点を出土する大型の土器廃棄土坑である。土師器煮炊具を主に土器廃棄がなされており、今回報告区域では最も古い、古代Ⅰ 期に位置付けられる土坑である。出土する須恵器食膳具の半数以上はⅡ 2 期以降の混在品で、図示した 73 の坏 H 蓋、74・75 の坏 H 身、76 の鉢 B 蓋のみが当土坑に伴うものである。3 点とも南加賀窯北評産のもので、坏 H 身口径の 11 cm 台という数値や立ち上がりの矮小化、そして鉢 B 蓋の形状などから、古代Ⅰ 1 期の中でも新段階、三湖台幅年

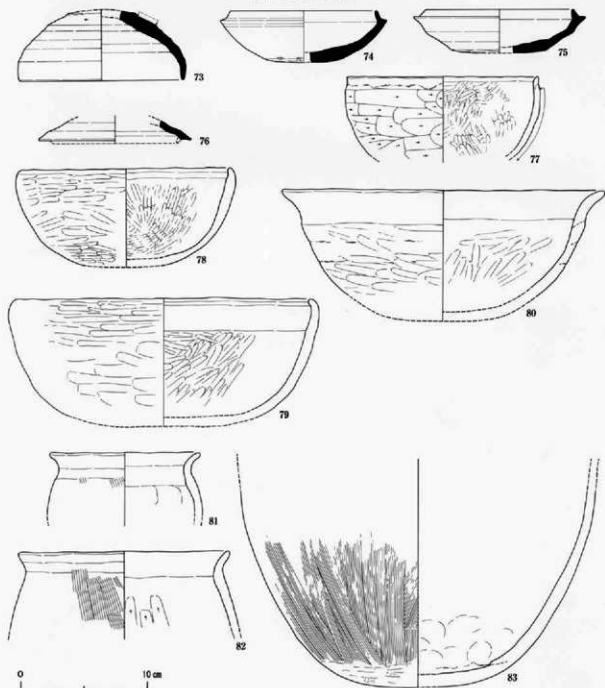


第74図 古代土坑出土遺物3 (SK366、SK367、SK370、全てS=1/3)

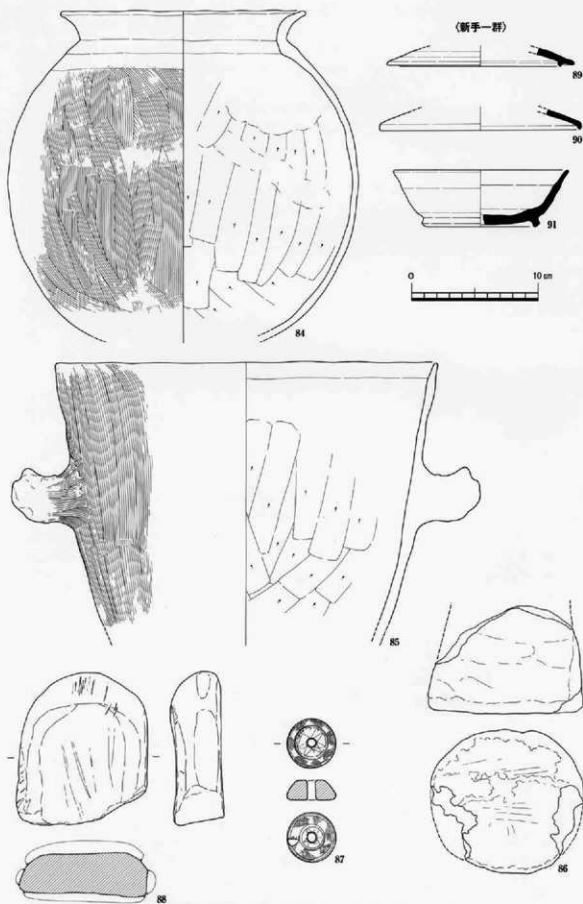
〈SK372出土遺物〉



〈SK373出土遺物〉



第75図 古代土坑出土遺物4 (SK372、SK373-1、全てS=1/3)



第76図 古代土坑出土遺物5 (SK372-2、全てS=1/3)

では1C期に位置付けられるものと理解する。土師器も古代Ⅲ期～Ⅳ期の煮炊具を僅かに混在させるが、概ね三湖台1C期の時期のものに統一される。全て在来型技法によるもので、食膳具では椀H、煮炊具では小型鍋と短柄小釜、長柄釜、深鍋、甔が出土する。図示した椀Hはいずれも内面黒色焼成されていないのだが、破片では同量程度内黒が存在する。なお、77の椀Hは外面ケズリ調整、内面ミガキ調整をしっかりと入れる食膳具器種だが、外面が強く被熱剥落し、内面に奥水線のコゲバンドを残すもので、小型鍋的な使用がなされている。小型鍋は口縁部内湾する通常形態のものに加えて、口縁部外反する形態のものが存在する。口縁部外反器のものも内外面を粗いミガキ調整が施されており、通常形態と同様の成形・整形方法がなされている。いずれも煮炊き使用痕跡が確認されている。なお、その他の遺物では支脚形土製品と砥石、石製紡錘車が出土している。86の支脚形土製品は、古代Ⅱ期以降に出土する小型円筒形を呈す土師器として成形、焼成されたものとは異なり、地山土を支脚状に固めただけのものである。底面に繊維状の圧痕を残し、表面は被熱で赤化している（写真15-12）。類見町遺跡では三湖台1期に散見されるもので、石製支脚の代わりに使用されたものだろう。87の石製紡錘車は滑石製の完形品で、表面に欠けや磨耗が顕著なものである。全面に線刻があり、上面と下面中央にはラフな星形の線刻、側面と下面には鋸歯文内を格子文で充填させる線刻が施される（写真18-45）。使用痕跡から実際に使用されたものだろうが、均整の取れた線刻文様は奢侈品としての位置付けもなされるだろう。

## 12. SK374 出土遺物

墓塚の可能性を持つもので、遺物出土は少ないが、古代Ⅳ1期に位置付けられる赤彩土師器椀Aが半完形品で出土する。口径18cm台を測る大型品で、薄手で作りもよく、丁寧なミガキ調整が施される点から、副葬品として墓塚内に入れられた可能性がある。なお、土坑内からは同時期の須恵器杯Bと杯Aの破片が出土しており、当該時期に位置付けられる土坑と判断される。

## 13. SK375 出土遺物

遺物出土量は100点以下と多くはないが、注目されるものとして95の須恵器杯B身がある。古代Ⅱ2期～Ⅱ3期に位置付けられるもので、外底面には大きく「大」のヘラ書き文字が焼成前に記されている（写真15-18）。ヘラ記号を記す際の乾燥状態、工具に似ており、同じ工程段階で記された可能性を持つ。「大」のヘラ書き文字を記す須恵器は、今回報告地区でもう1点、G区古代土器溜まり遺構から出土している。蓋の天井部のみの破片であるため、時期の特定は難しいが、鈕形態から古代Ⅱ2期からⅡ3期頃に位置付けられるもので、天井部内面に焼成前の状態で小さく「大」と一字記される。どちらも、南加賀窯産であり、時期が一致していることは興味深い。「大」のヘラ書き文字の意味については、工人識別や発注元を記した可能性があるが、南加賀窯産須恵器では、他に松架遺跡で確認がある。Ⅳ期に位置付けられる高塚Aで、杯部外面に「大」の線刻文字が小さく4箇所記されている（小松市教育委員会1994『松架遺跡』）。

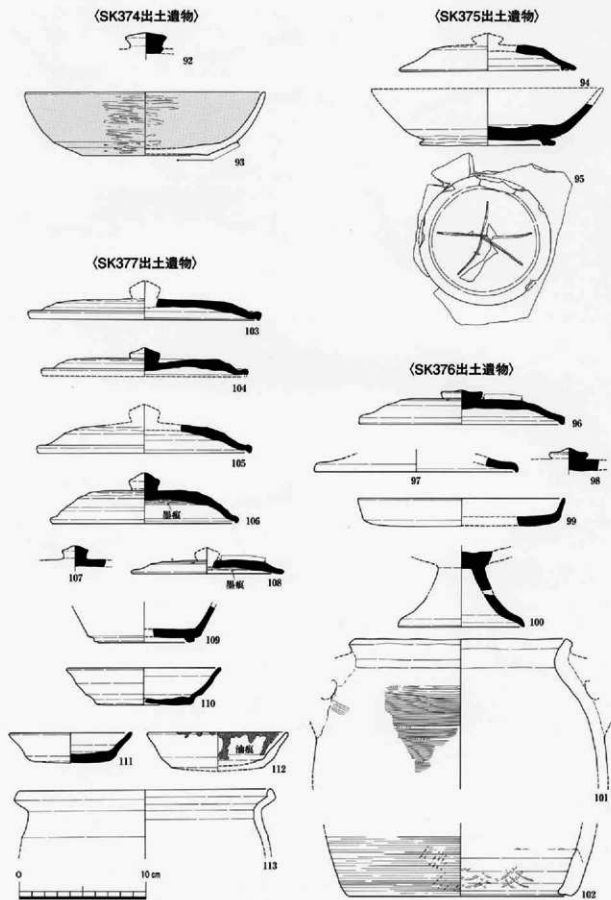
## 14. SK376 出土遺物

100点以上の遺物出土量をもつ土坑である。96～98・100の古代Ⅱ3期頃に位置付けられる土器と99・102の古代Ⅳ1期頃に位置付けられる土器とがあり、出土量は拮抗する。注目されるのは101の在来型技法による厚手の土師器煮炊具で、若干割の張る器形から、頸部で窄まり緩く口縁部で短く外反する。その頸部付近には環状把手が縦に付されており、双耳壺のような器形となる（写真14-8）。外面は縦ハケ目調整の後に横ハケ目調整が施されており、古代Ⅱ3期に位置付けられるものだろう。

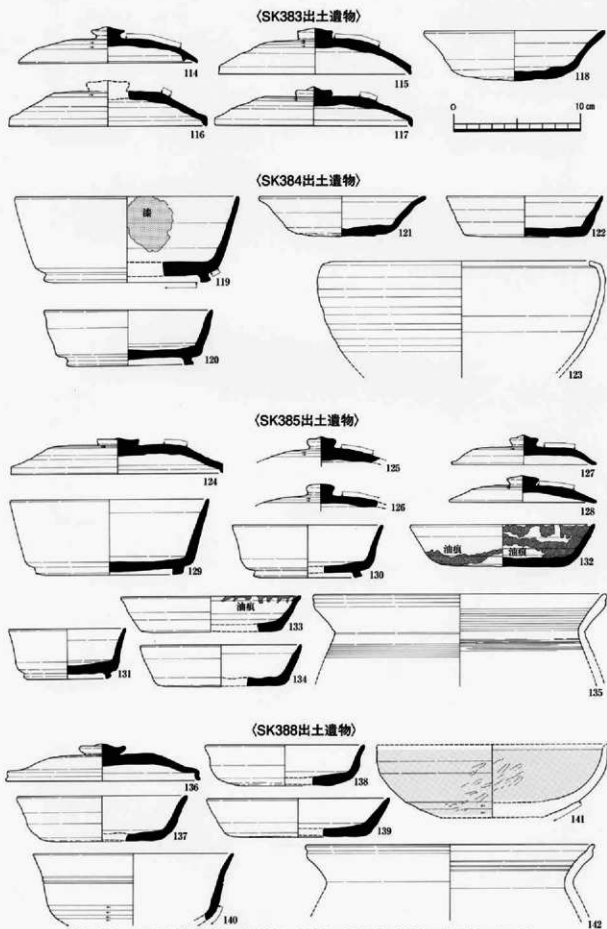
## 15. SK377 出土遺物

須恵器食膳具247点、須恵器貯蔵具28点、土師器食膳具8点、土師器煮炊具215点、石製品5点を出土する大型の土器廃棄土坑である。古代Ⅳ期に位置付けられる土器も含まれるが、図示した須恵器をはじめとして、古代Ⅴ2期に位置付けられる須恵器食膳具を中心に出土している。土師器煮炊具も概ねⅤ期に中心があり、数少ない当期の一括資料と言える。食膳具では須恵器が多量出土するのに対し、土師器は赤彩椀Aと外面赤彩内黒椀・甔が僅かに出土しているだけで、当期の食膳具構成を示すものと言えよう。図示した土器は須恵器杯B蓋・杯B身・杯A、土師器杯A・長柄釜で、106・108の須恵器杯B蓋には内面に顕著な磨耗痕と墨痕とがあり、転用視として使用されていたことを物語る。同様の墨痕をもつものは、他に杯Aで2点確認されており、文字は判読できないが、墨書された須恵器片も1点確認されている。また、油煙痕跡をもつ土師器杯A112を図示した。底面ヘラ切りによる須恵器器種を土師器焼成したもので、小型法量を持つ点など専用灯明具として生産されたものだ





第 77 図 古代土坑出土遺物 6 (SK374、SK375、SK376、SK377、全て S = 1 / 3)



ろう（写真16-33）。同形態の須恵器小型環Aは油煙痕跡を持たないものが多いが、灯明具専用器種として使用されていた可能性がある。なお、破片のために図化はしていないが、この他にも油煙痕跡をもつ須恵器環Aが2点出土している。

#### 16. SK383 出土遺物

土器出土量が30点程度の小型の土坑であるが、半完形品の須恵器環B蓋が4個体と完形品の環Aが1個体出土している。古代Ⅱ期～Ⅲ期に位置付けられるものであり、全て南加賀室北群産で占められる。時間的にまとまりがあり、埋納廃棄に近いものであったろう。

#### 17. SK384 出土遺物

須恵器食膳具78点、須恵器貯蔵具29点、土師器食膳具39点、土師器煮炊具65点、土製品1点、石製品2点を出土する土器廃棄土坑である。古代Ⅱ期からⅥ期までの土器が混在して出土するが、119・120・122など図示した須恵器をはじめとしてⅣ2期に中心を置く土器が多い。なお、時期は古代Ⅴ期に下る可能性が高いが、123の土師器鉢Eが1点出土している。体部上位で内湾して立ち上がり、口縁部が内屈する器形を呈すもので、器壁が薄く作られる特徴は、SE03で複数出土する土師器鉢Eに似る。当土坑はSB259の東側に隣接して掘られる土坑であり、当掘立柱建物に関連して掘られた土器廃棄土坑の可能性が高い。

#### 18. SK385 出土遺物

須恵器食膳具84点、須恵器貯蔵具24点、土師器食膳具20点、土師器煮炊具74点、石製品7点を出土する土器廃棄土坑である。一部古代Ⅱ期やⅤ期に位置付けられる土器も混在して出土するが、主体は古代Ⅳ期で、特に図示した土器は古代Ⅳ1期～Ⅳ2期に位置付けられるものが多い。図示した須恵器食膳具は全て南加賀室産で、132・133の須恵器環Aには、油煙痕が多量付着していた（写真16-30・31）。Ⅳ1期に位置付けられるものであり、この時期から当区域で仏堂の建物を中心とした仏教行事が開始された可能性がある。なお、128の環B蓋内面には顕著な磨耗痕があり、靛に転用されたものだろう。

#### 19. SK388 出土遺物

須恵器食膳具40点、須恵器貯蔵具12点、土師器食膳具11点、土師器煮炊具97点、製塩土器1点を出土する土器廃棄土坑である。古代Ⅱ期からⅥ期まで広く土器が混在するが、図示した須恵器食膳具は古代Ⅳ1期を中心とする時期に位置付けられるものが多く、南加賀室産に統一される。土師器長胴釜や赤彩土師器碗Aも同時期に位置付けられるものであり、今回の報告区域の中では最もまとまった当期の土器資料である。140に図示した須恵器は体部上位に沈線をもつ2条巡らし、体部下位から底面をケズリ調整するもので、金属器系の鍔を意識して作られたものと見られる。これも南加賀室産であり、後鏡生産が顕在化しない南加賀室跡群においては、後鏡に代わる器種であったのかもしれない。

### 第4項 古代井戸出土遺物

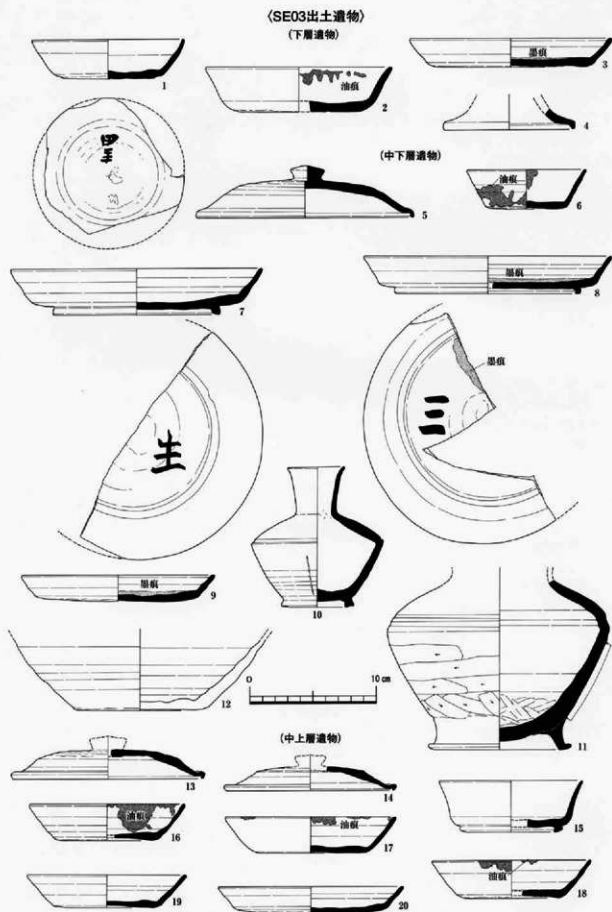
今回の報告区域には古代に位置付けられる大型井戸SE03が存在しており、ここから多くの土器が出土している。以下に井戸内部にあたるSE03とSE03の周縁に設けられたテラス状遺構（外周土坑）とに分けて、解説を加えることとする。

#### 1. SE03 出土遺物

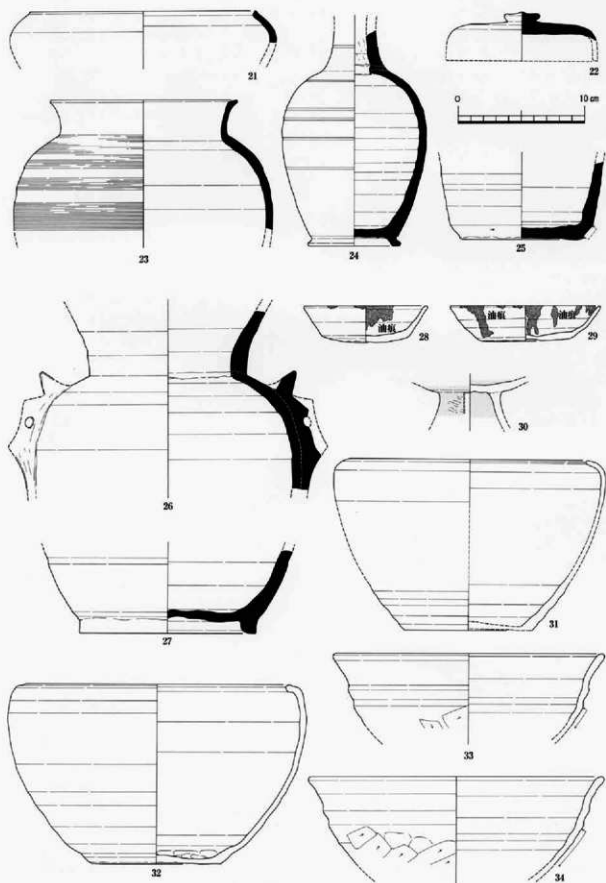
テラス状遺構下底面から5.8mも地下深く掘り込む井戸であり、埋土層から須恵器食膳具138点、須恵器貯蔵具70点、土師器食膳具63点、土師器煮炊具136点、土製品7点、石製品8点が出土する。堆積する土層により大まかに分層して土器の取り上げを行っており、テラス状遺構の下底面より1.9mまでを中上層、そこから地下2.0mまでを中下層、そしてそれ以下を下層として提示する。

なお、上層は、中上層の上に位置する土層だが、テラス状遺構が埋没した後に、SE03部分の土層が沈み、窪みを生じさせたもので、その部分を中世1期の段階に新たに掘削し、土器が廃棄されたものと見られる。中上層との境には炭化層が間層として存在しており、何らかの祭祀行為が行われた可能性もある。この上層遺物については、中世遺物の項で解説するので、ここでは扱わない。

《下層遺物》井戸側遺存部の上に橙色土塊を主とした土層が堆積しており、その土層付近で4点の須恵器食膳具が出土しているだけで、井戸の下底付近からは遺物の出土は確認されない。1の須恵器環A、3の須恵器蓋Aは



第79図 古代井戸出土遺物1 (SE03-1、全てS=1/3)



第80図 古代井戸出土遺物2 (SE03-2、全てS=1/3)

古代V2期に位置付けられるものであり、SE03の埋没時期を示す資料と判断される。2の須恵器坏Aや4の高坏Aは古代V2古期に位置付けられるものであり、2型式古く位置付けられるが、これは外周土坑などから紛れ込んだものだろう。2の須恵器坏A内面には広く油煙痕が付着しており、井戸周辺での灯明具使用を示す。井戸の廃絶に伴う可能性が高い盤Aと坏Aは、3の盤Aが転用硯としての使用を確認できるもので、1の坏Aには墨書が記されていた。墨書は外底面の上寄りに比較的小さく「田主」と記され、半完成品の状態で捨てられていた。「田主」墨書は石川県内では確認例がないが、人名として戸籍・計帳、木簡などに多く確認例があり、人名と評価するのが最も妥当と言える。ただ、記載文字の意味のとおり、田の所有者を示す意味で記された可能性もあり、その場合は、魚沼労働に関連するような村落祭祀に関連するものなのかもしれない。大型井戸からの出土であり、仏堂の建物との関連性も考えられるため、総括論稿において、詳細を述べるので、参照願いたい。

《中下層遺物》地山土塊や焼土小塊を含む、中上層の上半分の土層から、完形や半完形の土器がまとまって出土しているが、さらにその層の直下層から完形の須恵器坏B蓋1点が出土している。この完形の坏B蓋(5)はIV2新时期に位置付けられる能美窟産で、磨耗痕はさほど顕著ではなく、意識的な井戸埋納と位置付けられるものである。同様に井戸埋納を思わせる須恵器に、10の小型長頸瓶Aと23の壺Aがある。23の壺Aは口頸部を欠損する胴部完形品で、高松押水窟産の可能性を持つものである。10の小型長頸瓶Aも23と同窟産と思われるもので、全体に磨耗や欠けが認められるが、完形のまま埋納されている。小型壺瓶類や口を欠いた壺瓶器種の完形品を井戸に埋納する行為は、北陸地域の遺跡ではさほど珍しいものではないが、地元産の須恵器ではなく、わざわざ他地域産の須恵器壺瓶類を埋納することは興味深い。高松押水窟産の瓶類は中上層からも、大型の双耳瓶D(26)と大型の壺Eと思われる有台の底部破片(27)とが出土しており、一緒に当遺跡に持ち込まれた可能性が高い。それが何故、井戸鎮めの祭祀に使用されたのか。高松押水窟産須恵器に特別な付加価値が備わっているとは考え難く、他にこのような例があるのかも含め、今後検討が必要である。

また、この壺瓶類とともに須恵器食器具と土師器が出土する。須恵器は小型坏Aと盤A、盤Bで、いずれも古代V2期に位置付けられ、略完形品か半完成品である。小型坏Aは能美窟産のもので、油煙痕が内外面に付着する。盤Bは2個体存在するが、いずれも外底面に墨書が記されるもので、7は「生」墨書、8は「三」墨書の一字が記される。なお、8の墨書土器の内底面には墨溜めに使用したような痕跡を残しており、9の盤Aは転用硯として使用されている。墨書土器と転用硯をともに埋納する行為は、下層遺物でも確認できるが、井戸周辺での祭祀行為に伴い、その祭祀の場で、何らかの墨書行為が行われたことを示すだろう。水場祭祀行為と土器墨書とが深い関連性をもっていたことを示すであろう。

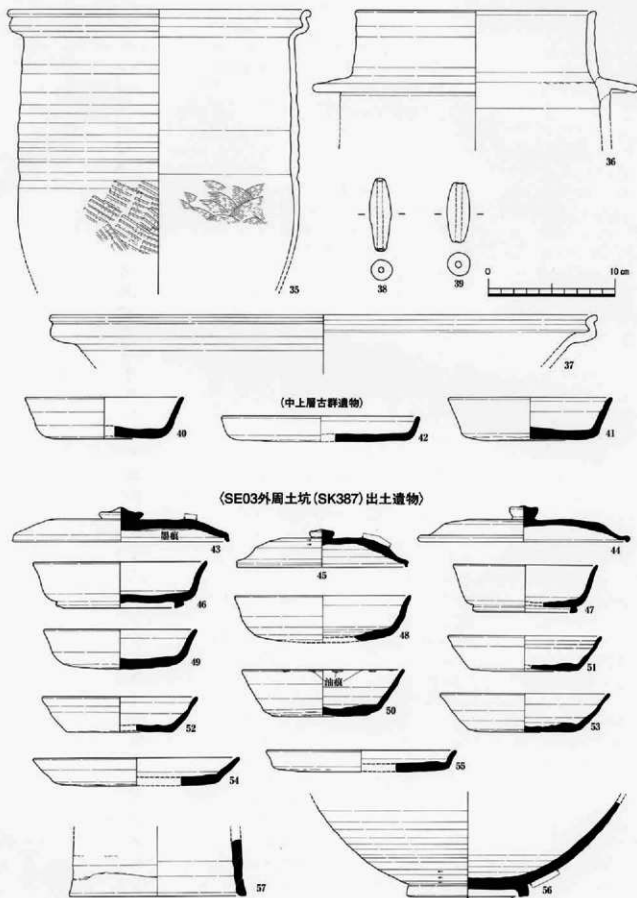
なお、土師器の12は底部糸切り痕跡をもつ鉢状器形を呈すもの、全体的な器形から鉢Eの底部と考えられる。須恵器などと同様にV期に位置付けられる。

《中上層遺物》焼土塊や炭化塊を混在させる土層の中に多くの土器が廃棄されており、SE03内から出土する遺物のうちの大半はこの層から出土している。V1期～V2期のものが大半だが、VI1期に下るものやIV2古期に遡るものも少量存在する。IV2古期のものは外周土坑からの混在と理解されるが、VI1期のものは当井戸の埋没がこの時期まで続いた可能性を示すだろう。中世において当井戸の埋没痕跡で何らかの祭祀行為を行っていたことを考えると、この場所が当遺跡の中では特別な空間(祭祀場)として位置付けられていたことを示すだろう。

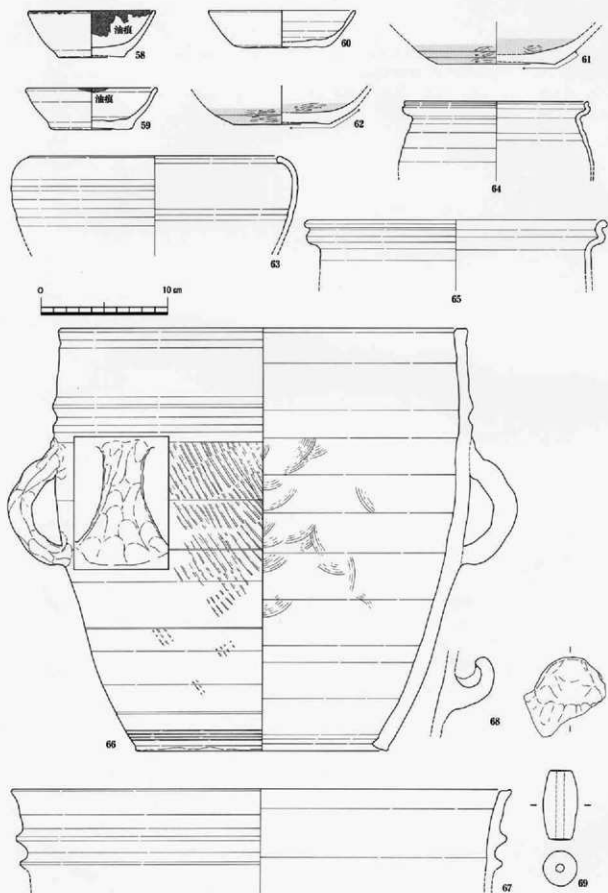
古代V期～VI1期に位置付けられる土器については、3つの特徴が見られる。第1は、油煙痕をもつ坏Aの出土が目立つことである。この層からは図示した5点の坏Aをはじめとして9点の油煙痕をもつ坏Aが出土しており、半完成品が多いことを特徴とするが、加えて3点は土師器の坏Aであり、灯明具として専用に生産されていたことを窺わせる。口縁部に灯芯痕を5箇所以上残すものが目立つ。

第2は、21の須恵器鉢Eや24の須恵器水瓶、31・32の土師器鉢Eなど、仏器の器種が複数廃棄されていることである。土師器鉢Eは底部糸切り痕を残す平底のもので、全体的にとても薄く作られている。南加賀窟産土師器であり、21の須恵器鉢Eとは口縁部増積み上げ器形において若干の違いがある。9世紀の鉢Eは底部尖底となるのが通常であり、その点も違いがあったろう。なお、水瓶は南加賀窟産で作りの良い優品である。

第3は通常の組成には加わらない土師器器種が確認されることである。33・34の小型鉢状器形を呈すものや36の羽釜は通常の集落などでは出土しない器種であり、特殊な用途で用いられたものと理解する。小型鉢状器種は内外に煤の付着が見られ、火を使うような祭祀行為場面で使用されたことを想起させよう。羽釜も内面に煤



第81図 古代井戸出土遺物3 (SE03-3、SE03外周土坑-1、全てS=1/3)

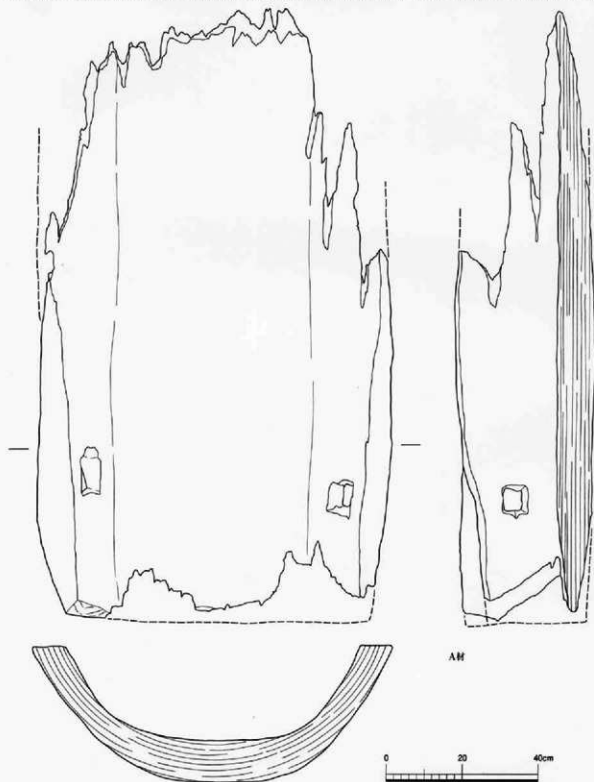


第82図 古代井戸出土遺物4 (SE03外周土坑-2、全てS=1/3)

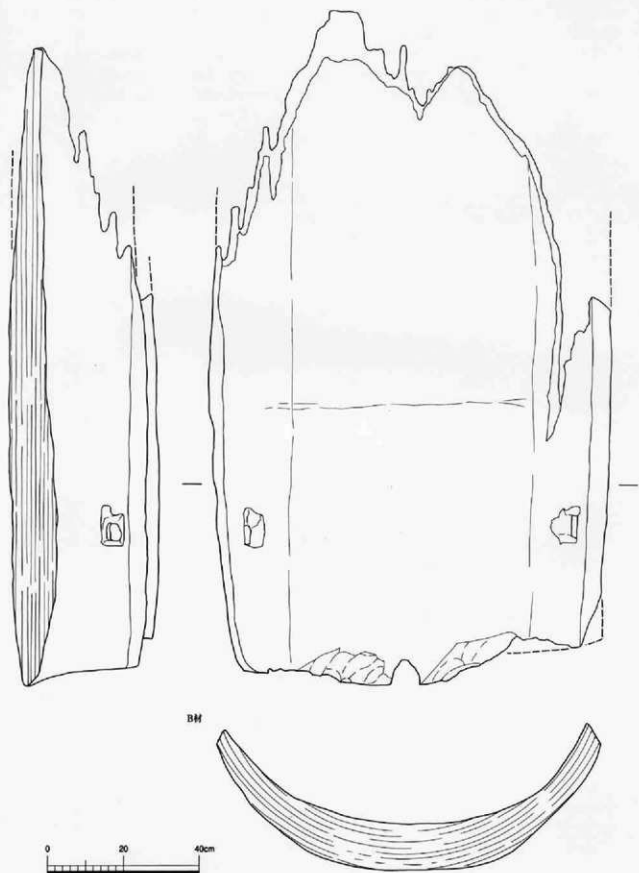


の付着があり、同じような場面で使用され、ともに当井戸に廃棄されたものと考えられる。長刷釜や浅鍋なども同様に煮炊きの痕跡が認められており、特別な祭祀用の煮炊き用具として、井戸に廃棄されたものと理解される。いずれもⅥ1期ないしはⅥ2期に位置付けられるもので、井戸廃絶後の時期のものである。

以上の井戸内出土遺物以外に、井戸の井戸側材として転用された舟が出土している。舷側端を合わせて円筒形とし、井戸側にしたもので、井戸側設置時に舟材の下端にあたる部分を尖底形状となるよう再加工している。なお、図示した2点の舟材は、井戸の南東側にあたるものをA材、北西側にあたるものをB材として図示している。



第83図 古代井戸出土遺物5 (SE03井戸側材-1, S=1/10)



第84図 古代井戸出土遺物6 (SE03 井戸側転用材-2、S=1/10)

当井戸側を舟と判断した理由は、一本削り貫き材である点と、大きさや厚さ、舟底状呈す断面形、材に彫られるホゾ穴の位置（井戸側設置時には両材を貫通する位置に穴がきていない）によっている。A材、B材ともに、樹種はスギ材と推察され、木質や年輪形状など同一材の可能性が高く、材の厚さ、弧の形状などから考えて、一般の削り舟材（底材）を切断したものと予想した。横断面の弧状呈す形状に平行して木目が入っているところから、木取りは一本材を半截した上で、半円状に削り抜く方法によったであろう。

大きさは、A材が外端幅940cm、内端幅780～850cm程度、長さ1,590cm、B材が外端幅100～106cm、内端幅920～960cm程度、長さ1,780cmを測る。長さについては井戸側転用設置後にその上部が朽ちてしまったための残存長で、実長を知る術はないが、A材、B材の部位特徴や幅などから考えて、4～5mを有に越える舟長であったろう。A材とB材とは幅に違いがあるが、それに対応するかのようには横断面形が異なる。幅狭のA材は舟底部にあたる部分で外側が25cm程、内側が50cm程の緩やかな平坦に近い部分を形成しており、そこから50～60度で両側へ開く形状をなす。これに対し幅広のB材は舟底部にあたる部分で外側が35cm程、内側が60cm程の緩やかな平坦部、そこから45～55度で両側へ開く形状をなす。舟底から舷部端までの深さはどちらも25cm程を測っており、前者が全体的に緩い弧状を呈し平坦部と舷部との転換点が明瞭でないのに対し、後者は転換点が明瞭で逆台形に近い形状をなす。舟底部の厚さはA材が11cmに対し、B材が12～13cmとやや厚くなっているが、舷部部の厚さはA材8cm程度に対し、B材7cm程度とやや薄くなっており、舷部端の面形成も上端を水平に幅広の面形成をするA材に対し、斜め下方に切り落とすB材といった違いがある。舟の幅に対する舟の深さから見て、現状で残る舷部部端は舟として端部にあつたとは考え難く、かといって舷部端面に井戸側材転用の際の再加工痕跡が認められない点から、遺存する部分では痕跡は確認されないものの、舷部板を付加する準備造舟の構造を有していたものと予想されよう。

舷部部の両側には左右対称になるようにホゾ穴が穿たれている。A材、B材とも井戸側設置時の下端部から凡そ30cm程度上がった箇所にあるため、井戸側設置時に両材を固定するための連結穴とも考えたが、微妙にホゾ穴の位置はズレており、もともと舟に穿たれていたものと考えのが妥当である。ホゾ穴の位置はA材で舷部端から10cm程、B材で5cm程にあり、貫通部は一辺5～6cm程度の方形を呈す。角材を横に渡す形状をなしてあり、舟梁穴に相当するものだろう。また、B材の設置時下端から上へ72cmのところには何かの見込み線を示すような細い横線が刻まれていた。一部2本入る部分もあり、舟の構築に伴う目印線の可能性がある。

以上、井戸側転用の舟材について述べたが、A材とB材の形状の違いから、A材は舟の艫に近い部分、B材は舟の前部から中央付近に当たる可能性がある。舷部はその形状から井戸側には転用しにくかったもので、艫の先端部と舷部分を切り落とし、中央で切断した後、舟の中央付近が上位にくるように設置されたものだろう。

## 2. SE03 外周土坑 (SK387) 出土遺物

SE03 外周土坑としたものは、井戸の外周にテラス状の一段下がった落ち込みを形成する遺構で、この縁に小ピットが巡り、覆屋状の簡易な建物が井戸と外周土坑を覆っていた可能性が高い。当土坑からは、須恵器食膳具308点、須恵器貯蔵具117点、土師器食膳具66点、土師器煮炊具685点、土製品9点、石製品13点が出土しており、中にはSE03内の中上層遺物と接合するものもあるが、当土坑内で接合する方が多い。土器の時期は古代I期からVI 2期までと幅広く出土する。SE03内で主体を占めたV期～VI 1期の土器は主体的に存在する傾向を看取できるが、IV 2期の土器が定量を占めていること、VI 2期の土器が定量確認されることは相違点としてあげられる。IV 2期の土器は井戸が機能していた段階、VI 2期の土器は井戸の埋め戻しが終わった後、その遺構地として祭祀的な空間を維持していた段階と位置付けられよう。特に、VI 1期までは井戸が埋められていても、当土坑までは埋められた形跡はなく、VI 2期の集落衰退とともに埋没したものと理解される。

図示した土器で、Ⅲ期に位置付けられる43や46は他遺構との接合が多く、破片での混在と見られるが、47・48・49・61・62のIV 2期の土器は当土坑に伴うものと理解する。V期の遺物は油煙痕をもつ坏Aが多く、特にV 2期は灯明具として専用製作された土師器小型坏Aが略定形2個出土する。同様に通常の坏A法量だが、土師器に焼かれたものも出土しており、このような灯明具においては、意識的に土師質に焼き上げたものを使用する傾向が看取できる。なお、SE03が埋められた後、その井戸縁に置かれるようにしてVI 1期～VI 2期に位置付けられる土師器大型甗が出土した。中上層で定量存在した羽釜や長胴釜の土師器煮炊具と同時期のものであり、祭祀行為に伴う特別な煮炊き行為に使用されたものだろう。

## 第5項 古代の道路状遺構・溝状遺構・炉状遺構出土遺物

### 1. 古代道路状遺構出土遺物

今回報告を行う区域には、道路状遺構1と道路状遺構3の2本の道路状遺構が存在している。道路状遺構1は中心に存在する溝状遺構SD30とその周縁に存在する土坑群から遺物が出土しており、道路状遺構3では路面や波板状凸凹面から遺物が出土している（SD31・32として取り上げ）。以下に、2本の道路状遺構について、遺物解説を行う。

#### (1) 道路状遺構1

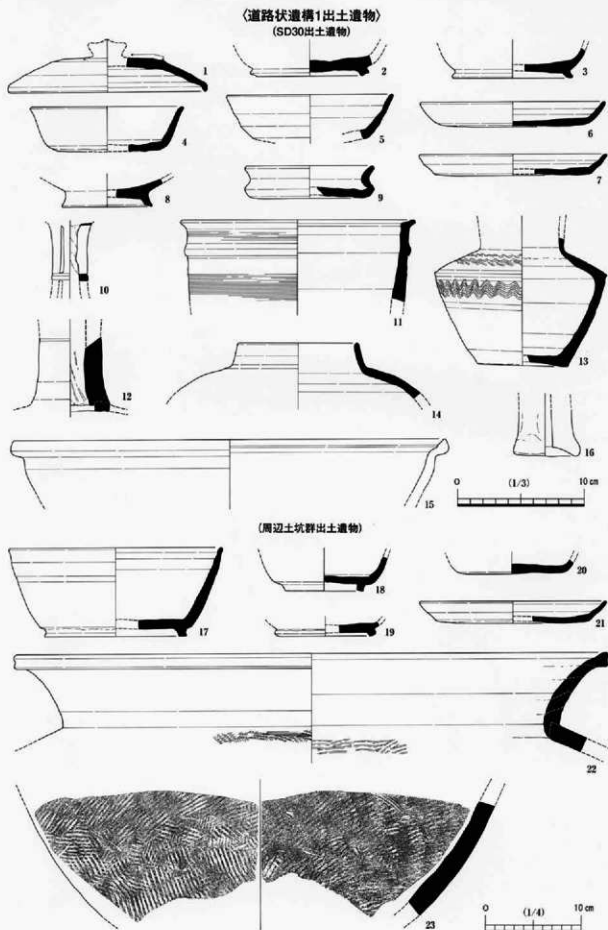
中心の溝状遺構であるSD30から出土した遺物と、周縁に存在する土坑群から出土した遺物とを分けて提示する。まず、SD30出土遺物だが、須恵器食膳具752点、須恵器貯蔵具397点、土師器食膳具74点、土師器煮炊具440点、土製品6点、石製品5点が出土する。古代Ⅰ1期からⅥ2期まで、時期幅広く出土しており、時期比定可能な須恵器食膳具から算出すれば、Ⅰ期3%、Ⅱ期～Ⅲ期14%、Ⅳ期24%、Ⅴ期30%、Ⅵ期29%の割合で構成されていることになる。もともと当遺構出土遺物は、路面に敷かれた須恵器が主であるため、道路が構築された年代や使用期間を求めることは難しいが、周縁土坑群から出土する土器などを見ても、Ⅴ期～Ⅵ期が中心であり、Ⅰ期からⅣ期までの土器は路面構築のための瓦礫的な部材として使用されたものと理解されよう。出土土器は大半が破片のため、図示できたものは少なく、時期的なまとまりも示すことができない。特筆されるような遺物も少ないが、その中には13の小型貯蔵具は注目される。胴部中心と上位に帯掻き波状文をもつ肩張り器形のもので、口縁部を欠損するため、器種の特定は難しいが、肩の張りや頸部の絞込みを考えれば、広口を呈す甕器形が考えられよう（写真17-37）。底部糸きり痕を残す平底のもので、糸切り小型甕の存在する時期から考えれば、古代Ⅲ期からⅣ2期に位置付けられよう。南加賀産須恵器であり、例を見ない器種である。

次に、周縁土坑からの出土遺物だが、須恵器食膳具40点、須恵器貯蔵具38点、土師器食膳具13点、土師器煮炊具54点、土製品1点がある。先述したように、Ⅴ期～Ⅵ期に位置付けられる遺物が多いが、図示した17～21はその項に位置付けられるものである。なお、22・23は須恵器大甕で、口径62cmを測る特大の南加賀産のものである。碎片化して様々な遺構から出土しており、SD30や道路状遺構3のSD31、SD32との接合関係が確認できる。なお、この甕については、一度全体の成形叩きが終わった後、内外面に薄く粘土を被覆し、最終的なナデ調整や叩き整形を行っており、被覆した粘土の下地に前の成形段階の叩きや当て具痕跡が残っている（写真17-39）。どのような意味で、粘土被覆が行われたのか。大甕という器種から、乾燥段階での器面の亀裂などが考えられるが、被覆することで修復できたとは考え難い。成形粘土が淡い青灰色から灰白色を呈す発色であったのに対し、被覆した粘土は鉄分の多い青黒く発色するものであったことを考えると、青黒い仕上げを求めて、被覆した可能性も考えられる。

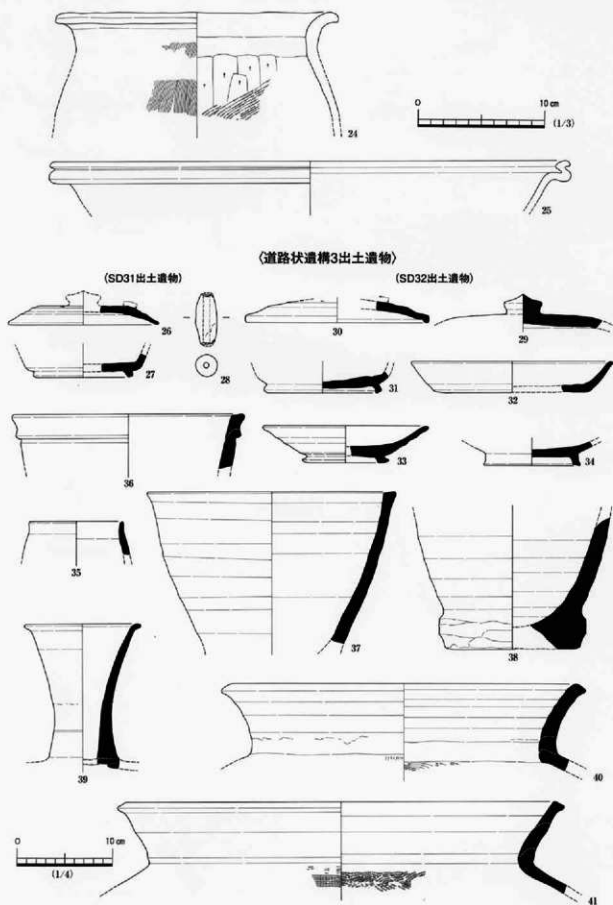
#### (2) 道路状遺構3

道路状遺構3は、道路状遺構1から分岐又は交叉して南へと伸びる遺構だが、さらに途中で付け替えが行われたような痕跡があり、北側をSD31、南側をSD32に分けて位置付けている。ただ、出土する遺物の時期に違いはなく、両遺構で接合関係も見られるため、特に分けずに遺物様相を述べたい。まず、出土した遺物の量であるが、須恵器食膳具316点、須恵器貯蔵具616点、土師器食膳具86点、土師器煮炊具525点、土製品3点、石製品11点と、須恵器貯蔵具の量が目立つ。須恵器食膳具の時期別ではⅠ期3%、Ⅱ期～Ⅲ期22%、Ⅳ期29%、Ⅴ期26%、Ⅵ期20%の割合で、道路状遺構1の出土遺物よりもやや古い時期に中心がある。ただ、当遺構の場合、その出土箇所の多くが路面整地土か、路面下の波板状凸凹面からの出土であり、古い時期に中心がずれるのは当然のことである。周辺に散乱する須恵器片や石、鉄滓などを土を締めるための材料として入れられたものだろう。須恵器では甕片が多いのもそのためである。ここでは、特筆される遺物のみを取り上げるが、35は貯蔵具専用焼台、42は須恵器甕の床面を剥ぎ取った床塊である。どちらも、須恵器甕関連遺物で、南加賀産から持ち込まれた製品に溶着していたものを出荷の際に剥ぎ取った残滓であろう。また、波板状凸凹面に充填される土器の中に須恵器ⅢBの半完形品(34)が伏せて埋められていた。南加賀産のもので、古代Ⅵ1期からⅥ2期に位置付けられる。

以上、道路状遺構3より出土した古代の遺物について述べたが、当遺構からは中世遺物も少量ながら出土している。このため、構築を中世へ下らせるべきと考えるが、他遺構重複や道路の作り替え等もあり、判断は遺構解説の項に委ねたい。



第85図 古代道路状遺構・溝状遺構・炉状遺構出土遺物1 (道路状遺構1-1、22・23のみS=1/4、他は全てS=1/3)



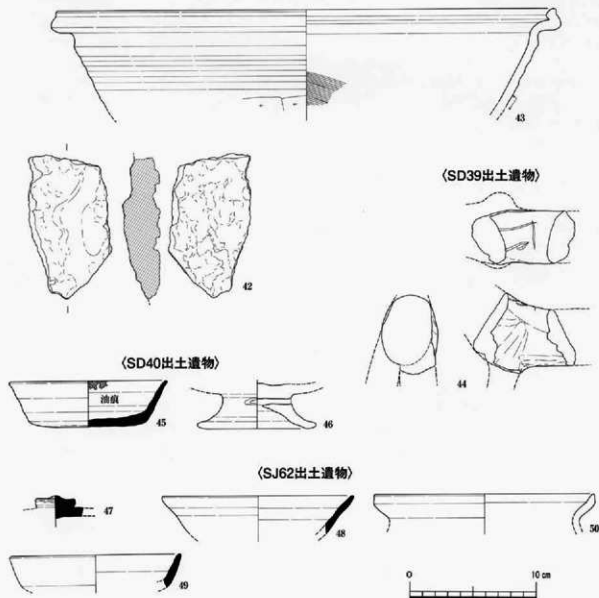
第66図 古代道路状遺構・溝状遺構・坪状遺構出土遺物2 (道路状遺構1-2、道路状遺構3-1、40-41のみS=1/4、他は全てS=1/3)

## 2. 古代溝状遺構出土遺物

今回報告を行う区域には、溝状遺構が22条と多いが、いずれも畝溝状を呈すもので、遺物出土は少ない。溝全体でも須恵器80点、土師器食膳具126点、土製品2点であり、図示したSD39とSD40のみを説明する。44は須恵器馬形の胴部前半の破片で、背面に靴を表現するような線刻が施されている（写真18-40）。南加賀窯産のもので、古代Ⅱ期からⅣ期の中で位置付けられよう。45は口縁部に油煙痕を残す古代Ⅳ2新期～Ⅴ1期の須恵器坏A。46は地元B類胎土をもつロクロ成形の土師器台付碗としたもので、碗が坏状の器形に低く「ハ」字に開く脚が付されるものである。脚基部にはへら先で刺したような孔が2方向に穿たれ、特殊な器形を呈す。「額見町遺跡Ⅲ」で報告したSK275-557に胎土や形態が似ており、同じような器種である可能性を持つ。

## 3. 古代炉状遺構出土遺物

遺物出土の確認された土師器焼成坑SJ62の出土遺物のみを取り上げる。SJ62からは須恵器食膳具5点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具21点が出土している。須恵器は図示したとおり、古代Ⅲ期からⅣ1期に位置付けられるもので、土師器食膳具が赤彩碗であることや、図示した50の土師器長胴釜の器形からも、この時期に位置付けて問題はない。遺物は土師器焼成坑の床面や直上層から出土しており、土師器に焼成割離痕をもつものはないが、土師器焼成坑の時期を、古代Ⅲ期頃に位置付けるのが妥当と判断した。



第87図 古代道路状遺構・溝状遺構・炉状遺構出土遺物3（道路状遺構3-2、SD39、SD49、SJ62、全てS=1/3）

## 第6項 古代のビット出土遺物

今回報告を行うG地区の古代ビットには、土師器焼成に関連する土器群を一括廃棄したり、土師器煮炊具を主に埋納するビット、または半完形品の墨書土器を埋納するビットなどがある。以下では、これらビットの性格に合わせて、分けて述べることとする。

### 1. 土師器焼成に関連するビット

#### (1) P28

径40cmほどのビット内に、土師器煮炊具片をはじめとして27点の土器片がまとめて廃棄されているビットで、覆土には焼土小塊や炭化小塊を混在させる。廃棄される土器がVI 2期の土師器煮炊具ではほぼ占められることと、それらにスヤコグなどの使用痕跡が認められなかったこと、覆土に焼土塊が多く含まれていたことから、当遺跡内での土師器焼成に伴って廃棄された焼成破損品ではないかと考えた。ただ、焼付け品や焼成剥離品は確認できず、確証は得られていない。なお、図示した1・2は、土師器短胴小釜と土師器長胴釜で、口縁部形態などから古代VI 2期に位置付けられるものである。図示はしていないが、VI 2期に位置付けられる浅鍋も出土しており、同時期に位置付け可能な碗の口縁部片も出土している。

#### (2) P38

長軸で75cm程度を測る楕円形ビットで、P28を越える数の土師器片が廃棄されている。特に匣鉢状土師製品が多く、砕片化するため破片数としては100点を越えるが、大半は接合・復元可能なものであり、およそ8~9個体に復元される。図示したものは、匣鉢状土師製品と大型の外赤彩輪A、土師器短胴小釜、須恵器鉢Fで、他に須恵器盤A、土師器長胴釜、土師器浅鍋が出土する。須恵器盤AはVI期に位置付けられるもので、破片出土の土師器短胴小釜の口縁部器形や、外赤彩輪Aの器形などから、当ビットは概ねVI 1からVI 2期に埋納されたものと判断される。さて、当ビットよりまとまって出土した匣鉢状土師製品についてだが、南加賀窯跡群の内黒土師器焼成における輪・皿の合わせ口焼成技法とともに出現した窯道具で、VI 1期以降確認されるものである。内黒土師器焼成は、発炭材を内面に入れて伏せて焼く、伏せ置き法が通常採られたが、この方法であると1段を伏せ並べるしかできず、量を焼くことができない。匣鉢状土師製品を用いた合わせ口法は匣鉢に入れることで口のズレを防止し、複数を重ね焼くことに成功したもので、内黒食糧具の量産化のために導入されたものと見られる。当遺構のものを見ると、法量から6~9の口径大きいタイプと10・11の口径小さなタイプとに分けられ、器形においても前者はやや間き気味の体部、後者は直立か内傾気味に立ち上がる特徴を有する。前者の4個体は残りがよく、特徴的な被熱痕跡を残す。7・8は内面の中位から下位にかけて広く被熱による劣化剥落が認められ、特に内底面付近が赤く被熱が顕著であった。これに対し外面は火色が体部中位から底面にかけて及び、特に底面における火色付着は特徴的である。口縁部から体部上位にはところどころ黒斑が残っており、同様の口縁部黒斑は6においても認められる。6の場合、外面の火色や内面の赤化剥落は認められないが、口縁部外面には黒斑が複数箇所確認でき、それが口縁部内面には及ばないというのが特徴である(写真18-43)。このような被熱や黒斑痕跡から、当匣鉢状土師製品は合わせ口にした内黒焼成品を上から被せるようにして伏せて使用されたものと理解される。全てこのような痕跡でないため、一つの使用法と言えものだが、当事例ではこのような使用法が採られたものと予想される。

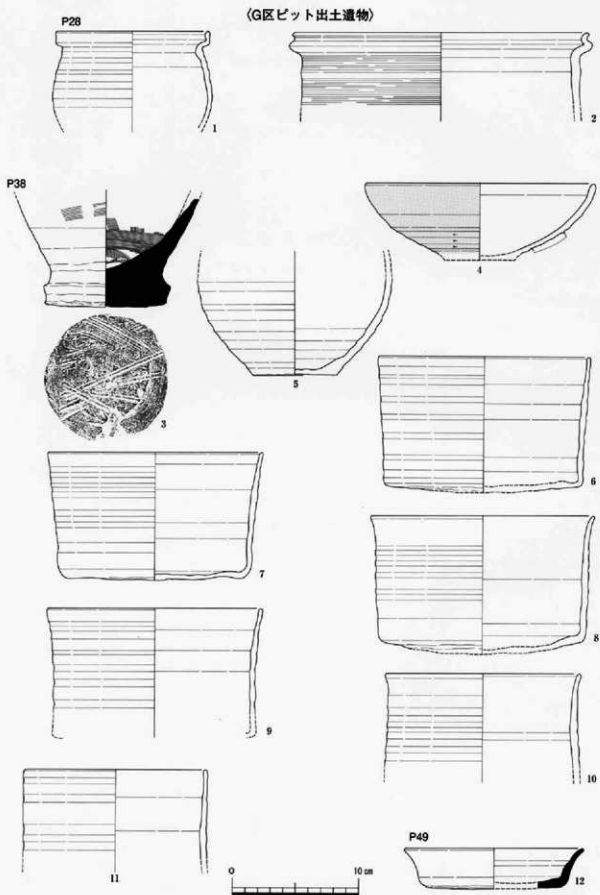
### 2. 土師器煮炊具を埋納するビット

今回の報告区域からは土師器煮炊具の大きな破片を意図的に埋納したようなビットがある。P713としたもので、全て古代VI 2期に位置付けられる。同時期の土師器煮炊具の大型破片を埋納するようなビットは多く、全て意図的な埋納とは考え難いが、特徴的である。なお、これらの煮炊具についてだが、いずれも外面の煤や内面のコグなど、煮炊き使用された痕跡を持つものである。

### 3. 墨書土器を埋納するビット

今回の報告区域からは特徴的な文字を記した墨書土器を出土するビットがある。P162とP163は「八木」か「八木」の二字またはこれで一文字とするものを筆跡太く記されており(写真15-21・22)、P362は筆が細いが類似した墨書(写真15-20)である。他に例を見ない文字であるため、どのように読むべきか判断できないが、総括で考察を加えたので、参照願いたい。いずれの墨書土器も古代V 2期頃に位置付けられる須恵器環Aで、外底面にやや大きめに記されている。いずれも南加賀窯で、14と21は内底面に磨耗痕が認められる。

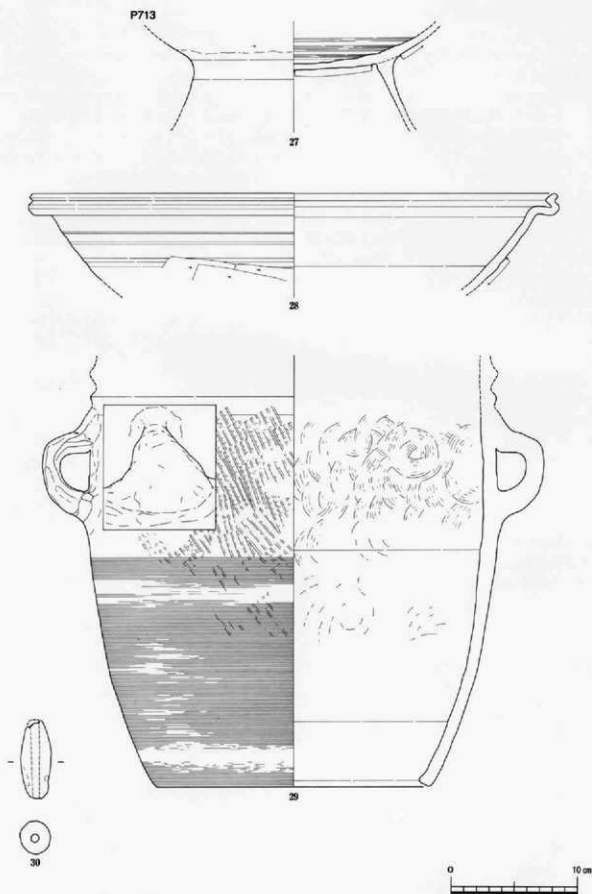




第88図 古代ピット出土遺物1 (全てS=1/3)



第89図 古代ビット出土遺物2 (全てS=1/3)



第90図 古代ピット出土遺物3 (全てS=1/3)

### 第7項 古代土器溜まり遺構出土土物

今回報告を行う区域では、ゆーれー30～38Grの区域に古代の土器溜まり遺構が分布している。発掘調査時は個別グリッドごとに取り上げたが、この中で集中区や時期的なまとまりによる区分などができなかったため、一つの古代土器溜まり遺構として図掲載した。須恵器食膳具3,992点、須恵器貯蔵具3,579点、土師器食膳具324点、土師器煮炊具11,804点が出土しており、それぞれの占有率は20.3%、18.2%、1.6%、59.9%となる。土師器煮炊具の率が高いが、細片での出土が多く、重量比では須恵器貯蔵具が最も高い。包含層やピットを含めた資料データと比較しても、貯蔵具率は高く、それが当土器溜まり遺構の特徴と言えるだろう。A地区の谷部に土器廃棄が行われたと同様の性格のもと理解され、広範囲且つ長期にわたる土器捨て場であったと理解する。以下にその出土土物を解説するが、種別ごとに概要を述べ、特に解説を要する遺物については個別に詳述したい。

#### 1. 須恵器及び須恵器製品、その他陶器類

須恵器食膳具は、図に掲載したものも含め、8世紀後半から9世紀前半に位置付けられるものが過半数を占め、8世紀前半と9世紀後半に位置付けられるものは半減、7世紀代のものはさらに少ない。この状況は周辺遺構の燔土時期に対応しており、特に8世紀後半から9世紀前半は、当地区に所在する仏堂の建物や大型井戸SE03との関係が深いだろう。当土器溜まり遺構から、油煙痕の付着する環Aや環Bが35点、甕や墨溜めに転用された環B蓋や甕胴部片が6点出土するものも、その関係で廃棄されたものと理解する。時期は図示した15・36・44のようにIV期に位置付けられるものが多いが、V期に位置付けられるものも定量あり、井戸の南西側で比較的多まる傾向を示す。ただ、当土器溜まり遺構は、先述のように一般的な廃棄品が主体であり、様々な廃棄行為の集積といった感がある。

食膳具で特に注目されるものとしては、2の内面天井に「大」とヘラ書きされた環B蓋と10の巨大つまみをもつ蓋、31の外底面に「古」と墨書された環B身が上げられる。

「大」のヘラ書き環B蓋は古代Ⅱ2期頃に位置付けられるもので（写真15-19）、SK375で出土する環B身の「大」ヘラ書きとはほぼ同時期であり、関連性が注目される。筆跡は異なるが、どちらも南加賀窯産である。

10の大型つまみは、つまみ径5cmを測る巨大なもので、V期頃に顕在化する金属器系の環状突帯付鍋蓋と予想される。ただ、これまでの南加賀窯や能美窯で確認されるこのような蓋のつまみは4cmを越えるものは確認できず（南加賀窯群の二ツ梨一貫山3号窯や能美窯群の和気白石窯など）、当遺構出土のものが、鍋蓋のつまみであることは確定的ではない。ただ、他の器種は思いあたらず、仏教的器種として特別に大型の蓋を作成したものと理解される。

「古」の墨書土器は古代VI1期に位置付けられる環B身で、外底面に大きく1字で記される。一字墨書は吉祥句を記す場合が多く、特にこの時期は増加する傾向にあるが、「古」墨書は吉祥句とは考え難く、一般的ではない。石川県内では白山市の横江庄遺跡で「古」墨書が環B身の外面体部に記された事例が確認されただけで、他に類例も知らない。「古万呂」などの人名の略したものの可能性もあろうが、定かではない。

次に、須恵器貯蔵具であるが、食膳具同様、時期幅広く確認され、特に顕在化する時期というのではない。器種では鉢の出土が目立つ傾向にあり、63・64の大型の鉢Bは残りがよい。特に63は略完形のもので、外面底部にススの付着が認められる。鉢Bは鉢Eの衰退するVI期以降、南加賀窯では量産される器種であり、その形態や法量の類似性から鉢Eに代わる器種として使用された可能性を持つ。67の鉢Eと同様に、仏堂の建物との関係で考えられる可能性がある。また、70の双耳瓶の口頭部打ち欠きの半完形品が廃棄されていることも仏教的行為との関係があるかもしれない。甕の出土も多く、当遺構における貯蔵具率の高さは、甕の胴部破片によるものである。

貯蔵具で注目されるものとしては、先に上げた67の鉢Eと72の「佛」とヘラ書き刻書された蓋、そして79の小型甕が上げられる。

鉢Eは薄手に作られた南加賀窯産の優品で、砂粒の少ない良質の胎土を使用する。内外面に黄土（赤彩状）を塗布した後ミガキ調整しているため、黒光りする仕上がりとなっており、金属器を意識した作りとなっている。

72は南加賀窯産の短頸甕の蓋と思われるもので、内面天井中央に「佛」と大きく焼成前の刻書がなされたものである（写真15-17）。「佛」の刻書須恵器は、全国的にも類例は乏しいと思われるが、仏教関連遺跡から「佛」の墨書土器が出土することは少なくない。小松市の山林寺院遺跡、浄水寺跡では3点の「佛」の1字墨書土器が

出土しており、仏教的行為の中で墨書されたものと理解される。これに對する形で、浄水寺跡では「神」の墨書土器が出土しており、神仏に捧げる用具として使用されていたものと見なされる。では、焼成前の「佛」刻書は何を意味するものかだが、同様に「仏」へ捧げる容器として、本遺跡の仏堂で使用される容器として生産され、供給されたものと位置付けられる。南加賀窯の生産に深く関連する額見町遺跡であればこそ、という部分はあるが、問題はその器種が短頸壺であることにある。短頸壺が仏教的行為の中での、仏に捧ぐ用具として使用された可能性はないとは言えないが、墨書土器では一般的でない。仏僧の蔵骨器に記した可能性なども考えておくことが必要だろう。

79の小型壺は仏教関係の遺物ではないが、Ⅶ期に位置付けられる半完形品で、内面に放射状当て具が残るものである。当遺跡に供給がなされる南加賀窯や能美窯にはこのような形態の放射状当て具は使用されておらず、外面叩きの特徴や全体的な器形なども含めて、他地域産の可能性が高い。

須恵質製品は、専用焼台が9点、円面視の破片が1点のみ出土する。専用焼台は、南加賀窯で使用されるもので、形態的にⅦ期からⅧ期に位置付けられるものである。製品に着きたまま持ち込まれ、当集落内で割がされた残滓と言えものだろう。

## 2. 土師器及び土師質製品

土師器食器類では、古代Ⅳ・Ⅴ期に位置付けられる赤彩土師器を主体とし、Ⅵ期に位置づけられる外面赤彩内黒焼成の碗皿類も定量存在する。非口ロ成形の碗皿類は極めて少なく、それは当期の須恵器食器類の少なさに対応している。

ここで図示したものは、赤彩土師器の中でも残りのよいものだが、特に、95の鉢Eは内外面をミガキ調整する優品の赤彩土師器である。口縁部端を若干つまみ上げる形態で、口径は23cmを測る。赤彩土師器の鉢Eは例が少ないが、大きさや作りなどから見て、仏器として当地区の仏教活動に使用されたものだろう。

土師器煮炊具では、古代Ⅳ・Ⅴ期に中心を置く傾向は認め難く、時期幅広く出土している。ビット埋納の土師器煮炊具がⅥ期に顕在化するのと同様に、Ⅶ期に位置付けられる半完形品が数個体出土しており、埋納された可能性があろう。なお、Ⅱ期頃に位置付けられる長胴蓋を数点図示したが、特に、99の長胴蓋は、地元B類粘土を持つもので、口縁部に叩き成形痕跡を残し、朝鮮系土師器と位置付けられるものである。

土師質製品では、甕形製品12点、支脚形製品16点、円筒形製品10点、管状鉢29点、匣鉢状製品43点が出土する。匣鉢状製品は図示していないが、ビットに一括廃棄されたP38の事例と同様に、土師器焼成窯道具として当遺跡で使用され、廃棄されたものと見られる。

甕形、支脚形、円筒形は、移動式の煮炊き用具セットであるが、それぞれ関連性をもって出土しているかは、わからない。108・109は、胎土や焼色などから同一個体になると予想される甕形土師製品で、「額見町遺跡Ⅲ」で報告したSD25-63とも同一個体となる可能性が高い。108は焚口部から掛け口にあたる部分の破片で、平坦な天井を有して掛け口を円形に切り取る、朝鮮系の甕形土製品と言えものである。焚口には短い庇が巡るが、その庇の下位に2本の線刻が巡る装飾が施されており、特徴的である。通常の甕形製品よりも小型のものであり、祭祀的な用具として使われていた可能性を持つ。109はその底部の破片で、直線的な形態から、甕の下位の部分にあたるものと理解する。いずれも胎土は地元B2類で、108の内側にはススの付着したような痕跡がある（写真14-10・11）。

110も甕形土師製品の底部の破片と思われるもので、内外面ハケ目調整を施す（写真14-9）。甕形土師製品の底部としてはかなり大型のものだが、類似する形態の底部が二ツ梨横川1号窯跡（小松市教育委員会1989「二ツ梨横川1号窯跡」26頁）で出土しており、古代Ⅳ1期に位置付けられるものと理解する。

112・113は口ロ成形の円筒形土師製品で、玉縁状となる形態である。内側にススの付着した痕跡があり、煙突として使用された可能性が高い。いずれも南加賀窯産と推察される古代Ⅳ期のものである。

114～117は支脚形土師製品で、冒頭で示したように比較の出土量がある。小型円筒形で両端を若干広げるⅠA2a類（115・116）と大型円筒形のⅡA2類（114）、中実のⅠB1類（117）がある。いずれも指ナエ痕跡を残す手捏ね品で、117は被熱赤化する。

当土器溜まり遺構で最も注目されるのは、29点出土した管状鉢である。完形のもので大半で、119～141に図示したが、このうち10個は、ら32～33Grでまとまって出土している。意識的にまとめて廃棄された感じがあり、

図に示すとおり、形態についても、長さ4.5～5.0cm、径2.5～2.8cm、重量30～38gと統一性がある。胎土も全て同質の窯場胎土、焼成も表面が黒光りするような還元で焼き上げられる特徴を有し、そのうちの幾つかは表面を指ナデだけではなく、面整形して多面体を作り出している。同質の形態、焼成のものが、り30・31・34Grでも出土しており(122・125・135)、周りに散乱する様子も伺える。漁労網錘の埋納魔業が祭祀と呼べるものかは判断できないが、黒く還元しているのは2次被熱の結果の可能性もあり、興味深い。なお、他の管状錘に関しては、長さ6.2cm、径3.35cm、重量68gの大型のものから、長さ3.3cm、径1.0cm、重量3g程度の小型のものまで様々で、11世紀以降に下る資料も含まれている可能性がある。

### 3. 石製品及び金属製品

石製品は117点出土するが、石帯1点と砥石26点、台石と呼んだ大型の砥石状製品5点以外は、カマドのソデ部材石と思われる凝灰岩質か軽石凝灰岩質の切片であり、それらは図示していない。カマドに使われた凝灰岩は被熱して煤が付着しているものが定量あり、造り付けカマドの他に、簡易カマドを作るための部材として使用されたものと思われる。

図示したものは石帯と砥石で、石帯(142)は腰帯の末端に付される鈍尾の形態のものである。石材は頁岩であり、横の長さは欠損するために不明だが、縦は4.4cmと大型である。表面と側面のみが研磨されており、裏面には使用の際に付いたような細かな剥離が多く確認されるとともに、先端の中央に腰帯に固定するための目釘を打ち込んだ留め穴が2個確認される。石製の鈍尾は、石川県内では金沢市戸水大西遺跡や小松市漆町遺跡で出土しているだけであり、貴重な資料と言える。

砥石は、残りのよいもののみを図示したが、砂岩質のものや凝灰岩質のものがあり、後者が主流である。砂岩質のものは145・147の四角柱のものと148の短冊形のものがあり、大型の台石状のものも砂岩質である場合が多い。これに対し、凝灰岩質のものは、小型であることが多く、全て四角柱の形態をもつが、長期の使用によって極度に磨り減って扁平形となった状態で出土しているものが多い。143の小型品はその断片までを使用する様子が見られる。なお、144の大型のものは、砥面が4面確認されるが、磨り減り度合いは少なく、未使用に近い状態の完形品である。石材を切った際の傷も多く残っており、原型をとどめている。未使用に近いものを廃棄する意図が何らかの祭祀行為に基づくものであるかは不明だが、古墳への供献遺物として出土する事例が多々見られることを考えれば、埋納の可能性もあるだろう。

鉄製品は、刀子、鎌、棒状製品で、図示していない鉄製品が120点ほどある。錆化が著しく原型を留めていないものや用途不明のもの、棒状製品で、未成品のものも多く含まれているものと予想される。

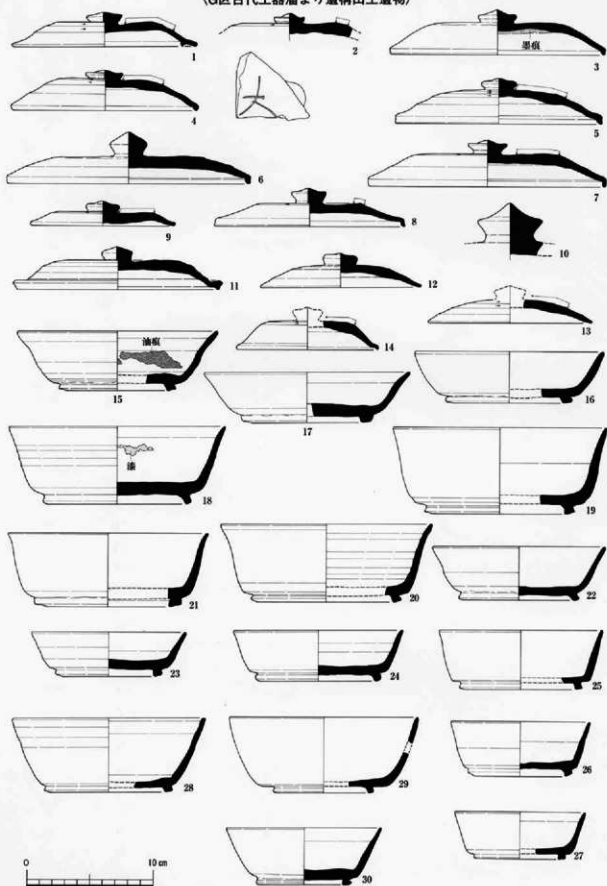
149～151は刀子で、153の刃幅2cmを測るものも刀子の可能性を持つ鉄製品である。149は刃幅1.5cm程度のやや小振りのもので、凹形態は斜角の片間を呈す。背は平造り、茎が細長く伸びる。150は、刃幅2.1cm、茎幅1.0cm程度を測る、凹形態が直角両側のものである。刃は直刃で、背は平造りである。151は刃部の破片で、刃幅は1.7cm程度、背は平造りを呈する。

152は直刃鎌である。鎌の先端が欠損するため長さは不明だが、刃幅は2.5cmを測る。刃は直接的で、基部が下方に若干膨らみ、端部を折り曲げている。着柄角度は75度を測る。

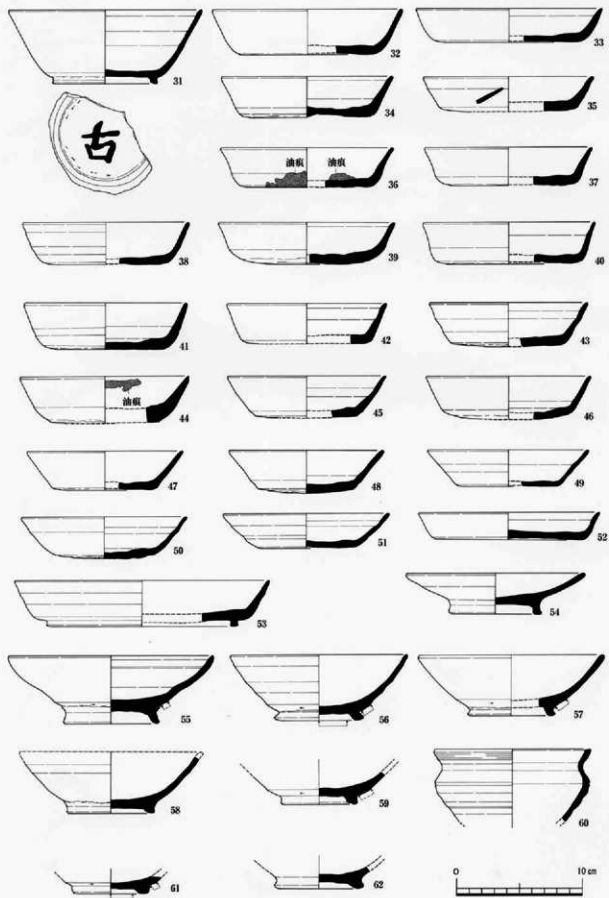
154～158は断面正方形の棒状製品で、154は上・下端を欠損するために不確定だが、上端部が幅広となって薄くなることから、長頭鎌の刃部と茎部を欠損する腕被部にあたるものと予想する。158も径の細さや真っ直ぐに伸びる形状は長頭鎌の腕被部にあたる可能性が高く、155も上端が幅広となって薄くなる形状が長頭鎌の未成品の可能性が高い。ただ、155に関しては、長頭鎌にしては、上端から下端まで徐々に細くなる形状をしており、釘の可能性が高い。釘と思われるものは157で、先端へ向かい徐々に先細となる形状と上端がL字状に曲がっている形状はその特徴を有している。156も断面方形を呈す棒状のものであるが、その上に金具状の楕円形のものが付いており、何かの金具の一部である可能性を持つ。

この他に、3点の銭貨が出土している。全て、よ37Grで出土しており、出土状況を把握していないが、1箇所に埋納されていた可能性もある。当地区の掘削調査は、平鎌で行っているため、本銭貨の検出は偶発的であり、そのうちのいくつかは当遺構の掘削の際に塵土とともに捨てられた可能性はある。当地に複数枚の銭貨が埋められていた可能性はあり、出土地点は仏堂の建物や大型井戸から離れているが、関連する遺物と理解する。なお、銭貨は、全て「神功開寶」であり、腐食が著しい(写真18-46)。

(G区古代土器溜まり遺構出土遺物)

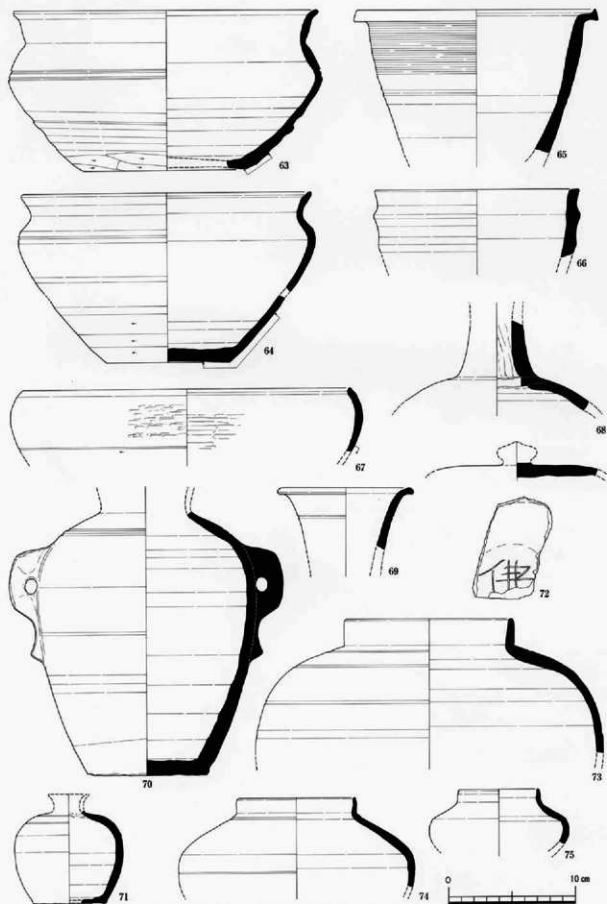


第91図 古代土器溜まり出土遺物1 (全てS=1/3)

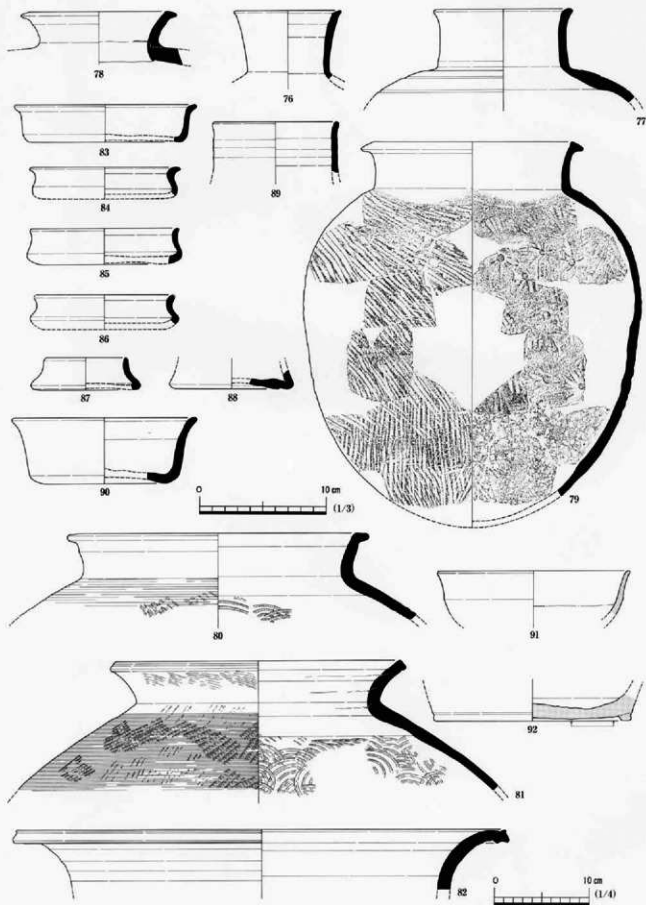


第92図 古代土器溜まり出土遺物2 (全てS=1/3)

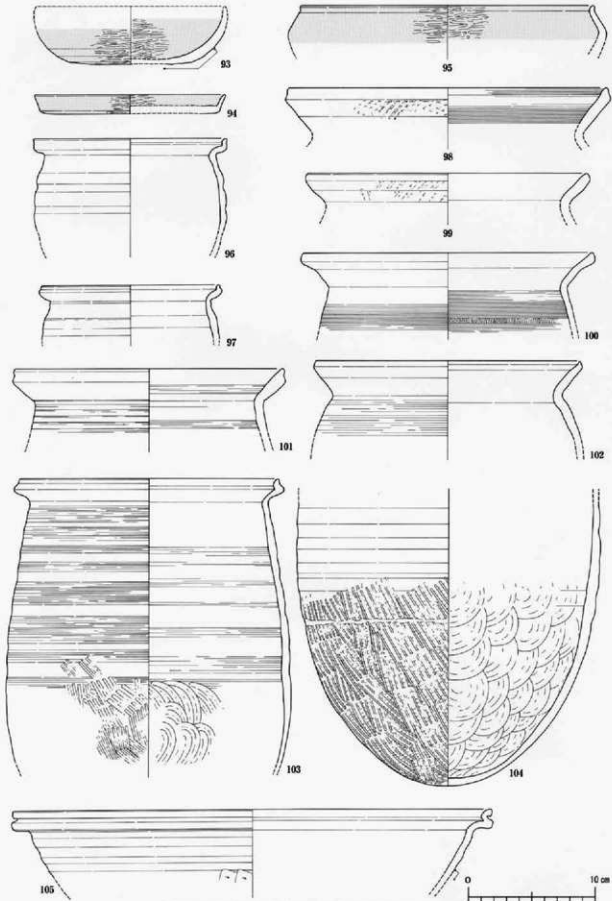




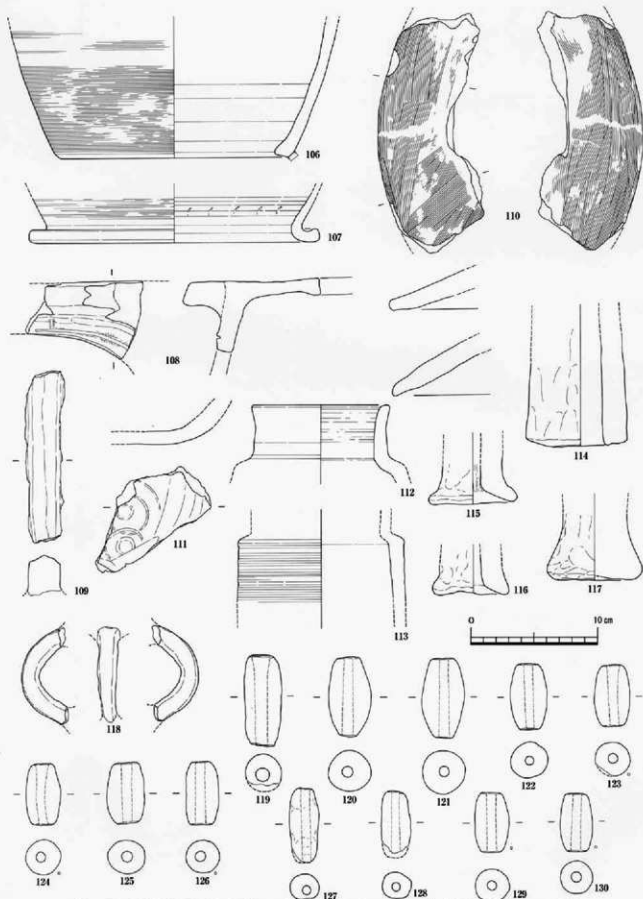
第93図 古代土器溜まり出土遺物3 (全てS=1/3)



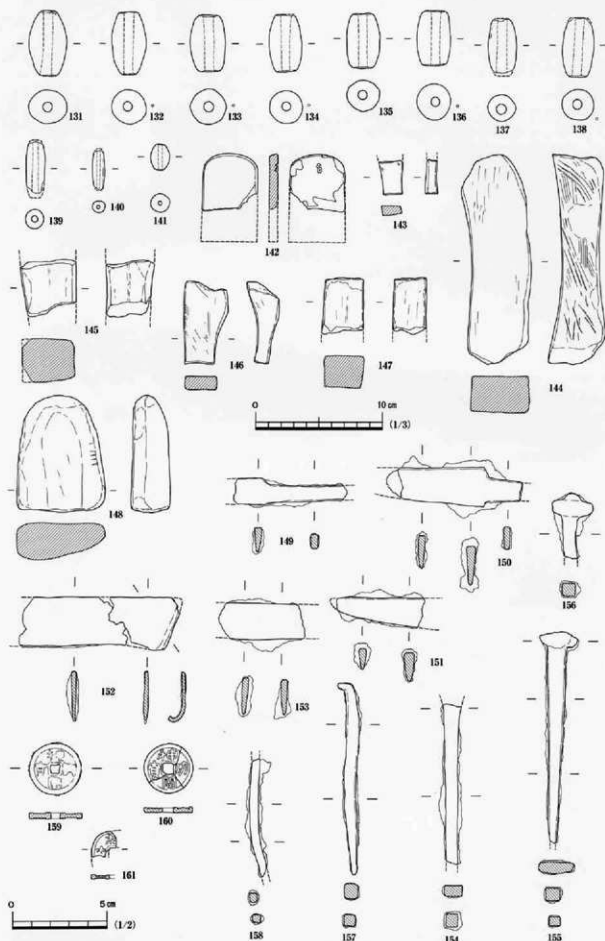
第94図 古代土器溜まり出土遺物4 (82のみS=1/4、他は全てS=1/3)



第95図 古代土器溜まり出土遺物5 (全てS=1/3)



第96図 古代土器溜まり出土遺物6 (・マークは、5 32・33Gr 集中廃棄、全てS=1/3)



第97図 古代土器溜まり出土遺物7(○マークは、5 32-33Gr集中廃棄、149~161はS=1/2、他は全てS=1/3)

### 第3節 中世の遺構出土遺物解説

ここで述べる遺物は、中世遺構出土遺物としているが、田嶋編年の古代Ⅶ期から中世Ⅰ期までのもので、望月の暦年代観では10世紀後半から12世紀末までにあたり、厳密には古代末期前後にあたるものである。

今回の調査区域においては、掘立柱建物、土坑、井戸、土器溜まりなど、当期に位置付けられる遺構が多く、掘立柱建物から134点、土坑から2,093点、井戸から393点、溝や道路状遺構から89点、土器溜まり遺構やピット、包含層から4,313点、そして古代の堅穴建物や土坑等からも164点が出土した。以下に個別遺構出土の遺物解説を行うが、分類名称や編年区分は、筆者が「顔見町遺跡Ⅱ」の中で示した総論論稿「南加賀地域の平安後期土器群に関する編年の考察」に基づくので、参照いただきたい。

#### 第1項 中世土坑出土遺物

今回報告の区域では、定量の土師器食膳具を出土する埋納土坑が確認されている。比較的遺構数は多く、土師器食膳具を大量廃棄するSK472をはじめとして、SK254、SK355、SK392でもまとまった土師器の廃棄がある。また、墓塚の可能性をもつ土坑が複数存在しており、その遺構においても遺存度高い土師器食膳具が数点出土している。

##### 1. SK254 出土遺物

小型で浅い土坑であるため、土師器食膳具の出土は29点と少ないが、図示したとおり、完形の平底小皿をはじめとして半完形の椀皿類が定量出土している。内訳は通常土師器が26点、内黒土師器が3点で、通常土師器は平底椀3割強、輪高台椀1割強、平底小皿5割強、内黒椀は破片のため確証はないが、輪高台椀と予想される。柱状高台器種は確認されておらず、顕在化する前の段階の器種組成様相を示している。

図示した土師器平底椀は全てA類胎土で占められる。いずれも口径15cm台のもので、体部が圓く器形のものである。体部の器内も薄く、2の口縁部端内側が若干肥厚する。「顔見町遺跡Ⅱ」で報告したB地区上層土器溜まり分類でのa類に共通するもので、1・3の内面には平滑にするようなミガキ状のナデが施される。

平底小皿は、地元胎土のA・B類と南加賀近傍のD類、北加賀産と思われるC類の各種胎土で構成されるが、基本的に古代Ⅶ期以来の伝統的な椀形態の系統にある①類型に統一される様相を持つ。その中で7～9はB地区上層土器溜まりの分類でa1類としたものである。A類胎土のもので、11のB類胎土のものは、a1類の祖形となるような器形のものである。12のD類胎土はc2類、13・14のC類胎土のものはe類に該当できる。

内黒椀はC類胎土で、体部が深く立ち上がる器形を呈する。内面にミガキ調整が施されるもので、類型ではc2類に該当する。

以上の土師器群については、柱状高台器種が確認されないことと通常土師器の輪高台が定量確認できた点から、南加賀8A期的な様相を持つが、平底椀が体部外傾する器形で占められる点や平底小皿の多様な形態は8B期に位置付けられるものと理解できる。8B期の中でもやや古手の一群と位置付けられようか。

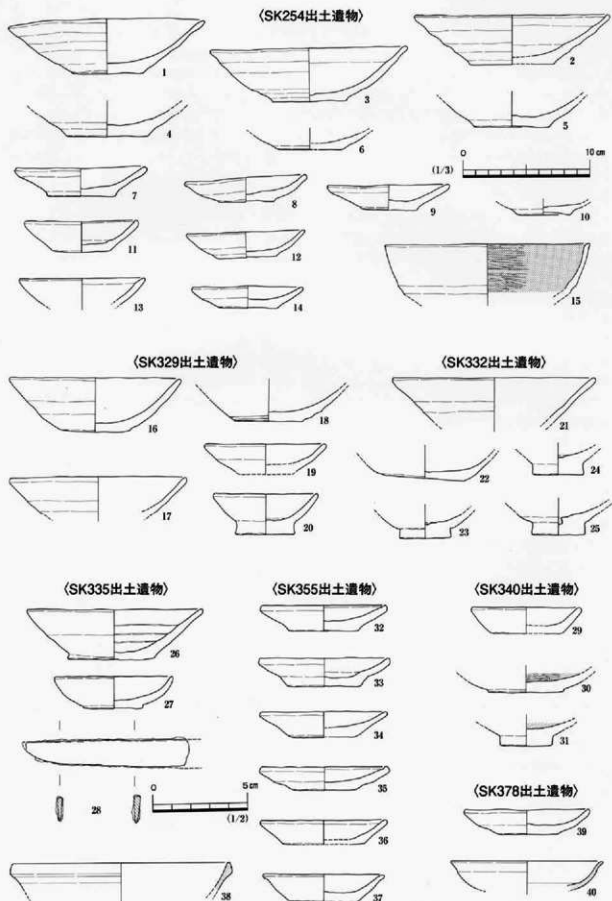
##### 2. SK329 出土遺物

調査区の西端隅に複数の墓塚が群在中世墓塚群の一つであり、当土坑からは21点の土師器食膳具が出土している。平底椀をはじめとして数点の遺存度高い土師器食膳具があり、全て通常土師器で構成される。器種は平底椀3個体、平底小皿3個体、柱状高台小皿2個体で、そのうちの残りのよい5点のみを図示した。土師器胎土は20の柱状高台小皿がB類胎土である以外は、D類胎土で占められており、特に赤く発色するものが多い。

平底椀はいずれも口径14cm未満のもので、やや体部椀形を呈するものである。柱状高台小皿は底径が大きく、体部椀形を呈する器形。平底小皿は口径9.4cmを測る椀形を呈するものである。これらの器形や法量などの特徴から判断し、南加賀地域編年に対比すれば、8A期に位置付けられるものと見ることができ、墓塚資料であるため、偏った土器組成をしており、8B期に下る可能性もある。

##### 3. SK332 出土遺物

調査区の西端隅に群在中世墓塚群の一角に所在する土坑である。85点の土師器食膳具が出土しているが、図示できるような遺存度高いものは少なく、破片のみ5点図示した。柱状高台小皿3点と平底椀2点で、21の平底椀の口径と体部比較器形や柱状高台が主体的に存在する点から、南加賀編年の8B期に位置付けたい。なお、出土土師器は内黒椀が1点のみ確認される以外は、全て通常土師器で、平底小皿が一定量出土している。



第98図 中世遺構出土遺物1 (SK254, SK329, SK332, SK335, SK340, SK355, SK378, 28のみ $S=1/2$ , 他は全て $S=1/3$ )

#### 4. SK335 出土遺物

当土坑は、調査区の西端隅に群在中世墓塚群と位置付けられるものの一つであり、17点の土師器食膳具と2点の鉄製品が出土している。土師器食膳具は、全て通常土師器で、2個体の平底碗と2個体の平底小皿が確認できる。平底碗はA類とD類胎土で、図示したD類胎土の26は大きな底径から体部外傾する厚手の碗である。A類胎土は厚手で内湾器形を呈す。平底小皿はA類とC類胎土で、C類胎土の27は底径大きく体部内湾器形のものである。資料点数が少なく、判断が難しいが、南加賀編年8C期に位置付けられよう。

鉄製品は、刀子と厚い板状製品2点が出土しており、出土状態から、当土坑に伴う副葬品の可能性を持つ。図示した28の刀子は刃幅1.5cmの直線的な刃部をもつもので、背は平造りである。大きさや形状など、古代のものとは代わりはなく、伝世的所有の可能性がある。

#### 5. SK340 出土遺物

当土坑は、調査区の西端隅に群在中世墓塚群の一角に所在する墓塚と思われるもので、土坑内から中世土師器食膳具が13点出土している。ただ、出土遺物の多くは古代土器であり、古代V期頃に位置付けられる須恵器食膳具等10点と土師器煮炊具42点が出土する。中世土師器食膳具は、内黒碗が3点ある以外は全て通常土師器で、平底碗と平底小皿、柱状高台小皿が出土する。29の平底小皿は、口径小さく、底径の大きな体部立ち気味の器形を呈すもので、皿③類型に近い形態を持つ。31の柱状高台小皿の体部器形も皿状器形を呈すなど、新しい様相を示しており、南加賀編年の8C期的な様相を持つ。ただ、当資料を8C期とした場合、内黒土師器が目立つことは様相に合致しない。資料が少なく判断が難しいが、8B期の中でも新相と位置付けるのが妥当だろう。

#### 6. SK355 出土遺物

比較的大型の土器廃棄土坑で、古代IV期～V期の遺物と中世の遺物とが混在して出土しており、複数時期の土坑が重複しているものと見られる。中世に位置付けられる土器は、土師器食膳具119点と白磁1点で、土師器のうち内黒碗が1点ある以外は通常土師器で占められる。通常土師器は平底碗と平底小皿で、図示したように、平底小皿の略完形から半完形のもの6個体まとまって出土した。全てA類胎土、その中でも砂粒の多いもので、全体的に厚手で雑な作りをする。焼成や色調も同質であり、同時焼成品の可能性もある。口径は9.5～10cm程度で、器形特徴は32・33・35・36がB地区上層土器溜まりのa2類、34・37はb1類に類似する。南加賀編年の8B期に位置付けられる特徴を有しており、共存する38の白磁碗の存在も、8B期の様相と位置付けられよう。なお、白磁碗は口縁部の小破片であるが、玉縁口縁の形態から、山本信夫氏の大宰府白磁分類のIV1b類に該当するもので、山本C期に位置付けられる（山本信夫「大宰府白磁分類と編年（基礎編）」『石川県立歴史文化財センター研究資料』1993年）。

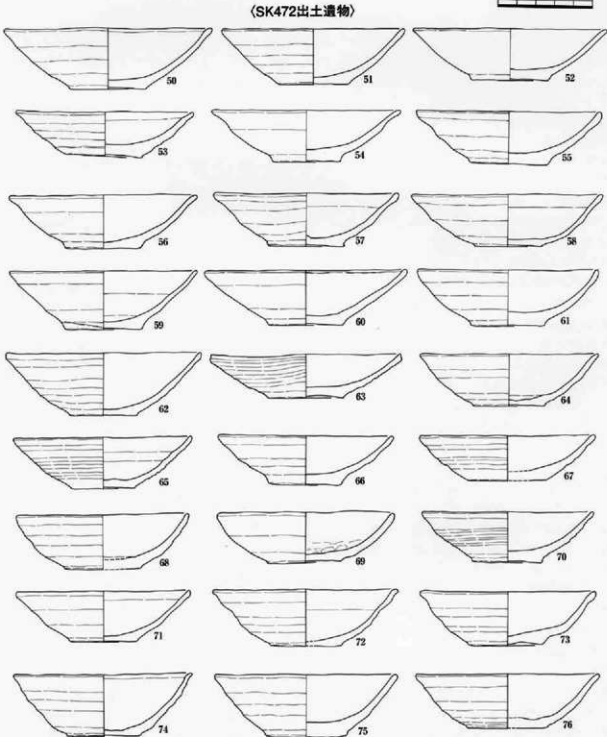
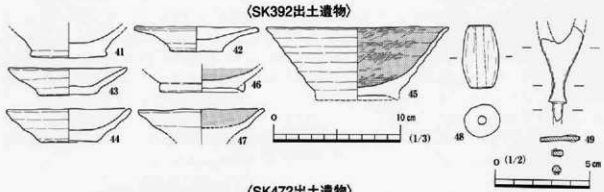
#### 7. SK378 出土遺物

小型の土坑で、中世土師器食膳具11点と白磁皿1点を出土する。土師器は通常土師器のみで、39の平底小皿の完形のみを図示した。A類胎土のもので、体部内湾気味に浅く立ち上がる器形を呈す。B地区上層土器溜まりa2類に近いが、体部は薄い。白磁小皿は口縁部から体部にかけての破片で、口縁部外反器形と見込みの圏線から、山本白磁分類Ⅴ5類に該当し、山本B期に位置付けられる。山本B期は10世紀後半から11世紀前半に位置付けられるものであり、南加賀編年の8A期に位置付けられる可能性を持つ。ただ、白磁1点の判断であり、共存する土師器平底小皿は、8B期に下っても問題のない器形である。

#### 8. SK392 出土遺物

小型で浅い土坑だが、中世土師器食膳具59点、土師質管状鉢1点、鉄製品1点が出土する。土師器食膳具は内黒土師器15点、通常土師器44点で構成され、定量の内黒碗が存在する。図示したものは、通常土師器の平底小皿と柱状高台碗、内黒土師器の柱状高台小皿と輪高台碗で、破片で通常土師器の平底碗も出土している。平底小皿は、底径大きく体部開く器形のA類胎土（43・44）と小型でやや浅い底部から体部が強く開くD類胎土（42）がある。42は口縁部端に沈線状窪みを伴うもので、B区上層土器溜まりの平底碗c類に類似する。内黒柱状小皿は体部がやや広く器形で、ミガキ調整は伴わない。内黒輪高台碗はA類胎土の46がミガキ調整を伴わないもので、D類胎土の45がミガキ調整を伴うものである。45の体部は極めて薄く、ロクロヒダが顕著なもので、内面ミガキ調整は細かだが、ロクロヒダの凹部分には及んでおらず、丁寧さに欠く。なお、外面にはスス痕跡が残る。





第99図 中世遺構出土遺物2 (SK392、SK472-1、49のみS=1/2、他は全てS=1/3)

当資料については、柱状高台碗の存在や内黒輪高台碗の形態などから、南加賀編年8B期に位置付けられる。

その他の製品では49の鉄鎌がある。刃部が二股となる雁又式で、数少ない当期の鉄鎌資料である。寛は突開形態で、基部は断面円形を呈す。なお、48の土師質管状鉢は面整形を伴う黒く還元焙焼されたもので、G区古代土器溜まり遺構で報告した管状鉢の特徴に合致する。大きさと重量等も一致しており、当特徴を有す管状鉢の集中が、ら-32・33Grであることを考えれば、そこから紛れ込んだものと評価されよう。

## 9. SK472 出土遺物

発掘調査区の南西際で検出した大型の土器廃棄土坑であり、大量の中世土器が出土した。土坑出土遺物として取り上げたものは、土師器食膳具1,176点、土師器煮炊具3点、灰軸陶器碗1点、白磁碗皿3点であるが、上層土器溜まりとして取り上げたものうち、当土坑の上層にあたる部分はSK472に包括できるものであり、それを含めれば土師器食膳具は1,500点近くにはなる。

土師器食膳具は通常土師器967点(82%)、内黒土師器209点(18%)で構成される。通常土師器では、平底碗、柱状高台碗、輪高台碗、平底小皿、柱状高台小皿、輪高台小皿が確認され、それぞれ27%、3%、5%、60%、5%、1%で構成される。平底小皿と平底碗とで大半を占める組成だが、輪高台碗が柱状高台碗より高い数値を示す点や柱状高台小皿の率が低いこと、そして輪高台小皿の存在など特徴として上げられる。内黒土師器は輪高台碗、柱状高台碗、柱状高台小皿で構成される。輪高台碗が67%、柱状高台碗が20%、柱状高台小皿が13%で、柱状高台碗・小皿の通常土師器と内黒土師器の率は、通常が12点に対して、内黒が10点で構成される。柱状高台碗・小皿が出現する時期は、内黒焼成される率が高く、次第に通常土師器に統一される様相を示すが、当資料はその過渡期的様相を示すものと理解される。以下に、通常土師器食膳具、内黒土師器食膳具、土師器煮炊具、白磁の順で各器種の説明を行う。

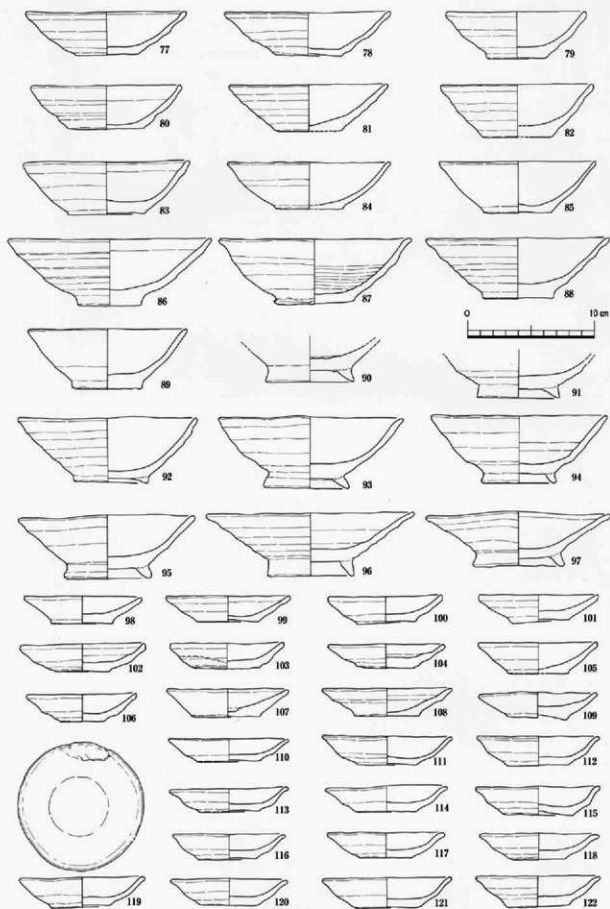
通常平底碗は、遺存状態のよいものが多く、完形、略完形、半完形のものを中心に36個体を図示した。口径は10.8cmから16.2cmまでであり、器形から外部外傾か口縁部外反する外部外傾型と器高高く碗形に立ち上がる深碗型に分けられる。

外部外傾型は口径14～16cm程度の大型と12.5～13.5cm前後の小型に分けられる。大型は、口径にばらつきが大きいもの、底径は6.0～5.0cm程度で、器高は4.0～4.5cmに中心がある。A・B類胎土が主で、その中でもB区上層溜まりで示したa類系統(50・54・56)が主だが、底径が大きめで体部薄く立ち上がる59や底径大きく体部厚く立ち上がり55・57など複数形態がある。D類胎土は少なく、その中でも体部薄く外面口クロヒダを顕著に持つc類系統(58・62・63)が目立つ。52もc類系統だが、体部大きく開く器形のものである。明確なb類系統は60だけで、D類胎土は後述の深碗型が主体となる。小型は底径5.0～5.5cm、器高3.3～4.0cmのもので、A・B類胎土とD類胎土とがある。A類胎土は体部薄く外傾して立ち上がる77・78で、大型の59と共通する形態を持つ。A類の中でも砂粒が多く、肌色に発色する特徴をもつA3類胎土のものであり、当資料の中では古く位置付けられる特徴をもち、ここではd類に分類しておく。D類胎土は66と71が52を小型化したc類系統の器形、84がb類系統を小型化した器形を呈す。

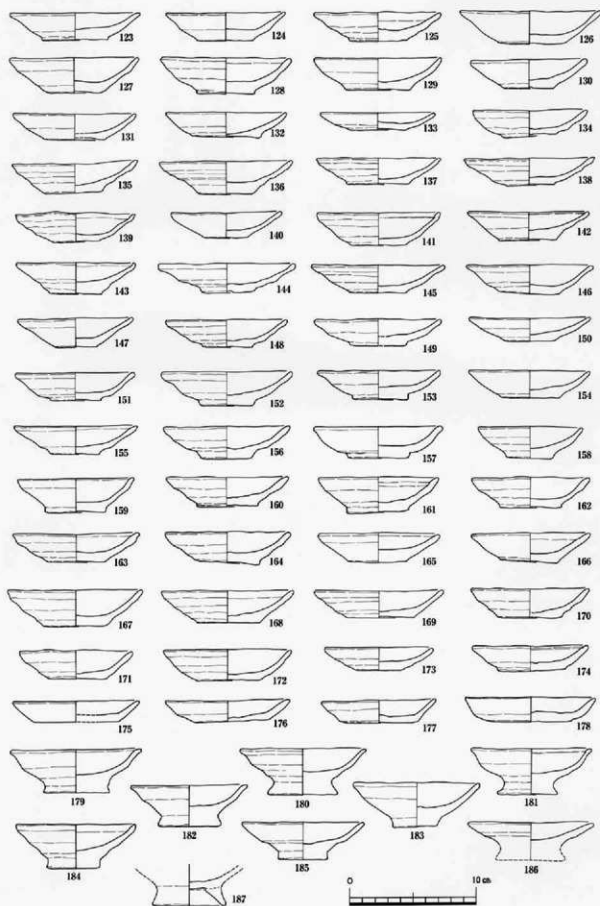
深碗型は口径13.5～14.5cmの大型と10.5～13.0cmの小型に分けられる。外部外傾型よりもひとまわり小型の口径をもち、厚手のものが多い。大型は口径14～14.5cmに中心を置くものが多く、底径は5.5～6.0cmに中心を置き、6.5cmまでの範囲で、器高は4.2～4.5cmに中心を置き、5.0cmまでの範囲で存在する。先述したようにD類胎土が主体で、大型の底部から体部内湾気味に立ち上がり、短く口縁部で外反する器形をなす(61・64・68・74・75)。全体的に厚手のものが多く、南加賀8A期に主体的に存在する形態であり、e類としておく。A類胎土は僅かであり、C類胎土も同器形で1点(76)のみ確認できる。小型は11cm以下の小碗形態の79を除けば、口径12cm台前後にまとまる。底径は5.4～6.0cm、器高は3.7～4.2cmで、小碗形態を除けば、全てD類胎土で占められる。器形は大きな底部から体部がまっすぐ開くもので、全体的に厚手の作りをする。これに関しても南加賀8A期に定量見られる法量のものであり、大型と共通する。

通常柱状高台碗は86のものが明確に底部突出する以外は、厚い底部をもつ外部外傾する平底碗のような形態をもつ。口径の大きなものが多いが、C類胎土の89は口径12.5cmの小型法量を呈す。

通常輪高台碗は、A・B類胎土のものも破片で図示したが、ほぼD類胎土で占められる。A類胎土は足高形態のもので、D類胎土も足高形態が主体だが、92のみは内黒土師器に通常に存在する低い貼付高台が付される。



第100図 中世遺構出土遺物3 (SK472-2、全てS=1/3)



第101図 中世遺構出土遺物4 (SK472-3、全てS=1/3)

体部器形も足高形態のものとなり、椀形で薄く作られている。足高形態は、やや椀形に立ち上がり、口縁部で外反する椀形の93～95と体部が直線的に開き皿形の96・97とに分けられる。足高高台椀は8A期の椀形器形から、8B期になって皿形に変化するため、2時期の土師器が混在するようにも見えるが、高台形態や体部の作り、調整は同質であり、同時に作られたものと評価できる。過渡期の様相を示すものだろう。

通常平底小皿は、口径8.2cmの小型のものや10.8～11.1cmの大型のものが僅かに存在するが、概ね8.5～10.5cmの範囲、9cm台に中心をもつ。胎土別では、A・B類が5割強、D類が4割弱、C類が1割弱で存在し、A・B類胎土は、大型底部から体部直線的に開き口縁部に面をもつa類系統(98～109)と体部下位で膨らみもち口縁部で外反するb1類系統(110～123)、体部が浅椀形に立ち上がるb2類系統(124～136)がある。全体的にa類系統は厚手、b1類系統は体部薄手、b2類系統は厚手で器高の高いものが多い。なお、137～139はA3類胎土のもので、平底椀同様の薄手体部をもつ点で共通し、f類に分類する。D類胎土は、径小さく突出する底部から体部開く器形のc1類系統(144～156)、底径大きめで口縁部内側が肥厚するc3類系統(159～166)、大ぶりで体部開く器形のd類系統(167～170)がある。概してc1類系統は体部薄手、c3類系統とd類系統は厚手で、D類胎土は赤い発色のものが半数以上を占める。C類胎土は椀形呈す大ぶりの172と小型で皿形を呈す173があるが、主体を占めるのは底径が5.5cm以上を測る扁平盤型器形のもので、g類としておく(174～178)。南加賀地域産には確認例がないが、北加賀では主体的に存在する形態のものである。なお、119は口縁部に粘土結成形時の粘土の重ね目を残すもので(写真20～53)、底部円柱に右回りで2巻き程度度付した様子が窺い知れる。

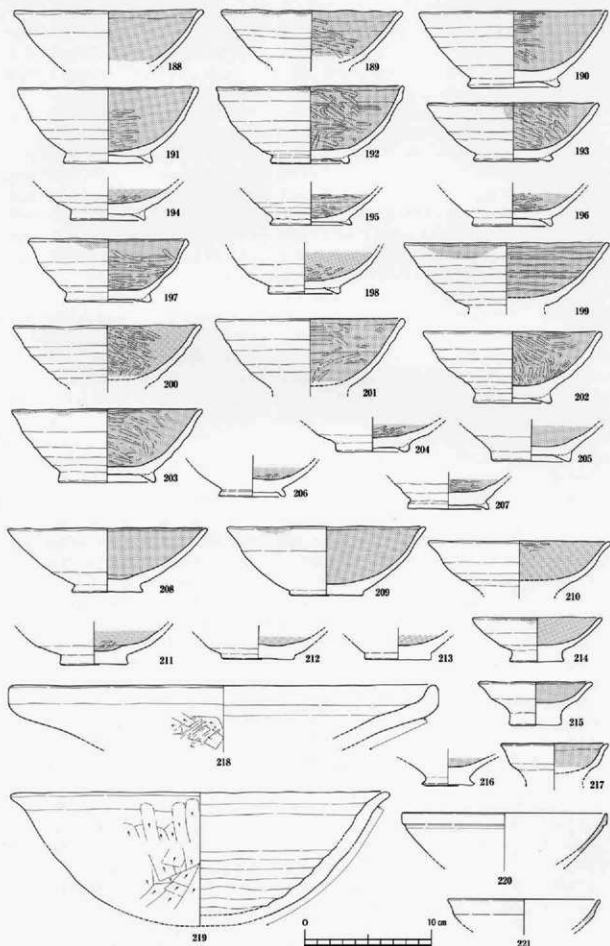
通常柱状高台小皿は口径9.2～10.4cmのもので、A・B類胎土を主として構成される。D類胎土は少なく、C類胎土は輪高台の187が確認されるだけである。輪高台は足高状呈すもので、体部は皿形に開く器形のもので、A・B類胎土は高台底部が開き気味となる179～182と円筒形の183・184とがある。前者は体部下位に膨らみを持って立ち上がり、口縁部の外反する平底小皿b1類系統の器形を呈すもので、後者は口縁部端に面をもつ平底小皿a類系統の器形をなすものである。どちらも浅椀器形で、8A期に主体的に存在する深椀器形のものはない。D類胎土は体部浅椀器形の185と体部皿形呈す186がある。後者は当期に出現する新器形で、次の段階に定着普及するものである。

内黒輪高台椀は口径12.5～13.5cmの小型のものや16cm台の大型のものも存在するが、概ね14cm台に中心をもつ。胎土はA・B類が主で、D類胎土とC類胎土は少ない。A類胎土は、内面に粗いミガキ調整を施すものがほとんどで、ロクロナデのみで仕上げるものは188のみである。口縁部が外反する浅椀器形のもので、189も同様の器形を呈す。193のやや小型のものも体部開く器形のもので、高台は極めて低く貼付され、底面ナデ消しされる。これに対し、190～192は深椀器形のもので、192は特に薄手で精緻に作られる。深椀器形の高台は浅椀器形に比べて高く踏ん張る傾向があり、やや古相を呈す。なお、197は口径12.4cmを測る小型のものであるが、高台径は通常のものと同様変わらない。小型法量として当器種の法量分化の名残とも捉えられる。D類胎土はA類胎土に比べて内面のミガキ調整が丁寧で、ミガキ調整の省略されるものは基本的に確認されない。回転ミガキ調整を施すものもあり(199)、これは体部開く器形で、B区上層土器溜まりのb類と合致する。他のD類胎土は器高が高く体部が真っ直ぐに開く器形のもので、底径は小さい傾向がある。高台は低いものが貼付されるが、底面の承り痕跡を残す傾向があり、その点がA類胎土と異なる。C類胎土のものもミガキ調整は丁寧で、高台が踏ん張る傾向がある。206の小型底径のものは、高台を挽き出したような形態をもつ。

内黒柱状高台椀、内黒柱状高台小皿ともに、全てA・B類胎土で占められる。通常土師器と同様の器形をしており、法量も似通っているが、210と211には一部粗いミガキ調整が施されており、内黒焼成による光沢を出すためのひと手間をかけている。

土師器煮炊具はいずれもD類胎土で、体部が強く開き口縁部端で上に屈曲する盤形の218と半球状の底部から口縁部で若干外反する鍋形の219がある。前者の盤形は台脚状を付して火舎状の器種となる可能性がある。

白磁は220の碗と221の皿が出土している。碗は玉縁口縁部の形態から山本信夫氏の大宰府白磁分類のIV 1a類に、皿は体部屈曲器形から山本分類のⅥ 1類に該当するものと思われる。いずれも山本C期に位置付けられる。以上、各器種の説明で述べたように、当土坑資料については、南加賀8A期と8B期の両方の要素が見られ、過渡的段階の資料と位置付けられる。詳細な編年の位置づけについては、節の末尾でまとめて述べるが、当期の最もまとまった基準資料と言えるものであり、北加賀地域との併行関係が追える資料である。



第102図 中世遺構出土遺物5 (SK472-4、全てS=1/3)

## 第2項 中世井戸出土遺物

中世に位置づけられる井戸はSE01のみであるが、古代大型井戸であるSE03の埋没後に、同じ場所に中世土器を廃棄する土坑が掘られており、土器廃棄土坑の性格のものだが、SE03の上層土坑としたため、ここであわせて述べることにする。

### 1. SE01 出土遺物

古代井戸と同様に深い掘削を伴う井戸で、遺物は井戸の上層付近と下層から下底にかけて出土している。図示したものは下層から下底にかけてのもので、時期的にまとまりをもって存在する。古代の遺物も混在するが、量的には少ない。中世土器は食器が152点とまとまって出土しており、その他に煮炊具2点、白磁碗皿類8点、漆器碗1点も出土する。土師器食器は内黒土師器が9点ある以外は、通常土師器で占められ、内黒土師器は230～232の柱状高台碗と229の輪高台碗がある。柱状高台碗、輪高台碗ともにD類胎土のもので、輪高台碗の内面にはミガキ調整が施される。底部の厚いもので、高台は低い。通常土師器は平底碗と柱状高台碗、平底小皿、柱状高台小皿で、柱状高台器種が目立つのが特徴と言える。222の平底碗はC類胎土のもので、厚手で底径小さく深身呈す器形特徴は、三浦・幸明遺跡Ⅲ区SK10出土の平底碗類に似る〔松任市三浦・幸明遺跡〕松任市教育委員会1996年。225の平底小皿も同じC類胎土のもので、三浦・幸明遺跡Ⅲ区SK10出土品に類似した形のものも存在する。北加賀から搬入されたものだろう。224の柱状高台碗はA類胎土で、底部に空洞を残すものである。この空洞は、底部門柱造りの際の底部粘土柱を作る際の練り込み不足による粘土の隙間であり、当器種には稀に見られる現象である。226～228の柱状高台小皿はいずれもA類胎土のもので、体部は浅碗形を呈し、同類型のものがB地区上層土器溜まりにて出土している。以上の土師器食器から、南加賀8B期に位置付けられるものと見ることができ、北加賀との併行関係においては、三浦・幸明遺跡Ⅲ区SK10資料を標識とする出越茂和氏の編年案のⅣ1期に対応しよう（出越茂和「北陸古代後半における碗・皿・食器（後）」『北陸古代土器研究』第7号、北陸古代土器研究会。ただ、出越氏が当期を田嶋中世Ⅰ～Ⅱ期に併行させた点に筆者編年との相違があり、北加賀産の平底小皿については、南加賀よりも小皿③類型がⅠ型式早く出現するとの評価で対応できるものとする。

土師器煮炊具は土師器鍋の上半部と底部破片が出土しており、上半部破片のみ図示した。非クロコ成形のもので、内外面を指ナテして仕上げている。外面全体に厚くスス痕が、内面に薄くコゲ痕が付着するもので、胎土の特徴から他地域から搬入されたものと予想される。

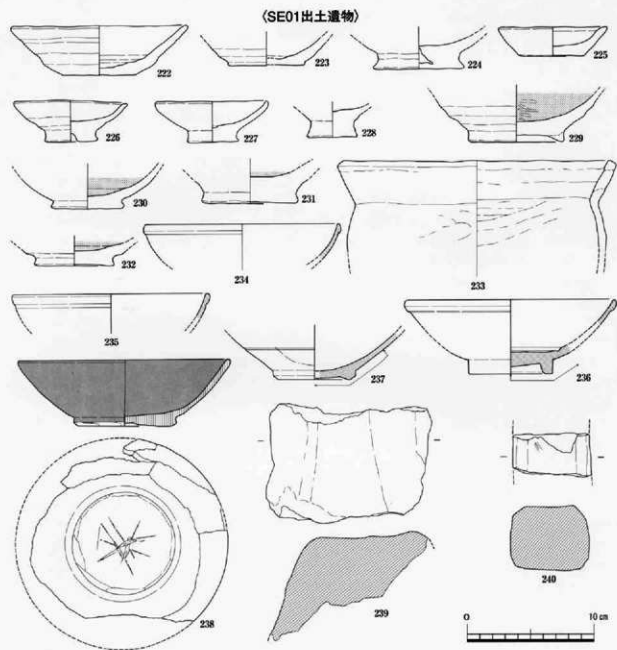
当遺構からの舶載磁器の出土は多く、白磁碗を4点図示した。235と236の碗は小さな玉縁口縁部が付くタイプで、235には細かな貫入が入る。236の高台は高い削り出しのもので、内底部見込部分に深い段をもつ。いずれも山本信夫氏の大宰府白磁分類のⅪ1類に該当し、山本B期に位置付けられる。234の碗も小さな玉縁が付く口縁部で、細かな貫入が入る陶器質の胎土を持つものである。山本白磁分類Ⅱ1類に該当し、山本C期に位置付けられる。237の碗は低い削り出し高台を持ち、外面体部下位に沈線をもつもので、山本白磁分類Ⅳ1b類に該当し、山本C期に位置付けられる。以上、山本B期からC期にかけてのものであるが、伝世的な使用を考えれば、山本C期に併行する時期に考えて問題はないだろう。

以上の土器以外に、238の木製漆器碗が1点出土している。口径16.8cm、器高5.3cm、底径8.1cmを測るロクロ挽きした完形品で、体部の開く器形やベタ高台状を呈す器形は田尻シンペイダシ遺跡のものに類似しよう。ただ、当資料の方がより碗形を呈しており、高台径は小さく作られている。内外面の調整等の作りが丁寧なものに対し、外底面のみは底面中央に放射線状の工具痕が残るなどの手抜きが見られ、その部分では漆の塗布の処理もなされていない。外底面の縁には雑な手持ちケズリ調整がなされており、底部の一部欠けなどに伴う再加工の結果、木地が露出した可能性もある（写真20～59）。

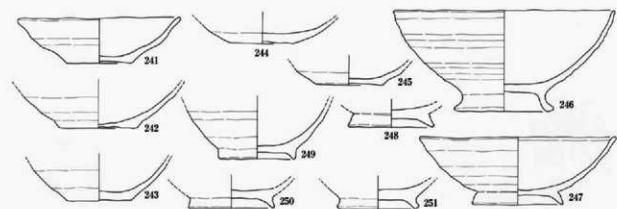
### 2. SE03 上層土坑出土遺物

SE03上層土坑出土遺物は、田嶋編年古代Ⅶ1期、南加賀7A期に位置づけられる古群資料（241～243・245～251）と中世Ⅰ～Ⅱ1期、南加賀8B期に位置付けられる新群資料（244・252～274）とがある。

古群資料は全て通常土師器で、平底碗と輪高台碗が確認できる。胎土はA類がほとんどで、中でもA3類主体に構成される。平底碗は全形のわかる資料が241のみと少ない。底径は242が6cm台とやや大きい。他は5cm台前半で、241と同様の器形、法量を有すると見られる。241の法量は口径12.6cm、器高3.6cm、底径5.1cmで、

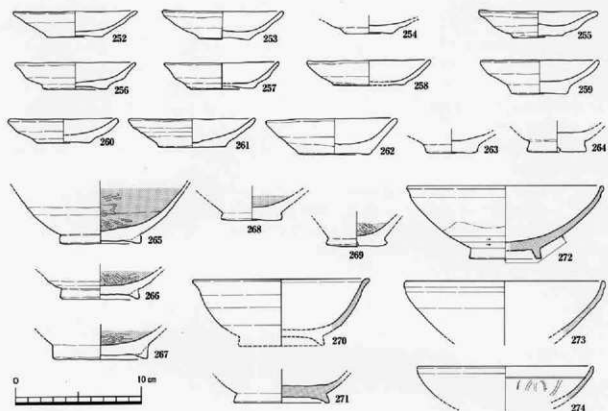


(SE03上層土坑)

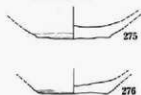


第103図 中世遺構出土遺物6 (SE01、SE03上層土坑-1、全てS=1/3)

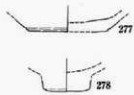




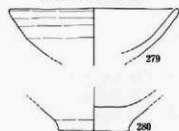
(SB247出土遺物)



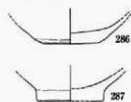
(SB249出土遺物)



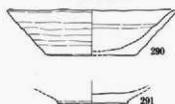
(SB250出土遺物)



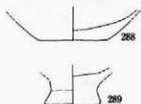
(SB251出土遺物)



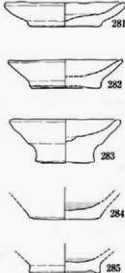
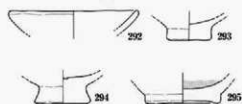
(SB258出土遺物)



(SB254出土遺物)



(SB274出土遺物)



第104図 中世遺構出土遺物7 (SE03上層土坑-2、SB247～SB274、全てS=1/3)

全体的に薄い底部、体部をもつ。輪高台碗は、全形のわかる資料が246・247の大型法量のもののみであるが、体部下半の破片資料から判断し、口径13cm台のものが通常法量であったと理解される。断面三角形に踏ん張る形態の高台が付き、底面糸切り痕を残す。大型法量のもは口径17cm台の246と口径15cm台の247とがある。前者は体部が深い碗形を呈す器形のもので、足高の高台が付けられる。体部は薄く、底面は糸切り痕をナゲ消す。後者は通常の断面三角形の高台で、体部が浅い碗形を呈す。薄く作られる特徴は足高形態のものと同様であるが、口縁部端を内側に肥厚させる特徴がある。当期の碗類に特徴的に見られる器形特徴であり、当期の編年指標の一つに上げられる。

新群資料は平底碗、輪高台碗、平底小皿、柱状高台小皿の土師器の他に、白磁碗と灰釉陶器碗がある。平底碗と平底小皿は通常土師器、輪高台碗は内黒土師器、柱状高台小皿は通常土師器と内黒土師器の両方がある。平底碗は破片のみだが、平底小皿は11点を図化した。A・B類胎土はSK472において薄手d類器形としたA3類胎土をもつ252～254とb1類系統の255とがある。D類胎土は薄手で底径大きく扁平な器形のもの(256～258、h類とする)と、厚手のd類系統(259)。C・E類胎土は大きな底部からそのまま開く器形のe類系統(261・262)である。C類胎土が定量含まれることが特徴と言える。柱状高台小皿は全てA・B類胎土のもので、263は体部皿形に開くが、碗形呈すものが主で、内黒の269では内面をミガキ調整している。内黒輪高台碗は265がA類胎土、266・267がD類胎土で、いずれも内面にミガキ調整が入る。極めて低い高台が貼付され、底面の糸切り痕をナゲ消す。

これら土師器群に共伴する資料として白磁と灰釉陶器があるが、270・271の灰釉陶器碗は東濃産のものと推察され、口縁部外反器形や高台形態、糸切り痕を残す点、そして無軸のものと施軸のものとが混在して存在することから、西坂1号窯式に位置づけ可能性と判断する。白磁碗は3個体出土する。272は数少ない半完形品で、口縁部は小さな玉縁状、体部は内湾し、底部は倒り出し高台が高く作られる。胎土が陶器質の細かな貫入が入るもので、山本信夫氏の大宰府白磁分類Ⅱ1類に該当する。273も小さな玉縁が付く口縁部で体部開く器形のものである。胎土は硬質、軸が水色を呈す点から、山本白磁分類Ⅱ1類に分類される。274は口縁部が直口縁で、体部内湾して立ち上がる点、内面に横線と堆線による文様が入る点から山本白磁分類Ⅱ4類に分類される。以上、新群資料は土師器食膳具にやや8A期に遡る様相も見られるが、柱状高台小皿の定量化と白磁の共伴の多さ、西坂1号窯式に位置付けられる灰釉陶器の出土から、8B期に位置付けることで問題はなからう。

### 第3項 中世掘立柱建物出土遺物

中世掘立柱建物の柱穴から出土する遺物は、以下に示す一覧表のとおり、出土量が少なく、まとまった一括資料としての性格を有しておらず、特筆される遺物も出土していないが、SB250については、今回の報告区域で最も新しく位置付けできる資料と言えそうであり、以下に示しておきたい。なお、その他の遺構出土の遺物については、個別の観察表と下記の一覧表に示すことで代えたい。

SB250出土物については、中世に位置付けられる27点の土師器食膳具のうち、内黒土師器が3点ある以外は、全て通常土師器である。内黒土師器は輪高台碗と柱状高台碗を指示したが、いずれもミガキ調整を持たないもので、輪高台の形態も終末期の様相をもつ。通常土師器は平底碗と柱状高台碗、平底小皿、柱状高台小皿が出土している。A類かD類胎土のもので、281や282の平底小皿の底径大きく、体部短く開く形態は、三木だいもん遺跡溝6の小皿③類型に似ており、南加賀8C期に位置付けられる。283の体部皿形を呈す柱状高台小皿の形態も、同時期に位置付けでき、内黒土師器の定量存在は気にかかるが、数少ない8C期の基準資料と言えよう。

今回報告区域の中世掘立柱建物出土遺物一覧表

遺構名	遺物の概要	遺構名	遺物の概要
SR247	中世Ⅰ-Ⅰ期?土師器9点。古代土器13点混在。	SR274	中世Ⅰ-Ⅱ期?土師器25点。古代土器26点混在。
SR249	中世Ⅰ-Ⅱ期?土師器4点。古代土器15点混在。	SR275	中世Ⅰ-Ⅰ期?土師器5点。古代土器3点混在。
SR250	中世Ⅰ-Ⅱ期頃の土師器27点。古代土器71点混在。	SR276	中世遺物出土なし。掘立柱建物形態から中世認定。
SR251	中世Ⅰ-Ⅱ期?土師器13点。古代土器13点混在。	SB289	中世遺物出土なし。掘立柱建物形態から中世認定。
SR254	中世Ⅰ-Ⅱ期?土師器9点。古代土器18点混在。	SR291	中世遺物出土なし。掘立柱建物形態から中世認定。
SR258	古代Ⅱ2期?土師器6点。古代土器9点混在。	SB293	白磁碗口縁部破片1点出土しており、中世Ⅰ-Ⅱ期に発行と推察。古代土器4点混在。
SR268	中世遺物出土なし。掘立柱建物形態から中世認定。		

## 第4項 その他の遺構出土遺物

### 1. 道路状遺構3 (SD32) 出土遺物

道路状遺構3の波板状凸凹面には古代の遺物とともに、中世に位置づけられる土器が僅かながら出土している。またまった資料ではないが、道路状遺構3の構築年代を示す資料であるため、図示しておく。298と299は土師器柱状高台碗の底部破片で、南加賀8B期頃に位置付けられるものである。300～303は白磁で、300は口縁部に小さな玉縁をもつ体部碗形の碗である。硬質の胎土で水色調の釉色、細かな貫入が入るもので、山本信夫氏の大宰府白磁分類Ⅺ1類に該当する。301は低い削り出し高台をもち、見込部に沈線が巡る碗底部で、山本白磁分類Ⅳ1a類に該当する。302は皿の半完形品で、底面は平底を呈す。口縁部は短く外屈する形態で、内底面の見込部に沈線を入れる。山本白磁分類Ⅳ2類に該当するもので、303の平底の皿底部についても、同様の形態を見込部に入れる。山本白磁分類Ⅳ2類に該当するもので、303の平底の皿底部についても、同様の形態を見込部に入れる。以上の白磁類は300が山本B期である以外は、山本C期に位置付けられるものであり、8B期に伴行する時期のものである。当道路の構築が11世紀後半以降に行われていた可能性を示す資料である。

### 2. G区中世土器溜まり1出土遺物

G区西側隅にあたる区域には、中世に位置付けられる墓塚群の存在があるが、その墓塚群の直上層から北にむかって中世の土器溜まり層が確認される。これをG区中世土器溜まり1としているが、ここでは193点の土師器食器類と5点の土師器煮炊具、8点の白磁碗、1点の灰輪陶器碗が出土している。

土師器食器類は通常土師器が175点、内黒土師器18点で構成される。内黒土師器の器種はほぼ柱状高台器種で占められる状況が見られ、内黒土師器の衰退とともに、輪高台器種が終焉する様相を読み取ることができる。通常土師器は平底碗3割、柱状高台碗3割弱、柱状高台小皿1割半、平底小皿2割半で、柱状高台器種の増加と平底小皿の減少が傾向として提示できる。以下に各器種の説明を述べる。

平底碗では、305の体部大きく開くものを示した。口径14.6 cmのもので、体部下位は内湾する。

平底小皿は、古代からの碗形の系統にある小型底部で体部外傾する小皿①類型と底径大きく体部が短く立つ小皿③類型とがある。①類型は口径9 cm程度、底径4 cm台前半のもので、体部が強く開く薄手の307・313と厚手で体部下位に張りがある309・310に分かれる。後者は③類型化の形態か。③類型(308・312・315)は底径5 cmを測り、器高低く体部短く立ち上がるもので、全てD類胎土のものである。

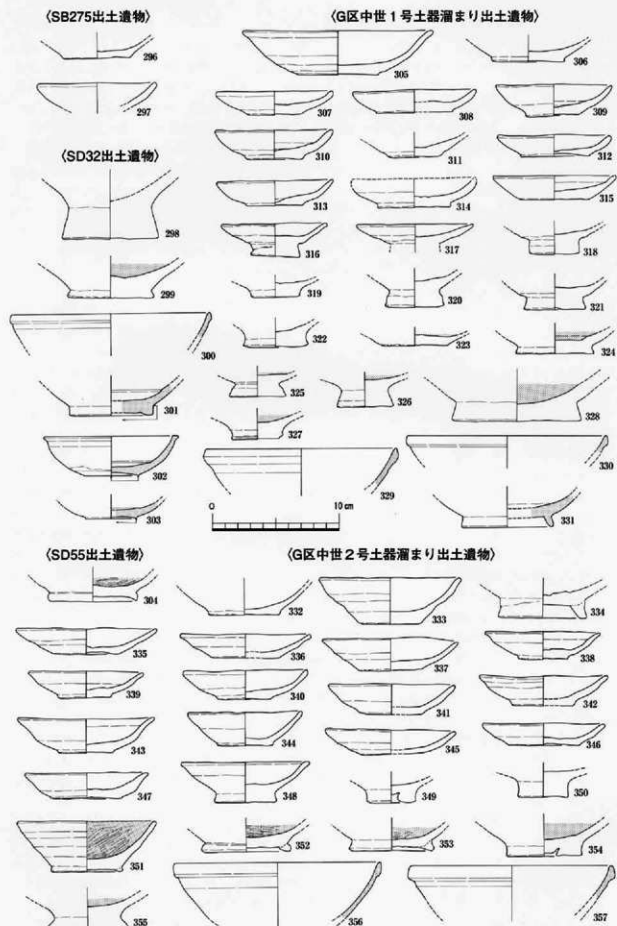
柱状高台小皿は、316・317のように体部が皿形に開く形態のものであり、底部破片出土のものでも体部の遺存状態から、同様の器形を呈することが予想される。内黒のもの定量存在するが、それについても皿形を呈している。なお、柱状高台碗も同様に内黒が定量見られるが、体部遺存の資料はなく、全形は不明である。ただ、328の10.2 cmを測る大型の内黒製品はC類胎土を持つ鉢状器形のもので、内面にススが付着した可能性もある。

これらに伴行する白磁碗と灰輪陶器は、329の白磁碗が山本信夫氏の大宰府白磁分類Ⅱ5類に該当するもの。330の白磁碗が山本白磁分類Ⅺ1類に該当するもの。331の灰輪陶器碗が東濃産の西坂1号窯式期の可能性をもつものである。概ね11世紀後半から12世紀前半に位置付けられるものであり、白磁類の共存数の多さは南加賀8B期以降であることを示す。また、内黒輪高台碗の衰退と柱状高台器種の増加、平底小皿の減少は8C期に位置付けられる特徴で、平底小皿の1類型の後者タイプとしたものと3類型は、小松市白江柳川遺跡412号井戸で出土するものに法量、形態とも共通する。8C期の中でも後半期に位置付けられるものであり、当遺跡の7中では最もまった当該期資料と言えるだろう。

### 3. G区中世土器溜まり2出土遺物

大型の土師器廃棄土坑SK472の周辺、れ・る-36・37Grにまたまった中世土器の廃棄が確認されており、それらをG区中世土器溜まり2として扱った。当初これら土器群は単一遺構として扱っていないため、遺物出土状況に不明な点はあるが、概ね出土土器は南加賀7C期と8B期にまとまる。

図示したものは、通常土師器が平底碗、輪高台碗、平底小皿、柱状高台小皿。内黒土師器が輪高台碗と柱状高台碗。そして白磁碗である。332の平底碗は南加賀7C期のもの。335・336の平底小皿は口径11 cm程度を測る大型、薄手のもので南加賀7C期のものである。同時期に位置付けられる土師器は、333・337の口径11 cm程度を測る平底小皿の碗タイプと、351の口径10.7 cmを測る内黒輪高台碗の小、352・353の内黒輪高台碗の通常法量で、平底小皿の碗タイプは小皿出現期の特徴的な器形のもの、内黒輪高台碗の小型法量は内黒輪高台碗が法量分化している段階のものである。内黒輪高台碗は内面ミガキ調整が丁寧で、高台は低いが底面の糸切り調整をそ



第105図 中世遺構出土遺物8 (SB275、SD32、SD55、中世1号土器溜まり、中世2号土器溜まり、S=1/3)

のまま残す。南加賀7C期の資料は、C区SK110を基準資料としてあげているが、当遺構では平底小皿と平底碗のみのセット出土であり、今回の資料が加わることで土器組成や土器様相を補うことができるだろう。

以上の土器群を除けば、南加賀8B期に概ね位置付けられる。平底小皿が多く、柱状高台器種が目立つ。平底小皿はSK472で出土したものと共通する類型が見られ、C類胎土の346・347は底径の大きな③類型のものである。当期に典型的に存在する②類型の小皿(338・339・343)や、柱状高台小皿の浅椀状を呈す器形(348)など、8B期の様相を示している。なお、出土する白磁碗類は8B期に伴うものである。356の長い玉縁状口縁部は山本信夫氏の大宰府白磁分類Ⅱ5類に、357の大きな玉縁状口縁部はⅣ1a類に該当するもので、概ね11世紀後半の年代視となる。

#### 4. ビット及び包含層出土遺物

##### (1) ビット埋納資料

ビットには当期の土師器碗皿類の完形品や半完形品を埋納する事例があるが、一つのビットからまとまって複数個体が出土する事例はなく、単品での資料評価となるが、南加賀7B期に位置付けられる土師器が3個体出土している。その他は概ね8B期に位置付けられるものであり、3点出土する白磁碗皿も同時期のものである。

南加賀7B期の資料は、C地区の土師器焼成坑SK146が該当するが、破片での出土が主であるため、全形を窺い知れる資料が少なく、今回のビット資料はそれを補足する資料と言える。358の輪高台椀は、A3類胎土のもので、口径13.2cmを測る浅椀形を呈す。高台は断面方形のものがしっかりと踏ん張り、全体的に薄く作られる。外面のロクロヒダと口縁部内面の肥厚の特徴は、7A期的でもあるが、浅い椀形器形は当期に位置付けられよう。367の足高台をもつ大型の輪高台椀もA3類胎土を持つものである。口径15.3cmを測り、体部が薄く直線的に開く器形は、当期の指標となる器種特徴と言える。高台は比較的薄いものがしっかりと踏ん張り、底面はナデ消しされる。359は口径11.8cmを測る平底椀で、浅椀形に開く器形が当期の特徴と言える。内底面には強いロクロナデによる螺旋痕が残し、作りが粗雑になる傾向を示している。

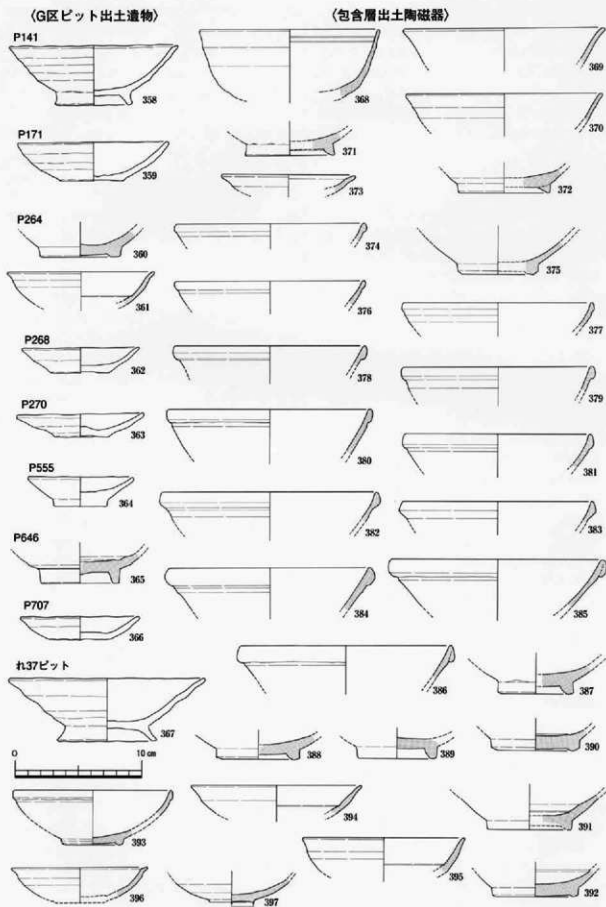
##### (2) 包含層(古代遺構混在含む)出土の灰釉陶器と白磁碗皿類

包含層資料の中に中世に位置付けられる土師器食器類は多数出土するが、ほとんどが細片であるのと、遺構資料の一括性がなく、稀有の存在である陶磁器類のみを取り上げる。包含層からは、灰釉陶器碗類が19点、灰釉陶器瓶類が1点、白磁碗皿が67点出土する。

灰釉陶器は全て東濃産産と思われるもので、368の体部内面に沈線を残す深椀形碗は、明和27号窯式以降には見られないものであり、丸石2号窯式期、11世紀前葉に位置付けられよう。他の369～372の碗は体部外傾し口縁部外反する器形と三角形高台が貼付される点、無軸に近い施輪状態などから、概ね西坂1号窯式期のものと位置付けられる。後述の白磁碗皿類同様に南加賀8B期に伴行する時期のものであり、373の小皿も同時期に位置付けられよう。内面施輪する小型品で、口縁部は外反する。

白磁碗皿は、山本信夫氏の大宰府白磁分類案に基づいて整理する。碗は口縁部に玉縁をもつ形態であり、玉縁の大きさや形、胎土等によっても分類される。主体を占めるのは、大ないしは中規模の玉縁口縁をもち、立ち気味の器形となるもの(380～386)で、山本Ⅳ1類に該当する。これに伴う底部は高台が外側直立し、内側が斜めに極めて低い削り出し高台を作るもので、特に390～392は内面下位に段を2か横沈線をもつ。山本分類Ⅳ1a類に該当する。なお、375の底部も内底見込の段がないが、当類型に該当する。山本C期に位置付けられるものだが、同時期に位置付けられるものに、細長い玉縁口縁をもつもの(378・379)がある。化粧土を伴うもので、山本Ⅱ5類に該当する。また、小さな玉縁口縁で陶器質の胎土をもつ山本Ⅱ1類(376・377)も定量存在する。化粧土を伴い、同じ山本C期に位置付けられる。これらⅡ類の底部は、高台外側が直立し、内側を斜めに削り出すもの(387・388)で、Ⅳ類よりも高い高台をもつ。これら碗と同時期の皿は、体部やや内湾気味に立ち上がり口縁部で若干外反する下位内面に段を2もつもの(394・395)で、山本Ⅰa類に該当。397の底部平底で内面見込に段を持たない山本Ⅶ1類、396の体部内湾気味に立ち上がり口縁部外反する山本Ⅴ2類も当期に位置付けられる。

以上の山本C期に位置付けられる碗皿類に対し、若干時期の遡る碗皿がある。374の小さな玉縁口縁で硬質の胎土をもち、水色系の釉色をもつ碗(山本Ⅺ1類)と393の口縁部に玉縁をもち、底部に削り出し高台をもつ浅椀形呈す皿(山本Ⅹ6類)で、山本B期に位置付けられる。



第106図 中世遺構出土遺物9 (G区ビット、包含層、全てS=1/3)

## 第5項 今回報告の中世土師器と平安後期土器群編年の補足

これまで、各遺構別に、今回報告区域の出土中世土師器の解説を行ってきたが、ここでは当出土土師器の様相を整理し、2008年に筆者が提示した「南加賀地域の平安後期土器群に関する編年の考察」の一部補足を行う。なお、器種名は昨年の編年案時のものとし、無台をA、有台をBとして提示する。

### 1. SK472の土器様相整理と南加賀8B期の編年案補足

本文でも述べたように、SK472資料は南加賀8A期と8B期の過渡的様相を持つ土器資料である。筆者は先の編年案提示において、8B期成立の編年指標として、体部外傾器種の椀・小皿の出現と柱状高台器種の盛行を上げており、白磁碗皿類が組成の中に定量含まれることも重要な要素と考えている。当資料においては白磁碗皿の出土量は少ないが、組成の中に確実に含まれる様相を有しており、先の椀A、小皿Aの新たな器形導入と柱状高台器種の増加傾向は、型的には8B期に位置付けられるだろう。以下に、当資料が8B期であるという前提で、先の編年案で提示した8A期の基準資料と8B期の基準資料とを比較検討し、当土器様相の特徴を整理したい。

まず、当資料の土器組成を提示するが、土師器食器の内訳は、通常土師器82%、内黒土師器18%で構成される。8A期のSK419が通常88%、内黒12%で構成される状況から確実に増加傾向を示しており、8B期の基準資料としたB区上層土器溜まりの通常85%、内黒15%に近い数値と言えよう。また、8B期の新相資料とする田尻シンペイダシ遺跡大溝資料が通常8:内黒2であるので、資料実態としては内黒2割程度とする数値の方が確実である。北加賀地域には見られない内黒土師器再興の伸びであり、それが南加賀地域の特徴と提示できる。

次に、器種別組成だが、SK472では、椀A 22.1%、柱状高台椀6.1%、椀B 16.2%、小皿A 49.2%、柱状高台小皿6.4%で構成される。これを8A期のSK419と8B期のB区上層土器溜まり資料と比較したのが下記の食器器種構成表であるが、椀Bが高い率を示していることを除けば、柱状高台器種の増加と小皿Aの減少、椀Aの増加傾向など、SK419からB区上層土器溜まりへの変遷過程の中で位置づけられる。また、柱状高台器種の内黒率の低下も同様の動きであり、8A期から8B期への器種組成の構成比率の変化は、中間型式を置けるくらいに、漸移的であったと言えよう。以下に各器種の特徴を整理する。

8A期～8B期の土師器食器器種構成表（底部個体数を主とした個体識別による点数換算割合）

資料名	椀A	柱状高台椀	椀B	小皿A	柱状高台小皿
SK419	23.0(内黒率 0%)	1.0(内黒率 100%)	10.0(内黒率 80%)	63.0(内黒率 0%)	3.0(内黒率 100%)
SK472	22.1(内黒率 0%)	6.1(内黒率 60%)	16.2(内黒率 75%)	49.2(内黒率 0%)	6.4(内黒率 63%)
B区上層溜まり	28.0(内黒率 20%)	8.0(内黒率 30%)	9.0(内黒率 80%)	42.0(内黒率 0%)	13.0(内黒率 30%)

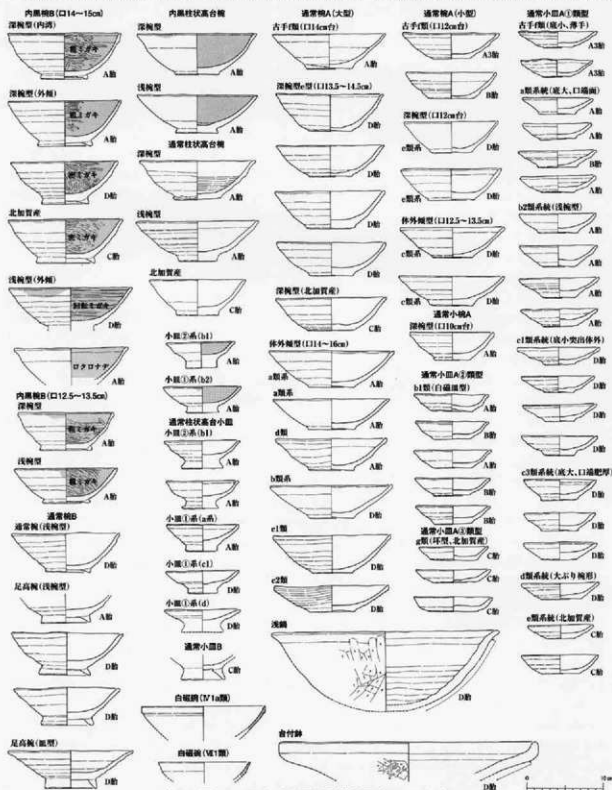
まず、椀Aだが、当器種はSK419で主体を占めた深椀型とB区上層溜まりで主体を占めた体部外傾型とが拮抗して存在することが特徴と言える。ただ、深椀型はD類胎土にのみ顕在化するもので、北加賀産のC類が深椀型を呈することを考えれば、A類胎土が早くに体部外傾型へ統一を図った可能性もある。また、通常法量よりひとまわり小さな小皿一型が定量存在することも特徴で、深椀型と体部外傾型とが存在する。体部外傾型で薄手作り、A類胎土の中でも砂粒混在が多く、発色が古代的な一型が大型と小型の法量で存在し、それらをF類としたが、その系統のものは小皿Aでも存在し、特徴的である。7期的な作り、形態のものであり、僅かに存在する口径10cm台の小椀的な法量のものも、同様に7期的な様相を残すものだろう。

椀Bは8B期以降、通常土師器が高台椀、内黒土師器が低高台の椀というように、全く異なる器形を呈しているものであるが、当資料においては一部通常土師器に低高台椀が存在しており、7期の名残を感じさせる。通常土師器は、ほぼD類胎土で占められ、足高台の椀には統一される様相をもつ。底部厚い浅椀器形が主体だが、体部が強く開く皿形と言え器形のものも確実に出現し、この器形はB区上層土器溜まり段階で普遍化する。通常土師器がD類胎土で構成されたのに対し、内黒土師器はA類胎土主体で構成される。どの胎土も深椀器形が主体で、内面ミガキ調整をもつ。A類胎土は粗いミガキ調整、D類・C類胎土は丁寧なミガキ調整であり、8A期的な様相が強い。ただ、8B期の指標とされる、A類胎土で内面口ロナデ仕上げをする体部外傾の浅椀器形や、D類胎土で回転ミガキ調整をする浅椀器形が確実に出現していることは、当資料を型式付ける指標となるものである。なお、当器種においても、ひとまわり小型法量のものが存在しており、法量分化と言えるものではな

いが、7期まで見られた内黒碗Bの法量分化の名残とも見られる。

柱状高台碗は、碗Bのような内黒と通常とで異なる器形を呈すことはなく、いずれにおいても深碗器形と浅碗器形が存在し、器形、法量とも互換性がある。これは碗Bの出自と異なり、当器種が内黒主体で始まり、8B期へと通常主体となる変化様相を示す器種であるためにおこったもので、それは柱状高台小皿においても同様のことが言える。胎土はほぼA類胎土で占められ、内黒土師器に僅かながらもミガキ調整を施すものが存在する。

当器種のミガキ調整は、8A期にも僅かながら見られるもので、その様相を引きずる。柱状高台小皿も、A類



第 107 図 SK472 出土土器類型構成図 (S = 1 / 5)



胎土が主体で、内黒と通常とで器形、法量に互換性を持つ。それは小皿Aの作り癖（b1類系統器形とa類系統の器形）とも共通しており興味深い。なお、D類胎土については内黒土師器がなく、A類胎土よりも概して浅い器形で、体部開く器形のものが出現している。碗Aでも見られたが、産地によって古い器形を残したり、新しい器形へ早くに転換させたりする現象が見られることも、当資料が過渡期にあることを物語るものと言えよう。

小皿Aは、7期以来の古代的な碗器形からの流れで追える①類型と白磁皿模倣として8A期に出現する②類型、8C期になって普遍化する底径大きく盤型の③類型とが一定の数量をもって存在する。主体を占める①類型は、A類胎土とD類胎土とが拮抗して存在し、B区上層土器溜まりで確認される形態のものが存在している。②類型が定量存在することも共通しており、当器種においてはB区上層土器溜まりの様相に近い。ただ、B区上層土器溜まりでは確認できなかった③類型が定量確認されたことは、SK472資料の特徴と言える。当類型の小皿Aは全て北加賀産で、この時期に併行する白山市三浦・幸明遺跡Ⅱ区SK10では、全体の1/4程度の率で③類型が出土している。南加賀において7C期に普遍化される③類型小皿へ繋がるものであるとは言えないが、北加賀の当期の土師器を特徴付ける形態であり、北加賀と南加賀との併行関係を追える数少ない資料と言えよう。このような特徴的な器形以外にも、SK472には三浦・幸明遺跡Ⅱ区SK10と共通する器形を有した碗Aや柱状高台碗が出土しており、両地域において器形や法量の違う土師器を同時期に生産していることが理解される。地域間の編年摺り合わせを行う際の重要な資料と言える。

以上の土師器食器具では、8A期の様相を引き摺る傾向が強くなり、過渡期の様相が色濃かったが、それ以外の器種では、新型の非クロコ成形土師器煮炊具の出現や舶載白磁碗皿の共伴など、8B期に始まる要素が顕在化する。当期の土師器煮炊具は個体数も少なく、その形態変化を追えるものではないが、丸底を呈す浅鍋器形はその後、平底へ変化している可能性があり、台付鉢状の器種も以降に続く様相が見られないなど、当器種の出現期的様相を示している可能性がある。また、白磁碗皿は、碗が山本信夫氏の大宰府白磁分類のⅡA類、皿がⅡI類に分類できるものであり、大宰府C期、暦年代では11世紀後半から12世紀前半の範疇である点から、年代的にも問題なかろう。

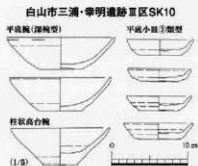
SK472の資料は、土師器食器具組成や新器形、新法量導入、新型煮炊具出現、白磁定量存在、土師器皿類の北加賀との併行関係の点などから、8B期に包括される資料である。ただ、これまで述べたように、8A期からの過渡期的様相を色濃く持つ資料群であり、限りなく8A期に近い8B期の最古段階に位置づけられるのが妥当だろう。これまで当期の基準資料としてきたB区上層土器溜まりは、そのままの資料評価でよいが、それに後続する加賀市田尻シンペイダシ大溝資料は当期の新段階資料とするよりも、8C期に限りなく近い8B期の最新段階資料とすることで理解したい。以上、3資料を古・中・新の3期区分することも可能だが、古と新は次の型式への過渡期的様相が強くなり、8A期から8C期へと転換する過渡期的土師器様相こそが8B期の特徴と位置付けたい。さらに、その変化は漸移的であり、それが地域において型式変化のズレを生み出しているようにも感じる。

## 2. 南加賀7B期、7C期の編年資料補足

今回報告資料には7期の資料が僅かながら散見されており、これまで報告した資料と組み合わせることで、当期の土師器組成の様相をより整理することができる。

7B期は土師器焼成坑のSK146を中心に提示していたが、今回G区ピット埋納の土師器碗類に当期に位置付けられる資料があり、それを加えて構成した。碗Bは足高台を持つ大型のものと口径13cm台の通常法量のものが存在する。内黒土師器は確認されず、それは当期が最も内黒土師器の衰退期に位置付けられる所以であろう。碗Aは口径13.5～14cmと口径12cm前後に分かれ、さらに口径10.5～11cmの小型碗、同口径で器高の低い小皿Aが出現する。小皿は極めて少なく、小型碗の低下した器形として存在することが特徴であるが、7C期に急増する小皿Aは当期のこの小型碗が原型と理解されよう。

7C期はSK110の小型土坑資料による小皿Aと碗Aのみの基準資料提示であったが、今回、G区中世土器溜

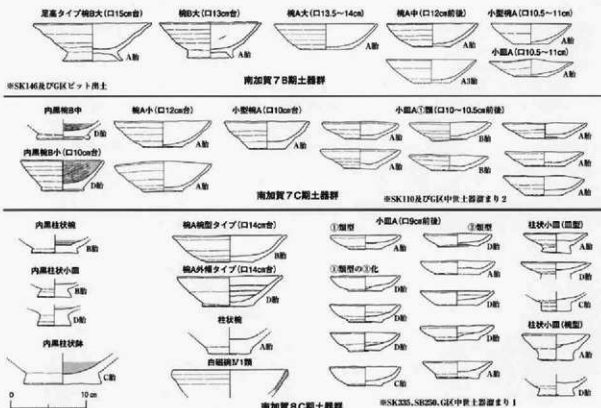


第108図 SK472出土北加賀産土師器に類似する三浦・幸明遺跡Ⅱ区SK10

まり2において、それを補う資料が出土した。内黒椀Bと小型椀Aで、内黒椀Bは口径13cm程度になると見られる通常法量と口径10cm台の小型法量が存在する。どちらもD類胎土で、内面ミガキ調整を施し、体部は外傾する。当期は内黒椀Bの法量分化が顕在化する時期であり、中・小の2法量分化を基本に、さらに15cm程度の大型も加わって3法量分化する様相が見られる。このような小型法量の内黒椀Bは当期で消滅するが、8A期には内黒柱状高台小皿が出現することでそれに代わる存在となったのだろう。他の通常土師器器種はほぼA類胎土で占められる。前代に定量存在した古代から続く、濃い肌色発色をした土師器が当期も主体的に存続しており、胎土も含めて土師器の作りが変化するのは次の段階と位置付けられる。小皿Aが主体を占めるが、口径10cm台の深身の小型椀が存在し、厚い底部の形態から、柱状高台小皿的な様相も見せる。

### 3. 南加賀8C期の顔見町遺跡出土資料の特徴

昨年に提示した福年案では、8C期に位置付けられる資料が乏しく、顔見町遺跡の資料では基準資料の提示ができなかった時期である。今回の報告地区で、SK335とSB250、G区中世土器溜まり1が当期に位置付けられ、寄せ集めの資料ではあるが、概ねの土器様相を提示することができた。まず、内黒土師器だが、椀Bはなく、柱状高台椀・小皿が存続する程度で、大型鉢状器形も確認できる。当期は内黒器種の消滅期であるが、それを存続させることが南加賀地域の特徴なのだろう。椀Aは体部が真っ直ぐ開く外傾型とやや椀形呈して開く椀型とがあり、いずれも口径14cm台の大型を呈す。ひとまわり小型でやや深身呈すタイプが存在する可能性はあるが、主流は大型の開く器形と理解する。柱状高台の椀は少ないが、小皿は多く確認される。体部強く開く器形が主体で、椀型ものは底径大きな厚手のものとなる。後に後者が主体となる形態であり、前者の器形は当期までだろう。小皿Aは①類型が少量存在するだけで、主体は③類型となる。①類型が底部大型化して③類型化したものと、底径大きく体部が短く開く③類型とがあり、次第に後者へ統一されることで、①類型は消滅する。8A期の北加賀産で定量見られた③類型とは、体部立ち上りの角度と形態が異なっており、当期の③類型はそのまま中世土師器型へと繋がる。胎土は前代同様にA類とD類主体に構成され、C類が少量含まれる。なお、白磁碗Ⅰ型が共存しており、その時期の中に包括される暦年代観が与えられる。以上、当資料については、一括資料ではないものの、土器様相としてはまとまりがあり、8C期でも後半とした白江梯川遺跡412号井戸に近いと言えよう。



第109図 南加賀7B期・7C期・8C期の顔見町遺跡出土土師器基準資料 (S=1/5)

付表1 額見町遺跡Ⅳ報告区域出土古代遺物観察表

1. 古代竪穴建物出土遺物

遺物番号	類別・名称	出土地点	図号	形状	規格	時期	調査等	備考	記録番号
1	銅貨	S012172	T148	南加南形	2377-1.最細	I群中	11		S01215
2	土師-黒耳	S012172	T150A, 最北E3	埴丸A1	73787-5.丸	2-5	11	埴丸1.5枚	S01215
3	土師-黒耳	S012110	T143, 最北1	埴丸A1	107204-4.丸	1.8	11	埴丸1枚	S01226
4	土師-黒耳	S012110	T148	埴丸A1	25786-5.最細	1.5	11	内外2枚	内務省蔵, 西内2枚
5	土師-黒耳	S012192	T158	埴丸A1	75786-5.最細	1.8	11	内外2枚	内務省蔵
6	土師-黒耳	S012192	T158	埴丸A1	107207-5.丸	約2.5	11	内外2枚	S01235
7	土師-黒耳	S012192	最北2	埴丸A2	107205-5.丸	約2.5	11		S01234
8	土師-黒耳(小)	S012190-3.1層	T156A, 最北E2, 最北E4, 最北E6	埴丸A2	57786-5.丸	2.5	11	埴丸中, 内外2枚	内務省, 赤松, 内務省蔵, 蔵上, 中野
9	土師-黒耳(小)	S012126-32	T148, 最北2, 最北E3	埴丸A2	25786-5.丸	2.5	11	埴丸中, 内外2枚, 赤土	内務省蔵, 赤松, 蔵上, 内上野1
10	土師-黒耳(小)	S012126-19-20	T156A, 最北E2, 最北E3	埴丸A2	107787-5.丸	1.4	11	埴丸中, 内外2枚	内務省蔵, 赤松, 蔵上
11	土師-黒耳(小)	S012126	T152A, 最北E6	埴丸A2	25786-5.丸	2.5	11	埴丸中, 内外2枚	S01220
12	土師-黒耳(小)	S012124-20-104+127	-	埴丸A2	57787-5.丸	約2.5	11	埴丸中, 内外2枚	内務省蔵
13	土師-黒耳(小)	S012111	T122A, 最北1	南加南形	577-1.最細	I群中	12		S0124
14	土師-黒耳(小)	S01221	T158	南加南形	25787-1.最細	I群中	約2-3		S0123
15	土師-黒耳(小)	S012126	最北E4, 最北E5	南加南形	15771-1.丸	1.4	11	瓦ケテテ	内務省蔵
16	土師-黒耳(小)	S012110	T155, 最北1, 最北E2, 赤松	南加南形	577-1.最細	1.8	約2-3	埴丸中	内務省蔵
17	土師-黒耳(小)	S012119-3.1層+ A20, 赤松	T154, 1.5層, 赤松, 最北E1	南加南形	NS-中.最細	1.4	約2-3	埴丸中	内務省蔵
18	土師-黒耳	S012177	T143, 最北2	南加南形	10761-1.最細	1.8	約2-3	埴丸中	S0128
19	土師-黒耳	S012105	T12A, 最北2	南加南形	10761-1.最細	1.9	約3	埴丸中	S0129
20	土師-黒耳	S012199	T150, 最北2	南加南形	10788-1.不整	1.4	V	埴丸中	S01237
21	土師-黒耳(小)	(注)							
22	土師-黒耳(小)	S012127	T156A, 最北E3	南加南形	57787-1.最細	1.4	V	埴丸中	S01228
23	土師-黒耳(小)	S012117	最北1, 最北E2	南加南形	10761-1.最細	1.2	約2-3	埴丸中	S01232
24	土師-黒耳(小)	S012122+P51	最北E4, 赤松	南加南形	577-1.最細	1.4	約2-3	埴丸中	S01214
25	土師-黒耳(小)	S012125-C, L層+ A26		南加南形	10787-1.最細	I群中	約2-3		S0126
26	土師-黒耳(小)	S012125+P7	T152A, 赤松E4, 最北E3	南加南形	NS-中.最細	1.5	約2-3	埴丸中	S01233
27	土師-黒耳(小)	S012121	7.2	埴丸A2	57787-5.丸	約2.5	約2-3	内外2枚	S01232
28	土師-黒耳(小)	S012127	T152A, 赤1.5層, A26E1, 赤松	埴丸A2	57786-5.丸	2.5	1.1V		S01243
29	土師-黒耳	S012190	T122, 最北E3	埴丸A1	25787-5.最細	2.5	11	内外2枚, 赤松, 赤土	S0124
30	土師-黒耳	S01149-129-135	最北E3	埴丸A1	57786-5.丸	1.7	11	内外2枚	赤松, 土師
31	土師-黒耳	S01149	最北E3	埴丸A1	25787-5.丸	約2.5	11	内外2枚, 赤松, 赤土	S0116
32	土師-黒耳	S01149	最北E7	埴丸A1	25786-5.最細	約2.5	11	内外2枚, 赤松, 赤土	S0117
33	土師-黒耳(小)	S01149	T157, 最北E3	埴丸A2	25786-5.丸	2.5	11	内外2枚, 赤土	S0118
34	土師-黒耳(小)	S01149-208	T156A, 最北E2, 赤土	埴丸A2	25787-5.最細	1.6	11	埴丸中, 内外2枚	内務省蔵, 赤松, 赤土
35	土師-黒耳(小)	S011410	T156A, 最北E5, 赤土	埴丸A2	57786-5.最細	1.2	11	内外2枚, 赤土, 赤松, 赤土	S0118
36	土師-黒耳(小)	S01149E20	T156A, 最北E2	埴丸A2	107787-5.丸	1.9	11	埴丸中, 内外2枚	S0119
37	土師-黒耳(小)	S01149E21	T156A, 最北E2	埴丸A2	107787-5.丸	1.9	11	埴丸中, 内外2枚	S0119
38	土師-黒耳(小)	S01149E22	T155A, 最北E2	埴丸A2	10788-5.丸	1.8	11	埴丸中, 内外2枚	赤松
39	土師-黒耳(小)	S01149E23	T156A, 最北E2	埴丸A2	57787-5.最細	1.8	11	内外2枚, 赤土, 赤松	S0119
40	土師-黒耳(小)	S01149E24	T111A	埴丸A2	25787-5.丸	1.9	11	内外2枚	S0114
41	土師-黒耳(小)	S01152	T179	南加南形	25761-1.最細	1.9	約1	瓦ケテテ	S0113
42	土師-黒耳(小)	S01153+赤土	T112, 赤1.2層, T12E2, 赤松	南加南形	25751-1.最細	1.4	約1	瓦ケテテ	赤松1, 赤土
43	土師-黒耳	S01157	T144	南加南形	2377-1.丸	1.9	約1		S0115
44	土師-黒耳	S01157D	-	南加南形	25671-1.丸	1.9	約1-約2	埴丸中	S0114
45	土師-黒耳(小)	S01191+S20247+49	T15A, 最北E2	南加南形	2377-1.最細	1.9	約2-3		S0116
46	土師-黒耳	S01152E3C	C12	南加南形	2571-5.最細	I群中	約2		S0117
47	土師-黒耳	S01157	最北E3	埴丸A1	10788-5.丸	2.5	約1-約2	赤土	S0115
48	土師-黒耳(小)	S01157E1A	最北E1	埴丸A1	57787-5.丸	約2.5	約2	内外2枚	S0115
49	土師-黒耳(小)	S01157E1B	最北E7	埴丸A2	10787-5.丸	約2.5	約2	内外2枚	S0115
50	土師-黒耳(小)	S01157E1C	T156A, 最北E7	埴丸A2	10788-5.丸	1.8	約1-約2	赤土	S0114
51	土師-黒耳	S01151	7.4+1.45+1.6	-	-	-	-		赤土
52	土師-黒耳	S01164	C12E3	南加南形	NS-中.最細	1.8	約1	瓦ケテテ, 赤土, 赤松	S0117
53	土師-黒耳	S01164	最北E3	埴丸A2	NS-中.最細	約2	1.1層+1.2	内外2枚	S0116-3
54	土師-黒耳	S01164	C20	南加南形	23761-1.最細	1.5	約1	埴丸中, 赤土	S0116
55	土師-黒耳	S01166	T12E2, 最北E3	埴丸A1	10787-5.丸	1.6	11	埴丸中, 内外2枚	内務省蔵
56	土師-黒耳	S01165	T149	埴丸A1	75787-5.丸	1.5	11	埴丸1.5枚	S0116
57	土師-黒耳	S01160-01+13+14	T167	埴丸A1	15787-5.丸	2.5	11	内外2枚	S0116
58	土師-黒耳	S01160-02+36	T156A, 最北E5	埴丸A1	75787-5.丸	2.5	11	内外2枚	S0116
59	土師-黒耳(小)	S01161	T122A, 最北E2, 赤土	埴丸A2	25787-5.丸	1.8	11	埴丸中, 内外2枚	赤松
60	土師-黒耳(小)	S01166A	T156A, 最北E4	埴丸A2	25787-5.丸	1.8	約1	赤土	S0116
61	土師-黒耳(小)	S0117	T156A, 最北E2	南加南形	10788-5.丸	1.4	約2	瓦ケテテ	S0117
62	土師-黒耳(小)	S0117E1+S20347	T152A, 赤1.8	南加南形	15787-5.丸	1.2	約2	瓦ケテテ	赤松1, 赤土
63	土師-黒耳(小)	S0117E1	T122A, 赤土	南加南形	2577-1.最細	I群中	約2		S0117
64	土師-黒耳(小)	S0117E1E2	T156A, 最北E2, 赤土	南加南形	25761-1.最細	1.2	約2	瓦ケテテ	赤松1, 赤土
65	土師-黒耳(小)	S0117E1E3	最北E7						S0117
66	土師-黒耳(小)	S0117E1	T152	南加南形	15751-1.最細	1.2	約2	瓦ケテテ	S0117
67	土師-黒耳(小)	S0117E1	69A, 赤土	南加南形	107787-5.丸	1.8	約1	赤土	S0117
68	土師-黒耳	S0117E2	-	埴丸A1	15787-5.丸	1.5	約2-約3	内外2枚	S0117
69	土師-黒耳	S0117E1	T156A, 最北E3	埴丸A2	10787-5.丸	I群中	約2-3		S0117
70	土師-黒耳(小)	S0119E1+1	T156A, 最北E3	埴丸A2	15787-5.最細	I群中	約2-約3		S0117
71	土師-黒耳(小)	S0119E1	T156A, 最北E3	埴丸A2	15787-5.最細	1.6	約2		S0118
72	土師-黒耳(小)	S0119E1	T156A, 最北E3	南加南形	1577-1.最細	1.9	約2		S0118
73	土師-黒耳(小)	S0119E1	T156A, 最北E3	南加南形	NS-中.最細	1.9	約2	埴丸中	S0118
74	土師-黒耳(小)	S0119E1	最北E7	南加南形	15761-1.最細	1.7	約2		S0118

付表1 額見町遺跡群報告区域域出土古土遺物観察表

## 2. 古代掘立柱建物出土遺物

遺跡番号	調査・発掘	出土地点	遺物	土質	色・地	形状	時期	備考	実測番号	
SK2013	4	掘立柱遺物	SK2013P7	台形A, 台形B	赤加直焼	13300号・品	1/10	V	焼へつり器	SK2013
	5	掘立柱	SK2013P8	11150	赤加直焼	10796号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2013
	6	掘立柱	SK2013P9	品A	赤加直焼	10796号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2013
SK2016	7	掘立柱	SK2016P1	11110	赤加直焼	23316号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2016
	8	掘立柱	SK2016P2	11123	赤加直焼	23317号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2016
	9	掘立柱	SK2016P3	11123	赤加直焼	23317号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2016
SK2017	10	掘立柱	SK2017P1	11123	赤加直焼	23317号・品	1/15	B2	天すり	SK2017
	11	掘立柱	SK2017P2	6.33	赤加直焼	23317号・品	2/3	V2	焼へつり器	SK2017
	12	掘立柱	SK2017P3	6.33	赤加直焼	23317号・品	1/3	V2	焼へつり器	SK2017
SK2019	13	掘立柱	SK2019P1	11123	赤加直焼	23317号・品	1/13	V2	焼へつり器	SK2019
	14	掘立柱	SK2019P2 + SK2019P5 + SK2019P20 + 6.33 + 9.33	101.7・焼A	赤加直焼	23317号・品	1/3	V	焼へつり器	SK2019
	15	掘立柱	SK2019P10	11200・焼B	赤加直焼	23317号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2019
SK2020	16	掘立柱	SK2020P1	11123	赤加直焼	10796号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2020
	17	掘立柱	SK2020P2	11415・台形A	赤加直焼	10826号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2020
	18	掘立柱	SK2020P3	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2020
SK2024	19	掘立柱	SK2024P1	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2024
	20	掘立柱	SK2024P2	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2024
	21	掘立柱	SK2024P3	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2024
SK2026	22	掘立柱	SK2026P1	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2026
	23	掘立柱	SK2026P2	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2026
	24	掘立柱	SK2026P3	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2026
SK2028	25	掘立柱	SK2028P1	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2028
	26	掘立柱	SK2028P2	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2028
	27	掘立柱	SK2028P3	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2028
SK2029	28	掘立柱	SK2029P1	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2029
	29	掘立柱	SK2029P2	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2029
	30	掘立柱	SK2029P3	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2029
SK2030	31	掘立柱	SK2030P1	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2030
	32	掘立柱	SK2030P2	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2030
	33	掘立柱	SK2030P3	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2030
SK2031	34	掘立柱	SK2031P1	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2031
	35	掘立柱	SK2031P2	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2031
	36	掘立柱	SK2031P3	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2031
SK2032	37	掘立柱	SK2032P1	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2032
	38	掘立柱	SK2032P2	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2032
	39	掘立柱	SK2032P3	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2032
SK2033	40	掘立柱	SK2033P1	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2033
	41	掘立柱	SK2033P2	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2033
	42	掘立柱	SK2033P3	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2033
SK2034	43	掘立柱	SK2034P1	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2034
	44	掘立柱	SK2034P2	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2034
	45	掘立柱	SK2034P3	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2034
SK2035	46	掘立柱	SK2035P1	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2035
	47	掘立柱	SK2035P2	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2035
	48	掘立柱	SK2035P3	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2035
SK2036	49	掘立柱	SK2036P1	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2036
	50	掘立柱	SK2036P2	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2036
	51	掘立柱	SK2036P3	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2036
SK2037	52	掘立柱	SK2037P1	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2037
	53	掘立柱	SK2037P2	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2037
	54	掘立柱	SK2037P3	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2037
SK2038	55	掘立柱	SK2038P1	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2038
	56	掘立柱	SK2038P2	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2038
	57	掘立柱	SK2038P3	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2038
SK2039	58	掘立柱	SK2039P1	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2039
	59	掘立柱	SK2039P2	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2039
	60	掘立柱	SK2039P3	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2039
SK2040	61	掘立柱	SK2040P1	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2040
	62	掘立柱	SK2040P2	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2040
	63	掘立柱	SK2040P3	11317	赤加直焼	23627号・品	1.0	V	焼へつり器	SK2040

## 3. 古代土坑出土遺物

遺跡番号	調査・発掘	出土地点	遺物	土質	色・地	形状	時期	備考	実測番号	
SK229	1	掘立柱	SK229P1	11316, 焼A, 台形A, 台形B	赤加直焼	58号・品	1.2	B	焼へつり器	SK229
	2	掘立柱	SK229P2	11316, 焼A	赤加直焼	2336号・品	1.0	B	焼へつり器	SK229
	3	掘立柱	SK229P3	11316, 焼A, 台形A, 台形B	赤加直焼	575号・品	2.5	B1	焼へつり器	SK229
SK234	4	掘立柱	SK234P1	11316, 焼A	赤加直焼	2336号・品	1.0	B1	焼へつり器	SK234
	5	掘立柱	SK234P2	11316, 焼A, 台形A	赤加直焼	2336号・品	1.0	B1	焼へつり器	SK234
	6	掘立柱	SK234P3	11316	赤加直焼	58号・品	1/3	B2	天すり	SK234
SK237	7	掘立柱	SK237P1	11316, 焼A	赤加直焼	10797号・品	1.0	B	焼へつり器	SK237
	8	掘立柱	SK237P2	11316, 焼A	赤加直焼	10797号・品	1.0	B	焼へつり器	SK237
	9	掘立柱	SK237P3	11316, 焼A	赤加直焼	10797号・品	1.0	B	焼へつり器	SK237
SK238	10	掘立柱	SK238P1	11316	赤加直焼	58号・品	1.0	V1	焼へつり器	SK238
	11	掘立柱	SK238P2	11316, 焼A, 台形A, 台形B	赤加直焼	2336号・品	1.5	V1	焼へつり器	SK238
	12	掘立柱	SK238P3	11316, 焼A, 台形A, 台形B	赤加直焼	2336号・品	1.5	V2	焼へつり器	SK238
SK242	13	掘立柱	SK242P1	11316, 焼A, 台形A, 台形B	赤加直焼	2336号・品	1.5	B	天すり	SK242
	14	掘立柱	SK242P2	11316, 焼A, 台形A, 台形B	赤加直焼	2336号・品	1.5	B	天すり	SK242
	15	掘立柱	SK242P3	11316, 焼A, 台形A, 台形B	赤加直焼	2336号・品	1.5	B	天すり	SK242
SK245	16	掘立柱	SK245P1	11316	赤加直焼	23627号・品	1.2	B	天すり	SK245
	17	掘立柱	SK245P2	11316	赤加直焼	23627号・品	1.2	B	天すり	SK245
	18	掘立柱	SK245P3	11316	赤加直焼	23627号・品	1.2	B	天すり	SK245
SK246	19	掘立柱	SK246P1	11316, 焼A, 台形A, 台形B	赤加直焼	575号・品	1.5	B2	天すり	SK246
	20	掘立柱	SK246P2	11316, 焼A, 台形A, 台形B	赤加直焼	575号・品	1.5	B2	天すり	SK246
	21	掘立柱	SK246P3	11316, 焼A, 台形A, 台形B	赤加直焼	575号・品	1.5	B2	天すり	SK246











遺物番号	類別・名称	出土地点	遺跡	期上	品名	規格	時期	調査号	備考	所蔵者
7	銅器-円筒形土	6-20	①184, 遺17, 遺31, 遺32	弥生前期	75305-1土好	1.8	B25	スチズ	遺跡Ⅲ, 使用痕跡	G線1
8	銅器-円筒形土	234	①184, 遺32, 遺37, 遺40	弥生前期	705中土好	1.9	B20	スチズ	遺跡Ⅲ, 使用痕跡	G線14
9	銅器-円筒形土	952-1-32	①114, 遺136, 遺146, 遺149	弥生前期	107060-1土好	2.3	B20	スチズ	遺跡Ⅲ, 使用痕跡	G線9
10	銅器-筒形土	173	遺15, 遺30	弥生前期	56中土好	1.4	V		遺跡1	G線13
11	銅器-円筒形土	538	①184, 遺14, 遺24, 遺25	弥生前期	107050-1土好	1.7	B20	スチズ	遺跡Ⅲ, 内土中穴埋跡, スチズ	G線15
12	銅器-円筒形土	630	①170, 遺17, 遺27, 遺30	弥生前期	2537-1土好	2.5	B20	スチズ	遺跡Ⅲ, 使用痕跡	G線21
13	銅器-円筒形土	234	①130	弥生前期	2537-1土好	1.8	B2	スチズ	遺跡1, 使用痕跡	G線18
14	銅器-円筒形土	234	①110	弥生前期	2538-1土好	1.3	V1	スチズ	遺跡Ⅲ, 使用痕跡	G線20
15	銅器-円筒形土	630-20-533	①157, 遺17, 992, 993	弥生前期	5705-1土好	1.6	B1	スチズ	遺跡Ⅲ, 使用痕跡	G線26
16	銅器-円筒形土	152	①184, 遺13, 9106, 9105	弥生前期	2538-1土好	1.6	B	スチズ		G線8
17	銅器-円筒形土	634	①182, 遺15, 9104, 9105	弥生前期	305中土好	1.3	B	スチズ	内土中穴埋跡	G線5
18	銅器-円筒形土	232-30-638	①184, 遺2, 9117, 9107	弥生前期	107050-1土好	1.90	B2	スチズ	内土埋跡	G線40
19	銅器-円筒形土	635	①184, 遺105, 9118, 9120	弥生前期	10705-1土	1.6	B2	スチズ		G線3
20	銅器-円筒形土	232	①184, 遺2, 9118, 9105	弥生前期	576中土好	1.8	B2	スチズ		G線28
21	銅器-円筒形土	631	①187, 遺16, 9116, 9105	弥生前期	2076-1土好	1.6	B2	スチズ		G線29
22	銅器-円筒形土	234	①121, 遺126, 9106, 9104	弥生前期	576中土好	3.5	B1	スチズ	使用痕跡	G線4
23	銅器-円筒形土	933	①121, 遺13, 9104, 9105	弥生前期	576中土好	1.6	B25	スチズ	内土中穴埋跡? 再見ヘラシ	G線7
24	銅器-円筒形土	234	①122, 遺43, 9106, 9105	弥生前期	73706-2土	4.5	B1	スチズ	内土埋跡	G線9
25	銅器-円筒形土	230-630	①122, 遺47, 9106, 9105	弥生前期	576中土好	1.4	B20	スチズ		G線1
26	銅器-円筒形土	630-30-625	①108, 遺436, 9123, 9105	弥生前期	107070-1土好	1.3	B2	スチズ	使用痕跡	G線24
27	銅器-円筒形土	930-20-610+P1078	①102, 遺37, 9123, 9104	弥生前期	5704中土好	1.4	B2	スチズ		G線3
28	銅器-円筒形土	936	①103, 遺38, 9104, 9105	弥生前期	2537-1土好	1.8	V	スチズ		G線6
29	銅器-円筒形土	935	①114, 遺36, 9128, 9105	弥生前期	56中土好	1.3	V	スチズ	使用痕跡	G線2
30	銅器-円筒形土	931-32	①122, 遺43, 9125, 9104	弥生前期	56中土好	2.3	V1	スチズ	内土埋跡	G線25
31	銅器-円筒形土	935	①122, 遺38, 9122, 9105	弥生前期	107050-1土好	1.3	B1	スチズ	使用痕跡, 内土埋跡? 17	G線9
32	銅器-円筒形土	634	①150, 9106	弥生前期	5076中土	1.4	B	スチズ	使用痕跡	G線1
33	銅器-円筒形土	630-30-635	①144, 遺27	弥生前期	10706-1土好	2.3	B	スチズ	内土埋跡	G線5
34	銅器-円筒形土	230-30	①113, 遺25	弥生前期	73705-1土好	1.2	B1	スチズ	使用痕跡	G線20
35	銅器-円筒形土	634	①113, 遺29	弥生前期	73705-1土好	1.8	B1	スチズ	使用痕跡? 17	G線2
36	銅器-円筒形土	634	①114, 遺15	弥生前期	73706中土好	1.5	B1	スチズ	内土埋跡	G線3
37	銅器-円筒形土	936	①133, 遺28	弥生前期	25370-1土	1.5	B1	スチズ	内土埋跡	G線4
38	銅器-円筒形土	936	①134, 遺25	弥生前期	107070-1土好	1.4	B1	スチズ	内土埋跡	G線3
39	銅器-円筒形土	630-30-P104	①142, 遺13	弥生前期	107060-1土好	1.4	B1	スチズ	使用痕跡	G線2
40	銅器-円筒形土	930-30-632	①113, 遺33	弥生前期	2537-1土好	1.9	B20	スチズ		G線-C7
41	銅器-円筒形土	232-30	①124, 遺37	弥生前期	576中土	2.7	B20	スチズ	使用痕跡	G線-02
42	銅器-円筒形土	230	①126, 遺32	弥生前期	10707-1土	1.5	B2			G線6
43	銅器-円筒形土	232-30	①123, 遺35	弥生前期	73707-1土	1.5	B2	スチズ		G線-03
44	銅器-丸入形銅器	630-20-612	①184, 遺17	弥生前期	56中土好	1.5	B2	スチズ	内土埋跡	G線44
45	銅器-丸入	230	①122, 遺13	弥生前期	10707-1土	1.4	V			G線-7
46	銅器-丸入	230	①124, 遺14	弥生前期	73705中土	1.4	V	スチズ	使用痕跡	G線-03
47	銅器-丸入	132	①122, 遺13	弥生前期	10707-1土	1.9	V	スチズ	内土埋跡	G線-10
48	銅器-丸入	230	①126, 遺14	弥生前期	10707-1土好	1.3	V2	スチズ	内土埋跡	G線-13
49	銅器-丸入	230-634	①124, 遺29	弥生前期	56中土好	1.3	B2	スチズ		G線8
50	銅器-丸入	936	①133, 遺25	弥生前期	37365中土好	1.2	B1	スチズ	使用痕跡	G線-04
51	銅器-丸入	936	①134, 遺23	弥生前期	2076中土	1.4	B2	スチズ		G線12
52	銅器-丸入	630-30	①142, 遺12	弥生前期	107070-1土好	1.9	B20	スチズ	使用痕跡, 内土埋跡? 17	G線20
53	銅器-丸入	230-30	①101, 遺45, 9113, 9105	弥生前期	970中土好	1.9	B2-V1	スチズ	使用痕跡	G線21
54	銅器-環形	930-30-630	①146, 遺125, 9127, 9105	弥生前期	970中土	4.5	B2	スチズ	内土埋跡	G線1
55	銅器-環形土	630-31+P1038	①182, 遺134, 9176, 9105	弥生前期	975-1土好	1.2	B2	スチズ	内土埋跡	G線3
56	銅器-環形	630-430	①130, 遺12, 9170, 9105	弥生前期	10707-1土	1.2	B2	スチズ	内土埋跡, 内土埋跡? 17	G線6
57	銅器-環形	635	①116, 遺43, 9105, 9107	弥生前期	2370中土	1.4	B2	スチズ		G線2
58	銅器-環形	630	9106, 内土埋跡	弥生前期	34中土好	3.3	B3	スチズ	使用痕跡	G線8
59	銅器-環形	630	9106, 内土埋跡	弥生前期	34中土好	1.6	B3	スチズ	使用痕跡, 内土埋跡? 17	G線7
60	銅器-多口小	731-20-631	①124, 遺13, 9113	弥生前期	25375中土好	3.90	V	スチズ		G線2
61	銅器-環形	936	9106, 9107	弥生前期	977-1中土	4.00	B2	スチズ	内土埋跡	G線5
62	銅器-環形	936	9176, 9104	弥生前期	10707-1中土	4.3	B2	スチズ	内土埋跡	G線4
63	銅器-環形土	630-430	①146, 遺223, 9145, 9105	弥生前期	2370中土	9.90	V	スチズ		G線4
64	銅器-環形土	630-30-20-630-30-630-P1071-P1072	①127, 遺15, 9123, 9106	弥生前期	54中土好	1.75	V-V1	スチズ	内土埋跡	G線0
65	銅器-環形	637-30-630+P1071	①184, 遺20	弥生前期	2076中土好	1.4	E-2	再見4日, 記録		G線1
66	銅器-環形	636	①201	弥生前期	25375中土好	1.30	B2			G線1
67	銅器-環形	232-30	①124, 遺20	弥生前期	54中土好	1.400	B-V		内土埋跡(1.5埋跡あり)	G線1
68	銅器-丸入	630-430	9106	弥生前期	2377-1土好	1.4	B2-1			G線11
69	銅器-丸入	936	①211	弥生前期	2370中土好	1.000	B2-1			G線12
70	銅器-丸入	936-430-630-630-630-P1071	9176, 9171, 9105, 9106	弥生前期	107070-1土好	3.5	B2			G線17
71	銅器-小口	230-31	9177, 9123, 9106, 9107	弥生前期	2570中土好	1.2	V	スチズ		G線13













遺跡A3-遺跡A2に褐色や赤色の大粒砂粒が少量含有する黄灰色粘土。  
 遺跡A1-細砂粒含有の少ない均質な粉っぽい粘土で、白色系から赤褐色に黄色、黄褐色と変化する。  
 遺跡B2-遺跡B1に大粒砂粒(褐色、青褐色、赤色)を混和材として多量入る黄灰色粘土。

遺跡C-遺跡B1に似るが、赤色酸化鉄粒含有し、赤く変色しやすい土。  
 遺跡A1-海神宮を含むサツツアの砂粒質粘土。砂粒含有が少なく、金沢川野等で確認される系統上。

遺跡A2-遺跡A1に褐色や白色の大粒砂粒を含有する黄褐色土。赤く変色しやすいものが多い。

**(古代東-中世土器類群)**

H-A-細砂粒多量含有する硬面のガツツア粘土。薄い肌色発色で加賀系統粘土。なお、小石多量含有のものは特にH-A2。表面はガツツアが、砂粒が目立たない濃肌色呈するものはH-A3とした。

H-B-A系統で変化する硬面ガツツアが強く、くすんだ赤褐色呈す粘土。小石多量含有はH-B2とした。

H-C-細砂粒発色の少ない粉っぽい粘土(やや粒っぽい)、海神宮を併せ含む北加賀系統土。発色を基本とするが、特に白色系ものはH-C2とした。

H-D-C類に似た粉っぽい粘土だが骨針が含まず。細砂粒を併せ含む含有する粘土。白色系統の発色を基本とするが、赤褐色の発色のものが多い。これはH-D2とした。

H-E-ネット質粘土。光る透明感ある磁物多量含有。金沢本流産物。

**4. 色・焼について**

土器の色・焼については(石・炭は無記入)、色は土器断面の中で土層を占める色調を、森林水産資源科産物検査所検査所(鹿野)・財団法人日本色彩研究所(鹿野)参照(参照 標準土色録)1994年編に基づき、その表示方法に従って示した。焼色は土器の焼成具合を、焼締まりの強い順から、堅硬一良好一良一不具合の4段階表示した。

**5. 時期について**

観察表に示す遺物群と土器群の時期については、田嶋明人氏の北陸古代土器編年表(田嶋明人1988「古代土器編年表の認定」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題』(報告録)及び田嶋明人1997「加賀地域の10-11世紀の土器群」)に基づき、観察表に示す年代(『シンポジウム北陸の10-11世紀の土器群』)に基づき、観察表に示す年代とした。古代土器は特に古代と区別しないが、中世土器については古代と区別するため年代と表記した。各土器群の編年表については、『新見町遺跡B』の総論論文で古代土器1期から3期にかけて編年表を、「新見町遺跡B」の総論論文で古代土器4期中から5期までの土器群編年表を、観察表の編年表に示す。著者の編年表の誤りについて述べているので御注意いただきたいが、観察表に現れているのは、混乱を避けるため、日輪編年表に基づいた。なお、古代中世新期の土器については、本文中で中世土器と述べたが、詳しくは『新見町遺跡B』の総論論文を御注意いただきたい。日輪編年表における、著者の考える著者年代論を付記したものを右に示すので参考とさせていただくとともに、これ以外で記載される灰黒陶器、白磁については、灰黒陶器は東海東北陶器編年表(山内伸治「新編」『白土系14号宮内閣東海東北陶器』多治見市教育委員会、1994)及び、尾野善昭「東海東北陶器編年表」『考古学』第96号、1999年)、白磁は山本佳夫編年表(山本佳夫「中世前期の貿易陶器」『既述 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会、1995年)に基づいて示した。

**6. 観察等について**

観察表に示す遺物群、土器群の調査等については主要な成形、調査断面の断面を記載し、他の主要な形制については内面図式式の分類案に基づき示した(内面図式参照1988「新見町遺跡B」に見られる明確な日文について)『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』)。日輪を平行線文、D類を同心円文とし、Hも平行線文のみならず本目のあるもの、Hも縦は右が上り斜交の木目のあるもの、H-C類は上り斜交の木目のあるもの、H-E類は本目の見えないもの、D-C類は同心円網り込みの付いた同心円本目の見えない素材使用のもの、D-C類は縦目網り込みのもの、SD類は本流産物である年輪編年表のものとした。なお、白磁では山本大寺前白磁分類案(本文150頁頁面に基づく)を提示した。

**7. 備考について**

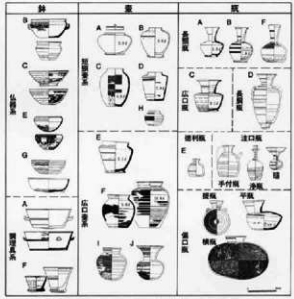
1. 土器に関する備考では、煮炊き使用痕跡や使用に伴う割破痕、付着物、彩色や焼成状況、特殊な施文や模刻、彫刻痕、へら記号、煮か焼きを記した。なお煮か○としたものは煮炊き用の煮か焼き型を記したもので、1期は煮かを使用したものの正体で煮か一段か二段積みもの、2期は煮か蓋に身に煮かのもので、そのまま柱状に積み重ねるB-C類と身煮か+身煮か交互に煮かB目類とに分けられる。蓋と身を別々にそのまま柱状に煮かのものについては蓋類とした。なお、石製品や金属製品、土製品等については重量や質量等べきことを記した。

**8. 実測番号について**

観察表に示す実測番号は、実測原図に記載された番号であり、資料に随付した資料実測番号と対比可能である。ただし、黒磁土と土器群、石製品等、種類により図に付した実測番号を分けため、番号は重複する。

**(南加賀地域古代土器編年表と暦年年代)** ※ ( ) 書は標準古墳資料

遺物群	種別	南加賀地域群	南加賀系群	暦年年代	
I 1期	古砂器	金沢山1号遺	(+)	7世紀前半 (6世紀後半)	
	新砂器	金沢山1号遺	八尾内山1号遺	(-)	7世紀中葉
		金沢山5号遺	(河田山6号遺)		7世紀4/4期
I 2期	古砂器	伊藤山7-2号遺	滝尾B-1号遺	7世紀4/4期	
	新砂器	伊藤山7-2号遺	滝尾A12号遺	7世紀4/4期	
II 2期	古砂器	伊藤山6号遺	滝尾A12号遺	8世紀前半	
	新砂器	伊藤山6号遺	滝尾A12号遺	8世紀前半	
III 3期	古砂器	鳩の本山1号遺	滝尾A12号遺	8世紀前半	
	新砂器	伊藤山6号遺	滝尾A12号遺	8世紀前半	
IV 1期	古砂器	丸野野山1-1号遺	丸野野山1号遺	8世紀2/3期 ~8世紀中葉	
	新砂器	丸野野山1-1号遺	丸野野山1号遺	8世紀中葉	
IV 2期	古砂器	二ツ梨山1号遺	八尾内山1号遺	8世紀中葉 ~8世紀4/4期	
	新砂器	二ツ梨山1号遺	八尾内山1号遺	8世紀中葉	
IV 3期	古砂器	新見山5号遺	新見山5号遺	8世紀4/4期	
	新砂器	新見山5号遺	新見山5号遺	8世紀4/4期	
V 1期	古砂器	二ツ梨山1号遺	新見山5号遺	800年前後	
	新砂器	二ツ梨山1号遺	新見山5号遺	800年前後	
V 2期	古砂器	伊藤山6号遺	新見山5号遺	9世紀2/4期	
	新砂器	伊藤山6号遺	新見山5号遺	9世紀2/4期	
VI 1期	古砂器	伊藤山6号遺	太田遺	800年前 ~800年頃	
	新砂器	伊藤山6号遺	太田遺	9世紀前半 ~10世紀前半	
VII 3期	古砂器	伊藤山4号遺	豆腐山1A遺	10世紀前半 ~950年頃	
	新砂器	伊藤山6号遺	伊藤山3号遺	10世紀前半 ~950年頃	
	新砂器	伊藤山6号遺	豆腐山7号遺	10世紀前半 ~950年頃	
VII 1期	古類	河野山PC-1新見町SK49	10世紀1/4期		
	新類	河野山PC-1新見町SK49	10世紀1/4期		
VII 2期	古類	千代子オキナ16土器、新見町SK146	10世紀2/4期		
	新類	新見町SK146	1000年前後		
中1-1期	新類	新見町SK49-SK14-SK42	11世紀2期前後		
	新類	新見町SK472-自土器群2号1	1070-1110年頃		
中1-2期	新類	新見町SK325-G自土器群2号1	1110-1150年頃		



新見町遺跡B出土土器群分類図(北野1999年加賀改良)



## 第IV章 総 括

### 一 額見町遺跡の古代「村寺」に関する考察一

#### 1. はじめに

今回の報告区域は、8世紀後半から9世紀前半を中心とする集落群という点で、これまで報告したI群集落やII群集落とは異なる様相を持つが、その中核となるものが、四面廂付獨立柱建物と井屋を伴う大型井戸と理解している。この遺構の周辺からは古代仏教系遺物が出土し、四面廂付獨立柱建物や井屋を伴う大型井戸が仏教に関係する施設であることを示唆する。以下では、古代仏教系遺物の出土状況とその内容、四面廂付獨立柱建物などの仏教的建物、井屋を伴う大型井戸について検討を加え、額見町遺跡の仏教施設の様相と特徴を提示する。

#### 2. 額見町遺跡検出の古代仏教施設に関する検討

##### (1) 古代仏教系遺物の出土状況と内容

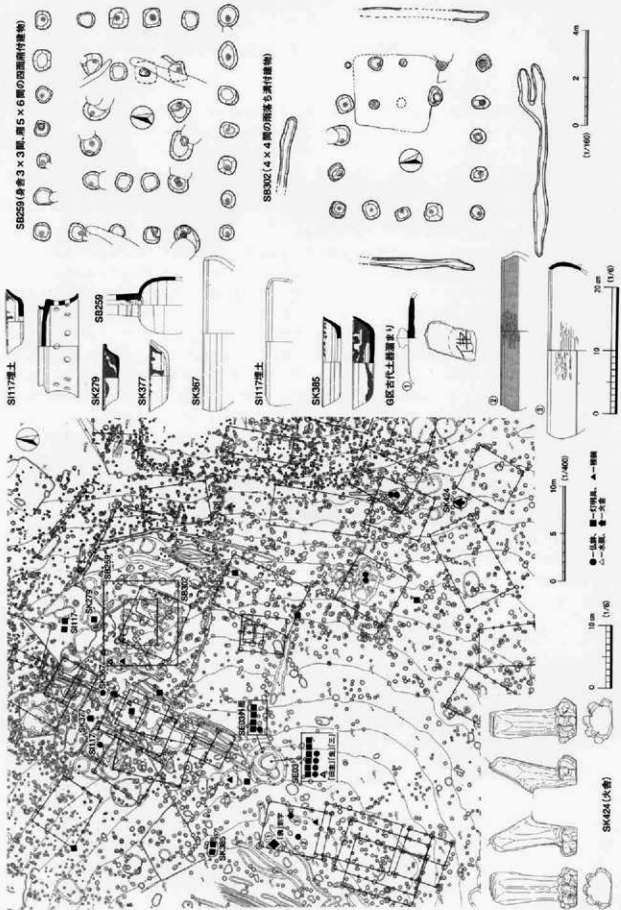
仏教系遺物には、仏像をはじめとして、經典、仏塔、仏具などがあるが、古代集落遺跡で出土する仏教系遺物と言えば、仏具に使用される金属製用具類、そしてそれを模倣した土器、瓦塔・堂などとなる。関東の古代仏教系遺物を集成した「考古資料から古代を考える会」は、仏教系遺物の模倣土製品について、仏鉢(当報告では鉢E)、後鉢、水瓶(浄瓶)、多口瓶、香炉(火舎)、三足盤、厭足付容器などを上げており(『古代仏教系遺物集成・関東』2000年)、筆者はこれに灯明具専用器種と想定する灰皿形を呈した小型鉢を加えたい。また、須恵器・土師器食膳具に灯明痕跡の付着するものについては転用灯明具とし、古代仏教系遺物に加えて資料抽出すると、額見町遺跡では今回報告の仏教的建物周辺にはほぼ出土に限られる。既に報告したI群、II群集落域では仏鉢4点、水瓶1点、火舎1点、専用灯明具1点、転用灯明具1点が出土するが、その多くが古代II二期からIII期と古く、まとまった出土の傾向もない。仏教系遺物の出土が、如何に当仏教施設周辺に集中しているかを物語る。

第110図の左に、仏教的建物とその周辺の仏教系遺物出土状況を示したが、大きくは仏教的建物の北西側地点、大型井戸SE03内とその周辺の地点、仏教的建物の南側からやや東寄りの地点の3箇所にまとまっていることがわかる。特にSE03周辺には仏教系遺物の集中出土があり、井戸内と外周土坑を合わせると図示しただけでも仏鉢5点、転用灯明具10点を数える。転用灯明具は図示していないものも含めると21点もあり、この周辺と仏教的建物周辺の出土を合わせると100点近い転用灯明具片が出土している。転用灯明具の時期は、第110・111図に示すように、古くはSK385やSE03下層出土のIV1期～IV2古期に位置付けられ、最も新しいものはSE03中上層のV2期に位置付けられる。IV1期～IV2古期は8世紀3/4期、V2期は9世紀2/4期に位置付けられ、仏鉢や水瓶、厭足付盤(火舎)、後鉢などもこの時期にほぼ該当する。

転用灯明具は主に須恵器坏Aを使用するが、須恵器形に成形した底部ヘラ切り技法の土師器坏Aも少量使用されている。この時期の南加賀の土師器食膳具は、赤彩土師器坏Aが通常であり、土師器坏Aは転用灯明具専用土器として作られた可能性が高い。法量もひとまわり小型を呈し、同様の転用灯明具が同時期の能美地城山林寺院、八里向山B遺跡でまとまって出土している(V期の短期間に営まれた一堂二宇の山林寺院、小松市2004)。

仏鉢は図示できていないものを含めると10点以上が出土する。南加賀では仏鉢の生産が低調であり、先述の八里向山B遺跡でも1個体が出土するのみである。そのような中で10個体以上の出土は突出した数量であり、継続的に仏教施設が営まれていたことを物語る。また、当遺跡の仏鉢の特徴として、須恵器よりも土師器が多いことが上げられる。土師器仏鉢は底面糸切りの平底で、極めて薄く作られており、概ねV期に位置付けられる。また、赤彩品も確認され、内外面にミガキ調整を施し、黒く光沢を持つ発色の須恵器仏鉢などもある。

その他、水瓶が2点、後鉢蓋が3点、小型瓶類が5点以上、そしてかなり写実的な獣脚意匠を施した大型三足盤が出土している。厭足部分のみの完形2本を土坑埋納しており、火舎として使用したものであろう(次回報告分)。土師質の同類型品が南加賀室跡群二ツ梨一貫山支群で定量的出土しており、IV2期からV1期頃に南加賀室跡群では盛んに生産されたようである(小松市2002)。この他に、仏教的建物の北側からこの時期のものとしては大型の圓足円面鏡が1点、圓化した範囲から西側にやや外れるが、「神功開寶」3枚の埋納、石帯1点が確認でき、いずれも仏教系遺物と呼べるものではないが、当施設と関連性を持つであろう。同様に当施設と関係のあるものとして、井戸内から土師器羽釜と井戸端から大型瓶の完形品が潰れて出土している。いずれもV1期頃に位置



第110図 都見町遺跡出土仏教系遺物とその分布状況並びに仏堂的遺物平面図

付けられるものであり、特に羽釜は金属器模倣器種として特別に生産されたものだろう。仏前への供物調理に使用された可能性がある。なお、当区域からは、これらの仏教系遺物とともに墨書・刻書土器が出土する。「佛」、「田主」、「八水」等、文字の意味するところが注目されるが、仏教施設と関連する字句もあり、遺構説明の後に改めて述べる。

## (2) 仏堂的建物に関する検討

筆者が仏堂的建物と性格付けするのは、第110図右に示した四面廂付建物のSB259と雨落ち溝を四方に持つ欄柱建物のSB302である。SB259の四面廂付建物の構造は、須田勉氏が提唱される村落寺院の主堂たる性格を付すべきものであるが(須田2006)、SB302に関しては、柱穴の並びの不確定要素と雨落ち溝の評価、出土土器がない点などから、仏堂的建物の認定に躊躇する部分がある。本文報告でも柱穴配置に関して不確定要素があるとしているが、筆者は仏教系遺物の時期相と仏堂的建物の同所建て替え、雨落ち溝の位置から考えて、積極的に仏堂的建物と位置付ける立場をとった。

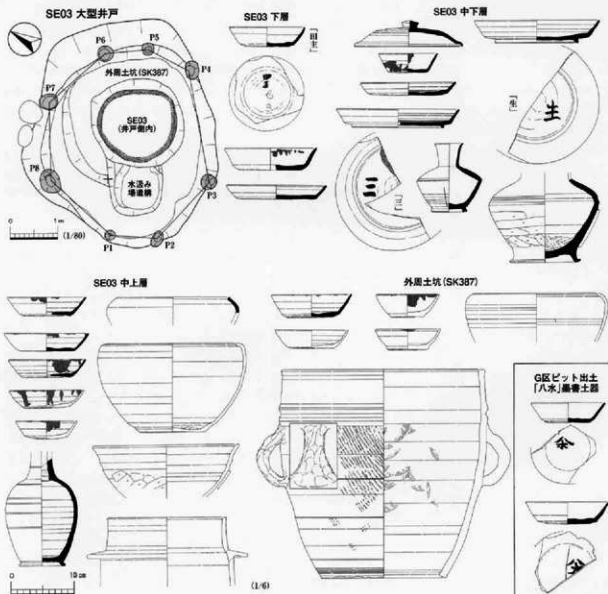
SB259は3×3間の欄柱建物の身舎に5×6間の四面廂が付く東西棟の建物で、主軸をほぼ方位軸に合わせる南面の建物である。身舎の規模は370×480cm、廂の規模は790×910cmで、身舎の柱穴掘方の方が深く大きく掘られる。柱穴掘方が一部方形を呈すものもあるが、多くは円形か不整形で、身舎と廂の柱並びが微妙に合わない。特に桁間柱穴に関しては本数も合わず、仏像を身舎の桁間柱並びに合わせて南面配置した場合、廂の柱がちょうど身舎の柱間にあたり、仏像が建物外部からは見えない構造となっている。このため、四面廂付建物とは言い難いのではないかと考えたが、完全に東西棟に主軸を持つ建物は、観見町遺跡ではこの建物に限定されること、外側と内側の建物の柱規模関係や間隔などから、建替え重複とは考え難く、四面廂付建物と断定し、そのような身舎と廂の柱配置が仏像を外側から見せるような建物構造をしていないという点が、当建物構造の特徴を示すものと判断した。つまり、身舎内に須弥壇が配置され、その上に仏像が安置されるような、定型的な寺院建築とは異なっていた可能性がある。関東の集落遺跡内で確認される仏堂的建物の事例では、このような身舎と廂との桁柱の本数が合わない事例や、柱間隔の違いにより身舎と廂で柱筋が通らない事例は少なからず確認でき、集落遺跡内で確認される仏堂建物構造の特徴ともされている。このような仏堂的建物について論じた須田勉氏は、この四面廂付建物をはじめとする仏堂的建物について、廂部構造が土庫であった可能性が高いことと構造や造営にかかわる技術が在地の豪族居宅に極めて近いことから、在地豪族の居宅建築から発展し、在地の中で専用寺院建築に昇華、定着したものと位置付けている(須田2006、50頁)。またこのような廂部構造について、伽藍寺院の金堂に見られる廂部の利用とは異なった法会上の機能が想定されるとしており、寺院建物とは廂部空間の構造的違い、例えば身舎部分から壁で仕切られる構造を有していた可能性を指摘されている。

以上述べたSB259の柱穴からは水瓶と外底面墨書をもつ須弥器盤Aが出土する。盤Aの器形からV2期(9世紀2/4期)頃と判断され、その廃絶時期の一端を知ることができるが、この建物に重複する形で、主軸を東へ17度振る東西620cm、南北600cm程度の正方形に近い独立柱建物、SB302が存在する。3×4間の南北棟に東側へ1間の廂が付く構造にも復元されているが、その場合の身舎の桁柱は細く不安定なため、4×4間の正方形欄柱建物である可能性を支持したい。東側の柱がやや不安定だが、北西南の3面の柱穴掘方はしっかりとした大形の掘り込みをもつもので、柱穴列からそれぞれ200～240cmの所に雨落ち溝が掘られている。この区域の遺構重複が多く、明確に捉え切れていない部分もあるが、ほぼ四面に溝を伴うものと予想でき、柱芯から2m以上軒が出る建物であることを物語ろう。通常の官衙級建物でも軒の出の長さは150～200cmとされており(山中2003、98頁)、仏堂としての寺院建築に順ずる屋根構造がこのような軒の出の長さに繋がったものと予想したい。この独立柱建物からは古代の土器が出土しておらず、時期を復元できる資料がないが、四面廂付建物がV2期に廃絶した建物とすれば、大型井戸の廃絶時期や周辺の仏教系遺物の終焉時期と一致しており、四面廂付建物を建替えとし、それに先行する建物としてSB302を位置付けたい。当区域で仏教系遺物の出土が始まるIV1～IV2古期をSB302の成立期に想定して初期仏堂に、仏教系遺物の出土が盛んとなるV1期をもって四面廂付建物へ建替えられたものと推察したい。この2棟の仏堂的建物は、建替えが行われながらも、仏堂空間を保持したものであり、その南側は仏教行事を行うような広場的な空間として位置付けられていたであろう。なお、この仏堂的建物に重複する欄柱建物ももう1棟(SB267)存在するが、この独立柱建物は柱穴からII3期の須弥器が出土しており、仏教系遺物の出現以前ということで、仏堂的な建物とは性格の異なるものと理解したい。

### (3) 古代大型井戸に関する検討

これまで述べた仏堂の建物の南西側には大型井戸 SE03 が存在する。井戸本体の径が上端で 150～160 cm、深さが井戸側上端から下底まで 580 cm を測るもので、下位の 150 cm 部分のみ一本の削り貫き材を 2 枚合わせて井戸側とする。井戸本体の周辺には 480 × 360 cm の大型土坑の掘削があり、井戸周縁は平坦なテラス面を形成する。そのテラス面の内部、井戸の南西側に併設して縦横 1 m 程の方形プランを呈すステップ状の掘り込みがあり、形態や位置からこれを水汲み場と理解した。当水汲み場設置により、土坑はこの部分が張り出す形状となるが、それに合わせるかのように小柱穴 P1・P2 が 1 m 間隔で、土坑際に掘られる。柱穴は井戸の主軸上の奥側へも 2 本 P5・P6 が土坑際に掘られており、この 4 本の柱穴を基点に左右に 2 本対の柱穴を配し、計 8 本の小柱穴が並ぶ。水汲み場の手前に並ぶ P1・P2 を入口として 8 本柱で建てられる井戸の覆屋を復元することが可能で、しっかりとした建物構造を有するものではないが、外観的には八角形を呈す井屋と認識されるには十分なものであろう。

このような井戸の深さのためか、遺物出土は埋土の各段階に分けられる傾向があり、通常は井戸底埋納されるような口頸部を打ち欠いた完形品の短頸壺や完形の小瓶が、井戸が埋め戻される過程の中で出土してくる。そのようなことから、井戸がある程度埋められた後も井戸の機能を有していた可能性も考えられるが、井戸の下層埋土出土のものが V 2 期に位置付けられ、中上層埋土のものと接合関係にあることを考えれば、仏堂の建物が廃絶する V 2 期に一気に埋め戻されたと考えるのが穏当だろう。井戸の上層埋土にあたる中上層埋土から転用灯明具



第 111 図 額見町遺跡の井屋をもつ大型井戸と出土遺物並びに仏教系土器

をはじめとして、仏鉢や浄瓶などが多く出土する背景には、そのような法具が不要となり、井戸埋納とともに一括廃棄した様子が示唆する。井戸の埋没時期はⅤ2期だが、井戸の掘削時期に関しては掘方等から遺物出土がなく、裏付け資料がない。ただ、井戸内や井戸の外周テラスから出土する転用灯明具はⅣ1期からⅣ2古期に位置付けられるものが定量存在しており、その頃から井戸として機能していたことが窺い知れる。

このような極めて深い井戸の掘削は、北陸では例を見ないものであり、当遺跡の立地地形が台地であるからと言っても、尋常ではない深さである。当地点から西へ150mも行けば、柴山湯の高縁に達することができ、単なる水を得るという視点で言えば、これだけの井戸の掘削は不要である。Ⅱ世紀後半以降の大型総柱建物群を構成する段階になって、同じ領域に新たに井戸が2基掘削されており（SE01・SE02）、この空間を聖域と位置付け、この地における湧水に拘ったものと見なされよう。特別な意味を持つ井戸であり、特に古代は井屋を伴う構造の大型井戸である点を考え合わせれば、湧き出る清浄な泉を得るための宗教的な観念に基づく特別な装置であったと性格づけできよう。仏教との関連で言えば、所謂「開伽井」に相当するものであり、ここで汲まれる清浄な泉は、仏や菩薩へ備える香水または参拝者への加持香水に使用されたのだろう。

#### (4) 仏堂的建物と他の建物群に関する検討

以上、2棟の仏堂的建物と大型井戸について検討したが、これ以外にも周辺には同時期に建物が営まれていた可能性が高く、建物のいくつかは仏堂的建物と関連して仏教施設を構成する機能を有していた可能性がある。多くが次回報告分の掘立柱建物であるため、出土遺物も含め十分な検討がなされていないが、雨落ち溝を四方に持つ正方形掘立柱建物のSB302と、南面する四面廂付建物のSB259の2棟の仏堂的建物と主軸方位の合う建物を抽出したのが第112図である。

初期仏堂としたSB302に主軸を合わせる建物は、西側に2×2間の総柱建物3棟（SB255、SB266、SB321）がほぼ等間隔で柱筋を合わせて建ち並んでおり、その建物群と同じ並びで南西側に大型井戸SE03が存在する。北側のSB255とSB266は東柱が2本立つタイプ、SB321は田字の総柱タイプで、いずれもしっかりとした倉庫様の建物と言えものだが、東柱の形態が異なる点は気になる。仏堂的建物の南東側には3×4間の掘立柱建物が南北棟に1棟（SB326）位置し、軒を連ねる格好となる。その他にも、類似する主軸方向をもつものが、SB326の南側に2棟（SB311・SB333）、SE03の南西側に2棟（SB303・SB305）存在するが、同時期に存在したとしても、建物配置の観点から、仏堂的建物の付属施設として存在していたとは考え難い。仏堂的建物は、南側建物空白地に法会等を行う広場をあて、その西側に総柱建物群と大型井戸を、東側に南北棟の掘立柱建物を配置する建物構成であったと推察する。3棟の総柱建物全てが仏堂的建物に付属する建物であった可能性もあるが、建物の

雨落ち溝付掘立柱建物を主軸とする段階：Ⅳ1～Ⅳ2期？



四面廂付掘立柱建物を主軸とする段階：Ⅴ1～Ⅴ2期？



第112図 2時期の仏堂的建物に主軸を合わせる掘立柱建物の配置図（S=1/600）

位置関係と北の2棟と南の1棟の東柱構成の違いから、最も南側のSB321のみが関連施設であった可能性が有ろう。そうなればSB321は法具などを取る倉として、欄柱建物SB326は僧坊的な性格の建物として、SB302の主堂を奥に配置し、左右にコ字配置する建物構成であった可能性が有ろう。

以上のSB302の主堂の建物から四面附付建物のSB259へ北に主軸を振り、ほぼ方位軸に合わせて建て替えられるが、類似する主軸をもつ建物は、西側にSB322、東側にSB225、南側にSB332とSB334がある。SB322とSB225はいずれも2×3間の南北棟の欄柱建物で、仏堂の建物からほぼ等間隔で存在し、その南側にも南北棟の欄柱建物が数棟存在する。特にSB317は細長い建物であり、僧坊の可能性が有る。仏堂の建物の左右に位置する建物と合わせて、関連すると位置付けられよう。先述したSB302の建物構成においては、仏堂の建物の南側に広場の建物空白地が存在していたが、当建物構成においては、仏堂の建物の南側正面6m程の地点に掘立柱建物が存在している。SB259とほぼ同じ主軸を向くSB332とSB334の2棟の2×2間の建物が重複存在しており、特にSB334は倉庫様の建物形態であるものの、柱間の狭さと柱穴の大きさ、梁間が棟持ち柱である点など特殊な感がある。そもそも主堂の建物の南側に隣接して倉を置く建物配置は考え難く、仏堂に付随する礼拝堂的な建物である方が考え易いだろう。

また、もう一つの可能性として、当建物が棟持ち柱を持ち、柱の太い小型建物であるという特殊性から、「社」的な性格を有する建物であった可能性もある。この仏堂の建物の存在する箇所から真直ぐ南方へ200m、台地尾根を上った頂上部には、式内社「気多御子神社」の伝承を持つ神社が現在建てられている。この神社は、近世額田村の村社として存在した神明宮を近代になって気多御子神社と改称したもので、その名は境内に残る社叢を「キタモリ＝気多森」と呼んでいたことから来ているとされる。柴山湯に面する小高い場所にあり、同じ標高の尾根頂上には三洲台古墳群最大の方後円墳である、白のはぞ古墳が存在する。古代の社の置かれる場所は湧水地点に近接する小高い台地上であることが多くとされており(根本2003)、まさに当地は適地であったと言えよう。湧水地点との一体性が重要との視点で言えば、初期の「社」が大型井戸のSE03に近接して存在することは十分に考えられ、仏教施設に隣接する形で「社」が営まれていた可能性が有るだろう。

仏堂の建物と「社」の併設する事例は出雲で確認例がある。青木遺跡や杉沢遺跡など4遺跡が報告されており(内田2006)、杉沢遺跡では「堂」と「社」とされる建物遺構が6mほどの距離を置いて並列配置されるなど、近接した位置関係を有している。

額見町遺跡からは神祇信仰に関連する遺物出土はないが、集落群が全盛期を迎える7世紀後半～8世紀中頃にはA地区やH地区などで大規模な土器廃棄遺構が確認される。須恵器類などの大型貯蔵具や長頸瓶類を中心に廃棄されており、その他壺瓶類、小型瓶類のほかにも、円面硯や須恵質棒状錘、須恵質動錘車、土馬、獣足付羽釜、鳥形瓶など特殊品が廃棄される。大甕等大型貯蔵具や瓶類が多いのは、酒に関わる祭祀が行われたことを示唆しており、古来から続く神祇信仰に基づく集

SB334(深淵200cm, 幅220cm)



第113図「社」的遺構図



第114図 額見町遺跡の仏教施設の位置と気多御子神社

落群内祭祀の様子を示すものと言えよう。それが当仏教施設出現とともに衰退していく様は、仏に帰依することで簡易に現世利益を得られるといった、新たな仏教信仰の教えが民衆に広く受け入れられたことを示すだろう。

#### (5) 仏教的建物周辺の刻書、墨書土器に関する検討

以上の仏教施設の性格を考える上で、文字資料の示す意味は重要である。ただ、額見町遺跡では墨書土器をはじめとして数えるほどしか資料はなく、しかも今回報告の仏教施設周辺に集中する傾向がある。刻書では「佛」、「大」、「生」、墨書では「生」、「田主」、「八水」、「古」などがあり、特に「佛」刻書は当区域の仏教施設が仏教と関連するものであることを端的に示してくれよう。「佛」刻書は焼成前に生産地に記されたものであり、当仏教施設へ供給されることを前提に生産されたものである。当刻書が須臾器蓋蓋の天井内面に記されていたことはどのような意味があるか定かでないが、仏や菩薩などの本尊に捧げる容器であったことを示すだろう。

他に当仏教施設との関連性を示す資料に、111 図の右下に示した「八水」と墨書した須臾器坏Aがある。四面廂付建物と同時期のもので、仏堂の建物の北西 40 m 程の位置にある 2 つの隣接する小ピットに埋納されていた。「八水」の意味は地名の可能性もあるが、仏教との関わりで考えるならば、「八功德水」という言葉がある。弥陀如来の報土にある池の水を示す言葉で、八種の勝れた特質（功德）を備えた水とされておられ、別名「八味水」、「八定水」と略称されることも多かったようである。つまり、「八功德水」を略記した可能性があり、その場合は SE03 から汲まれる浄水のことを示した可能性があろう。当墨書土器は香水を入れる容器と位置付けられ、仏前に捧げられていたものだろう。また、この井戸の井屋が八角形の外観をもつ建物であった可能性が高いことから、そこで汲まれる浄水という意味で、「八角堂の水」を略し、「八水」と呼ばれていた可能性もある。いずれにしても、井戸で汲まれる浄水（香水）を仏に捧げるための容器として墨書した可能性が高いと判断される。

これ以外は直接仏教施設に関連する墨書は確認できないが、SE03 に廃棄された「田主」墨書土器は、仏堂の性格を考える上で重要である。「田主」は平城宮木簡や竹簡などに人名として記載されているものであり、氏族名を示す可能性もあるが、表記文字の通り田の主という意味で記されたとすれば、田の所有者＝領主を示すこととなろう。ただ、当集落遺跡が農業経営を基盤とする伝統的な集落ではなく、手工業生産を主な生業とする移民集落である点を考え合わせれば、単に田の所有者を意味するものではなく、広義での領主層、額田郷を束ねる郷長的な存在として記された可能性があろう。また、そのような郷長的な存在を記すのに、意識的に「田」の字句を使用した点に関しては、村落内祭祀的な意味合いも感じる。先述した「社」的建物の存在を考えれば、仏堂の建物と「社」的建物と併存する中で、仏教行事である悔過法会とともに「儀制令・春時祭田染」にあるような村落内祭祀が行われた可能性があろう。村落内祭祀においては、それを司る「社首」的存在が必要であり、「田主」の墨書が意識的に記された背景にはそのような意味合いが込められていた可能性もあると見たい。

以上の墨書は複数字句でその性格を読み取り得るものだが、額見町遺跡で最も多く記される墨書に「生」の 1 字句墨書がある。SE03 で 1 点、仏堂の建物の北側に隣接の SK364 で 1 点出土しており、C 地区 SK116 でも 2 点が出土する。また、仏堂の建物南側の広場の空間に近接する SK409 では、焼成前に「生」を刻書した須臾器坏 B 身が出土しており、これら「生」文字表記が仏堂の建物の周辺に集中することから、上記の墨書土器同様に、当施設に関連するものと推察される。墨書に加えて刻書が存在することは、「佛」刻書同様に当施設への供給を前提に記されたものであり、「生」を仏教的ないしは祭祀的な字句と考えられなければ、「田主」同様に主宰者として記された可能性があろう。「生」を人名と見た場合、越前足羽郡や坂井郡に広く分布する「生江臣」や「生部」の氏族名が目される。江沼郡域内で確認されていない氏族名だが、その可能性は十分にありと見たい。

[生]刻書 (SK409)



[生]墨書 (SK116)



第 115 図 「生」書土器

### 3. まとめ～額見町遺跡の古代仏教施設の性格と南加賀の山林寺院との関係～

これまで、額見町遺跡の古代仏教施設と関連する出土遺物について述べたが、まとめると以下に要約できる。

当仏教施設は、その出現を 8 世紀中頃とし、8 世紀末頃には初期の仏堂の建物から四面廂付の仏堂の建物へ替えられたものとする。初期仏堂は雨落ち溝をもつ正方形擬立柱建物の形態を呈し、他の建物群との隔絶性が

低い「小堂」的な風貌をもつ建物として存在した。それを主堂として南側東西に法具を収める倉や僧坊、「開伽井」に匹敵する井屋をもつ大型井戸を配置する建物構成であったと理解される。お堂の南側は建物空白地として広場的な位置付けがなされ、悔過法会などとともに農耕祭祀的な行為も行われたものだろう。

建替後の仏堂は四面廻廊付建物構造となり、他の建物群とは隔絶した構造と規模をもつようになる。同時に建物主軸も、初期仏堂段階の集落群の主軸に合わせた建物方位から、独立した南北方位軸に合わせた建物軸となって、多分に南面を意識した東西棟の建物を志向する。「小堂」よりも格上の「金堂」的な風貌を備えた建物を主堂とし、僧坊的な長方形建物を南側東西に配置する建物構成となる。大型井戸は継続して営まれ、悔過法会、農耕祭祀の中核をなす信仰の拠所となっていたものだろう。建替後の仏教施設で特徴的なのは、主堂の南面に隣接して営まれる小型棟持ち柱建物の存在である。当建物は礼堂的な性格をもつ可能性があるものの、筆者は当地に隣接する式内社「気多御子神社」伝承地の位置関係から、「社」に匹敵する神祇信仰に通じる建物の可能性を有力視したい。

初期仏堂段階では大型井戸自体が神祇信仰の場であった形態から、それに併設して神を祭る建造物として「社」が成立する背景には、この時代に進められた政治的な神祇祭祀統括があったろう。祭祀場に「社」が建てられることで公的な祭祀場として認知され、それが「延喜式」神名帳に記載の2861所の「社」に繋がったと予想する。仏教施設があった場所に「社」が併設される形態を探るが、神祇信仰は集落成立時より存在した在地信仰であり、初期仏堂段階においても、農耕祭祀にまつわる宗教行事は執り行われていたであろう。「社」という建物自体の出現は平安期の政治的な意思による時代の潮流に則ったものであったと理解したい。

以上の仏教施設は須田勉氏が提唱する村落寺院に該当するものだが、北陸においてSB259のような「金堂」的な風貌を有する仏教施設の確認事例は他になく、額見町遺跡の初期仏堂に近い、正方形の掘立柱建物の形態をもつ「小堂」の建物を伴う事例が少数例（金沢市上荒屋遺跡、白山市源波遺跡、富山市長岡杉林遺跡）確認されるにとどまる（出越1999）。北陸で確認される多くの仏教系遺物を出土する遺跡は、建物遺構の中に特に仏堂的建物の特徴することはできず、仮に集落遺跡内に「小堂」的建物が存在していたとしても、通常の居住用建物とは異なる構造や隔絶した空間を形成することなく、通常の建物内に信仰対象を納め置き、仏教行事を執り行うのが一般的だったのだろう。当該状況は北陸のみならず、西日本でも同様の状況と推察されるが、須田勉氏が集成した関東や東北の事例における、明確な仏堂建物として他の建物に卓越する事例が多く確認される状況とは大きな違いがある。仏教信仰を受け入れる地域環境や歴史的素地の違いにもよるだろうが、このような一般的建物と隔絶した建物構造や空間を形成する背景には、8世紀後半以降も東国が一般居住建物として堅穴建物を継続的に採用し、西日本のような掘立柱建物へ転換していかなかった状況が関連しているようにも感じる。西日本でも集落内での建物の再検討を行う必要性はあるが、建物構造だけでは判別しにくい状況にあるのが実情だろう。

北陸地域の事例検討をした出越茂和氏は、先の論稿で「小堂」的建物の存在する遺跡に仏教系遺物を定量出土する遺跡を加えて、「里寺」と呼称し、それらは荘園関係や土地開発関係、手工業生産関係、社会的上位の位置にある遺跡には限られるとした（出越1999、174 - 178頁）。つまり、仏堂を構え、定期的な仏教活動を行えるだけの権力や財力を有する在地権力者の存在が成立の前提にあるわけだが、在地権力者はこうした仏教政策を行うことによって、地域の墾田・山林開発を行う新興村落における民衆と在地権力者との精神的結合を強化し、新たな支配論理を形成しようとしたとされている（須田2006、65 - 66頁）。このように仏教施設は単一の集落に帰属するものではなく、在地権力者の支配領域内で生産活動に従事する民衆に対する信仰の拠所として設置されたものであり、そのような成立要因に限られた遺跡でしか確認されない状況に繋がっていたものだろう。

その中でも突出した存在の額見町遺跡の仏教施設は、僧坊的建物や「社」的建物も併設するなど、まさに信仰拠点と呼ぶにふさわしいものであった。その仏堂建物として整った形態や他の居住用建物から隔絶した配置構成、台地集落にもかわらず井泉に均った井戸掘削などは、在地権力者の権力、財力の大きさを示すものであり、支配統括する対象領域は郷単位を越えて、広く三湖台地古代集落群全域または丘陵部手工業生産遺跡群域を包括して設定するような、広域の集落民を対象とする信仰拠点であった可能性が高いだろう。

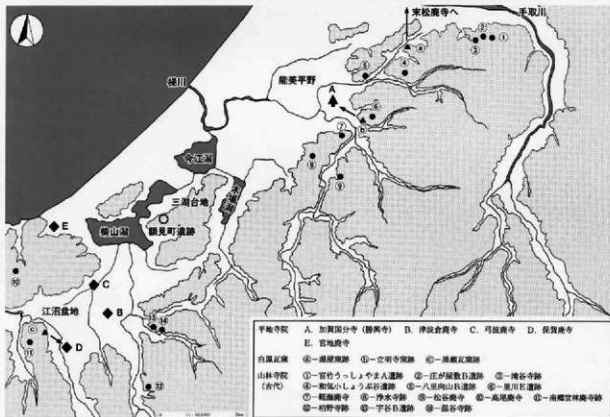
以上、村落内での仏教信仰が8世紀中頃以降に盛んとなるのと時期を同じくして、里からほど近い山間部へ少数の堂舎で構成される仏教施設が造られ始める。所謂山林寺院であり、南加賀地域では8世紀2/4期の松谷庵寺を始めとして、8世紀中頃から末の宮竹うっしよやま遺跡、9世紀前半の八里山山B遺跡、9世紀後半の里



川E遺跡、10世紀前半の軽海庵寺、9世紀後葉～15世紀の浄水寺跡など、能美地域を中心に営まれる。江沼地域においても、9世紀後葉～11世紀に営まれた南郷堂林庵寺跡をはじめとして、宇谷B遺跡や温谷寺跡などでも古代の山林寺院が確認されており、江沼盆地内に営まれる津波倉庵寺、保賢庵寺、弓波庵寺、宮地庵寺などの白鳳期寺院が8世紀代まで継続的に営まれていたことが、このような山林寺院成立に繋がった可能性があらう。

能美地域の平野部には、伽藍配置を有す平地寺院の確認はなされていない。ただ、梯川流域の古代集落遺跡からは、9世紀後半～10世紀の軒先瓦が定量出土しており、当地域の一角に加賀国分寺が存在していた可能性を示唆する。国分寺推定地とされる国府台地は昭和初期の耕地整理によりほぼ壊滅状態であり、場所の特定は困難な状況だが、出土する平安宮式軒先瓦の時期は9世紀3/4期頃に位置付けられ、841年に勝興寺を転用して成立する加賀国分寺の年代に近い(小松市2006)。能美地域の山林寺院が9世紀後半以降に活発化する背景には、国分寺成立に伴って越前国分寺より移配される講師1名と僧10名の存在があったと言える。また、同時に国分寺の前身である定額寺がこの台地上に存在していた可能性が高いこととなるが、国分寺推定地では白鳳期に位置付けられる瓦も出土しており、周辺集落からも同時期の軒先瓦が出土する。さらに近年、国分寺推定地から東へ17kmの丘陵縁部で7世紀後葉に位置付けられる瓦陶兼棄窯(立明寺窯)が発見され、定額寺存在の可能性を示す資料が少しずつ見えてきた。定額寺は官寺に準ずるものであり、国家の庇護を受け、僧侶が常駐する七堂伽藍を備えた寺院である。寺に常駐する僧侶は、その習(勉学)・行(修行)の場、または密教的な行法により国域の厄災消除を祈願する道場の場合、里の集落から隔絶された山林に求め、西日本各地の寺院同様に、8世紀中頃以降、平地寺院に付随する機能を担って、能美地域の山林寺院は成立していったのだろう(上原2008)。

以上のように、山林寺院は平地寺院との連携の中で成立してくるものと言え、主堂を礎石建物とする点や建物の柱配置が仏像を安置すべき須弥壇を軸に設定されている点など、寺院建築様式に基づく建物構造を有している。成立当初から寺としての位置付けが明確な建物であり、村落の仏堂建物とは少数の中小規模倉庫で建物構成される点で共通するものの、根本的な主堂の建物構造においては明らかに違っていただろう。それは本稿の前半で述べたように、村落の仏堂建物ももとは在地の豪族住宅建物に起源があり、仏教建築として成立していない点を論じた須田勉氏の説に明確に論じられている部分でもある。以上の視点から、村落の仏教施設を平地寺院、山林寺院と同列に「寺院」と呼称することには躊躇すべきであり、他の用語を検討する必要がある。



第116図 南加賀地域の山林寺院分布と平地寺院、観見町遺跡の位置(S=1/200,000)

平安初期の仏教説話集『日本書紀』に登場する寺堂について、その表記の仕方により性格を分類された直木孝次郎氏は、「寺」は官寺や郡寺などの在地豪族の建立した伽藍配置を伴う寺院を指し、「山寺」は山林修行の場としての修行寺、「堂」は村人の協同かもしくは在地有力者によって建立、維持される堂を指すとされた（直木 1969）。確かに、古代村落に存在したであろう多くの仏教施設は、「堂」と言える小規模施設であり、寺院建築を基本としない点からも、寺と呼ぶべきものではないと感じる。ただ、関東や北陸の仏教系遺物出土遺跡からは「寺」や「〇寺」と墨書された土器を出土することが多く（笹生 1998、出越 1999）、これら仏教施設が集落の中で「寺」と認識されていたことは間違いない。これに対し、「堂」と記した墨書土器は上記集落では確認がなく、建物自体は「堂」レベルであったとしても、「仏像」または「仏」に匹敵する信仰対象を納める仏教施設という視点で、民衆は「寺」と呼んでいたのだろう。以上より、筆者は村落の仏教施設について規模の如何に関わらず、村の中の寺的機能を有するものという意味で「村寺」と総称したい。なお、このような村の仏教施設について、南木佳士著の小説『阿弥陀堂だより』を例に「村堂」の風景や在り方について触れた宮瀧交二氏の論稿は、村落経営の視点で「村寺」を位置付けており、イメージを膨らませてくれる（宮瀧 2006）。

以上、「村寺」は在地社会の中で僧が法会を行うものであったと言えるが、『日本書紀』や『東大寺風通文編』をもとに僧の都鄙間交通と「村寺」の役割を論じた鈴木景二氏は、在地権力者が開催する私的法会において、民衆を前に僧が、檀越（権力者）の徳を賛嘆し、寺堂の縁起、地名の起源、檀越の先祖以来の伝統、檀越の正当性などを説くことで、権力者の私的財源による功德が呪術的恩恵として民衆に与えられたとし、これによって在地に根付く民衆の共同体意識を解体し（または在地神祇信仰を仏教に取り込む形で）、在地権力者が民衆の個別支配を可能とする、新たな在地社会秩序を形成しようとしたと性格付けた（鈴木 1994）。また、地方の法会に招かれる僧は中央の官大寺僧であったとし、国師・講読師制度に基づく部内巡行や修行のための題圖、また在地権力者に屈請されて地方へ赴いたとされた。官大寺僧は、国分寺の僧や在地の自度僧、沙弥など僧の候補者と接し、ともに山林寺院等で修行することで、在地の僧達と師弟関係を結び、村寺における法会においても活動をともにしたとされる。

「村寺」を舞台とした民間の仏教信仰はこのような僧達によって支えられていたものであり、在地権力者は官大寺僧を屈請または自度僧などを抱え込むなどしたのだろう。「村寺」は8世紀後半以降に、在地社会の新たな支配体制を模索する権力者（新興勢力や富裕層など）にとって、民衆を精神的にコントロールできる有効な装置であり、在地の神祇信仰もその中に組み入れられることで、民衆に広く受け入れられたものと考えられよう。

以上、顔見町遺跡の仏教施設について述べたが、その遺構の性格を論じるにおいて、やや論拠が曖昧な部分があることは否めない。未報告部分もあり、詳細な検討はできなかったが、今後の報告の中で再考を期すことでご容赦いただきたい。また、本稿を草するにあたり、仏堂の建物に関しては須田勉氏、出越茂和氏、池田敏宏氏に、墨書土器に関しては湯川善一氏に、ご指導をいただいた。稿の末尾ではあるが、感謝の意を表したい。

#### 引用文献

- 上原真人 2008「北陸の古代寺院と山林寺院—松谷寺跡をめぐる—」第27回まいぶん講座資料 小松市教育委員会  
 内田律雄 2006「出雲の神社遺構と神祇制度」『古代の信仰と社会』国士館大学考古学会編  
 小松市教育委員会 2002「二ツ壱—貫山窟跡」  
 小松市教育委員会 2004「八里向山遺跡跡」  
 小松市教育委員会 2006「まいぶんフォーラム成果報告書 加賀国府と中宮八院」  
 笹生 衛 1998「古代集落と仏教信仰—千粟案内の事例を中心に」『第3回特別展 仏の寺まう空間—古代蔵々浦の仏教信仰—』茨城県土浦市上高津塚ふるさと歴史の広場  
 鈴木景二 1994「都鄙間交通と在地秩序—奈良・平安初期の仏教を素材として—」『日本史研究』379  
 須田 勉 2006「古代村落寺院とその信仰」『古代の信仰と社会』国士館大学考古学会編  
 出越茂和 1999「古代北陸における官寺・山寺・里寺」『北陸の考古学Ⅲ』石川考古学研究会  
 直木孝次郎 1968「日本書紀に見る『堂』について」『奈良時代史の諸問題』瑞書房  
 根本祐樹 2003「古代神社の立地・環境—常陸国風土記行方郡条を中心として—」『神道宗教学会第57回学術大会 古代の神社』國學院大學  
 宮瀧交二 2005「村落と民衆」『列島の古代史3 社会集団と政治組織』岩波書店  
 山中敏史他 2003「古代の官衙遺跡Ⅰ遺構編」奈良文化財研究所



写真1 額見町遺跡遺景斜め航空写真（北西方向から）



写真2 額見町遺跡遺景斜め航空写真（北東方向から）

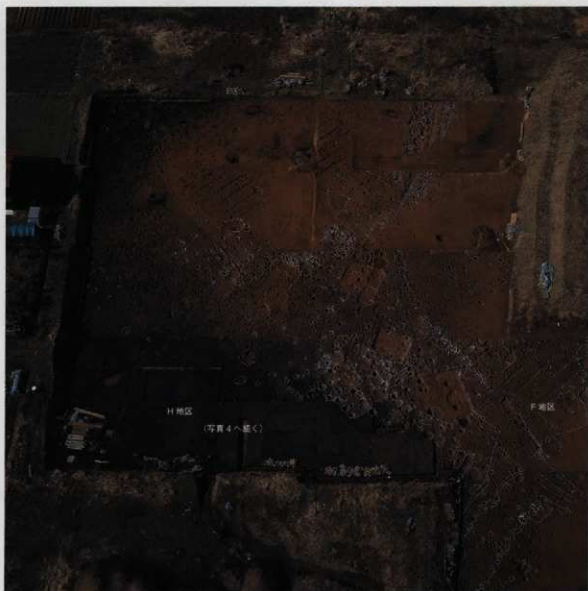


写真3 G地区遺跡垂直航空写真



写真4 H地区北面垂直航空写真



写真5 観見町遺跡区割りと今回調査区域位置



写真6 SI112 完掘全景



写真7 SI112 L字型カマド完掘全景



写真10 SI112 カマド煙道



写真8 SI112 L字型カマド



写真9 SI112 カマド主部



写真11 SI112 遺物出土状況



写真12 SI112 カマド覆土 (Dライン)



写真13 SI112 煙道修復痕跡



写真14 SI112 カマド煙道断ち割り

(SI112 遺構調査写真)



写真15 SI114 完掘全景



写真16 SI114 カマド完掘全景



写真19 SI114 遺物出土状況



写真17 SI114 カマド覆土状況



写真18 SI114 カマド焚口



写真20 SI114 掘方状況

〈SI114 遺構調査写真〉



写真21 SI115 完掘全景



写真22 SI115 カマド完掘



写真23 SI115 遺物出土状況



写真24 SI115 掘方完掘



写真25 SI115 カマド掘方断ち割り

〈SI115 遺構調査写真〉





写真 26 SI116 完掘全景



写真 27 SI116 カマド



写真 28 SI116 カマド覆土

《SI116 遺構調査写真》



写真 29 SI117 完掘全景



写真 30 SI117 遺物出土状況



写真 31 SI117 掘方状況

《SI117 遺構調査写真》



写真 32 SI118 完掘全景



写真 33 SI118 カマド焼熱残存状況

《SI118 遺構調査写真》



写真 34 G区西端の墓塚群（部分）



写真 35 SK327 上層被熱箇所掘り状況



写真 36 SK327 上層被熱除去後・完掘状況



写真 37 SK329 完掘状況



写真 38 SK330 遺物出土状況



写真 39 SK370 遺物出土状況



写真 40 SK472 遺物出土状況アップ

《土坑 遺構調査写真》





写真 41 SE01 上層完備全景 (北側より撮影)



写真 42 SE01 上層完備全景 (西より)



写真 43 SE01 上層土層断面



写真 45 SE01 最下層 (標高 4600 m 地点) 掘削・遺物出土状況



写真 44 SE01 上層土層断面アップ



写真 46 SE01 最下層遺物出土状況 (西側より撮影)



写真 47 SE01 最下層遺物出土状況 (北側より撮影)



写真 48 SE01 最下層土層状況



写真 49 SE01 最下層出土木製塊



写真 50 SE01 最下層遺物除去後

《SE01 遺構調査写真》



写真 51 SE03 完備全景



写真 54 SE03 外周土坑 (SK387) 土層ベルト



写真 55 SE03 外周土坑 (SK387) 土層アップ



写真 56 SE03 外周土坑 (SK387) 土層アップ



写真 52 SE03 外周土坑 (SK387) 遺物出土状況



写真 57 SE03 外周土坑 (SK387) 出土遺物除去後、土坑底面遺物及び井戸プラン輸出



写真 53 SE03 外周土坑 (SK387) 遺物出土状況アップ



写真 58 SE03 上層掘削時の埋土と遺物出土状況

(SE03 遺構調査写真 1)



写真 59 SE03 上層半截状況



写真 60 SE03 上層土層断面アップ



写真 61 SE03 標高 5,000 m 地点まで掘削



写真 62 SE03 標高 5,000 m 地点での  
埋土・掘方土状況



写真 63 SE03 標高 5,000 m 地  
点から下底まで重機による平截



写真 65 SE03 標高 5,000 m 地点での完掘、井戸側検出



写真 64 SE03 標高 5,000 m 地点での完掘



写真 66 SE03 井戸側アップ (北東側より撮影)



写真 67 SE03 井戸側アップ (南西側より撮影)



写真 68 SE03 標高 5,000 m 地点での半截断面状況

《SE03 遺構調査写真2》



写真 69 SK255 土層断面



写真 70 SK255 完掘

《SK255 製炭土坑 遺構調査写真》



写真 71 SJ52 検出状況



写真 72 SJ52 断ち割り状況

《SJ52 鍛冶炉 遺構調査写真》



写真 73 SJ62 検出・遺物出土状況



写真 74 SJ62 完掘状況



写真 75 SJ62 壁熱状況



写真 76 SJ62 焼床断ち割り状況

《SJ62 土師器焼成坑 遺構調査写真》





写真77 SD30 A区完掘全景



写真78 SD30 A区・Bライン土層



写真79 SD30 A区東ビット群土層



写真81 SD30 B区・Bライン土層



写真80 SD30 B区跡床レベル完掘状況



写真82 SD30 C区跡床レベル完掘状況



写真83 SD30 C土層と土器状況



写真85 SK303土層状況



写真84 SD30 C・Cライン土層



写真86 SK297土層状況

《道路状遺構 1 遺構調査写真》



写真87 SD31・SD32北完掘状況



写真88 SD31・SD32北検出の波板状凸凹面



写真89 SD31(右:上からP12~下へP14)・SD32北  
(左側:上からP3~下へP5)検出の波板状凸凹面



写真90 SD31・P9

《道路状遺構 3 遺構調査写真1》



写真91 SD32北・検出(路面内遺物)状況



写真95 SD32・第2路面・硬化と礫散きアップ



写真96 SD32・第2路面・硬化と礫散きアップ



写真97 SD32路床完備



写真92 SD31・P10土層



写真93 SD31 P5(左)・SD32 P1(右)土層



写真94 SD32・第2路面検出状況



写真98 SD32・Cライン土層



写真99 SD32・Bライン土層



写真100 SD32・Dライン土層



写真101 SD32北・波板状凸凹面  
Bライン土層状況

〈道路状遺構3 遺構調査写真2〉



写真1 古代仏教施設周辺の仏教系遺物 (SE03、SK424 出土の集合)



写真2 古代仏教施設周辺の灯明具 (SE03、SK279、SK385 出土の集合)



写真3 中世1-Ⅱ1期の土師器食器群 (SK472 出土の集合)



写真4 I I期在来型長柄釜地元A胎土



写真7 V期北陸型羽釜壺場A胎土

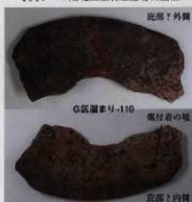


写真9 II期在来型甕形土製品地元A胎土



写真5 I I期在来型短柄小釜地元A胎土



写真8 II期在来型手付深鍋地元B胎土



写真6 I I期在来型小型鍋地元A胎土



写真10 II期朝鮮型甕形土製品地元B胎土



写真11 II期朝鮮型甕形土製品地元B胎土





写真12 I 1期土製支脚 (地山粘土)



写真13 II期?不明土師製品地元B粘土



写真14 I 1期在来型椀地元A粘土



写真14 I 1期在来型椀地元A粘土



写真16 II期台付椀地元B粘土



写真17 V期の墨書須恵器「佛」



写真21 V 2期の墨書須恵器「八水」

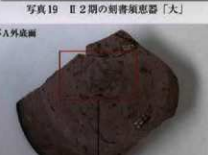


写真22 V 2期の墨書須恵器「八水」



写真23 V2期の墨書須恵器「田主」

写真24 V2期の墨書須恵器「生」

写真26 V期の墨書須恵器「生」?



写真29 N期の須恵器専用灯明具（小器鉢）

写真30 N2古期の須恵器环A転用灯明具

写真32 V期の須恵器転用灯明具

写真29 N期の須恵器専用灯明具（小器鉢）

写真31 N2古期の須恵器环A転用灯明具

写真33 V2期の土師器环A転用灯明具



写真34 IV～V期の須恵器鉢E (仏鉢形)



写真35 IV 2期の須恵器小瓶A



G区瀬まり-02



写真36 V期の須恵器甕A



写真38 II 3～III期の須恵器大甕口縁部 (補修粘土痕跡)



被覆粘土の剥がれた部分

粘土多い粘土で面直し、ナゲ調整を施す

口縁部外面



銅部装飾部アップ

銅上平ヨ条波状文

銅下斜ヨ条波状文

写真37 III～IV期の須恵器小甕C



被覆粘土の剥がれた部分

口縁部内面



粘土多い粘土修復塗り出し成形

胴部下位内面

写真39 V～VI期の須恵器大甕の口縁部、胴下部破片 (道路1外周土坑-22・23)

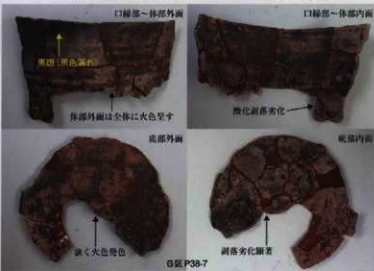
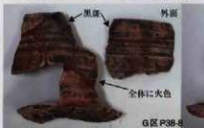


写真43 G区P38出土のV期頃の土師質匣鉢状製品(土師器焼成道具)





写真48 鉄鏝(左:雁又式、右:片刃式)

写真50 鉄製刀子

写真47 鉄釘?

写真49 鉄製金具?

写真51 鉄製直刃鎌



写真52 SE03井戸側転用材（単構造船転用?）



SK472-119

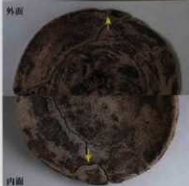


写真53 土師器平底小皿の粘土成形痕



SK472-192



SK472-207



SK472-198



写真57 内里輪高台碗の高台と底部調整



SK472-61

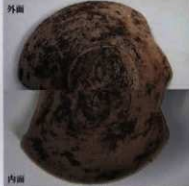


写真54 土師器平底碗の円柱造り痕跡



SK472-109



SK472-155



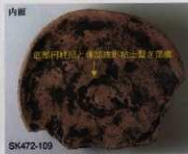
SK472-99



写真58 土師器平底小皿のへら印号



写真55 土師器小皿の成形痕跡



SK472-109



SK472-155



SK472-155



写真59 漆器碗 (SE01-238)

## 額見町遺跡 IV

—串・額見地区産業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4—

発 行 日 平成21年 3月31日

編集・発行者 小松市教育委員会  
文化課 埋蔵文化財調査室  
〒923-0801 石川県小松市園町ホ62番地  
(TEL) 0761-24-8132

印 刷 英文堂印刷





Excavation Reports of Cultural Sites  
in Nukamimachi Sites  
Vol. IV



古代仏教施設周辺出土の墨書・刷書遺物

2009. 3. 31

Komatsu City Board Of Education